第百十九條　隱居ノ屆書ニハ左ノ諸件ヲ記載スルコトヲ要ス

一　隱居ノ氏名、族稱、出生ノ年月日、職業及ヒ本籍地

二　家督相續人ノ名、出生ノ年月日、職業及ヒ家督相續人ト隱居者トノ續柄

三　隱居ノ原因

第百二十條　裁判所ノ許可ヲ得テ隱居ヲ爲ス場合ニ於テハ屆出人ハ屆書ニ裁判ノ謄本ヲ添フルコトヲ要ス

第百二十一條　隱居ノ屆出人ハ屆書ニ家督相續人ノ承認ノ證書ヲ添ヘ又ハ承認ヲ爲シタル者ヲシテ屆書ニ其旨ヲ附記シ之ニ署名、捺印セシムルコトヲ要ス

前項ノ規定ハ民法第七百五十五條第二項ノ規定ニ依リ夫ノ同意ヲ要スル場合ノ屆出ニ之ヲ準用ス

第百二十二條　隱居ノ取消ノ裁判カ確定シタルトキハ其訴ヲ提起シタル者ハ裁判確定ノ日ヨリ一ケ月內ニ裁判ノ謄本ヲ提出シテ登記ノ取消ヲ申請スルコトヲ要ス

第百六條第二項ノ規定ハ前條ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十一節　失踪

第百二十三條　失踪ノ宣告アリタルトキハ其宣告ヲ請求シタル者ハ裁判確定ノ日ヨリ十日內ニ左ノ諸件ヲ具シ裁判ノ謄本ヲ添ヘテ之ヲ屆出ツルコトヲ要ス

一　失踪者ノ氏名、出生ノ年月日、職業及本籍地

二　失踪ノ宣告アリタル年月日

三　失踪者カ家族ナルトキハ戶主ノ氏名、族稱及戶主ト失踪者トノ續柄

第百二十四條　失踪ノ宣告ノ取消アリタルトキハ其取消ヲ請求シタル者ハ裁判確定ノ日ヨリ一箇月內ニ裁判ノ謄本ヲ提出シテ登記ノ取消ヲ申請スルコトヲ要ス

第十二節　死亡

第百二十五條　死亡者アリタルトキハ屆出義務者ハ其死亡ヲ知リタル日ヨリ五日內ニ左ノ諸件ヲ具シ醫師ノ診斷書若クハ檢案書又ハ警察官ノ檢視調書ノ謄本ヲ添ヘテ之ヲ屆出ツルコトヲ要ス

一　死亡者ノ氏名、出生ノ年月日、男女ノ別及本籍地

二　死亡ノ年月日及場所

三　死亡者カ家族ナルトキハ戶主ノ氏名、族稱及戶主ト死亡者トノ續柄

前項ノ屆出期間ハ衞生ノ爲メ特別ノ必要アルトキハ命令ヲ以テ之ヲ短縮スルコトヲ得

第百二十六條　左ニ掲ケタル者ハ其順序ニ後ヒ死亡ノ屆出ヲ爲ス義務ヲ負フ

第一　戶主

第二　同居者

第三　家主、地主又ハ土地若クハ家屋ノ管理人

同順位ノ屆出義務者數人アルトキハ其中ノ一人ヨリ屆出ヲ爲スヲ以テ足ル

第百二十七條　死亡ノ屆出ハ死亡地又ハ死亡者ノ本籍地若クハ寄留地ノ戶籍吏ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

第百二十八條　第七十條及第七十四條ノ規定ハ死亡ノ屆出ニ之ヲ準用ス

第百二十九條　死刑ノ施行アリタルトキハ監獄ノ長ハ遲滯ナク第百二十五條ニ掲ケタル諸件ヲ具シ監獄所在地ノ戶籍吏ニ死亡ノ報告ヲ爲スコトヲ要ス

前項ノ規定ハ在監中死亡シタル者アリテ死體ノ引取人ナキ場合ニ之ヲ準用ス此場合ニ於テハ報告書ニ醫師ノ診斷書又ハ檢案書ヲ添フルコトヲ要ス

第百三十條　航海中ニ死亡者アリタルトキハ船長又ハ船長ハ二十四時內ニ乘船者中ヨリ選ミタル證人ノ前ニ於テ第百二十五條ニ掲ケタル諸件ヲ航海日誌ニ記載シ證人ト共ニ署名、捺印シ且證人ノ出生ノ年月日、職業及本籍地ヲ記載スルコトヲ要ス

前項ノ手續ヲ爲シタル後船舶カ日本ノ港ニ著シタルトキハ船長又ハ船長ハ二十四時內ニ死亡ニ關スル航海日誌ノ謄本ヲ其地ノ戶籍吏ニ送付スルコトヲ要ス

船舶カ外國ノ港ニ著シタルトキハ船長又ハ船長ハ遲滯ナク死亡ニ關スル航海日誌ノ謄本ヲ其國ニ駐在スル日本ノ公使又ハ領事ニ送付シ公使又ハ領事ハ三箇月內ニ之ヲ外務大臣ニ發送シ外務大臣ハ十日內ニ之ヲ死亡者

ノ本籍地ノ戸籍吏ニ發送スルコトヲ要ス

第百三十一條　艦船ノ難破ニ因リテ乘組員及ヒ乘客ノ全部又ハ一部カ死亡シタルトキハ其難波ノ取調ヲ爲シタル官廳又ハ公署ハ死亡者ノ本籍地ノ戸籍吏ニ死亡ノ報告ヲ爲スコトヲ要ス

第百三十二條　死亡者ノ本籍分明ナラス且其何人タルコトヲ認識スルコト能ハサルトキハ警察官ハ檢視調書ヲ作リ遲滯ナク之ヲ其地ノ戸籍吏ニ報告スルコトヲ要ス

死亡者ノ本籍分明ナルニ至リ又ハ其何人タルコトヲ認識スルコトヲ得ルニ至リタルトキハ警察官ハ遲滯ナク前ニ報告ヲ受ケタル戸籍吏ニ之ヲ報告スルコトヲ要ス

第百二十六條　第一項第一號及第二號ニ揭ケタル死亡屆出義務者カ前項ノ事實ヲ知リタルトキハ十日內ニ死亡ノ屆出ヲ爲スコトヲ要ス此場合ニ於テハ醫師ノ診斷書又ハ檢案書ニ代ヘ警察官ノ檢視調書ノ謄本ヲ添フルコトヲ得

第十三節　家督相續

第百三十三條　家督相續ニ因リテ戸主ト爲リタル者ハ其事實ヲ知リタル日ヨリ一箇月內ニ左ノ諸件ヲ具シ之ヲ被相續人ノ本籍地ノ戸籍吏ニ屆出ツルコトヲ要ス

一　家督相續ノ原因及ヒ戸主ト爲リタル年月日

二　前戸主ノ名及前戸主ト家督相續人トノ續柄

家督相續人カ外國ニ在ル場合ニ於テハ前項ノ屆出ハ三箇月內ニ屆書ヲ發送スルヲ以テ足ル

第百三十四條　家督相續回復ノ裁判カ確定シタルトキハ相續權ヲ回復シタル者ハ裁判確定ノ日ヨリ一箇月內ニ前條ニ揭ケタル諸件ヲ具シ裁判ノ謄本ヲ添ヘテ之ヲ屆出テ且前ニ爲シタル家督相續ノ登記ノ取消ヲ申請スルコトヲ要ス

第百三十五條　家督相續人カ胎兒ナルトキハ其母ハ相續ノ開始アリタルコトヲ知リタル日ヨリ一箇月內ニ左ノ諸件ヲ具シ醫師ノ診斷書ヲ添ヘテ家督相續ノ屆出ヲ爲スコトヲ要ス

一　相續開始ノ年月日

二　家督相續人ノ胎兒ナルコト

三　前戸主ノ名及前戸主ト家督相續人トノ續柄

第百三十三條第二項ノ規定ハ前項ノ屆出ニ之ヲ準用ス

第百三十六條　胎兒ヲ家督相續人トシテ屆出テタル場合ニ於テ其胎兒カ死體ニテ生レタルトキハ母ハ出產ノ日ヨリ一箇月內ニ醫師又ハ出產ニ立會ヒタル產婆ノ檢案書ヲ提出シテ家督相續ノ登記ノ取消ヲ申請スルコトヲ要ス

母カ登記取消ノ申請ヲ爲ササルトキハ家督相續人ハ其事實ヲ知リタル日ヨリ一箇月內ニ登記ノ取消ヲ申請スルコトヲ要ス

第百三十七條　推定家督相續人廢除ノ裁判カ確定シタルトキハ被相續人ハ裁判確定ノ日ヨリ十日內ニ左ノ諸件ヲ具シ裁判ノ謄本ヲ添ヘテ之ヲ屆出ツルコトヲ要ス

一　廢除セラレタル者ノ名、出生ノ年月日及職業

二　廢除ノ原因

三　廢除ノ裁判カ確定シタル年月日

第百三十八條　被相續人カ遺言ヲ以テ推定家督相續人ヲ廢除スル意思ヲ表示シタル場合ニ於テ廢除ノ裁判カ確定シタルトキハ前條ノ屆出ハ遺言執行者ヨリ之ヲ爲ス、コトヲ要ス

前項ノ場合ニ於テハ屆書ニ被相續人ノ死亡ノ年月日ヲ記載スルコトヲ要ス

第百三十九條　推定家督相續人廢除ノ取消ノ裁判カ確定シタルトキハ其取消ヲ請求シタル者ハ裁判確定ノ日ヨリ一箇月內ニ裁判ノ謄本ヲ提出シテ登記ノ取消ヲ申請スルコトヲ要ス

第十五節　家督相續人ノ指定

第百四十條　家督相續人指定ノ屆書ニハ左ノ諸件ヲ記載スルコトヲ要ス

一　指定家督相續人タルヘキ者ノ氏名、族稱、出生ノ年月日、職業及本籍地

二　法定ノ推定家督相續人ナキコト

第百四十一條　民法第九百八十一條ノ規定ニ依リテ家督相續人指定ノ屆出ヲ爲ストキハ屆書ニ前條ニ掲ケタル諸件及被相續人ノ死亡ノ年月日ヲ記載シ又之ニ其指定ニ關スル遺言ノ謄本ヲ添フルコトヲ要ス

第百四十二條　家督相續人指定ノ取消ノ屆書ニハ左ノ諸件ヲ記載スルコトヲ要ス

一　指定家督相續人ノ氏名、族稱、出生ノ年月日、職業及本籍地

二　指定ノ年月日

第百四十三條　家督相續人指定ノ取消ノ屆出ヲ爲ス者ハ同時ニ家督相續人指定ノ登記ノ取消ヲ申請スルコトヲ要ス

第百四十四條　民法第九百八十一條ノ規定ニ依リテ指定ノ取消ノ屆出ヲ爲ス場合ニ於テハ前二條ノ規定ニ依ル外屆書ニ被相續人ノ死亡ノ年月日ヲ記載シ且之ニ指定ノ取消ニ關スル遺言ノ謄本ヲ添フルコトヲ要ス

第百四十五條　家督相續人ノ指定カ其效力ヲ失ヒタルトキハ指定ヲ爲シタル者ハ其事實ヲ知リタル日ヨリ一箇月內ニ其效力ヲ失ヒタル事由ノ證明書ヲ提出シテ登記ノ取消ヲ申請スルコトヲ要ス

第十六節　入籍、離籍及復籍拒絕

第百四十六條　民法第七百三十五條第一項若クハ第七百三十七條ノ規定ニ依リ他家ノ家族ト爲ラント欲スル者又ハ民法第七百三十八條ノ規定ニ依リ自己ノ親族ヲ婚家、養家又ハ自己ノ家族ト爲サント欲スル者又ハ民法第七百三十八條ノ規定ニ依リ自己ノ親族ヲ婚家、養家又ハ自己ノ家族ト爲サント欲スル者ハ左ノ諸件ヲ具シテ入籍ノ屆出ヲ爲スコトヲ要ス

一　入籍スヘキ家ノ戶主ノ氏名、出生ノ年月日、職業及本籍地

二　入籍スヘキ家ノ戶主又ハ家族ト入籍スヘキ者トノ親族關係

三　入籍スヘキ者カ廢家シテ他家ニ入ルトキハ其旨

四　入籍スヘキ者カ家族ナルトキハ其去ルヘキ家ノ戶主ノ氏名、出生ノ年月日、職業、本籍地及其戶主ト入籍スヘキ者トノ續柄

第百四十七條　民法第七百三十五條第一項、第七百三十七條及第七百三十八條ノ規定ニ依リ戶主、配偶者、養親、親權ヲ行フ者又ハ後見人ノ同意ヲ要スル場合ニ於テハ屆出人ハ屆書ニ同意ノ證書ヲ添ヘ又ハ同意ヲ爲シタル者ヲシテ屆書ニ同意ノ旨ヲ附記シ之ニ署名、捺印セシムルコトヲ要ス

第百四十八條　戶主カ其家族ヲ離籍セント欲スルトキハ左ノ諸件ヲ具シテ之ヲ屆出ツルコトヲ要ス

一　離籍セラルヘキ者ノ氏名、出生ノ年月日及職業

二　離籍ノ原因及發生ノ年月日

三　離籍セラルヘキ者ト共ニ家ヲ去ルヘキ者アルトキハ其名、出生ノ年月日、職業及其者ト離籍セラルヘキ者トノ續柄

第百四十九條　離籍ニ因リテ一家ヲ創立シタル者ハ其事實ヲ知リタル日ヨリ十日內ニ左ノ諸件ヲ具シテ其旨ヲ屆出ツルコトヲ要ス

一　離籍ヲ爲シタル戶主ノ氏名、出生ノ年月日、及本籍地

二　離籍ヲ爲シタル戶主ト屆出人トノ續柄

三　離籍ノ原因及年月日

四　屆出人ノ家ニ入ルヘキ者アルトキハ其名、出生ノ年月日、職業及其者ト屆出人トノ續柄

第百五十條　戶主カ其家族タリシ者ノ復籍ヲ拒ムント欲スルトキハ左ノ諸件ヲ具シテ之ヲ屆出ツルコトヲ要ス

一　復籍ヲ拒マルヘキ者ノ氏名、出生ノ年月日、職業及ヒ本籍地

二　復籍ヲ拒マルヘキ者カ家族ナルトキハ戶主ノ氏名、出生ノ年月日、職業及本籍地

三　復籍拒絕ノ原因及其原因發生ノ年月日

第百五十一條　復籍拒絕又ハ復籍スヘキ家ノ廢絕ニ因リテ復籍ヲ爲スコト能ハサル者カ一家ヲ創立シタルトキハ其事實ヲ知リタル日ヨリ十日內ニ左ノ諸件ヲ具シテ其旨ヲ屆出ツルコトヲ要ス

一　復籍ヲ拒ミタル戶主又ハ廢絕シタル家ノ最終ノ戶主ノ氏名、出生ノ年月日、職業及本籍地

二　復籍拒絕又ハ復籍スヘキ家ノ廢絕ノ原因及年月日

三　屆出人ノ家ニ入ルヘキ者アルトキハ其名、出生ノ年月日、職業及其者ト屆出人トノ續柄

第十七節　廢家及絶家

第百五十二條　廢家ヲ爲サント欲スル者ハ左ノ諸件ヲ具シ家督相續ニ因リテ戸主ト爲リタル者ニ非サルコトノ證明書又ハ廢家ノ許可ニ關スル裁判ノ謄本ヲ添ヘテ之ヲ屆出ツルコトヲ要ス

一　廢家シタル者カ入ルヘキ家ノ戸主ノ氏名、出生ノ年月日、職業及本籍地

二　廢家シタル者ニ隨ヒテ他家ニ入ル者ノ名、出生ノ年月日及職業

第百五十三條　絶家ノ家族ニシテ一家ヲ創立シタル者ハ其事實ヲ知リタル日ヨリ十日内ニ左ノ諸件ヲ具シテ絶家及一家創立ノ屆出ヲ爲スコトヲ要ス

一　絶家ノ最終ノ戸主ノ氏名、出生ノ年月日、職業及本籍地

二　絶家ノ原因及年月日

三　一家ヲ創立シタル者ニ隨ヒテ其家ニ入ル者ノ名、出生ノ年月日及職業

第十八節　分家及廢絶家再興

第百五十四條　分家ヲ爲サント欲スル者左ノ諸件ヲ具シテ之ヲ屆出ツルコトヲ要ス

一　分家ノ戸主トナルヘキ者ノ氏名、出生ノ年月日、職業及本籍地

二　本家ノ戸主ノ氏名、職業、本籍地及戸主ト分家ノ戸主トナルヘキ者トノ續柄

三　分家ノ家族トナルヘキ者アルトキハ其名、出生ノ年月日職業

四　分家ノ戸主及家族トナルヘキ者ノ父母ノ氏名、職業及本籍地

第百五十五條　廢絶家ヲ再興セント欲スル者ハ左ノ諸件ヲ具シテ之ヲ屆出ツルコトヲ要ス

一　廢絶家ノ最終ノ戸主ノ氏名、職業及本籍地

二　廢絶ノ原因及年月日

三　廢絶シタル家ト再興ヲ爲ス者ノ家トノ續柄

四　再興ヲ爲ス者ノ戸主ノ氏名、出生ノ年月日、職業及本籍地

五　再興ヲ爲ス者ニ隨ヒテ其家ニ入ルヘキ者ノ出生ノ年月日及職業

第百五十六條　分家又ハ廢絶家再興ノ屆出人ハ屆書ニ戸主ノ同意ノ證書ヲ添ヘ又ハ戸主ヲシテ屆書ニ同意ノ旨ヲ附記シ之ニ署名、捺印セシムルルコトヲ要ス

前項ノ規定ハ民法第七百四十三條但書ノ規定ニ依リ親權ヲ行フ者又ハ後見人ノ同意ヲ要スル場合ニ之ヲ準用ス

第十九節　國籍ノ得喪

第百五十七條　外國人カ婚姻又ハ養子縁組ニ因リテ日本ノ國籍ヲ取得スヘキトキハ婚姻又ハ縁組ノ屆書ニ國籍取得者ノ原國籍ヲ記載スルコトヲ要ス

入夫婚姻又ハ養子縁組ノ場合ニ於テハ前項ノ規定ニ依ル外屆書ニ内務大臣ノ許可書ノ謄本ヲ添フルコトヲ要ス

第百五十八條　外國人カ認知ニ因リテ日本ノ國籍ヲ取得スヘキトキハ認知者ハ認知ノ屆書ニ子ノ原國籍ヲ記載スルコトヲ要ス

子ノ母カ外國人ナルトキハ認知者ハ屆書ニ母ノ國籍ヲ記載スルコトヲ要ス

第百五十九條　歸化ヲ爲シタル者ハ歸化ノ許可ヲ受ケタル日ヨリ十日内ニ左ノ諸件ヲ具シ内務大臣ノ許可書ノ謄本ヲ添ヘテ之ヲ屆出ツルコトヲ要ス

一　歸化人ノ氏名、出生ノ年月日、職業、住所及國籍

二　父母ノ氏名、出生ノ年月日、職業及國籍

三　歸化人ト共ニ日本ノ國籍ヲ取得シタル者アルトキハ其名、出生ノ年月日、職業及其者ト歸化人トノ續柄

四　許可ノ年月日

歸化人ノ妻又ハ子カ歸化人ト共ニ日本ノ國籍ヲ取得セサルトキハ屆書ニ其事由ヲ記載スルコトヲ要ス

第百六十條　日本ノ國籍ヲ失フヘキ者ハ其國籍喪失前ニ左ノ諸件ヲ具シテ之ヲ屆出ツルコトヲ要ス

一　國籍喪失ノ原因
二　國籍喪失ノ期日ヲ知リ得ヘキトキハ其年月日
三　法定ノ推定家督相續人アルトキハ其名、出生ノ年月日、職業及其者ト屆出人トノ續柄
四　新ニ取得スヘキ國籍
五　屆出人ノ妻又ハ子カ共ニ國籍ヲ失フヘキトキハ其妻又ハ子ノ名、出生ノ年月日及職業

第六百十一條　日本ノ國籍ヲ失ヒタル者カ國籍喪失前ニ前條ノ屆出ヲ爲スコト能ハサリシトキハ國籍喪失後十日內ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

前項ノ規定ハ國籍喪失者カ胎本ニ住所又ハ居所ヲ有セサルトキハ之ヲ適用ス

第百六十二條　日本ノ國籍ヲ失フヘキ者カ滿十七年以上ノ男子ナルトキハ國籍喪失ノ屆出人ハ屆書ニ其者カ既ニ陸海軍ノ現役ニ服シタルコト又ハ之ニ服スル義務ナキコトノ證明書ヲ添フルコトヲ要ス

日本ノ國籍ヲ失フヘキ者カ官職ヲ帶ソル者ナルトキハ國籍喪失ノ屆出人ハ屆書ニ所屬長官ノ許可書ノ謄本ヲ添フルコトヲ要ス

第百六十三條　日本ノ國籍ヲ回復シタル者ハ國籍回復ノ許可ヲ得タル日ヨリ十日內ニ左ノ諸件ヲ具シ內務大臣ノ許可書ノ謄本ヲ添ヘテ屆出ツルコトヲ要ス

一　日本ノ國籍ヲ失ヒタル原因及年月日
二　國籍回復前ニ有セシ國籍
三　國籍回復ノ許可ヲ得タル年月日
四　國籍回復者ト共ニ日本ノ國籍ヲ取得シ又ハ之ヲ回復シタル者アルトキハ其名、出生ノ年月日、職業及國籍回復者トノ續柄

第二十節　氏名及族稱ノ變更

第百六十四條　氏ヲ復舊シ又ハ名ヲ改稱シタル者ハ十日內ニ左ノ諸件ヲ具シ管轄官廳ノ許可書ノ謄本ヲ添ヘテ屆出ツルコトヲ要ス

一　復舊又ハ改稱前ノ氏名
二　復舊シタル氏又ハ改稱シタル名
三　復舊又ハ改稱ノ原因及許可ノ年月日

第百六十五條　新ニ華族ニ列セラレ又ハ華士族ノ稱ヲ失ヒタル者ハ十日內ニ左ノ諸件ヲ具シ辭令書又ハ管轄官廳ノ許可書ノ謄本ヲ添ヘテ之ヲ屆出ツルコトヲ要ス

一　新舊族稱
二　族稱變更ノ原因
三　族稱變更ノ辭令又ハ許可アリタル年月日

前項ノ屆出ハ其族稱ニ變更アリタル者カ家族ナルトキハ戶主ヨリ之ヲ爲スコトヲ要ス

第百六十六條　前條ノ規定ハ分家、廢絕家再興又ハ處刑ニ因リテ族稱ヲ失ヒタル者ニハ之ヲ適用セス

但處刑ニ因リテ族稱ヲ失ヒタル場合ニ於テハ裁判所ハ其者ノ本籍地ノ戶籍吏ニ其旨ヲ報告スルコトヲ要ス

第二十一節　身分登記ノ變更

第百六十七條　身分登記ノ變更ヲ請求セント欲スル者ハ原登記ヲ爲シタル戶籍役場ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ノ許可ヲ得テ其申請ヲ爲スコトヲ要ス

第百六十八條　身分登記變更ノ申請ハ許可ノ裁判カ確定シタル日ヨリ一箇月內ニ左ノ諸件ヲ具シ裁判ノ謄本ヲ添ヘテ原登記ヲ爲シタル戶籍吏ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

一　原登記ノ件名及年月日
二　變更スヘキ事項

第百六十九條　前條ノ規定ハ確定裁決ニ依リテ身分登記ノ變更ヲ申請スル場合ニ之ヲ準用ス

第五章　戶籍簿

第百七十條　戶籍ハ戶籍吏ノ管轄地內ニ本籍ヲ定メタル者ニ付キ之ヲ編製ス

日本ノ國籍ヲ有セサル者ハ本籍ヲ定ムルコトヲ得ス

第百七十一條　戸籍ハ地番號ノ順序ニ從ヒ之ヲ編綴シテ帳簿ト爲ス
戸籍吏ノ管轄地内ニ各別ニ地番號ヲ附シタル二個以上ノ區畫アル場合ニ於テハ其區畫ノ順序ハ戸籍吏之ヲ定ム

第百七十二條　戸籍簿ハ正副二本ヲ設ク
戸籍簿ノ正本ハ之ヲ戸籍役場ニ備ヘ其副本ハ監督區裁判所ヲ管轄スル地方裁判所之ヲ保存ス

第百七十三條　家督相續、廢絶家其他ノ事由ニ因リ戸籍ノ全部ヲ抹消シタルモノハ之ヲ戸籍簿ヨリ除キ別ニ編綴シテ帳簿ト爲シ之ヲ戸籍役場ニ保存ス
前項ノ帳簿ヲ保存スヘキ期間ハ司法大臣之ヲ定ム

第百七十四條　第十二條乃至第十四條ノ規定ハ戸籍簿並ニ戸籍ノ謄本及抄本ニ之ヲ準用ス

第六章　戸籍ノ記載手續

第百七十五條　戸籍ハ戸毎ニ一本ヲ作ル

第百七十六條　戸籍ニハ左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス
一　戸主、前戸主、及ヒ家族ノ氏名
二　戸主ノ族稱及本籍地但家族ト戸主ト族稱ヲ異ニスル場合ニ於テハ家族ニ付テモ其族稱ヲ記載スルコトヲ要ス
三　戸主及家族ノ出生ノ年月日
四　戸主又ハ家族トナリタル原因及年月日但出生ニ因リテ家族ト爲リタル者ニ付テハ此記載ヲ要セス
五　戸主並ニ家族ノ父母ノ氏名及ヒ其父母ト戸主又ハ家族トノ續柄
六　戸主ト前戸主ノ續柄及家族ト戸主トノ續柄但家族ノ中他家ヨリ入リテ他ノ家族ノ配偶者ト爲リタル者又ハ他ノ家族ヲ經テ戸主トノ親族關係ヲ有スル者ニ付テハ其者ト戸主トノ續柄ノ外他ノ家族トノ續柄ヲ記載スルコトヲ要ス
七　他家ヨリ入リテ戸主又ハ家族ト爲リタル者ニ付テハ其原籍地、原籍ノ戸主ノ氏名、族稱及其戸主ト戸主又ハ家族ト爲リタル者トノ續柄
八　他家ヨリ入リテ家族トナリタル者ニシテ他ノ家族トノミ親族關係ヲ有スル者ニ付テハ其者ト他ノ家族トノ續柄
九　戸主又ハ家族ノ變更及其原因並ニ年月日
十　後見人アル者ニ付テハ後見人ノ氏名、住所及後見人ノ就職並ニ任務終了ノ年月日

第百七十七條　戸主及家族ノ氏名ヲ戸籍ニ記載スルニハ左ノ順序ニ依ル
第一　戸主
第二　戸主ノ直系尊屬
第三　戸主ノ配偶者
第四　戸主ノ直系卑屬及其配偶者
第五　戸主ノ傍系親及其配偶者
第六　戸主ノ親族ニ非サル者
直系尊屬ノ間ニ在リテハ親等ノ遠キ者ヲ先ニシテ直系卑屬又ハ傍系親ノ間ニ在リテハ親等ノ近キ者ヲ先ニス
直系尊屬直系卑屬又ハ傍系親ノ間ニ在リテ親等ノ同シキ者ハ親族間ノ順位ニ依リ親族間ノ順位ノ同シキ者ハ出生ノ前後ニ依リテ其順序ヲ定ム
前二項ノ規定ハ戸主ノ親族ニ非サル者ノ記載ニ之ヲ準用ス

第百七十八條　戸籍吏カ身分登記ヲ爲シ又ハ戸籍ニ關スル屆出ヲ受理シタルトキハ次條以下ノ規定ニ從ヒテ戸籍ノ記載ヲ爲スコトヲ要ス

第百七十九條　家督相續又ハ家督相續回復ノ登記ヲ爲シタルトキハ其登記及前戸主又ハ戸主ノ名義ヲ有セシ者ノ戸籍ニ基キテ新戸主ノ戸籍ヲ編製スルコトヲ要ス
前項ノ場合ニ於テハ前戸主又ハ戸主ノ名義ヲ有セシ者ノ戸籍ニ事由ヲ記載シ其戸籍ヲ抹消シ且其戸籍ト新戸主ノ戸籍トニ職印ヲ以テ契印ヲ爲スコトヲ要ス

胎兒カ家督相續人ナル場合ニ於テハ其出生ニ至ルマテ第二項ノ手續ヲ爲スコトヲ要セス此場合ニ於テハ前戸主ノ戸籍中戸主ニ關スル部分ノミヲ抹消シ家督相續人ノ胎兒ナル旨ヲ記載スルコトヲ要ス

第百八十條　分家、廢絶家再興其他新ニ家ヲ立ツヘキ事件ノ登記ヲ爲シ又ハ轉籍若クハ無籍戸主ノ就籍ノ屆出ヲ受理シタルトキハ其登記又ハ屆出ニ基キテ戸籍ヲ編製シ轉籍屆出ノ副本ハ遲滯ナク之ヲ舊管轄ノ戸籍吏ニ送付スルコトヲ要ス

前項ノ規定ニ依リテ戸籍ヲ編製スルニハ第百七十六條ニ掲ケタル事項ノ外各場合ニ付キ特殊ナル事項ヲ記載スルコトヲ要ス

第百八十一條　復籍拒絶ノ登記ヲ爲シタルトキハ復籍ヲ拒絶シタル者ノ戸籍ニ登記ノ要旨ヲ記載スルコトヲ要ス

第百八十二條　廢絶家ノ登記ヲ爲シタルトキハ最終戸主ノ戸籍ニ事由ヲ記載シテ其戸籍ヲ抹消スルコトヲ要ス

第百八十三條　單身戸生ノ死亡又ハ失踪ノ登記ヲ爲シタル場合ニ於テハ其家ニ家督相續人ナキコト分明ナルトキハ戸籍吏ハ戸籍役場ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ノ許可ヲ得テ死亡者又ハ失踪者ノ戸籍ニ絶家ノ原因及ヒ年月日ヲ記載シテ其戸籍ヲ抹消スルコトヲ要ス

第百八十四條　戸籍吏ノ管轄地內ニ於ケル本籍地變更ノ屆出ヲ受理シタルトキハ事由ヲ戸籍ニ記載シ舊本籍地ニ關スル記載ヲ抹消シ新本籍地ヲ記載スルコトヲ要ス

第百八十五條　前六條ノ場合ヲ除ク外身分登記ヲ爲シ又ハ戸籍ニ關スル屆出ヲ受理シタルトキハ其登記又ハ屆出ニ基キ第百七十六條ニ掲ケタル事項ヲ戸籍ニ記載スルコトヲ要ス

前項ノ場合ニ於テ第百八十條第二項ノ規定ニ依リテ戸籍ニ記載シタル事項ノ變更アルトキハ其變更ヲ記載スルコトヲ要ス

第百八十六條　戸籍ヲ編製シタル後一人又ハ數人ヲ戸籍ニ入ルヘキトキハ第百七十七條ノ順序ニ拘ハラス戸籍ノ末尾ニ之ヲ記載スルコトヲ得

第百八十七條　一戸ノ全員又ハ一戸內ノ一人若クハ數人ヲ戸籍ヲリ除クヘキトキハ事由ヲ戸籍ニ記載シテ戸籍ノ全部又ハ一部ヲ抹消スルコトヲ要ス

第百八十八條　入籍ノ手續ヲ爲ス場合ニ於テ入籍ヲ爲スヘキ者ノ本籍カ他ノ戸籍吏ノ管轄ヨリ戸籍吏ノ管轄ニ轉屬スルモノナルトキハ身分ニ關スル屆書其他ノ書類又ハ戸籍ニ關スル屆書ヲ送付スルト同時ニ入籍ヲ爲シタル旨ヲ舊管轄ノ戸籍吏ニ通知スルコトヲ要ス

第百八十九條　除籍ノ手續ヲ爲スヘキ場合ニ於テ除籍ヲ爲スヘキ者ノ本籍カ戸籍吏ノ管轄ヨリ他ノ戸籍吏ノ管轄ニ轉屬スルモノナルトキハ新管轄ノ戸籍吏ヨリ入籍ヲ爲シタル旨ノ通知ヲ受ケタル後發送及ヒ受附ノ年月日ヲ戸籍ニ記載シテ除籍ノ手續ヲ爲スコトヲ要ス

轉籍ニ因リテ除籍ヲ爲スヘキ場合ニ於テハ前項ニ掲ケタル事項ノ外轉籍地及ヒ轉籍ノ年月日ヲ記載スルコトヲ要ス

第百九十條　身分登記又ハ戸籍ニ關スル屆出ニ基キテ戸籍ノ記載ヲ爲ス場合ニ於テハ前十一條ニ規定シタル事項ノ外身分ニ關スル屆書其他ノ書類又ハ戸籍ニ關スル屆書ノ受付年月日ヲ記載スルコトヲ要ス

第百九十一條　第十八條、第二十九條及ヒ第三十一條ノ規定ハ戸籍ノ記載ニ之ヲ準用ス

第百九十二條　戸籍用紙中ノ一部分ヲ用ヰ盡シタルトキハ掛紙ヲ以テ用紙ニ充ツルコトヲ得

掛紙ヲ爲シタルトキハ戸籍吏ハ職印ヲ以テ掛紙ト本紙トニ契印ヲ爲スコトヲ要ス

第百九十三條　行政區畫、土地ノ名稱又ハ地番號ノ變更アリタルトキハ戸籍ニ記載シタル區畫名稱又ハ番號ハ當然之ヲ改正シタルモノト看做ス

第百九十四條　第百七十九條及ヒ第百八十條ノ規定ニ依リテ戸籍ヲ編製シタルトキハ戸籍吏ハ遲滯ナク其副本ヲ監督區裁判所ヲ管轄スル地方裁判所ニ送付スルコトヲ要ス

第七章　戸籍ニ關スル屆出

第百九十五條　戸籍吏ノ管轄地外ニ本籍ヲ轉セント欲スルトキハ戸主ヨリ左ノ諸件ヲ具シ戸籍ノ謄本ヲ添ヘテ之ヲ轉籍地ノ戸籍吏ニ屆出ツルコトヲ要ス

一　轉籍者ノ氏名出生ノ年月日及ヒ職業

二　原籍地及ヒ轉籍地

前項ノ届書ハ正副二本ヲ作ルコトヲ要ス

第百九十六條　戸籍吏ノ管轄地内ニ於テ本籍地ヲ變更セント欲スルトキハ戸主ヨリ原籍地及ヒ新本籍地ヲ具シテ其旨ヲ戸籍吏ニ届出ツルコトヲ要ス

第百九十七條　届出ノ缺漏其他ノ事由ニ因リ本籍ヲ有セス又ハ復本籍ヲ有スル者ハ就籍又ハ除籍ノ届出ヲ爲サントスル戸籍役場ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ノ許可ヲ得テ其届出ヲ爲スコトヲ要ス

第百九十八條　就籍ノ届出ハ許可ノ裁判カ確定シタル日ヨリ十日内ニ左ノ諸件ヲ具シ裁判ノ謄本ヲ添ヘテ就籍スヘキ地ノ戸籍吏ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

一　就籍スヘキ者ノ氏名、族稱、出生ノ年月日時、職業及ヒ其者ト戸主トノ續柄

二　就籍スヘキ者ノ父母ノ氏名及ヒ其者ト父母トノ續柄

三　本籍ヲ有セサリシ原因

四　就籍スヘキ者カ前ニ本籍ヲ有セシトキハ其舊本籍地

五　就籍スヘキ者カ戸主ナルトキハ其旨

六　就籍スヘキ者カ家族ナルトキハ戸主ノ氏名、族稱、職業及ヒ其者ト戸主トノ續柄

七　就籍スヘキ者カ戸主及ヒ家族ナルトキハ戸主、家族ノ別及ヒ家族ト戸主トノ續柄

八　就籍スヘキ者カ他家ヨリ入リテ戸主又ハ家族トナリタル者ナルトキハ其原籍地、原籍ノ戸主ノ氏名、族稱及ヒ其戸主ト就籍スヘキ者トノ續柄

前項第六號及ヒ第七號ノ場合ニ於テ就籍スヘキ家族カ他家ヨリ入リテ他ノ家族ノ配偶者トナリタル者ナルトキ又ハ他ノ家族ヲ經テ戸主トノ親族關係ヲ有スル者ナルトキハ届書ニ其者ト戸主トノ續柄ノ外他ノ家族トノ續柄ヲ記載シ若シ他ノ家族トノミ親族關係ヲ有スル者ナルトキハ其者ト他ノ家族トノ續柄ノミヲ記載スルコトヲ要ス

第百九十九條　除籍ノ届出ハ許可ノ裁判カ確定シタル日ヨリ十日内ニ左ノ諸件ヲ具シ裁判ノ謄本ヲ添ヘテ除籍スヘキ地ノ戸籍吏ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

一　除籍スヘキ者ノ氏名、族稱、職業、本籍地及ヒ複本籍地

二　複本籍ヲ有セル原因

三　除籍スヘキ者カ本籍ト複本籍トニ於テ身分ヲ異ニスルトキハ本籍並ニ複本籍ニ於ケル身分及ヒ其身分ノ異ナル原因

第二百條　就籍又ハ除籍スヘキ者カ家族ナルトキ又ハ戸主及ヒ家族ナルトキハ前二條ノ届出ハ戸主ヨリ之ヲ爲スコトヲ要ス

戸主カ前二條ノ期間内ニ其届出ヲ爲ササルトキハ許可ノ裁判ヲ受ケタル者ヨリ其届出ヲ爲スコトヲ得

第二百一條　第百九十八條及ヒ第百九十九條ノ規定ハ確定判決ニ依リテ就籍又ハ除籍ノ届出ヲ爲ス場合ニ之ヲ準用ス

第二百二條　第四十三條、第四十四條、第四十六條、第四十九條乃至第五十二條、第五十四條、第五十五條、第五十八條及ヒ第六十二條乃至第六十六條ノ規定ハ本章ノ場合ニ之ヲ準用ス

第八章　抗告

第二百三條　身分登記又ハ戸籍ニ關スル事件ニ付キ戸籍吏ノ處分ヲ不當トスル者ハ戸籍役場ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百四條　抗告ハ管轄區裁判所ニ抗告ヲ差出シテ之ヲ爲ス

抗告狀ニハ届書又ハ申請書及ヒ其他ノ關係書類ヲ添フルコトヲ要ス

第二百五條　抗告ヲ受ケタル裁判所ハ抗告ニ關スル書類ヲ戸籍吏ニ送付シテ其意見ヲ求ムルコトヲ要ス

第二百六條　戸籍吏ハ抗告ヲ理由アリト認ムルトキハ處分ヲ變更シテ其旨ヲ裁判所及ヒ抗告人ニ通知スルコトヲ要ス

抗告ヲ理由ナシト認ムルトキハ其意見ヲ具シ送付ヲ受ケタル書類ヲ五日内ニ裁判所ニ返還スルコトヲ要ス

第二百七條　裁判所ハ抗告ヲ理由ナシトスルトキハ之ヲ却下シ其理由アリトスルトキハ戸籍吏ニ相當ノ處分ヲ

命スルコトヲ要ス

抗告ヲ却下シ又ハ處分ヲ命スル裁判ハ決定ヲ以テ之ヲ爲シ之ヲ戸籍吏及ヒ抗告人ニ送達スルコトヲ要ス

第二百八條　裁判所ノ決定ニ對シテハ法律ノ違背シタル裁判ナルコトヲ理由トスルトキニ限リ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒテ抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百九條　抗告ノ費用ニ付テハ非訟事件手續法ノ規定ヲ準用ス

第九章　罰則

第二百十條　本法ノ規定ニ依リ期間内ニ爲スヘキ屆出又ハ申請ヲ怠リタル者ハ十圓以下ノ過料ニ處セラル

第二百十一條　期間内ニ屆出又ハ申請ヲ爲ササルニ因リ戸籍吏カ期間ヲ定メテ屆出又ハ申請ノ催告ヲ爲シタル場合ニ於テ尚ホ其屆出又ハ申請ヲ怠リタル者ハ二十圓以下ノ過料ニ處セラル二回以上戸籍吏ノ催告ニ應セサル者亦同シ

第二百十二條　戸籍吏ハ左ノ場合ニ於テハ三十圓以下ノ過料ニ處セラル

一　正當ノ理由ナクシテ身分又ハ戸籍ニ關スル屆出若クハ申請ヲ受理セサルトキ

二　身分登記又ハ戸籍ノ記載ヲ爲スコトヲ怠リタルトキ

第二百十三條　戸籍吏ハ左ノ場合ニ於テハ十圓以下ノ過料ニ處セラル

一　正當ノ理由ナクシテ身分登記簿又ハ戸籍簿ノ閲覽ヲ拒ミタルトキ

二　正當ノ理由ナクシテ身分登記又ハ戸籍ノ謄本若クハ抄本ヲ交付セス又ハ身分若クハ戸籍ニ關スル屆出又ハ申請ノ受理ノ證明書ヲ交付セサルトキ

第二百十四條　本章ニ定メタル過料ノ裁判ハ過料ニ處セラルヘキ者ノ住所又ハ居所ノ地ヲ管轄スル區裁判所之ヲ爲ス其裁判及ヒ裁判ノ執行ニ付テハ非訟事件手續法ノ規定ヲ準用ス

第二百十五條　自己又ハ他人ノ利ヲ圖リ若クハ他人ヲ害スル目的ヲ以テ身分又ハ戸籍ニ關シ詐僞ノ屆出若クハ申請ヲ爲シタル者ハ十一日以上四月以下ノ重禁錮又ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處セラル

附則

第二百十六條　市町村長ヲ置カサル地ニ於テハ市町村長ノ職務ヲ行フ吏員ヲ以テ戸籍吏トシ其吏員ノ職務ヲ行フ役場ヲ以テ戸籍役場トス

市町村長ノ職務ヲ行フ吏員ノ事務ヲ代理スヘキ者ナキ地ニ在リテハ監督區裁判所ヲ管轄スル地方裁判所ノ長司法大臣ノ認可ヲ得テ豫メ其事務ヲ代理スヘキ者ヲ定ム

市參事會員其他戸籍吏ノ職務ヲ行フヘキ吏員ナキ地ニ於テ此等ノ者ニ代ハリテ戸籍吏ノ職務ヲ行フヘキ者モ亦前項ノ手續ニ依リテ之ヲ定ム

第二百十七條　本法ノ規定ニ依リテ納付スル手數料ハ之ヲ市町村ノ收入トス但國庫ヨリ戸籍役場ノ經費ヲ支辨スル地ニ在リテハ之ヲ國庫ノ收入トス

手數料ノ金額ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二百十八條　本法ノ規定ニ依リ屆出人其他ノ者ノ署名、捺印ヲ要スル場合ニ於テ其者カ印ヲ有セサルトキハ署名スルヲ以テ足ル若シ署名スルコト能ハサルトキハ名ヲ代署セシメ捺印スルヲ以テ足ル若シ署名スルコト能ハス且印ヲ有セサルトキハ名ヲ代署セシメ拇印スルヲ以テ足ル

前項ノ規定ニ依リ添印セス又ハ名ヲ代署セシメ若クハ拇印シタル場合ニ於テハ書面ニ其事由ヲ附記スルコトヲ要ス

第二百十九條　明治三十一年十二月三十一日マテハ從前登記目錄トシテ備ヘタル帳簿ヲ以テ身分登記簿ニ代用スルコトヲ得

第二百二十條　登記目錄ノ冊數又ハ紙數カ身分登記簿ニ代用スルニ足ラサル場合ニ於テハ明治三十一年十二月三十一日マテノ身分登記簿ニ限リ戸籍吏ハ第九條ノ規定ニ拘ハラス登記目錄ヲ作製スルト同一ノ手續ニ依リテ之ヲ作製スルコトヲ得

前項ノ規定ハ登記目錄ノ設ナカリシ地ノ身分登記簿ニ之ヲ準用ス

第二百二十一條　本法ノ規定ニ依リ戸籍ヲ改製スヘキ時期ハ各地又ハ一般ニ付キ司法大臣之ヲ定ム

本法施行後戸籍ノ記載ヲ爲シ又ハ新ニ戸籍ヲ編製スル場合ニ於テハ其記載又ハ編製ニ付テハ本法ノ規定ニ從

フコトヲ要ス但記載ヲ要スル事項ニシテ其事實ヲ知ルコト能ハサルモノ又ハ從來ノ戸籍用紙中其事項ヲ記載スヘキ區劃ノ設ナキモノハ其記載ヲ省クコトヲ得

第二百二十二條　明治四年四月四日布告戸籍法、明治十九年内務省令第十九號及ヒ同年内務省令第二十二號ハ寄留ニ關スル規定ヲ除ク外本法施行ノ日リ之ヲ廢止シ其他ノ法令ニシテ本法ノ規定ニ抵觸シ又ハ重複スルモノハ同日ヨリ之ヲ廢止ス

寄留ニ關スル事務ノ監督ニ付テハ第五條ノ規定ヲ準用ス

第二百二十三條　本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十一章　身分登記戸籍及寄留ニ關スル書類保存規程

明治三十五年七月二十四日司法省令第二十一號

身分登記戸籍及寄留ニ關スル書類保存規程左ノ通相定ム

身分登記戸籍及寄留ニ關スル書類保存規程

第一條　身分登記及戸籍ニ關スル戸籍役場ノ帳簿及書類ハ左ノ區別ニ從ヒ之ヲ保存スヘシ

一　除籍簿　五十年

二　戸籍ニ關スル屆書許可書及ヒ附屬書類　十年

三　受附簿　三年

四　請求、告知、催告又ハ通知ニ關スル帳簿及ヒ書類　三年

第二條　戸籍法第二百二十一條第一項ニ依リ戸籍ヲ改製シタル場合ニ於テハ原戸籍ヲ五十年間保存スヘシ

第三條　出入寄留ニ關スル屆書、除籍簿及ヒ附屬書類ハ五年間之ヲ保存スヘシ

第四條　戸籍法第三十八條第一項ニ依リ戸籍役場ヨリ區裁判所ニ送付シタル書類ハ十年間之ヲ保存スヘシ

第五條　地方裁判所ニ保存スル戸籍ノ副本ハ其正本カ家督相續、廢絶家其他ノ事由ニ因リ抹消セラレ又ハ戸籍法第二百二十一條第一項ニ依リ改製セラレタルトキハ其日ヨリ之ヲ保存スヘシ

第六條　第一條第三條及ヒ第四條ノ帳簿及ヒ書類ノ保存期間ハ當該年度ノ翌年ヨリ之ヲ起算シ第二條ノ原戸籍ノ保存期間ハ改製結了ノ翌年ヨリ之ヲ起算ス

第七條　區裁判所判事、戸籍吏又ハ市、區、町村長（市、區、町村長サキ地ニ於テハ其職務ヲ行フ吏員）カ保存期間ヲ經過シタル帳簿又ハ書類ヲ廢毀セントスルトキハ目錄ヲ作リ地方裁判所長ノ認可ヲ受クヘシ但戸籍吏又ハ市、區、町村長カ認可ヲ請フトキハ監督區裁判所ヲ經由スヘシ

附則

第八條　後見人ニ關スル戸籍法施行前ノ帳簿及ヒ書類ハ當該年度ノ翌年ヨリ五十年間之ヲ保存スヘシ

第九條　登記目錄ハ當該年度ノ翌年ヨリ三十年間之ヲ保存スヘシ

第十條　區裁判所ニ於テ戸籍法施行ノ際郡役所等ヨリ引繼ヲ受ケタル戸籍ニ關スル屆書ハ戸籍法施行前ニ編製シタル戸籍カ家督相續廢絶家其他ノ事由ニ因リ抹消セラレ又ハ戸籍法第二百二十一條第一項ニ依リ改製セラルルマテ之ヲ保存スヘシ

第十一條　第一條、第二條及ヒ第五條乃至第七條ノ規定ハ戸籍法施行前ノ除籍簿、原戸籍簿、戸籍ノ副本其他ノ帳簿及ヒ書類ニ之ヲ準用ス

第六編　刑事　監獄

第一章　刑法　明治四十年四月二十三日　法律第四十五號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル刑法改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

刑法

第一編　總則

第一章　法例

第一條　本法ハ何人ヲ問ハス帝國内ニ於テ罪ヲ犯シタル者ニ之ヲ適用ス

帝國外ニ在ル帝國船舶内ニ於テ罪ヲ犯シタル者ニ付キ亦同シ

第二條　本法ハ何人ヲ問ハス帝國外ニ於テ左ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者ニ之ヲ適用ス

一　第七十三條乃至第七十六條ノ罪

二　第七十七條乃至第七十九條ノ罪

三　第八十一條乃至第八十九條ノ罪

四　第百四十八條ノ罪及ヒ其未遂罪

五　第百五十四條、第百五十五條、第百五十七條及ヒ第百五十八條ノ罪

六　第百六十二條及ヒ第百六十三條ノ罪

七　第百六十四條乃至第百六十六條ノ罪及ヒ第百六十四條第二項、第百六十五條第二項、第百六十六條第二項ノ未遂罪

第三條　本法ハ帝國外ニ於テ左ニ記載シタル罪ヲ犯シタル帝國臣民ニ之ヲ適用ス

一　第百八條、第百九條第一項ノ罪、第百八條、第百九條第一項ノ例ニ依リ處斷ス可キ罪及ヒ此等ノ罪ノ未遂罪

二　第百十九條ノ罪

三　第百五十九條乃至第百六十一條ノ罪

四　第百六十七條ノ罪及ヒ同條第二項ノ未遂罪
五　第百七十六條乃至第百七十九條、第百八十一條及ヒ第百八十四條ノ罪
六　第百九十九條、第二百條ノ罪及ヒ其未遂罪
七　第二百四條及ヒ第二百五條ノ罪
八　第二百十四條乃至第二百十六條ノ罪
九　第二百十八條ノ罪及ヒ同條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル罪
十　第二百二十條及ヒ第二百二十一條ノ罪
十一　第二百二十四條乃至第二百二十八條ノ罪
十二　第二百三十條ノ罪
十三　第二百三十五條、第二百三十六條、第二百三十八條乃至第二百四十一條及ヒ第二百四十三條ノ罪
十四　第二百四十六條乃至第二百五十條ノ罪
十五　第二百五十三條ノ罪
十六　第二百五十六條第二項ノ罪

帝國外ニ於テ帝國臣民ニ對シ前項ノ罪ヲ犯シタル外國人ニ付キ亦同シ

第四條　本法ハ帝國外ニ於テ左ニ記載シタル罪ヲ犯シタル帝國ノ公務員ニ之ヲ適用ス

一　第百一條ノ罪及ヒ其未遂罪
二　第百五十六條ノ罪
三　第百九十三條、第百九十五條第二項、第百九十七條ノ罪及ヒ第百九十五條第二項ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル罪

第五條　外國ニ於テ確定裁判ヲ受ケタル者ト雖モ同一行爲ニ付キ更ニ處罰スルコトヲ妨ケス但犯人既ニ外國ニ於テ言渡サレタル刑ノ全部又ハ一部ノ執行ヲ受ケタルトキハ刑ノ執行ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得

第六條　犯罪後ノ法律ニ因リ刑ノ變更アリタルトキハ其輕キモノヲ適用ス

第七條　本法ニ於テ公務員ト稱スルハ官吏、公吏、法令ニ依リ公務ニ從事スル議員、委員其他ノ職員ヲ謂フ

公務所ト稱スルハ公務員ノ職務ヲ行フ所ヲ謂フ

第八條　本法ノ總則ハ他ノ法令ニ於テ刑ヲ定メタルモノニ亦之ヲ適用ス但其法令ニ特別ノ規定アルトキハ此限ニ在ラス

第二章　刑

第九條　死刑、懲役、禁錮、罰金、拘留及ヒ科料ヲ主刑トシ沒收ヲ附加刑トス

第十條　主刑ノ輕重ハ前條記載ノ順序ニ依ル但無期禁錮ト有期懲役トハ禁錮ヲ以テ重シトシ有期禁錮ノ長期有期懲役ノ長期ノ二倍ヲ超ユルトキハ禁錮ヲ以テ重シトス

同種ノ刑ハ長期ノ長キモノ又ハ多額ノ多キモノヲ以テ重シトシ長期又ハ多額ノ同シキモノハ其短期ノ長キモノ又ハ寡額ノ多キモノヲ以テ重シトス

二個以上ノ死刑又ハ長期若クハ多額及ヒ短期若クハ寡額ノ同シキ同種ノ刑ハ犯情ニ依リ其輕重ヲ定ム

第十一條　死刑ハ監獄内ニ於テ絞首シテ之ヲ執行ス

死刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ其執行ニ至ルマテ之ヲ監獄ニ拘置ス

第十二條　懲役ハ無期及ヒ有期トシ有期懲役ハ一月以上十五年以下トス

懲役ハ監獄ニ拘置シ定役ニ服ス

第十三條　禁錮ハ無期及ヒ有期トシ有期禁錮ハ一月以上十五年以下トス

禁錮ハ監獄ニ拘置ス

第十四條　有期ノ懲役又ハ禁錮ヲ加重スル場合ニ於テハ二十年ニ至ルコトヲ得之ヲ減輕スル場合ニ於テハ一月以下ニ降スコトヲ得

第十五條　罰金ハ二十圓以上トス但之ヲ減輕スル場合ニ於テハ二十圓以下ニ降スコトヲ得

第十六條　拘留ハ一日以上三十日未滿トシ拘留場ニ拘置ス

第十七條　科料ハ十錢以上二十圓未滿トス

第十八條　罰金ヲ完納スルコト能ハサル者ハ一日以上一年以下ノ期間之ヲ勞役場ニ留置ス
科料ヲ完納スルコト能ハサル者ハ一日以上三十日以下ノ期間之ヲ勞役場ニ留置ス
科料ヲ併科シタル場合ト雖モ留置ノ期間ハ六十日ヲ超ユルコトヲ得ス
罰金又ハ科料ノ言渡ヲ爲ストキハ其言渡ト共ニ罰金又ハ科料ヲ完納スルコト能ハサル場合ニ於ケル留置ノ期間ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ
罰金ニ付テハ裁判確定後三十日內科料ニ付テハ裁判確定後十日內ハ本人ノ承諾アルニ非サレハ留置ノ執行ヲ爲スコトヲ得ス
罰金又ハ科料ノ言渡ヲ受ケタル者其幾分ヲ納ムルトキハ罰金又ハ科料ノ全額ト留置日數トノ割合ニ從ヒ其金額ニ相當スル日數ヲ控除シテ之ヲ留置ス
留置期間內罰金又ハ科料ヲ納ムルトキハ前項ノ割合ヲ以テ殘日數ニ充ツ
留置一日ノ割合ニ滿タサル金額ハ之ヲ納ムルコトヲ得
第十九條　左ニ記載シタル物ハ之ヲ沒收スルコトヲ得
一　犯罪行爲ヲ組成シタル物
二　犯罪行爲ニ供シ又ハ供セントシタル物
三　犯罪行爲ヨリ生シ又ハ之ニ因リ得タル物
沒收ハ其物犯人以外ノ者ニ屬セサルトキニ限ル
第二十條　拘留又ハ科料ノミニ該ル罪ニ付テハ特別ノ規定アルニ非サレハ沒收ヲ科スルコトヲ得ス但前條第一項第一號ニ記載シタル物ノ沒收ハ此限ニ在ラス
第二十一條　未決勾留ノ日數ハ其全部又ハ一部ヲ本刑ニ算入スルコトヲ得

第三章　期間計算

第二十二條　期間ヲ定ムルニ月又ハ年ヲ以テシタルトキハ曆ニ從ヒテ之ヲ計算ス
第二十三條　刑期ハ裁判確定ノ日ヨリ起算ス
拘禁セラレタル日數ハ裁判確定後ト雖モ刑期ニ算入セス
第二十四條　受刑ノ初日ハ時間ヲ論セス全一日トシ之ヲ計算ス時效期間ノ初日亦同シ
放免ハ刑期終了ノ翌日ニ於テ之ヲ行フ

第四章　刑ノ執行猶豫

第二十五條　左ニ記載シタル者二年以下ノ懲役又ハ禁錮ノ言渡ヲ受ケタルトキハ情狀ニ因リ裁判確定ノ日ヨリ一年以上五年以下ノ期間內其執行ヲ猶豫スルコトヲ得
一　前ニ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルコトナキ者
二　前ニ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルコトアルモ其執行ヲ終リ又ハ其執行ノ免除ヲ得タル日ヨリ七年以內ニ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルコトナキ者
第二十六條　左ニ記載シタル場合ニ於テハ刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ取消ス可シ
一　猶豫ノ期間內更ニ罪ヲ犯シ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ
二　猶豫ノ言渡前ニ犯シタル他ノ罪ニ付キ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ
三　前條第二號ニ記載シタル者ヲ除ク外猶豫ノ言渡前他ノ罪ニ付キ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルコト發覺シタルトキ
第二十七條　刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ取消サルルコトナクシテ猶豫ノ期間ヲ經過シタルトキハ刑ノ言渡ハ其效力ヲ失フ

第五章　假出獄

第二十八條　懲役又ハ禁錮ニ處セラレタル者改悛ノ狀アルトキハ有期刑ニ付テハ其刑期三分ノ一無期刑ニ付テハ十年ヲ經過シタル後行政官廳ノ處分ヲ以テ假ニ出獄ヲ許スコトヲ得
第二十九條　左ニ記載シタル場合ニ於テハ假出獄ノ處分ヲ取消スコトヲ得
一　假出獄中更ニ罪ヲ犯シ罰金以上ノ刑ニ處セラレタルトキ
二　假出獄前ニ犯シタル他ノ罪ニ付キ罰金以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

三　假出獄前他ノ罪ニ付キ罰金以上ノ刑ニ處セラレタル者ニシテ其刑ノ執行ヲ爲ス可キトキ

四　假出獄取締規則ニ違背シタルトキ

假出獄ノ處分ヲ取消シタルトキハ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算入セス

第三十條　拘留ニ處セラレタル者ハ情狀ニ因リ何時ニテモ行政官廳ノ處分ヲ以テ假ニ出場ヲ許スコトヲ得

罰金又ハ科料ヲ完納スルコト能ハサルニ因リ留置セラレタル者亦同シ

第六章　時效

第三十一條　刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ時效ニ因リ其執行ノ免除ヲ得

第三十二條　時效ハ刑ノ言渡確定シタル後左ノ期間內其執行ヲ受ケサルニ因リ完成ス

一　死刑ハ三十年

二　無期ノ懲役又ハ禁錮ハ二十年

三　有期ノ懲役又ハ禁錮ハ十年以上ハ十五年、三年以上ハ十年、三年未滿ハ五年

四　罰金ハ三年

五　拘留、科料及ヒ沒收ハ一年

第三十三條　時效ハ法令ニ依リ執行ヲ猶豫シ又ハ之ヲ停止シタル期間內ハ進行セス

第三十四條　時效ハ刑ノ執行ニ付キ犯人ヲ逮捕シタルニ因リ之ヲ中斷ス

罰金、科料及ヒ沒收ノ時效ハ執行行爲ヲ爲シタルニ因リ之ヲ中斷ス

第七章　犯罪ノ不成立及ヒ刑ノ減免

第三十五條　法令又ハ正當ノ業務ニ因リ爲シタル行爲ハ之ヲ罰セス

第三十六條　急迫不正ノ侵害ニ對シ自己又ハ他人ノ權利ヲ防衛スル爲メ已ムコトヲ得サルニ出テタル行爲ハ之ヲ罰セス

防衛ノ程度ヲ超エタル行爲ハ情狀ニ因リ其刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得

第三十七條　自己又ハ他人ノ生命、身體、自由若クハ財產ニ對スル現在ノ危難ヲ避クル爲メ已ムコトヲ得サルニ出テタル行爲ハ其行爲ヨリ生シタル害其避ケントシタル害ノ程度ヲ超エサル場合ニ限リ之ヲ罰セス

但其程度ヲ超エタル行爲ハ情狀ニ因リ其刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得

前項ノ規定ハ業務上特別ノ義務アル者ニハ之ヲ適用セス

第三十八條　罪ヲ犯ス意ナキ行爲ハ之ヲ罰セス但法律ニ特別ノ規定アル場合ハ此限ニ在ラス

罪本重カル可クシテ犯ストキ知ラサル者ハ其重キニ從テ處斷スルコトヲ得

法律ヲ知ラサルヲ以テ罪ヲ犯ス意ナシト爲スコトヲ得ス但情狀ニ因リ其刑ヲ減輕スルコトヲ得

第三十九條　心神喪失者ノ行爲ハ之ヲ罰セス

心神耗弱者ノ行爲ハ其刑ヲ減輕ス

第四十條　瘖啞者ノ行爲ハ之ヲ罰セス又ハ其刑ヲ減輕ス

第四十一條　十四歲ニ滿タサル者ノ行爲ハ之ヲ罰セス

第四十二條　罪ヲ犯シ未タ官ニ發覺セサル前自首シタル者ハ其刑ヲ減輕スルコトヲ得

告訴ヲ待テ論ス可キ罪ニ付キ告訴權ヲ有スル者ニ首服シタル者亦同シ

第八章　未遂罪

第四十三條　犯罪ノ實行ニ著手シ之ヲ遂ケサル者ハ其刑ヲ減輕スルコトヲ得但自己ノ意思ニ因リ之ヲ止メタルトキハ其刑ヲ減輕又ハ免除ス

第四十四條　未遂罪ヲ罰スル場合ハ各本條ニ於テ之ヲ定ム

第九章　併合罪

第四十五條　確定裁判ヲ經サル數罪ヲ併合罪トス若シ或罪ニ付キ確定裁判アリタルトキハ止タ其罪ト其裁判確定前ニ犯シタル罪トヲ併合罪トス

第四十六條　併合罪中其一罪ニ付キ死刑ニ處ス可キトキハ他ノ刑ヲ科セス但沒收ハ此限ニ在ラス

其一罪ニ付キ無期ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス可キトキ亦他ノ刑ヲ科セス但罰金、科料及ヒ沒收ハ此限ニ在ラス

第四十七條　併合罪中二個以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス可キ罪アルトキハ其最モ重キ罪ニ付キ定メタル刑

ノ長期ニ其半數ヲ加ヘタルモノヲ以テ長期トス但各罪ニ付キ定メタル刑ノ長期ヲ合算シタルモノニ超ユルコトヲ得ス

第四十八條　罰金ト他ノ刑トハ之ヲ併科ス但第四十六條第一項ノ場合ハ此限ニ在ラス

二個以上ノ罰金ハ各罪ニ付キ定メタル罰金ノ合算額以下ニ於テ處斷ス

第四十九條　併合罪中重キ罪ニ沒收ナシト雖モ他ノ罪ニ沒收アルトキハ之ヲ附加スルコトヲ得

二個以上ノ沒收ハ之ヲ併科ス

第五十條　併合罪中既ニ裁判ヲ經タル罪ト未タ裁判ヲ經サル罪トアルトキハ更ニ裁判ヲ經サル罪ニ付キ處斷ス

第五十一條　併合罪ニ付キ二個以上ノ裁判アリタルトキハ其刑ヲ併セテ之ヲ執行ス但死刑ヲ執行ス可キトキハ沒收ヲ除ク外他ノ刑ヲ執行セス無期ノ懲役又ハ禁錮ヲ執行ス可キトキハ罰金、科料及ヒ沒收ヲ除ク外他ノ刑ヲ執行セス有期ノ懲役又ハ禁錮ノ執行ハ其最モ重キ罪ニ付キ定メタル刑ノ長期ニ其半數ヲ加ヘタルモノニ超ユルコトヲ得ス

第五十二條　併合罪ニ付キ處斷セラレタル者或罪ニ付キ大赦ヲ受ケタル場合ニ於テハ特ニ大赦ヲ受ケサル罪ニ付キ刑ヲ定ム

第五十三條　拘留又ハ科料ト他ノ刑トハ之ヲ併科ス但第四十六條ノ場合ハ此限ニ在ラス

二個以上ノ拘留又ハ科料ハ之ヲ併科ス

第五十四條　一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸レ又ハ犯罪ノ手段若クハ結果タル行爲ニシテ他ノ罪名ニ觸ルルトキハ其最モ重キ刑ヲ以テ處斷ス

第四十九條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ適用ス

第五十五條　連續シタル數個ノ行爲ニシテ同一ノ罪名ニ觸ルルトキハ一罪トシテ之ヲ處斷ス

第十章　累犯

第五十六條　懲役ニ處セラレタル者其執行ヲ終リ又ハ執行ノ免除アリタル日ヨリ五年內ニ更ニ罪ヲ犯シ有期懲役ニ處ス可キトキハ之ヲ再犯トス

懲役ニ該ル罪ト同質ノ罪ニ因リ死刑ニ處セラレタル者其執行ノ免除アリタル日ヨリ又ハ減刑ニ因リ懲役ニ減輕セラレ其執行ヲ終リ若クハ執行ノ免除アリタル日ヨリ前項ノ期間內ニ更ニ罪ヲ犯シ有期懲役ニ處ス可キトキ亦同シ

併合罪ニ付キ處斷セラレタル者其併合罪中懲役ニ處ス可キ罪アリタルトキハ其罪最重ノモノニ非スト雖モ再犯例ノ適用ニ付テハ懲役ニ處セラレタルモノト看做ス

第五十七條　再犯ノ刑ハ其罪ニ付キ定メタル懲役ノ長期ノ二倍以下トス

第五十八條　裁判確定後再犯者タルコトヲ發見シタルトキハ前條ノ規定ニ從ヒ加重ス可キ刑ヲ定ム

懲役ノ執行ヲ終リタル後又ハ其執行ノ免除アリタル後發見セラレタル者ニ付テハ前項ノ規定ヲ適用セス

第五十九條　三犯以上ノ者ト雖モ仍ホ再犯ノ例ニ同シ

第十一章　共犯

第六十條　二人以上共同シテ犯罪ヲ實行シタル者ハ皆正犯トス

第六十一條　人ヲ教唆シテ犯罪ヲ實行セシメタル者ハ正犯ニ準ス

教唆者ヲ教唆シタル者亦同シ

第六十二條　正犯ヲ幫助シタル者ハ從犯トス

從犯ヲ教唆シタル者ハ從犯ニ準ス

第六十三條　從犯ノ刑ハ正犯ノ刑ニ照シテ減輕ス

第六十四條　拘留又ハ科料ノミニ處ス可キ罪ノ教唆者及ヒ從犯ハ特別ノ規定アルニ非サレハ之ヲ罰セス

第六十五條　犯人ノ身分ニ因リ構成ス可キ犯罪行爲ニ加功シタルトキハ其身分ナキ者ト雖モ仍ホ共犯トス

身分ニ因リ特ニ刑ノ輕重アルトキハ其身分ナキ者ニハ通常ノ刑ヲ科ス

第十二章　酌量減輕

第六十六條　犯罪ノ情狀憫諒ス可キモノハ酌量シテ其刑ヲ減輕スルコトヲ得

第六十七條　法律ニ依リ刑ヲ加重又ハ減輕スル場合ト雖モ仍ホ酌量減輕ヲ爲スコトヲ得

第十三章　加減例

第六十八條　法律ニ依リ刑ヲ減輕ス可キ一個又ハ數個ノ原由アルトキハ左ノ例ニ依ル

一　死刑ヲ減輕ス可キトキハ無期又ハ十年以上ノ懲役若クハ禁錮トス

二　無期ノ懲役又ハ禁錮ヲ減輕ス可キトキハ七年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮トス

三　有期ノ懲役又ハ禁錮ヲ減輕ス可キトキハ其刑期ノ二分ノ一ヲ減ス

四　罰金ヲ減輕ス可キトキハ其金額ノ二分ノ一ヲ減ス

五　拘留ヲ減輕ス可キトキハ其長期ノ二分ノ一ヲ減ス

六　科料ヲ減輕ス可キトキハ其多額ノ二分ノ一ヲ減ス

第六十九條　法律ニ依リ刑ヲ減輕ス可キ場合ニ於テ各本條ニ二個以上ノ刑名アルトキハ先ツ適用ス可キ刑ヲ定メ其刑ヲ減輕ス

第七十條　懲役、禁錮又ハ拘留ヲ減輕スルニ因リ一日ニ滿タサル時間ヲ剩ストキハ之ヲ除棄ス

罰金又ハ科料ヲ減輕スルニ因リ一錢ニ滿タサル金額ヲ剩ストキ亦同シ

第七十一條　酌量減輕ヲ爲ス可キトキ亦第六十八條及ヒ前條ノ例ニ依ル

第七十二條　同時ニ刑ヲ加重減輕ス可キトキハ左ノ順序ニ依ル

一　再犯加重

二　法律上ノ減輕

三　併合罪ノ加重

四　酌量減輕

第二編　罪

第一章　皇室ニ對スル罪

第七十三條　天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子又ハ皇太孫ニ對シ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタル者ハ死刑ニ處ス

處ス

第七十四條　天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子又ハ皇太孫ニ對シ不敬ノ行爲アリタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

神宮又ハ皇陵ニ對シ不敬ノ行爲アリタル者亦同シ

第七十五條　皇族ニ對シ危害ヲ加ヘントシタル者ハ無期懲役ニ處ス

第七十六條　皇族ニ對シ不敬ノ行爲アリタル者ハ二月以上四年以下ノ懲役ニ處ス

第二章　內亂ニ關スル罪

第七十七條　政府ヲ顚覆シ又ハ邦土ヲ僭竊シ其他朝憲ヲ紊亂スルコトヲ目的トシテ暴動ヲ爲シタル者ハ內亂ノ罪ト爲シ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一　首魁ハ死刑又ハ無期禁錮ニ處ス

二　謀議ニ參與シ又ハ群衆ノ指揮ヲ爲シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ禁錮ニ處シ其他諸般ノ職務ニ從事シタル者ハ一年以上十年以下ノ禁錮ニ處ス

三　附和隨行シ其他單ニ暴動ニ干與シタル者ハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

前項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス但前項第三號ニ記載シタル者ハ此限ニ在ラス

第七十八條　內亂ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲シタル者ハ一年以上十年以下ノ禁錮ニ處ス

第七十九條　兵器、金穀ヲ資給シ又ハ其他ノ行爲ヲ以テ前二條ノ罪ヲ幇助シタル者ハ七年以下ノ禁錮ニ處ス

第八十條　前二條ノ罪ヲ犯スト雖モ未タ暴動ニ至ラサル前自首シタル者ハ其刑ヲ免除ス

第三章　外患ニ關スル罪

第八十一條　外國ニ通謀シテ帝國ニ對シ戰端ヲ開カシメ又ハ敵國ニ與シテ帝國ニ抗敵シタル者ハ死刑ニ處ス

第八十二條　要塞、陣營、軍隊、艦船其他軍用ニ供スル場所又ハ建造物ヲ敵國ニ交付シタル者ハ死刑ニ處ス

兵器、彈藥其他軍用ニ供スル物ヲ敵國ニ交付シタル者ハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス

第八十三條　敵國ヲ利スル爲メ要塞、陣營、艦船、兵器、彈藥、汽車、電車、鐵道、電線其他軍用ニ供スル場所又ハ物

ヲ損壞シ若クハ使用スルコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス

第八十四條　帝國ノ軍用ニ供セサル兵器、彈藥其他直接ニ戰鬪ノ用ニ供ス可キ物ヲ敵國ニ交付シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス

第八十五條　敵國ノ爲メニ間諜ヲ爲シ又ハ敵國ノ間諜ヲ幇助シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ五年以上ノ懲役ニ處ス

軍事上ノ機密ヲ敵國ニ漏泄シタル者亦同シ

第八十六條　前五條ニ記載シタル以外ノ方法ヲ以テ敵國ニ軍事上ノ利益ヲ與ヘ又ハ帝國ノ軍事上ノ利益ヲ害シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス

第八十七條　前六條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第八十八條　第八十一條乃至第八十六條ニ記載シタル罪ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第八十九條　本章ノ規定ハ戰時同盟國ニ對スル行爲ニ亦之ヲ適用ス

第四章　國交ニ關スル罪

第九十條　帝國ニ滯在スル外國ノ君主又ハ大統領ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

帝國ニ滯在スル外國ノ君主又ハ大統領ニ對シ侮辱ヲ加ヘタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス但外國政府ノ請求ヲ待テ其罪ヲ論ス

第九十一條　帝國ニ派遣セラレタル外國ノ使節ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス

帝國ニ派遣セラレタル外國ノ使節ニ對シ侮辱ヲ加ヘタル者ハ二年以下ノ懲役ニ處ス但被害者ノ請求ヲ待テ其罪ヲ論ス

第九十二條　外國ニ對シ侮辱ヲ加フル目的ヲ以テ其國ノ國旗其他ノ國章ヲ損壞、除去又ハ汚穢シタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス但外國政府ノ請求ヲ待テ其罪ヲ論ス

第九十三條　外國ニ對シ私ニ戰鬪ヲ爲ス目的ヲ以テ其豫備又ハ陰謀ヲ爲シタル者ハ三月以上五年以下ノ禁錮ニ處ス但自首シタル者ハ其刑ヲ免除ス

第九十四條　外國交戰ノ際局外中立ニ關スル命令ニ違背シタル者ハ三年以下ノ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第五章　公務ノ執行ヲ妨害スル罪

第九十五條　公務員ノ職務ヲ執行スルニ當リ之ニ對シテ暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

公務員ヲシテ或處分ヲ爲サシメ若クハ爲ササラシムル爲メ又ハ其職ヲ辭セシムル爲メ暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタル者亦同シ

第九十六條　公務員ノ施シタル封印又ハ差押ノ標示ヲ損壞シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ封印又ハ標示ヲ無效タラシメタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第六章　逃走ノ罪

第九十七條　既決、未決ノ囚人逃走シタルトキハ一年以下ノ懲役ニ處ス

第九十八條　既決、未決ノ囚人又ハ勾引狀ノ執行ヲ受ケタル者拘禁場又ハ械具ヲ損壞シ若クハ暴行、脅迫ヲ爲シ又ハ二人以上通謀シテ逃走シタルトキハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

第九十九條　法令ニ因リ拘禁セラレタル者ヲ奪取シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

第百條　法令ニ因リ拘禁セラレタル者ヲ逃走セシムル目的ヲ以テ器具ヲ給與シ其他逃走ヲ容易ナラシム可キ行爲ヲ爲シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス

前項ノ目的ヲ以テ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

第百一條　法令ニ因リ拘禁セラレタル者ヲ看守又ハ護送スル者被拘禁者ヲ逃走セシメタルトキハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第百二條　本章ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第七章　犯人藏匿及ヒ證憑湮滅ノ罪

第百三條　罰金以上ノ刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者又ハ拘禁中逃走シタル者ヲ藏匿シ又ハ隱避セシメタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第百四條　他人ノ刑事被告事件ニ關スル證憑ヲ湮滅シ又ハ僞造、變造シ若クハ僞造、變造ノ證憑ヲ使用シタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第百五條　本章ノ罪ハ犯人又ハ逃走者ノ親族ニシテ犯人又ハ逃走者ノ利益ノ爲メニ犯シタルトキハ之ヲ罰セス

第八章　騷擾ノ罪

第百六條　多衆聚合シテ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ騷擾ノ罪ト爲シ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一　首魁ハ一年以上十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

二　他人ヲ指揮シ又ハ他人ニ率先シテ勢ヲ助ケタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

三　附和隨行シタル者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第百七條　暴行又ハ脅迫ヲ爲ス爲メ多衆聚合シ當該公務員ヨリ解散ノ命令ヲ受クルコト三回以上ニ及フモ仍ホ解散セサルトキハ首魁ハ三年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其他ノ者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第九章　放火及ヒ失火ノ罪

第百八條　火ヲ放テ現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、汽車、電車、艦船若クハ鑛坑ヲ燒燬シタル者ハ死刑又ハ無期徒刑若クハ五年以上ノ懲役ニ處ス

第百九條　火ヲ放テ現ニ人ノ住居ニ使用セス又ハ人ノ現在セサル建造物、艦船若クハ鑛坑ヲ燒燬シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス

前項ノ物自己ノ所有ニ係ルトキハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス但公共ノ危險ヲ生セサルトキハ之ヲ罰セス

第百十條　火ヲ放テ前二條ニ記載シタル以外ノ物ヲ燒燬シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

前項ノ物自己ノ所有ニ係ルトキハ一年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第百十一條　第百九條第二項又ハ前條第二項ノ罪ヲ犯シ因テ第百八條又ハ第百九條第一項ニ記載シタル者ニ延燒シタルトキハ三年以下ノ懲役ニ處ス

前條第二項ノ罪ヲ犯シ因テ前條第一項ニ記載シタル物ニ延燒シタルトキハ三年以下ノ懲役ニ處ス

第百十二條　第百八條及ヒ第百九條第一項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第百十三條　第百八條又ハ第百九條第一項ノ罪ヲ犯ス目的ヲ以テ其豫備ヲ爲シタル者ハ二年以下ノ懲役ニ處ス

但情狀ニ因リ其刑ヲ免除スルコトヲ得

第百十四條　火災ノ際鎭火用ノ物ヲ隱匿又ハ損壞シ若クハ其他ノ方法ヲ以テ鎭火ヲ妨害シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第百十五條　第百九條第一項及ヒ第百十條第一項ニ記載シタル物自己ノ所有ニ係ルト雖モ差押ヲ受ケ、物權ヲ負擔シ又ハ賃貸シ若クハ保險ニ付シタルモノヲ燒燬シタルトキハ他人ノ物ヲ燒燬シタル者ノ例ニ同シ

第百十六條　火ヲ失シテ第百八條ニ記載シタル物又ハ他人ノ所有ニ係ル第百九條ニ記載シタル物ヲ燒燬シタル者ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

火ヲ失シテ自己ノ所有ニ係ル第百九條ニ記載シタル物又ハ第百十條ニ記載シタル物ヲ燒燬シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタル者亦同シ

第百十七條　火藥、汽罐其他激發ス可キ物ヲ破裂セシメテ第百八條ニ記載シタル物又ハ他人ノ所有ニ係ル第百九條ニ記載シタル物ヲ損壞シタル者ハ放火ノ例ニ同シ自己ノ所有ニ係ル第百九條ニ記載シタル物又ハ第百十條ニ記載シタル物ヲ損壞シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタル者亦同シ

前項ノ行爲過失ニ出テタルトキハ失火ノ例ニ同シ

第百十八條　瓦斯、電氣又ハ蒸汽ヲ漏出若クハ流出セシメ又ハ之ヲ遮斷シ因テ人ノ生命、身體又ハ財產ニ危險ヲ生セシメタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

瓦斯、電氣又ハ蒸汽ヲ漏出若クハ流出セシメ又ハ之ヲ遮斷シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス

第十章　溢水及ヒ水利ニ關スル罪

第百十九條　溢水セシメ現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、汽車、電車若クハ鑛坑ヲ浸害シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ三年以上ノ懲役ニ處ス

第百二十條　溢水セシメテ前條ニ記載シタル以外ノ物ヲ浸害シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

浸害シタル物自己ノ所有ニ係ルトキハ差押ヲ受ケ、物權ヲ負擔シ又ハ賃貸シ若クハ保險ニ付シタル場合ニ限リ前項ノ例ニ依ル

第百二十一條　水害ノ際防水用ノ物ヲ隱匿又ハ損壞シ若クハ其他ノ方法ヲ以テ水防ヲ妨害シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第百二十二條　過失ニ因リ溢水セシメテ第百十九條ニ記載シタル物ヲ浸害シタル者又ハ第百二十條ニ記載シタル物ヲ浸害シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第百二十三條　堤防ヲ決潰シ、水閘ヲ破壞シ其他水利ノ妨害ト爲ル可キ行爲又ハ溢水セシム可キ行爲ヲ爲シタル者ハ二年以下ノ懲役若クハ禁錮又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十一章　往來ヲ妨害スル罪

第百二十四條　陸路、水路又ハ橋梁ヲ損壞又ハ壅塞シテ往來ノ妨害ヲ生セシメタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス

第百二十五條　鐵道又ハ其標識ヲ損壞シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ汽車又ハ電車ノ往來ノ危險ヲ生セシメタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス

燈臺又ハ浮標ヲ損壞シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ艦船ノ往來ノ危險ヲ生セシメタル者亦同シ

第百二十六條　人ノ現在スル汽車又ハ電車ヲ顚覆又ハ破壞シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス

人ノ現在スル艦船ヲ覆沒又ハ破壞シタル者亦同シ

前二項ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス

第百二十七條　第百二十五條ノ罪ヲ犯シ因テ汽車又ハ電車ノ顚覆若クハ破壞又ハ艦船ノ覆沒若クハ破壞ヲ致シタル者亦前條ノ例ニ同シ

第百二十八條　第百二十四條第一項、第百二十五條及ヒ第百二十六條第一項、第二項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第百二十九條　過失ニ因リ汽車、電車又ハ艦船ノ往來ノ危險ヲ生セシメ又ハ汽車、電車ノ顚覆若クハ破壞又ハ艦船ノ覆沒若クハ破壞ヲ致シタル者ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

其業務ニ從事スル者前項ノ罪ヲ犯シタルトキハ三年以下ノ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第十二章　住居ヲ侵ス罪

第百三十條　故ナク人ノ住居又ハ人ノ看守スル邸宅、建造物若クハ艦船ニ侵入シ又ハ要求ヲ受ケテ其場所ヨリ退去セサル者ハ三年以下ノ懲役又ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第百三十一條　故ナク皇居、禁苑、離宮又ハ行在所ニ侵入シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

神宮又ハ皇陵ニ侵入シタル者亦同シ

第百三十二條　本章ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第十三章　祕密ヲ侵ス罪

第百三十三條　故ナク封緘シタル信書ヲ開披シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第百三十四條　醫師、藥劑師、藥種商、產婆、辯護士、辯護人、公證人又ハ此等ノ職ニ在リシ者故ナク其業務上取扱ヒタルコトニ付キ知得タル人ノ祕密ヲ漏洩シタル時亦同シ

宗教若クハ禱祀ノ職ニ在ル者又ハ此等ノ職ニ在リシ者故ナク其業務上取扱ヒタルコトニ付キ知得タル人ノ祕密ヲ漏洩シタル時亦同シ

第百三十五條　本章ノ罪ハ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

第十四章　阿片煙ニ關スル罪

第百三十六條　阿片煙ヲ輸入、製造又ハ販賣シ若クハ販賣ノ目的ヲ以テ之ヲ所持シタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス

第百三十七條　阿片煙ヲ吸食スル器具ヲ輸入、製造又ハ販賣シ若クハ販賣ノ目的ヲ以テ之ヲ所持シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

第百三十八條　稅關官吏阿片煙又ハ阿片煙吸食ノ器具ヲ輸入シ又ハ其輸入ヲ許シタルトキハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第百三十九條　阿片煙ヲ吸食シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス

阿片煙ヲ吸食スル爲メ房屋ヲ給與シテ利ヲ圖リタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス

第百四十條　阿片煙又ハ阿片煙吸食ノ器具ヲ所持シタル者ハ一年以下ノ懲役ニ處ス

第百四十一條　本章ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第十五章　飲料水ニ關スル罪

第百四十二條　人ノ飲料ニ供スル淨水ヲ汚穢シ因テ之ヲ用フルコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ六月以下ノ懲役又ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第百四十三條　水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料ノ淨水又ハ水源ヲ汚穢シ因テ之ヲ用フルコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ六月以下ノ懲役ニ處ス

第百四十四條　人ノ飲料ニ供スル淨水ニ毒物其他人ノ健康ヲ害ス可キ物ヲ混入シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス

第百四十五條　前三條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス

第百四十六條　水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料ノ淨水又ハ其水源ニ毒物其他人ノ健康ヲ害ス可キ物ヲ混入シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ五年以上ノ懲役ニ處ス

第百四十七條　公衆ノ飲料ニ供スル淨水ノ水道ヲ損壞又ハ壅塞シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第十六章　通貨僞造ノ罪

第百四十八條　行使ノ目的ヲ以テ通用ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ僞造又ハ變造シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス

僞造、變造ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ行使シ又ハ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ人ニ交付シ若クハ輸入シタル者亦同シ

第百四十九條　行使ノ目的ヲ以テ內國ニ流通スル外國ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ僞造又ハ變造シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス

僞造、變造ノ外國ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ行使シ又ハ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ人ニ交付シ若クハ輸入シタル者亦同シ

第百五十條　行使ノ目的ヲ以テ僞造、變造ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ收得シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス

第百五十一條　前三條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第百五十二條　貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ收得シタル後其僞造又ハ變造ナルコトヲ知テ之ヲ行使シ又ハ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ人ニ交付シタル者ハ其名價三倍以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス但一圓以下ニ降スコトヲ得ス

第百五十三條　貨幣、紙幣又ハ銀行券ノ僞造又ハ變造ノ用ニ供スル目的ヲ以テ器械又ハ原料ヲ準備シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

第十七章　文書僞造ノ罪

第百五十四條　行使ノ目的ヲ以テ御璽、國璽若クハ御名ヲ使用シテ詔書其他ノ文書ヲ僞造シ又ハ僞造シタル御璽、國璽ヲ押捺シ又ハ御名ヲ署シタル詔書其他ノ文書ヲ變造シタル者亦同シ

第百五十五條　行使ノ目的ヲ以テ公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名ヲ使用シテ公務所又ハ公務員ノ作ル可キ文書若クハ圖畫ヲ僞造シ又ハ僞造シタル公務所又ハ公務員ノ作ル可キ文書若クハ圖畫ヲ變造シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

公務所又ハ公務員ノ捺印若クハ署名シタル文書若クハ圖畫ヲ僞造シ又ハ公務所又ハ公務員ノ作リタル文書若クハ圖畫ヲ變造シタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第百五十六條　公務員其職員ニ關シ行使ノ目的ヲ以テ虛僞ノ文書若クハ圖畫ヲ作リ又ハ文書若クハ圖畫ヲ變造シタルトキハ印章、署名ノ有無ヲ區別シ前二條ノ例ニ依ル

第百五十七條　公務員ニ對シ虛僞ノ申立ヲ爲シ權利、義務ニ關スル公正證書ノ原本ニ不實ノ記載ヲ爲サシメタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

公務員ニ對シ虛僞ノ申立ヲ爲シ免狀、鑑札又ハ旅券ニ不實ノ記載ヲ爲サシメタル者ハ六月以下ノ懲役又ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

前二項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第百五十八條　前四條ニ記載シタル文書又ハ圖畫ヲ行使シタル者ハ其文書又ハ圖畫ヲ僞造若クハ變造シ又ハ虛僞ノ文書若クハ圖畫ヲ作リ又ハ不實ノ記載ヲ爲サシメタル者ト同一ノ刑ニ處ス

前項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第百五十九條　行使ノ目的ヲ以テ他人ノ印章若クハ署名ヲ使用シテ權利、義務又ハ事實證明ニ關スル文書若クハ圖畫ヲ僞造シタル他人ノ印章若クハ署名ヲ使用シテ權利、義務又ハ事實證明ニ關スル文書若クハ圖畫ヲ僞造シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

他人ノ印章ヲ押捺シ若クハ他人ノ署名シタル權利、義務又ハ事實證明ニ關スル文書若クハ圖畫ヲ變造シタル者亦同シ

前二項ノ外權利、義務又ハ事實證明ニ關スル文書若クハ圖畫ヲ僞造又ハ變造シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第百六十條　醫師公務所ニ提出ス可キ診斷書、檢案書又ハ死亡證書ニ虛僞ノ記載ヲ爲シタルトキハ三年以下ノ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第百六十一條　前二條ニ記載シタル文書又ハ圖畫ヲ行使シタル者ハ其文書又ハ圖畫ヲ僞造若クハ變造シ又ハ虛僞ノ記載ヲ爲シタル者ト同一ノ刑ニ處ス

前項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第十八章　有價證券僞造ノ罪

第百六十二條　行使ノ目的ヲ以テ公債證書、官府ノ證券、會社ノ株券其他ノ有價證券ヲ僞造又ハ變造シタル者ハ三月以上十年以下ノ懲役ニ處ス

行使ノ目的ヲ以テ有價證券ニ虛僞ノ記入ヲ爲シタル者亦同シ

第百六十三條　僞造、變造ノ有價證券又ハ虛僞ノ記入ヲ爲シタル有價證券ヲ行使シ又ハ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ人ニ交付シ若クハ輸入シタル者ハ三月以上十年以下ノ懲役ニ處ス

前項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第十九章　印章僞造ノ罪

第百六十四條　行使ノ目的ヲ以テ御璽、國璽又ハ御名ヲ僞造シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス

御璽、國璽又ハ御名ヲ不正ニ使用シ又ハ僞造シタル御璽、國璽又ハ御名ヲ使用シタル者亦同シ

第百六十五條　行使ノ目的ヲ以テ公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名ヲ僞造シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名ヲ不正ニ使用シ又ハ僞造シタル公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名ヲ使用シタル者亦同シ

第百六十六條　行使ノ目的ヲ以テ公務所ノ記號ヲ僞造シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス

公務所ノ記號ヲ不正ニ使用シ又ハ僞造シタル公務所ノ記號ヲ使用シタル者亦同シ

第百六十七條　行使ノ目的ヲ以テ他人ノ印章若クハ署名ヲ僞造シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス

他人ノ印章若クハ署名ヲ不正ニ使用シ又ハ僞造シタル印章若クハ署名ヲ使用シタル者亦同シ

第百六十八條　第百六十四條第二項、第百六十五條第三項、第百六十六條第二項及ヒ前條第二項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第二十章　僞證ノ罪

第百六十九條　法律ニ依リ宣誓シタル證人虛僞ノ陳述ヲ爲シタルトキハ三月以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第百七十條　前條ノ罪ヲ犯シタル者誣言シタル事件ノ裁判確定前又ハ懲戒處分前自白シタルトキハ其刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得

第百七十一條　法律ニ依リ宣誓シタル鑑定人又ハ通譯虛僞ノ鑑定又ハ通譯ヲ爲シタルトキハ前二條ノ例ニ同シ

第二十一章　誣告ノ罪

第百七十二條　人ヲシテ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ケシムル目的ヲ以テ虛僞ノ申告ヲ爲シタル者ハ第百六十九條ノ例ニ同シ

第百七十三條　前條ノ罪ヲ犯シタル者申告シタル事件ノ裁判確定前又ハ懲戒處分前自白シタルトキハ其刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得

第二十二章　猥褻、姦淫及ヒ重婚ノ罪

第百七十四條　公然猥褻ノ行爲ヲ爲シタル者ハ科料ニ處ス

第百七十五條　猥褻ノ文書、圖畫其他ノ物ヲ頒布若クハ販賣シ又ハ公然之ヲ陳列シタル者ハ五百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス販賣ノ目的ヲ以テ之ヲ所持シタル者亦同シ

第百七十六條　十三歲以上ノ男女ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ以テ猥褻ノ行爲ヲ爲シタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス十三歲ニ滿タサル男女ニ對シ猥褻ノ行爲ヲ爲シタル者亦同シ

第百七十七條　暴行又ハ脅迫ヲ以テ十三歲以上ノ婦女ヲ姦淫シタル者ハ强姦ノ罪ト爲シ二年以上ノ有期懲役ニ處ス十三歲ニ滿タサル婦女ヲ姦淫シタル者亦同シ

第百七十八條　人ノ心神喪失若クハ抗拒不能ニ乘シ又ハ之ヲシテ心神ヲ喪失セシメ若クハ抗拒不能ナラシメテ猥褻ノ行爲ヲ爲シ又ハ姦淫シタル者ハ前二條ノ例ニ同シ

第百七十九條　前三條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第百八十條　前四條ノ罪ハ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

第百八十一條　第百七十六條乃至第百七十九條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス

第百八十二條　營利ノ目的ヲ以テ淫行ノ常習ナキ婦女ヲ勸誘シテ姦淫セシメタル者ハ三年以上ノ懲役又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス其相姦シタル者亦同シ

第百八十三條　有夫ノ婦姦通シタルトキハ二年以下ノ懲役ニ處ス但本夫姦通ヲ縱容シタルトキハ告訴ノ效ナシ

第百八十四條　配偶者アル者重ネテ婚姻ヲ爲シタルトキハ二年以下ノ懲役ニ處ス其相婚シタル者亦同シ

第二十三章　賭博及ヒ富籤ニ關スル罪

第百八十五條　偶然ノ輸贏ニ關シ財物ヲ以テ博戲又ハ賭事ヲ爲シタル者ハ千圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス但一時ノ娛樂ニ供スル物ヲ賭シタル者ハ此限ニ在ラス

第百八十六條　常習トシテ博戲又ハ賭事ヲ爲シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス賭博物ヲ開張シ又ハ團徒ヲ結合シテ利ヲ圖リタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

第百八十七條　富籤ヲ發賣シタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ三千圓以下ノ罰金ニ處ス富籤發賣ノ取次ヲ爲シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ二千圓以下ノ罰金ニ處ス前二項ノ外富籤ヲ授受シタル者ハ三百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第二十四章　禮拜所及ヒ墳墓ニ關スル罪

第百八十八條　神祠、佛堂、墓所其他禮拜所ニ對シ公然不敬ノ行爲アリタル者ハ六月以下ノ懲役若クハ禁錮又ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

說教、禮拜又ハ葬式ヲ妨害シタル者ハ一年以下ノ懲役若クハ禁錮又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第百八十九條　墳墓ヲ發掘シタル者ハ二年以下ノ懲役ニ處ス

第百九十條　死體、遺骨、遺髮又ハ棺內ニ藏置シタル物ヲ損壞、遺棄又ハ領得シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス

第百九十一條　第百八十九條ノ罪ヲ犯シ死體、遺骨、遺髮又ハ棺內ニ藏置シタル物ヲ損壞、遺棄又ハ領得シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

第百九十二條　檢視ヲ經スシテ變死者ヲ葬リタル者ハ五十圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第二十五章　瀆職ノ罪

第百九十三條　公務員其職權ヲ濫用シ人ヲシテ義務ナキ事ヲ行ハシメ又ハ行フ可キ權利ヲ妨害シタルトキハ六月以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第百九十四條　裁判、檢察、警察ノ職務ヲ行ヒ又ハ之ヲ補助スル者其職權ヲ濫用シ人ヲ逮捕又ハ監禁シタルトキハ六月以上七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第百九十五條　裁判、檢察、警察ノ職務ヲ行ヒ又ハ之ヲ補助スル者其職務ヲ行フニ當リ刑事被告人其他ノ者ニ對シ暴行又ハ陵虐ノ行爲ヲ爲シタルトキハ三年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

法令ニ因リ拘禁セラレタル者ヲ看守又ハ護送スル者被拘禁者ニ對シ暴行又ハ陵虐ノ行爲ヲ爲シタルトキ亦同シ

第百九十六條　前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス

第百九十七條　公務員又ハ仲裁人其職務ニ關シ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ要求若クハ約束シタルトキハ三年以下ノ懲役ニ處ス因テ不正ノ行爲ヲ爲シ又ハ相當ノ行爲ヲ爲サザルトキハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

前項ノ場合ニ於テ收受シタル賄賂ハ之ヲ沒收ス若シ其全部又ハ一部ヲ沒收スルコト能ハザルトキハ其價額ヲ追徵ス

第百九十八條　公務員又ハ仲裁人ニ賄賂ヲ交付、提供又ハ約束シタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ罪ヲ犯シタル者自首シタルトキハ其刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得

第二十六章　殺人ノ罪

第百九十九條　人ヲ殺シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ三年以上ノ懲役ニ處ス

第二百條　自己又ハ配偶者ノ直系尊屬ヲ殺シタル者ハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス

第二百一條　前二條ノ罪ヲ犯ス目的ヲ以テ其豫備ヲ爲シタル者ハ二年以下ノ懲役ニ處ス但情狀ニ因リ其刑ヲ免除スルコトヲ得

第二百二條　人ヲ教唆若クハ幇助シテ自殺セシメ又ハ被殺者ノ囑託ヲ受ケ若クハ其承諾ヲ得テ之ヲ殺シタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第二百三條　第百九十九條、第二百條及ヒ前條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第二十七章　傷害ノ罪

第二百四條　人ノ身體ヲ傷害シタル者ハ十年以下ノ懲役又ハ五百圓以下ノ罰金若クハ科料ニ處ス

第二百五條　身體傷害ニ因リ人ヲ死ニ致シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス

自己又ハ配偶者ノ直系尊屬ニ對シテ犯シタルトキハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス

第二百六條　前二條ノ犯罪アルニ當リ現場ニ於テ勢ヲ助ケタル者ハ自ラ人ヲ傷害セスト雖モ一年以下ノ懲役又ハ五十圓以下ノ罰金若クハ科料ニ處ス

第二百七條　二人以上ニテ暴行ヲ加ヘ人ヲ傷害シタル場合ニ於テ傷害ノ輕重ヲ知ルコト能ハス又ハ其傷害ヲ生セシメタル者ヲ知ルコト能ハサルトキハ共同者ニ非スト雖モ共犯ノ例ニ依ル

第二百八條　暴行ヲ加ヘタル者人ヲ傷害スルニ至ラサルトキハ一年以下ノ懲役若クハ五十圓以下ノ罰金又ハ拘留若クハ科料ニ處ス

前項ノ罪ハ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

第二十八章　過失傷害ノ罪

第二百九條　過失ニ因リテ人ヲ傷害シタル者ハ五百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

前項ノ罪ハ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

第二百十條　過失ニ因リ人ヲ死ニ致シタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百十一條　業務上必要ナル注意ヲ忘リ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ三年以下ノ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十九章　墮胎ノ罪

第二百十二條　懷胎ノ婦女藥物ヲ用ヒ又ハ其他ノ方法ヲ以テ墮胎シタルトキハ一年以下ノ懲役ニ處ス

第二百十三條　婦女ノ囑託ヲ受ケ又ハ其承諾ヲ得テ墮胎セシメタル者ハ二年以下ノ懲役ニ處ス因テ婦女ヲ死傷ニ至シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

第二百十四條　醫師、產婆、藥劑師又ハ藥種商婦女ノ囑託ヲ受ケ又ハ其承諾ヲ得テ墮胎セシメタルトキハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス因テ婦女ヲ死傷ニ致シタルトキハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス

第二百十五條　婦女ノ囑託ヲ受ケス又ハ其承諾ヲ得スシテ墮胎セシメタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス前項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第二百十六條　前條ノ罪ヲ犯シ因テ婦女ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス

第三十章　遺棄ノ罪

第二百十七條　老幼、不具又ハ疾病ノ爲メ扶助ヲ要ス可キ者ヲ遺棄シタル者ハ一年以下ノ懲役ニ處ス

第二百十八條　老者、幼者、不具者又ハ病者ヲ保護ス可キ責任アル者之ヲ遺棄シ又ハ其生存ニ必要ナル保護ヲ爲サザルトキハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

自己又ハ配偶者ノ直系尊屬ニ對シテ犯シタルトキハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス

第二百十九條　前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス

第三十一章　逮捕及ヒ監禁ノ罪

第二百二十條　不法ニ人ヲ逮捕又ハ監禁シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

自己又ハ配偶者ノ直系尊屬ニ對シテ犯シタルトキハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス

第二百二十一條　前條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス

第三十二章　脅迫ノ罪

第二百二十二條　生命、身體、自由、名譽又ハ財產ニ對シ害ヲ加フ可キコトヲ以テ人ヲ脅迫シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

親族ノ生命、身體、自由、名譽又ハ財產ニ對シ害ヲ加フ可キコトヲ以テ人ヲ脅迫シタル者亦同シ

第二百二十三條　生命、身體、自由、名譽若クハ財產ニ對シ害ヲ加フ可キコトヲ以テ脅迫シ又ハ暴行ヲ用ヒ人ヲシテ義務ナキ事ヲ行ハシメ又ハ行フ可キ權利ヲ妨害シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス

親族ノ生命、身體、自由、名譽又ハ財產ニ對シ害ヲ加フ可キコトヲ以テ脅迫シ人ヲシテ義務ナキ事ヲ行ハシメ又ハ行フ可キ權利ヲ妨害シタル者亦同シ

前二項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第三十三章　略取及ヒ誘拐ノ罪

第二百二十四條　未成年者ヲ略取又ハ誘拐シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

第二百二十五條　營利、猥褻又ハ結婚ノ目的ヲ以テ人ヲ略取又ハ誘拐シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第二百二十六條　帝國外ニ移送スル目的ヲ以テ人ヲ略取又ハ誘拐シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス

帝國外ニ移送スル目的ヲ以テ人ヲ賣買シ又ハ被拐取者若クハ被賣者ヲ帝國外ニ移送シタル者亦同シ

第二百二十七條　前三條ノ罪ヲ犯シタル者ヲ幇助スル目的ヲ以テ被拐取者又ハ被賣者ヲ收受若クハ藏匿シ又ハ隱避セシメタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

營利又ハ猥褻ノ目的ヲ以テ被拐取者又ハ被賣者ヲ收受シタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス

第二百二十八條　本章ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第二百二十九條　第二百二十六條ノ罪、同條ノ罪ヲ幇助スル目的ヲ以テ犯シタル第二百二十七條第一項ノ罪及ヒ此等ノ罪ノ未遂罪ヲ除ク外本章ノ罪ハ營利ノ目的ニ出テサル場合ニ限リ告訴ヲ待テ之ヲ論ス但被拐取者又ハ被賣者犯人ト婚姻ヲ爲シタルトキハ婚姻ノ無效又ハ取消ノ裁判確定ノ後ニ非サレハ告訴ノ效ナシ

第三十四章　名譽ニ對スル罪

第二百三十條　公然事實ヲ摘示シ人ノ名譽ヲ毀損シタル者ハ其事實ノ有無ヲ問ハス一年以下ノ懲役若クハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

死者ノ名譽ヲ毀損シタル者ハ誣罔ニ出ツルニ非サレハ之ヲ罰セス

第二百三十一條　事實ヲ摘示セスト雖モ公然人ヲ侮辱シタル者ハ拘留又ハ科料ニ處ス

第二百三十二條　本章ノ罪ハ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

第三十五章　信用及ヒ業務ニ對スル罪

第二百三十三條　虛僞ノ風說ヲ流布シ又ハ僞計ヲ用ヒ人ノ信用ヲ毀損シ若クハ其業務ヲ妨害シタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百三十四條　威力ヲ用ヒ人ノ業務ヲ妨害シタル者亦前條ノ例ニ同シ

第三十六章　竊盜及ヒ强盜ノ罪

第二百三十五條　他人ノ財物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ノ罪ト爲シ十年以下ノ懲役ニ處ス

第二百三十六條　暴行又ハ脅迫ヲ以テ他人ノ財物ヲ强取シタル者ハ强盜ノ罪ト爲シ五年以上ノ有期懲役ニ處ス

前項ノ方法ヲ以テ財產上不法ノ利益ヲ得又ハ他人ヲシテ之ヲ得セシメタル者亦同シ

第二百三十七條　强盜ノ目的ヲ以テ其豫備ヲ爲シタル者ハ二年以下ノ懲役ニ處ス

第二百三十八條　竊盜財物ヲ得テ其取還ヲ拒キ又ハ逮捕ヲ免レ若クハ罪跡ヲ湮滅スル爲メ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタルトキハ强盜ヲ以テ論ス

第二百三十九條　人ヲ昏醉セシメテ其財物ヲ盜取シタル者ハ强盜ヲ以テ論ス

第二百四十條　强盜人ヲ傷シタルトキハ無期又ハ七年以上ノ懲役ニ處ス死ニ致シタルトキハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス

第二百四十一條　强盜婦女ヲ强姦シタルトキハ無期又ハ七年以上ノ懲役ニ處ス因テ婦女ヲ死ニ致シタルトキハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス

第二百四十二條　自己ノ財物ト雖モ他人ノ占有ニ屬シ又ハ公務所ノ命ニ因リ他人ノ看守シタルモノナルトキハ本章ノ罪ニ付テハ他人ノ財物ト看做ス

第二百四十三條、第二百三十五條、第二百三十六條、第二百三十八條乃至第二百四十一條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第二百四十四條　直系血族、配偶者及ヒ同居ノ親族又ハ家族ノ間ニ於テ第二百三十五條ノ罪及ヒ其未遂罪ヲ犯シタル者ハ其刑ヲ免除シ其他ノ親族又ハ家族ニ係ルトキハ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

親族又ハ家族ニ非サル共犯ニ付テハ前項ノ例ヲ用ヒス

第二百四十五條　本章ノ罪ニ付テハ電氣ハ之ヲ財物ト看做ス

第三十七章　詐欺及ヒ恐喝ノ罪

第二百四十六條　人ヲ欺罔シテ財物ヲ騙取シタル者ハ十年以下ノ懲役ニ處ス

前項ノ方法ヲ以テ財產上不法ノ利益ヲ得又ハ他人ヲシテ之ヲ得セシメタル者亦同シ

第二百四十七條　他人ノ爲メ其事務ヲ處理スル者自己若クハ第三者ノ利益ヲ圖リ又ハ本人ニ損害ヲ加フル目的ヲ以テ其任務ニ背キタル行爲ヲ爲シ本人ニ財產上ノ損害ヲ加ヘタルトキハ五年以下ノ懲役又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十八條　未成年者ノ知慮淺薄又ハ人ノ心神耗弱ニ乘シテ其財物ヲ交付セシメ又ハ財產上不法ノ利益ヲ得若クハ他人ヲシテ之ヲ得セシメタル者ハ十年以下ノ懲役ニ處ス

第二百四十九條　人ヲ恐喝シテ財物ヲ交付セシメタル者ハ十年以下ノ懲役ニ處ス

前項ノ方法ヲ以テ財產上不法ノ利益ヲ得又ハ他人ヲシテ之ヲ得セシメタル者亦同シ

第二百五十條　本章ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第二百五十一條　本章ノ罪ニハ第二百四十二條、第二百四十四條及ヒ第二百四十五條ノ規定ヲ準用ス

第三十八章　横領ノ罪

第二百五十二條　自己ノ占有スル他人ノ物ヲ横領シタル者ハ五年以下ノ懲役ニ處ス

自己ノ物ト雖モ公務所ヨリ保管ヲ命セラレタル場合ニ於テ之ヲ横領シタル者亦同シ

第二百五十三條　業務上自己ノ占有スル他人ノ物ヲ横領シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第二百五十四條　遺失物、漂流物其他占有ヲ離レタル他人ノ物ヲ横領シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金若クハ科料ニ處ス

第二百五十五條　本章ノ罪ニハ第二百四十四條ノ規定ヲ準用ス

第三十九章　贓物ニ關スル罪

第二百五十六條　贓物ヲ收受シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス
贓物ノ運搬、寄藏、故買又ハ牙保ヲ爲シタル者ハ十年以下ノ懲役及ヒ千圓以下ノ罰金ニ處ス
第二百五十七條　直系血族、配偶者、同居ノ親族又ハ家族及ヒ此等ノ者ノ配偶者ノ間ニ於テ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ其刑ヲ免除ス親族又ハ家族ニ非サル共犯ニ付テハ前項ノ例ヲ用ヒス

第四十章　毀棄及ヒ隱匿ノ罪

第二百五十八條　公務所ノ用ニ供スル文書ヲ毀棄シタル者ハ三月以上七年以下ノ懲役ニ處ス
第二百五十九條　權利、義務ニ關スル他人ノ文書ヲ毀棄シタル者ハ五年以下ノ懲役ニ處ス
第二百六十條　他人ノ建造物又ハ艦船ヲ損壞シタル者ハ五年以下ノ懲役ニ處ス因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス
第二百六十一條　前三條ニ記載シタル以外ノ物ヲ損壞又ハ傷害シタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ五百圓以下ノ罰金若クハ科料ニ處ス
第二百六十二條　自己ノ物ト雖モ差押ヲ受ケ、物權ヲ負擔シ又ハ賃貸シタルモノヲ損壞又ハ傷害シタルトキハ前三條ノ例ニ依ル
第二百六十三條　他人ノ信書ヲ隱匿シタル者ハ六月以下ノ懲役若クハ禁錮又ハ五十圓以下ノ罰金若クハ科料ニ處ス
第二百六十四條　第二百五十九條、第二百六十一條及ヒ前條ノ罪ハ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

第二章　刑法施行法

明治四十一年三月二十七日法律第二十九號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル刑法施行法ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

刑法施行法

第一條　本法ニ於テ舊刑法ト稱スルハ明治十三年第三十六號布告刑法ヲ謂ヒ他ノ法律ト稱スルハ刑法施行前ニ公布シタル法律及ヒ勅令、布告ニシテ法律ト同一ノ效力ヲ有スルモノヲ謂フ
第二條　刑法施行前ニ舊刑法ノ罪又ハ他ノ法律ノ罪ヲ犯シタル者ニ付テハ左ノ例ニ從ヒ刑法ノ主刑ト舊刑法ノ主刑トヲ對照シ刑法第十條ノ規定ニ依リ其輕重ヲ定ム

刑法ノ刑	舊刑法ノ刑
死刑	死刑
無期懲役	無期徒刑
無期禁錮	無期流刑
有期禁錮	有期徒刑、重懲役、輕懲役、重禁錮、有期流刑、重禁獄、輕禁獄、輕禁錮
罰金	罰金
拘留	拘留
科料	科料

第三條　法律ニ依リ刑ヲ加重減輕ス可キトキ又ハ酌量減輕ヲ爲ス可キトキハ加重又ハ減輕ヲ爲シタル後刑ノ對照ヲ爲ス可シ
數罪ヲ犯シタル者ニ付テハ併合罪又ハ數罪俱發ニ關スル規定ヲ適用シタル後刑ノ對照ヲ爲ス可シ
一罪ニ付ニ個以上ノ主刑ヲ併科ス可キトキハ二個以上ノ主刑中其一個ヲ科ス可キトキハ其中ニテ重キ刑ノミニ付キ對照ヲ爲ス可シ併合罪又ハ數罪俱發ニ關スル規定ニ依リ數罪ノ主刑ヲ併科ス可キトキ亦同シ

第四條　刑法施行前舊刑法又ハ他ノ法律ノ規定ニ依リ告訴ヲ待テ論ス可キ罪ヲ犯シタル者ハ刑法ノ規定ニ依リ告訴ヲ要セサルモノト雖モ告訴アルニ非サレハ其罪ヲ論セス

第五條　刑法第六條ニ依リ舊刑法又ハ他ノ法律ヲ適用スル場合ニ於テハ剝奪公權、停止公權、監視又ハ罰金ヲ附加ス可キトキト雖モ之ヲ附加セス

第六條　刑法施行前ニ犯シタル罪ニ付キ刑法施行ノ前又ハ後ニ確定裁判アリタル後刑法施行前ニ犯シタル餘罪ニ付キ裁判ヲ爲ストキハ左ノ例ニ依ル

一　確定裁判アリタル罪ニ舊刑法又ハ他ノ法律ヲ適用シタルトキト雖モ刑法又ハ刑法ノ刑名ニ依リ刑ヲ定メタル法令ニ於テハ其罪ト餘罪トニ付キ併合罪ニ關スル規定ヲ準用ス

二　確定裁判アリタル罪ニ刑法又ハ刑法ノ刑名ニ依リ刑ヲ定メタル法令ヲ適用シタルトキト雖モ舊刑法又ハ他ノ法律ニ於テハ其罪ト餘罪トニ付キ數罪俱發ニ關スル規定ニ依ル

第七條　左ニ記載シタル者刑法施行前更ニ刑法ノ有期懲役ニ相當スル刑ニ該ル罪ヲ犯シ刑法施行後其罪ニ付キ裁判ヲ爲ストキハ刑法又ハ刑法ノ刑名ニ依リ刑ヲ定メタル法令ニ於テハ累犯ニ關スル規定ヲ準用ス

一　舊刑法又ハ他ノ法律ニ依リ刑法ノ懲役ニ相當スル刑ニ處セラレタル者

二　舊刑法又ハ他ノ法律ニ依リ刑法ノ懲役ニ相當スル刑ニ該ル罪ト同質ノ罪ニ因リ死刑ニ處セラレ其執行ノ免除ヲ得又ハ減刑ニ因リ懲役ニ相當スル刑ニ減輕セラレタル者

第八條　刑法施行前ニ犯シタル一罪ト刑法施行後ニ犯シタル一罪又ハ數罪トニ付キ同時ニ裁判ヲ爲ス場合ニ於テハ刑法施行前ノ罪ニ舊刑法又ハ他ノ法律ヲ適用ス可キトキト雖モ其罪ト刑法施行後ノ一罪又ハ數罪トニ付キ併合罪ニ關スル規定ヲ準用ス

第九條　刑法施行前ニ犯シタル數罪ト刑法施行後ニ犯シタル一罪又ハ數罪トニ付キ同時ニ裁判ヲ爲ス場合ニ於テ刑法施行前ノ罪ニ舊刑法又ハ他ノ法律ヲ適用ス可キトキハ數罪俱發ニ關スル規定ニ依リテ定マリタル一ノ重キ罪ト刑法施行後ノ一罪又ハ數罪トニ付キ併合罪ニ關スル規定ヲ準用ス

前項ノ場合ニ於テ刑法施行前ノ罪ニ刑法又ハ刑法ノ刑名ニ依リ刑ヲ定メタル法令ヲ適用ス可キトキハ其數罪ト刑法施行後ノ一罪又ハ數罪トニ付キ併合罪ニ關スル規定ヲ適用ス

第十條　刑法施行後ニ犯シタル罪ニ付キ確定裁判アリタル後刑法施行前ニ犯シタル餘罪ニ付キ裁判ヲ爲ス場合ニ於テハ其罪ニ舊刑法又ハ他ノ法律ヲ適用シタルトキト雖モ確定裁判アリタル罪トニ付キ併合罪ニ關スル規定ヲ準用ス

第十一條　刑法施行前ニ犯シタル罪ニ付キ刑法施行後確定裁判アリタル後刑法施行後ニ犯シタル餘罪ニ付キ裁判ヲ爲ス場合ニ於テハ確定裁判アリタル罪ニ舊刑法又ハ他ノ法律ヲ適用シタルトキト雖モ其罪ト餘罪トニ付キ併合罪ニ關スル規定ヲ準用ス

第十二條　第七條第一項各號ニ記載シタル者刑法施行後有期懲役ニ該ル罪ヲ犯シタルトキハ累犯ニ關スル規定ヲ準用ス

第七條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十三條　刑法施行後ハ舊刑法又ハ舊刑法施行前ノ法令ノ刑ニ處セラレタル者ト雖モ刑ノ執行、假出獄及ヒ時效ニ付テハ刑法ノ規定ヲ準用ス但罰金又ハ科料ヲ完納スルコト能ハサル者ヲ勞役場ニ留置スル場合ニ於テハ檢事ノ請求ニ依リ裁判所決定ヲ以テ其言渡ヲ爲ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ第二條及ヒ明治十四年第八十一號布告第一條ノ例ニ依リ主刑ノ對照ヲ爲ス可シ

舊刑法ノ刑ニ處セラレタル者ノ刑法施行前ニ於ケル時效時間ノ起算及ヒ時效ノ中斷ニ付テハ期滿免除ニ關スル規定ニ從フ

第十四條　刑法施行後ハ舊刑法ノ刑ニ處ス可キ者ト雖モ刑ノ執行猶豫ニ付テハ刑法ノ規定ヲ準用ス

前項ノ場合ニ於テハ第二條ノ例ニ依リ主刑ノ對照ヲ爲ス可シ

第十五條　刑法施行前假出獄ヲ許サレタル者及ヒ幽閉ヲ免セラレタル者ニ付テハ刑法施行ノ日ヨリ刑法ノ假出獄ニ關スル規定ヲ準用ス

刑法施行前罰金又ハ科料ヲ納完セサル爲メ輕禁錮又ハ拘留ニ換ヘラレタル者ニ付テハ刑法施行ノ日ヨリ刑法

第十八條及ヒ第三十條ノ規定ヲ準用ス但留置ノ日數ハ其執行ノ日ヨリ起算シ刑法第十八條ノ期間ヲ超ユルコトヲ得ス

第十六條　懲治場留置ノ執行ハ刑法施行後ト雖モ從前ノ例ニ從フ但司法大臣ハ何時ニテモ其留置ヲ解キ又ハ感化院ニ入院セシムルコトヲ得

第十七條　闕席判決ヲ以テ言渡シタル刑ノ時效期間ハ其言渡ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第十八條　剝奪公權、停止公權、監視及附加ノ罰金ノ言渡ハ刑法施行ノ日ヨリ其效力ヲ失フ

但既ニ徵收シタル附加ノ罰金ハ之ヲ還付セス

附加ノ罰金ヲ完納セサル爲メ換ヘラレタル禁錮ニ付キ亦前項ニ同シ

第十九條　他ノ法律ニ定メタル主刑ハ第二條ノ例ニ準シ刑法ノ刑ニ對照シテ之ヲ刑法ノ刑名ニ變更ス但單ニ禁錮トアルハ之ヲ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ變更ス

他ノ法律ノ規定中剝奪公權、停止公權、監視及ヒ附加ノ罰金ニ處ス可キ旨ヲ定メタルモノハ之ヲ廢止ス

第二十條　他ノ法律ニ定メタル刑ニ付テハ其期間又ハ金額ヲ變更セス但他ノ法律中特ニ期間又ハ金額ヲ定メサル刑ニ付テハ仍ホ舊刑法總則中期間又ハ金額ニ關スル規定ニ從フ

第二十一條　他ノ法律ニ定メタル刑ヲ加重又ハ減輕ス可キ場合ニ於テハ第二十三條ノ場合ヲ除ク外舊刑法ノ加減例ニ關スル規定ニ依ル

第二十二條　他ノ法律中舊刑法ノ規定ヲ掲ケ又ハ舊刑法ノ規定ニ依リ若クハ之ニ依ラサルコトヲ定メタル場合ニ付キ刑法中其規定ニ相當スル規定アルモノハ刑法ノ規定ニ變更ス

爆發物取締罰則第十條ハ之ヲ廢止ス

第二十三條　前條ノ規定ニ依リ刑法ノ刑ヲ適用ス可キ場合ニ於テハ他ノ法律中刑ノ加重ニ關スル特別ノ規定ハ之ヲ適用セス刑ノ減輕ノ方法ニ付テハ刑法ノ加減例ニ關スル規定ニ從フ

第二十四條　明治二十二年法律第二十八號及ヒ明治二十三年法律第九十九號ハ之ヲ廢止ス

第二十五條　左ニ記載シタル舊刑法ノ規定ハ當分ノ內刑法施行前ト同一ノ效力ヲ有ス

一　第二編第三章第五節
二　第百九十八條乃至第二百條
三　第二編第四章第七節及ヒ第九節
四　第四編第五章第三節
五　第三編第二章第四節

刑法第八條ノ規定及ヒ本法中他ノ法律ニ關スル規定ハ之ヲ前項ノ規定ニ準用ス

第二十六條　左ニ記載シタル罪ハ刑法第二條ノ例ニ從フ

一　軍機保護法ニ掲ケタル罪
二　徵兵令ニ掲ケタル罪
三　明治三十八年法律第六十六號ニ掲ケタル罪
四　通貨及證券模造取締法ニ掲ケタル罪
五　船舶法ニ掲ケタル罪
六　船員法ニ掲ケタル罪
七　船舶職員法ニ掲ケタル罪
八　船舶檢査法ニ掲ケタル罪
九　戶籍法ニ掲ケタル罪
十　郵便法ニ掲ケタル罪
十一　舊刑法中印紙ノ僞造變造及ヒ其知情使用ニ關スル罪

第二十七條　左ニ記載シタル罪ハ刑法第三條ノ例ニ從フ

一　著作權法ニ掲ケタル罪
二　重要物產同業組合法ニ掲ケタル罪
三　移民保護法ニ掲ケタル罪

第二十八條　人ノ資格其他ノ事項ニ關シ舊刑法ノ刑名又ハ罪別ヲ揭ケタル他ノ法律ノ規定ハ刑法施行ノ爲メ變更セラルルコトナシ

第二十九條　死刑、無期又ハ短期一年以上ノ懲役若クハ禁錮ニ該ル罪ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ重罪ト看做ス

第三十條　前條ニ該當セサル懲役若クハ禁錮又ハ罰金ニ該ル罪ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ輕罪ト看做ス

前條ニ該當セサル懲役又ハ禁錮ニ該ル罪ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ禁錮ニ該ル罪ト看做ス

前條ニ該當セサル懲役ニ該ル罪ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ重禁錮ニ該ル罪ト看做ス

前條ニ該當セサル禁錮ニ該ル罪ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ輕禁錮ニ該ル罪ト看做ス

第三十一條　拘留又ハ科料ニ該ル罪ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ違警罪ト看做ス

第三十二條　他ノ法律ニ定メタル罪ニシテ死刑、無期又ハ短期六年以上ノ懲役若クハ禁錮ニ該ルモノノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第三十三條　死刑、無期又ハ六年以上ノ懲役若クハ禁錮ニ處セラレタル者ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ重罪ノ刑ニ處セラレタルモノト看做ス

第三十四條　前條ニ記載シタル者及ヒ舊刑法ノ重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ公權ヲ剝奪セラレタルモノト看做ス

前項ノ規定ハ復權ヲ得タル者ニハ之ヲ適用セス

第三十五條　六年未滿ノ懲役若クハ禁錮又ハ罰金ニ處セラレタル者ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ輕罪ノ刑ニ處セラレタルモノト看做ス

六年未滿ノ懲役ニ處セラレタル者ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ重禁錮ニ處セラレタルモノト看做ス

六年未滿ノ禁錮ニ處セラレタル者ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ輕禁錮ニ處セラレタルモノト看做ス

第三十六條　六年未滿ノ懲役又ハ禁錮ニ處セラレタル者及ヒ舊刑法ノ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ輕罪ノ刑ニ處セラレタルモノト看做ス

第三十七條　他ノ法律中舊刑法第三十一條又ハ第三十三條ノ規定アル爲メ人ノ資格ニ關シ別段ノ規定ヲ設ケサリシ場合ニ付テハ舊刑法第三十一條及ヒ第三十三條ノ規定ハ人ノ資格ニ關シ刑法施行前ト同一ノ效力ヲ有ス

第三十八條　刑事訴訟法第八條ヲ左ノ如ク改ム

公訴ノ時效ハ左ノ期間ヲ經過スルニ因テ完成ス

一　死刑ニ該ル罪ニ付テハ十五年

二　無期又ハ長期十年以上ノ懲役若クハ禁錮ニ該ル罪ニ付テハ十年

三　長期十年未滿ノ懲役又ハ禁錮ニ該ル罪ニ付テハ七年

四　長期五年未滿ノ懲役若クハ禁錮又ハ罰金ニ該ル罪ニ付テハ三年

五　刑法第百八十五條ノ罪ニ付テハ一年

六　拘留又ハ科料ニ該ル罪ニ付テハ六月

第三十九條　刑事訴訟法第六十二條第三號ヲ左ノ如ク改ム

第三　區裁判所ノ管轄ニ屬スル罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ區裁判所檢事ニ送致ス可シ

第四十條　刑事訴訟法第百二十五條第二號ヲ左ノ如ク改ム

第二　醫師、藥劑師、藥種商、產婆、辯護士、辯護人、公證人又ハ此等ノ職ニ在リシ者及ヒ宗教若クハ禱祀ノ職ニ在ル者又ハ此等ノ職ニ在リシ者其業務上取扱ヒタルコトニ付キ知得タル事實ニシテ默祕ス可キモノニ關スルトキ

第四十一條　刑事訴訟法第百二十六條第一項中「刑法第百八十條ニ從ヒ罰金」ヲ「四十圓以下ノ罰金又ハ科料」ニ改メ同條第二項中「罰金」ヲ「罰金又ハ科料」ニ改ム

同法第百三十八條中「刑法第百七十九條ニ從ヒ罰金」ヲ「四十圓以下ノ罰金又ハ科料」ニ改ム

同法第百四十四條第一項中「罰金」ヲ「罰金又ハ科料」ニ改ム

第四十二條　刑事訴訟法第百六十七條第一項ヲ左ノ如ク改メ第三項ヲ削ル

被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬スルモノト思料シタルトキハ公判ニ付スル言渡ヲ爲ス可シ

第四十三條　刑事訴訟法第百七十二條ヲ左ノ如ク改ム

第百七十二條　檢事ハ免訴又ハ管轄違ノ決定ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得

第四十四條　刑事訴訟法第二百三十六條中「輕罪、重罪ノ」ヲ削ル

第四十五條　刑事訴訟法第二百四十一條ヲ左ノ如ク改ム

第二百四十一條　裁判所ニ於テ輕罪トシテ受理シタル事件ヲ重罪ナリトスルトキハ其事件ヲ豫審判事ニ送付スル決定ヲ爲ス可シ檢事ノ請求アルトキ亦同シ

被告事件豫審ヲ經タルトキハ公判ヲ止メ受命判事ヲシテ其事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシムヘシ

受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

第四十六條　刑事訴訟法第二百六十四條中「更ニ重罪事件トシテ裁判ス可キ旨ノ決定ヲ爲シ」ヲ削ル

第四十七條　刑事訴訟法第三百十七條ニ左ノ一項ヲ加フ

監獄ニ於テ執行ス可キ二個以上ノ主刑ノ執行ハ其重キモノヲ先ニス但特別ノ事由アルトキハ檢事ハ重キ刑ノ執行ヲ停止シ他ノ刑ノ執行ヲ爲サシムルコトヲ得

第四十八條　刑事訴訟法第三百十八條ノ次ニ左ノ二條ヲ加フ

第三百十八條ノ二　死刑ノ執行ハ檢事及ヒ裁判所書記ノ立會ニテ之ヲ爲ス可シ

死刑ノ執行ニ關スル者ノ外刑場ニ入ルコトヲ得ス但檢事又ハ監獄ノ長ノ許可ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス

第三百十八條ノ三　死刑ノ言渡ヲ受ケタル者心神喪失シタルトキハ司法大臣ノ命令ニ因リ其全癒ニ至ルマテ執行ヲ停止ス

死刑ノ言渡ヲ受ケタル婦女懷胎ナルトキハ分娩後司法大臣ノ命令アルニ非サレハ執行ヲ爲スコトヲ得ス

第四十九條　刑事訴訟法第三百十九條第一項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

懲役、禁錮又ハ拘留ノ言渡ヲ受ケタル者左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其事故ノ止ムマテ刑ノ執行ヲ停止スルコトヲ得

一　心神喪失ノ狀態ニ在ルトキ

二　刑ノ執行ニ因リ生命ヲ保ツコト能ハサル虞アルトキ

三　受胎後七月以上ナルトキ

四　分娩後一月ヲ經過セサルトキ

第五十條　刑事訴訟法第三百二十條中「之ヲ爲ス可シ」ノ下ニ「刑ノ執行ノ停止ニ付キ亦同シ」ヲ加ヘ第二項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

前項ノ徵收ニ付テハ非訟事件手續法第二百八條ノ規定ヲ準用ス

第五十一條　刑事訴訟法第二十四條、第六十三條、第百六十八條、第百七十三條及ヒ第百七十四條但書ハ之ヲ削ル

第五十二條　刑事訴訟法中復權及ヒ特赦ニ關スル規定ハ之ヲ削ル

第五十三條　刑法第五十二條又ハ第五十八條ノ規定ニ依リ刑ヲ定ム可キ場合ニ於テハ其犯罪事實ニ付キ最終ノ判決ヲ爲シタル裁判所ノ檢事其裁判所ニ請求ヲ爲ス可シ

前項ノ請求アリタルトキハ裁判所ハ被告人又ハ其代理人ノ意見ヲ聽キ決定ヲ爲ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第五十四條　刑ノ執行猶豫ハ裁判所ニ於テ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ刑ノ言渡ト同時ニ判決ヲ以テ之ヲ言渡ス可シ

第五十五條　刑ノ執行猶豫ノ言渡ハ上訴ニ因リ其效力ヲ失フコトナシ但原判決ヲ取消シ又ハ破毀シタル場合ハ此限ニ在ラス

上訴裁判所ハ新ニ執行猶豫ノ言渡ヲ爲スコトヲ得

第五十六條　刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ取消ス可キ場合ニ於テハ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ所在地又ハ最後ノ住所地ヲ管轄スル地方裁判所ノ檢事其裁判所ニ請求ヲ爲ス可シ

前項ノ請求アリタルトキハ裁判所ハ被告人又ハ其代理人ノ意見ヲ聽キ決定ヲ爲ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第五十七條　第五十三條及ヒ前條ノ裁判及ヒ抗告ニ付テハ刑事訴訟法ノ規定ヲ準用ス

第五十八條　明治三十八年法律第七十號ニ依リ刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ受ケタルモノト看做ス

第五十九條　明治三十九年法律第五十四號ハ之ヲ廢止ス

第六十條　私訴ハ公訴ニ附帶スルトキハ民事訴訟ノ方式ニ依ラス書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第六十一條　贓物犯人ノ手ニ在ルトキハ被害者ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スル言渡ヲ爲ス可シ

第六十二條　左ニ記載シタルモノヲ以テ公訴ニ關スル訴訟費用トス

一　豫審、公判ニ付キ呼出シタル證人、鑑定人及ヒ通事ニ給與ス可キ日當、旅費ヒ止宿料

二　第六十六條ニ記載シタル費用

第六十三條　證人、鑑定人及ヒ通事ノ日當ハ左ノ範圍内ニ於テ豫審判事、受託判事又ハ裁判所之ヲ定ム

一　證人ノ日當ハ出頭一度ニ付金二十錢乃至金五十錢但止宿料ヲ給與スル場合ニ於テハ日當ヲ給與セス

二　鑑定人及ヒ通事ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金三十錢乃至金五圓

第六十四條　證人、鑑定人及ヒ通事ノ旅費ハ海陸路一里ニ付キ金五錢乃至金二十錢ノ範圍内ニ於テ豫審判事、受託判事又ハ裁判所之ヲ定ム但通路兩線以上アルトキハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算定ス

前項ニ掲ケタル者ノ止宿料ハ一日ニ付キ金二十錢乃至金一圓ノ範圍内ニ於テ豫審判事、受託判事又ハ裁判所之ヲ定ム但八里以上ノ地ヨリ來リ滯在スルトキニ非サレハ之ヲ給與セス

第六十五條　證人、鑑定人及ヒ通事ノ日當、旅費及ヒ止宿料ハ豫審ニ於テハ其終結前、公判ニ於テハ其判決前ニ本人ヨリ請求スルニ非サレハ之ヲ給與セス

第六十六條　鑑定、通譯ニ付キ數多ノ時間又ハ特別ノ技能若クハ費用ヲ要スルトキハ日當ノ外別ニ相當ノ金額ヲ給與スルコトヲ得

第六十七條　共犯ノ訴訟費用ハ共犯人ノ連帶負擔トス

附　則

本法ハ刑法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

刑法附則其他舊刑法施行ノ爲メ公布シタル法令ハ之ヲ廢止ス

第三章　刑法新舊法比照

明治十四年十二月二十八日太政官布告第八十一號

刑法第三條第二項ニ依リ新舊法ヲ比照スルニハ左ノ例ニ從フヘシ

第一條　新舊法比照左ノ如シ

新法	舊法
一　死刑	斬絞
二　無期徒刑	懲役終身
三　有期徒刑	
四　無期流刑	禁獄終身
五　有期流刑	
六　重懲役	懲役十年
七　輕懲役	懲役七年
八　重禁獄	禁獄十年
九　輕禁獄	禁獄七年
十　重禁錮	懲役十一日以上五年以下
十一　輕禁錮	禁獄鎖錮十一日以上五年以下
十二　罰金	贖罪收贖罰金科料二圓以上
十三　拘留	懲役禁獄鎖錮拘留十日以下

十四　科料　贖罪收贖罰金科料二圓未滿

第二條　舊法ノ刑期新法主刑ノ刑期內ニ在ル時ハ新法ニ從フ但舊法ノ刑期ニ過クルコトヲ得ス（舊法ニ於テ懲役百日ニ該ル者新法ニ照シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ新法ニ從ヒ二月以上百日以下ノ重禁錮ニ處スルノ類）

若シ舊法ノ刑期新法主刑ノ短期ニ等シクシテ舊法ニ定役ナク新法ニ定役アル時ハ舊法ニ從フ（舊法ニ於テ禁獄三十日ニ該ル者新法ニ照シ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ舊法ニ從ヒ禁獄三十日ニ處スルノ類）

第三條　舊法新法ノ刑其ニ短期長期アル者ハ其短期ノ短キ者ニ從フ但其長期ノ短キ者ニ過ルコトヲ得ス（舊法ニ於テ一年以上三年以下ノ懲役ニ該ル者新法ニ照シ三月以上四年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ新法ニ從ヒ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處スルノ類）

若シ舊法新法ノ刑其短期等シクシテ舊法ニ定役ナク新法ニ定役アル時ハ舊法ニ從フ（舊法ニ於テ二月以上三年以下ノ禁獄ニ該ル者新法ニ照シ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ舊法ニ從ヒ二月以上二年以下ノ禁獄ニ處スルノ類）

第四條　舊法ノ贖罪收贖若クハ罰金科料ノ金額新法主刑ノ金額內ニ在ル時ハ新法ニ從フ但舊法ノ金額ニ過クルコトヲ得ス

第五條　舊法新法ノ罰金科料共ニ多數寡數アル者ハ其寡數ノ寡キ者ニ從フ但其多數ノ寡キ者ニ過クル事ヲ得ス

第六條　舊法ニ於テ罪ニ體刑ニ該ル者新法ニ於テ罰金ヲ附加ス可キ時ハ其罰金ヲ附加セス

第七條　舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ於テ罰金科料ニ該ル時ハ新法ニ從フ

舊法ニ於テ贖罪收贖若クハ罰金科料ニ該ル者新法ニ照シ體刑ニ該ル時ハ舊法ニ從フ

第八條　舊法ニ從ヒ贖罪收贖ニ處シタル者其金額ヲ延期限內ニ納完スル能ハサル時ハ一圓ヲ一日ニ折算シ輕禁錮又ハ拘留ニ換フ但一圓未滿ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

第九條　舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ從ヒ重罪ノ刑ニ處スル時ハ新法ノ附加刑ヲ適用セス但除族追奪位記沒收ノ類ハ舊法ニ從フ

第十條　舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ從ヒ禁錮ノ刑ニ處スル時ハ監視ヲ附加セス

第十一條　華士族ノ犯罪新法ニ於テ輕罪ニ該ル者舊法ニ從ヒ處斷スル時ハ其族ヲ除セス

第十二條　新法ト舊法トヲ比照スルニハ各其本法ニ照シ加減シタル者ヲ以テ本刑ト爲ス

第十三條　舊法ニ於テ棒鎖ニ該ル者ハ仍ホ棒鎖ニ處ス

右奉　勅旨布告候事

第四章　刑事訴訟法（明治二十三年十月七日法律第九十六號　改正　三二年七三號）

第一編　總則

第一條　公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルコトヲ目的トスルモノニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢事之ヲ行フ

第二條　私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償、贓物ノ返還ヲ目的トスルモノニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

第三條　公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ルモノニ非ス又告訴、私訴ノ拋棄ニ因テ消滅スルモノニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

第四條　私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラス公訴ニ付キ第二審ノ判決アルマテ何時ニテモ其公訴ニ附帶シテ之ヲ爲スコトヲ得

第三者ハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ公訴附帶ノ私訴ニ參加スルコトヲ得

第五條　被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償、返還ヲ要ムル妨礙ト爲ルコトナカル可シ

第六條　公訴ヲ爲ス權ハ左ノ事項ニ因テ消滅ス

第一　被告人ノ死去

第二　告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ告訴ノ拋棄

第三　確定判決

第四　犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止

第五　大赦

第六　時效

第七條　私訴ヲ爲ス權ハ左ノ事項ニ因テ消滅ス

第一　拋棄又ハ和解

第二　確定判決

第三　時效

第八條　公訴ノ時效ハ左ノ期間ヲ經過スルニ因テ完成ス

一　死刑ニ該ル罪ニ付テハ十五年

二　無期又ハ長期十年以上ノ懲役若クハ禁錮ニ該ル罪ニ付テハ十年

三　長期十年未滿ノ懲役又ハ禁錮ニ該ル罪ニ付テハ七年

四　長期五年未滿ノ懲役若クハ禁錮又ハ罰金ニ該ル罪ニ付テハ三年

五　刑法第百八十五條ノ罪ニ付テハ一年

六　拘留又ハ科料ニ該ル罪ニ付テハ六月

第九條　私訴ノ時效ハ被害者無能力ナルトキ又ハ公訴ニ附帶セスシテ其訴ヲ爲シタルトキト雖モ公訴ノ時效ト其期間ヲ同クス

公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタルトキハ民法ニ定メタル時效ノ例ニ從フ

第十條　公訴、私訴ノ時效ハ犯罪ノ日ヨリ其期間ヲ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

第十一條　時效ハ起訴、豫審又ハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期間ノ經過ヲ中斷ス其未タ發覺セサル正犯、從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ

時效ノ經過ヲ中斷シタルトキハ起訴、豫審又ハ公判ノ手續ヲ止メタル日ヨリ更ニ其期間ヲ起算ス

第十二條　起訴、豫審又ハ公判ノ手續其規定ニ背キタルニ因リ無效ニ屬スルトキハ時效ノ經過ヲ中斷スル效ナカル可シ但裁判所ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無效ニ屬スルトキハ此限ニ在ラス

第十三條　被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人、告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重過失ニ出テタルトキハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得

被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人、告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重過失ニ因リ其犯罪ニ付キ不實ノ申立ヲ爲シタ民事ルトキ亦同シ原告人上訴ヲ爲シ敗訴シタルトキハ被告人其上訴ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得

要償ノ訴ハ本案ノ判決アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第十四條　被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ判事、檢事、裁判所書記、執達吏、司法警察官又ハ巡査、憲兵卒ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

第十五條　此法律ニ於テ期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ卽時ヨリ起算シ日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當ルトキハ期間ニ算入ス可カラス但時效ノ期間ハ此限ニ在ラス

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第十六條　此法律ニ定メタル期間ニハ海陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サルモノト雖モ三里以上ナルトキ亦同シ

島嶼又ハ外國ニ付テハ裁判所ニ於テ特ニ附加期間ヲ定ムルコトヲ得

第十七條　此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期間ヲ經過シタルトキハ特別ノ場合ヲ除ク外其訴訟ヲ爲ス權ヲ失フ可シ

第十八條　訴訟關係人ハ裁判所所在ノ地ニ住セサルトキハ其地ニ假住所ヲ定メ裁判所ニ屆出ツ可シ否ラサルトキハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルコトヲ得ス

第十九條　書類ノ送達ハ此法律ニ於テ別ニ規定アラサルトキハ民事訴訟法ノ規定ヲ準用ス

第二十條　官吏、公吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署、公署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ每葉ニ契印ス可シ若シ官署、公署ノ印ヲ用ユルコト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規定ニ背キタルトキハ其書類ノ效ナカル可シ

官吏、公吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ

第二十一條　官吏、公吏訴訟ニ關スル書類ノ原本、正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラス若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記入アルトキハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スルトキハ之ヲ讀ミ得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規定ニ背キタルトキハ其變更增減ノ效ナカル可シ

第二十一條ノ二　官吏、公吏ニ非サル者ノ署名捺印ス可キ場合ニ於テ捺印スルコト能ハサルトキハ署名ノミヲ爲シ署名スルコト能ハサルトキハ立會人ヲシテ代署セシメ捺印ノミヲ爲シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ立會人ヲシテ代署セシム可シ

立會人ハ其代署ノ事由ヲ記載シテ署名シ又ハ署名捺印ス可シ

官吏、公吏ノ面前ニ於テハ本人署名スルコト能ハサル場合ト雖モ立會人ヲ要セス官吏、公吏代署シテ其事由ヲ附記ス可シ

第二十二條　此法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサルトキハ其效アリトス

第二十三條　此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルコトヲ得ス

第二十四條　削除

第二編　裁判所

第一章　裁判所ノ管轄

第二十五條　犯罪ノ種類ニ關スル裁判ノ管轄ハ裁判所構成法ノ規定ニ從ノ管轄ヲ異ニスル數箇ノ犯罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタル時ハ上級ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

第二十六條　同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地又ハ被告人所在ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス

第二十七條　數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第二十八條　從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アルトキハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

裁判所構成法第五十條第二號ニ記載シタル皇族ノ犯罪ニ付テハ其正犯、從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス大審院ニ於テ之ヲ管轄ス

第二十九條　外國ニ在テ犯シタル罪本邦ノ法律ニ依リ處斷ス可キモノニシテ內地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタルトキハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタルトキハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

闕席判決ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最後ノ住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第三十條　海船內ノ犯罪ニ付テハ定繫港又ハ犯罪後最初ニ著船シタル地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第三十一條　管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第十條ノ規定ニ從フ

第三十二條　管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スコトヲ得

大審院ニ於テ管轄裁判所ヲ指定ス可キ場合ニ於テハ檢事總長ハ司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其申請ヲ爲スコトヲ得

第三十三條　管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲サントスル者ハ申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ其趣意書ヲ差出ス可シ

裁判所ハ書類ニ依リ其申請ヲ決定ス可シ

第三十四條　犯罪ノ性質、被告人ノ身分、員數、地方ノ民心其他重大ナル事情ニ由リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スル恐アルトキハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

第三十五條　公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ハ司法大臣ノ命ニ因リ大審院檢事總長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

大審院ニ於テハ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クコトナク其申請ヲ決定スヘシ

第三十六條　被告人ノ身分、地方ノ民心又ハ訴訟ノ模樣ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルコト能ハサル恐アルトキ

ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

第三十七條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ハ管轄裁判所ノ檢事其他訴訟關係人ヨリ上級裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタルトキハ前項ノ申請ヲ爲スコトヲ得ス

第三十八條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ヲ爲スニハ其趣意書二通ヲ原裁判所ニ差出ス可シ裁判所書記ハ速ニ一通ヲ相手方ニ送達シ相手方ハ其送達アリタルヨリ三日內ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

裁判所ニ於テ前項ノ申請ヲ受ケタルトキハ其訴訟手續ヲ停止ス可シ

第三十九條　前條ノ申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ於テハ書類ニ依リ其申請ヲ決定ス可シ

第二章　裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避、回避

第四十條　判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除斥セラル可シ

第一　判事被害者ナルトキ

第二　判事又ハ其配偶者ト被告人、被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三　判事其事件ニ付キ證人、鑑定人ト爲リタルトキ又ハ被告人若クハ被害者ノ法律上代理人ナルトキ

第四　判事其事件ノ豫審終結ニ干與シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ前審ニ干與シタルトキ

第四十一條　判事法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラルル場合及ヒ偏頗ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ情況アル場合ニ於テハ檢事其他訴訟關係人ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得

第四十二條　忌避ノ申請及ヒ其裁判ニ付テハ民事訴訟法第三十四條乃至第三十八條ノ規定ニ從フ

第四十三條　忌避ノ申請アリタルトキハ公判ニ付テハ其辯論ヲ中止ス可シ豫審ニ付テハ仍ホ其處分ヲ繼續ス可シ但急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審手續ヲ中止スルコトヲ得

第四十四條　判事自ラ第四十條ニ定メタル原由アルコトヲ認メ又ハ回避ス可キモノト思料シタルトキハ忌避申請ノ管轄裁判所ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

其裁判所ニ於テハ回避ノ申立ヲ裁判ス可シ

第四十五條　本章ノ規程ハ裁判所書記ニモ之ヲ準用ス但其裁判ハ書記所屬ノ裁判所之ヲ爲ス可シ

第三編　犯罪ノ搜査、起訴及ヒ豫審

第一章　搜査

第四十六條　檢事ハ後ニ記載シタル告訴、告發、現行犯其他ノ原由ニ因リ犯罪スルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ其證憑及ヒ犯人ヲ搜査ス可シ

第四十七條　警視總監及ヒ地方長官ハ各其管轄地內ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ搜査スルニ付キ地方裁判所檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府知事ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏、公吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ司法警察官トシテ犯罪ヲ搜査ス可シ

第一　警視警部長、警部、警部補

第二　憲兵將校、下士

第三　島司

第四　郡長

第五　林務官

第六　市町村長

第一節　現行犯罪

第四十八條　海船內ノ犯罪ニ付テハ船長ニ於テ司法警察ノ職務ヲ行フ可シ

第一節　告訴及ヒ告發

第四十九條　何人ニ限ラス犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

司法警察官告訴ヲ受ケタルトキハ違警罪ニ付キ卽決ヲ爲ス場合ヲ除ク外速ニ其書類ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送

致ス可シ

第五十條　告訴人ハ成ル可ク其證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キコトヲ申立ツ可シ

第五十一條　告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作リ告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第五十二條　官吏、公吏其職務ヲ行フニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ

告發ハ官吏、公吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ

第五十三條　何人ニ限ラス犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ第五十條第五十一條ノ規定ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ告發スルコトヲ得告發ヲ受ケタル司法警察官ハ第四十九條ノ規定ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第五十四條　告訴、告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スコトヲ得但第五十二條ノ場合ハ此限ニ在ラス

無能力者ノ告訴ハ法律上代理人之ヲ爲スモ其效アリトス

第五十五條　告訴、告發ハ其取下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スルコトヲ得此場合ト雖モ第十三條ノ規定ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受ケルコトアル可シ

第二節　現行犯罪

第五十六條　現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第五十七條　重罪、輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

第一　犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラルトキ

第二　兇器、贓物其他ノ物件ヲ携帶シ又ハ身體、被服ニ顯著ナル犯罪ノ痕跡アリテ犯人ト思料ス可キトキ

第三　家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戶主ヨリ官吏ニ其

處分ヲ求メタルトキ

第五十八條　司法警察官及ヒ巡査、憲兵卒其職務ヲ行フニ當リ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ令狀ヲ待タスシテ被告人ヲ逮捕ス可シ

罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪又ハ違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ被告人ノ氏名、住所ヲ問ヒ輕罪ニ付テハ檢事、違警罪ニ付テハ卽決ヲ爲ス可キ官署ニ告發ス可シ其氏名、住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ檢事若クハ官署ニ引致スルコトヲ得

第五十九條　巡査、憲兵卒被告人ヲ逮捕シタルトキハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ

其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第六十條　何人ニ限ラス重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得

第六十一條　前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルコトヲ得サルトキハ自己ノ氏名、職業、住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡査、憲兵卒ニ引渡スコトヲ得

被告人ヲ巡査、憲兵卒ニ引渡シタルトキハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ

被告人又ハ巡査、憲兵卒ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルコトヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムコトヲ得ス

第二章　起訴

第六十二條　地方裁判所檢事犯罪ノ搜査ヲ終リタルトキハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

第一　重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ

第二　輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ其裁判所ニ訴ヲ爲ス可シ

第三　區裁判所ノ管轄ニ屬スル罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ區裁判所檢事ニ送致ス可シ

第六十三條　削除

第六十四條　檢事ハ被告事件其裁判ノ管轄ニ屬セサルモノト思料シタルトキハ之ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致スル可シ

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサルモノト思料シタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第六十五條　前數條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ルトキハ檢事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ

第六十六條　檢事豫審ヲ求ムルトキハ證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所逮捕ス可キ人名及ヒ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

第三章　豫審

第六十七條　現行ノ重罪、輕罪ヲ除ク外豫審判事ハ檢事ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取掛ルコトヲ得ス此規定ニ背キタルトキハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ

第六十八條　檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟記錄ヲ檢閲スルコトヲ得但二十四時內ニ之ヲ還付ス可シ

又必用ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スコトヲ得

第一節　令狀

第六十九條　豫審判事ハ檢事ノ起訴ニ因リ重罪、輕罪ノ事件ヲ受理シタルトキハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アルヘシ召喚狀ニ因リ出頭シタル被告人ハ卽時ニ之ヲ訊問ス可シ又遲クトモ出頭ノ日ヲ過クルコトヲ得ス

第七十條　豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地內ニ住セサルトキハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第七十一條　豫審判事又ハ受託判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出頭セサルトキハ拘引狀ヲ發スルコトヲ得

第七十二條　豫審判事又ハ受託判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ拘引狀ヲ發スルコトヲ得

第一　被告人定リタル住所アラサルトキ

第二　被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スル恐アルトキ

第三　被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスル恐アルトキ

第七十三條　拘引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル判事ニ被告人ヲ引致ス可シ

拘引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時內ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スルトキハ拘留狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放スヘシ

第七十四條　豫審判事又ハ受託判事ハ召喚狀又ハ拘引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應スル能ハサルコトヲ疏明シタルトキハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得

第七十五條　拘留狀ハ被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キモノト思料スルニ非サレハ之ヲ發スルコトヲ得ス但被告人逃亡シタル場合ニ於テハ其訊問ヲ爲サスシテ之ヲ發スルコトヲ得

第七十六條　總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名、職業、住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除ク外其氏名分明ナラサルトキハ容貌、體格等ヲ明示ス可シ

又令狀ニハ之ヲ發スル年月日時ヲ記載シ判事及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ

第七十七條　拘引狀、拘留狀ハ時宜ニ因リ正本數通ヲ作リ巡査、憲兵卒數人ニ分付スルコトアルヘシ

召喚狀ハ執達吏ヲシテ被告ニ送達セシメ拘引狀、拘留狀ハ巡査、憲兵卒ヲシテ之ヲ執行スヘシ

拘引狀、拘留狀ヲ執行スルニハ其正本ヲ携帶シ被告人ノ請求アルトキハ之ヲ示ス可シ

拘引狀、拘留狀ヲ執行シタルトキハ其正本ニ執行ノ場所及日時ヲ記載シ若シ執行スルコト能ハサルトキハ其事由ヲ記載シテ署名捺印ス可シ

巡査、憲兵卒ハ令狀ニ關スル書類ヲ檢事ニ差出ス可シ

第七十八條　令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査、憲兵卒ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿シタリト思料シタルトキハ其地ノ市町村長又ハ其差支アルトキハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラス搜索調書ヲ作リ立會ト共ニ署名捺印ス可シ

家宅搜索ハ日出前日沒後之ヲ爲スコトヲ得ス但旅店、割烹店其他夜間ト雖モ衆人ノ出入スル場所ニ付テハ其

公開時間内ニ限リ何時ニテモ捜索ヲ爲スコトヲ得

第七十九條　豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潜匿シタルコトヲ知リ又ハ潜匿シタリト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スルトキハ巡査、憲兵卒ニ令狀ヲ帶行セシムルコトヲ得

巡査、憲兵卒ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事、檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ

第八十條　豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルコト能ハサルトキハ各檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ捜査及ヒ逮捕ヲ爲ス可キコトヲ請求スルヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ捜索及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ此場合ニ於テ檢事ノ發シタル逮捕狀ハ拘留狀ト同一ノ效ヲ有ス

第八十一條　豫備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人、軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタルトキハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ令狀ヲ示ス可シ其長官又ハ隊長ハ已ムコトヲ得サル差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可シ

第八十二條　勾留狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監獄署ニ引致ス可シ若シ其監獄署ニ引致スルコト能ハサルトキハ假ニ最近ノ監獄署ニ引致スルコトヲ得

何レノ場合ニ於テモ監獄署長ハ令狀ヲ檢閲シ被告人ヲ受取リ其證書ヲ渡ス可シ

第八十三條　削除

第八十四條　在監中ノ被告人中ニ對シ發シタル勾留狀ハ司獄官吏ヲシテ之ヲ執行セシム

勾留狀執行ニ關シテハ第七十七條ノ規定ヲ適用ス

第八十五條　勾留ヲ受ケタル被告人ハ官吏ノ立會ニ依リ他人ト接見スルコトヲ得

書類ハ豫審判事又ハ檢事ノ檢閲ヲ經タル後他人ト之ヲ授受スルコトヲ得

豫審判事ハ必要ナリト思料シタルトキハ被告人ノ監房ヲ別異シ他人トノ接見、書類物件ノ授受ヲ禁シ又ハ其書類物件ヲ差押フルコトヲ得

第八十六條　豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キモノニ非スト思料シタルトキハ豫審中何時ニテモ勾

留狀ヲ取消ス可シ

第二節　密室監禁　削除

第八十七條　削除

第八十八條　削除

第八十九條　削除

第三節　證據

第九十條　被告人ノ自白、官吏ノ檢證調書、證據物件、證人及ヒ鑑定人ノ供述其他諸般ノ徵憑ハ判斷ニ任ス

第九十一條　豫審判事ハ檢事若クハ被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徵憑ヲ集取ス可シ

第九十二條　豫審判事臨檢、捜索、物件差押又ハ被告人、證人ノ訊問ヲ爲スニハ裁判所書記ノ立會ヲ必要トス

書記ハ調會ヲ作リ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルコト能ハサルトキハ立會人二名アルヲ要ス但監獄署ニ就テ被告人ヲ訊問スルトキハ其監獄署ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ

前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作リ之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其效ナカル可シ

第四節　被告人ノ訊問及ヒ對質

第九十三條　豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス

豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ自白セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用ユ可カス

第九十四條　裁判所書記ハ訊問及ヒ供述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ

第九十五條　豫審判事ハ被告人ニ其供述ノ相違ナキヤ否ヤヲ問ヒ署名捺印セシム可シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第九十六條　被告人其供述ニ付キ變更增減ス可キコトヲ申立タルトキハ更ニ訊問ヲ爲シ其訊問及ヒ供述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第九十七條　被告人ハ供述書ノ謄本ヲ求ムルコトヲ得

第九十八條　豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルコト、人違ナルコト其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模樣ヲ證スル爲メ必要ナリトスルトキハ被告人ト他ノ被告人、證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルコトヲ得

第九十九條　書記ハ對質人ノ供述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ

第九十五條　第九十六條ノ規定ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百條　被告人又ハ對質人聾ナルトキハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナルトキハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聾者、啞者文字ヲ知ラサルトキハ通事ヲ命ス可シ

被告人又ハ對質人國語ニ通セサルトキ亦同シ

第百一條　通事ハ正實ニ通譯ス可キ宣誓ヲ爲ス可シ

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第百三十六條第百三十七條第百四十一條ノ規定ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第五節　檢證、搜索及ヒ物件差押

第百二條　豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ犯所又ハ其他ノ場所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

第百三條　豫審判事ハ犯罪ノ性質、方法、日時、場所及ヒ被告人ノ人違ナキコトヲ證明ス可キ模樣ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ模樣ヲモ記載ス可シ

第百四條　豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スル疑アル者ノ住所ニ臨檢シ搜索ヲ爲スコトヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者住居ニ在ラサルトキハ同居ノ親屬若シ其在ラサルトキハ市町村長ノ立會アルヲ要ス

第七十八條第三項ノ規定ハ本條ニモ亦之ヲ適用ズ

第百五條　豫審判事ハ被告人又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スル疑アル者ノ身體及ヒ之ニ屬スル物件ニ就キ搜索ヲ爲スコトヲ得

第百六條　豫審判事ハ臨檢、搜索ニ因リ發見シタル物件其事實ヲ證明スルニ足ル可シト思料シタルトキハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ裁判所書記之ヲ擔任ス可シ

第百七條　豫審判事ハ臨檢、搜索、物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサルトキハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守ヲ置クコトヲ得

第百八條　被告人ハ臨檢、搜索、物件差押ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會セシムルコトヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタルトキハ自ラ立會フコトヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスルトキハ此限ニ在ラス

第百九條　豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシムル可シ

其訊問及ヒ供述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第百十條　豫審判事ハ臨檢、搜索ノ場所ニ於テ證人ノ供述ヲ聽クコトヲ必要ナリトスルトキハ第百十五條以下ノ規定ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ

第百十一條　豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルコトヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アルトキハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルコトヲ得

第百十二條　豫審判事ハ其管轄地內ト雖モ時宜ニ依リ臨檢、搜索、物件差押ノ事ヲ區裁判所判事ニ囑託スルコトヲ得

第百十三條　豫審判事ノ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ驛遞、電信、鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知

シ被告人又ハ豫審事件ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ此等ノ者ニ對シ發シタル書類、電報又ハ物件ヲ受取開披スルコトヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

第百十四條　證言ヲ拒ムコトヲ得ル者ノ所持スル物件ニシテ其黙祕ス可キ義務アル事情ニ關スルモノハ其承諾アルニ非サレハ之ヲ差押ヘ及ヒ開披スルコトヲ得ス

第六節　證人訊問

第百十五條　證人ノ呼出狀ニハ其氏名、住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ

又出頭ノ日時、場所及呼出ニ應セサルトキハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルコトアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第百十六條　證人疾病其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ疏明シタルトキハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第百十七條　證人ト爲ル可キ者豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ナルトキハ其所屬ノ長官又ハ隊長ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官又ハ隊長ハ即時ニ出頭セシム可キコトヲ認可シ又ハ職務上已ムコトヲ得サル差支アルトキハ其事由ヲ付シテ出頭ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第百十八條　豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除ク外證人呼出ニ應セサルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ弐圓以上弐拾圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得若シ證人再度ノ呼出ニ應セサルトキハ費用賠償ノ外二倍ノ罰金ヲ言渡ス可シ又勾引狀ヲ發スルコトヲ得

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス可シ其勾引ニ付テモ亦同シ

第百十九條　豫審判事ハ證人罰金言渡書ノ送達アリタルヨリ三日內ニ其出頭セサリシコトヲ正當ノ理由ヲ以テ辯解シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ

第百二十條　證人呼出狀ニ因リ出頭シタルトキハ其呼出狀ヲ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタルトキハ其人遅ナキコトヲ疏明ス可シ

第百二十一條　豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名、年齡、職業、住所及ヒ第百二十三條ニ記載シタル者ナリヤ否ヤヲ問フ可シ

第百二十二條　豫審判事ハ證人ヲシテ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ黙祕セス又何事ヲモ附加セサル旨ヲ宣誓セシム可シ

裁判所書記ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第百二十三條　左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコトヲ許サス但宣誓ヲ爲サシメスシテ事實參考ノ爲メ其供述ヲ聽クコトヲ得

第一　民事原告人

第二　民事原告人及ヒ被告人ノ親屬但姻族ニ付テハ婚姻ノ離除シタルトキト雖モ亦同シ

第三　民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ此等ノ者ノ後見ヲ受クル者

第四　民事原告人及ヒ被告人ノ雇人又ハ同居人

第百二十四條　左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

第一　十六歲未滿ノ幼者

第二　知覺精神ノ不十分ナル者

第三　瘖啞者

第四　公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

第五　重罪事件又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

第六　現ニ供述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證憑十分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

第百二十五條　左ニ記載シタル場合ニ於テハ證書ヲ拒ムコトヲ得

第一　官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者其職務上黙祕ス可キ義務アル事情ニ關スルトキ

第二　醫師、藥劑師、藥種商、產婆、辯護士、辯護人、公證人又ハ此等ノ職ニ在リシ者其業務上取扱ヒタルコトニ付キ知得タル事實ニシテ黙祕ス可キモノニ關スルトキ

證言ヲ拒ム者ハ拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ疏明ス可シ

第百二十六條　證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ供述ヲ肯セサルトキハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ四十圓以下ノ罰金又ハ科料ヲ言渡ス但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金又ハ科料ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ス可シ

第百二十七條　證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルコトヲ得

第百二十八條　豫審判事ハ證人ノ供述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスルトキハ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得

若シ證人同行スルコトヲ肯セサルトキハ第百十八條ノ規定ニ從フ

第百二十九條　第百條第百一條ノ規定ハ證人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百三十條　皇族證人ナルトキハ豫審判事其所在ニ就キ訊問ヲ爲ス可シ

各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所在地外ニ滯在スルトキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス可シ

帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滯在中ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス可シ

第百三十一條　豫審判事ハ證人ニ其供述ノ相違ナキヤ否ヤヲ知ラシムル爲メ裁判所書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ

證人ハ其供述ヲ變更增減センコトヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルコト及ヒ變更增減ノ條件ヲ調書ニ記載ス可シ

調書ニハ豫審判事、書記及ヒ證人共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第百三十二條　豫審判事ハ證人裁判所所在ノ地ニ住セサルトキハ其住居ノ地ノ區裁判所判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ルトキハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

第百三十三條　第百十八條第百十九條及ヒ第百二十六條ニ揭ケタル證人ニ對スル豫審判事ノ權ハ受託判事ニモ屬ス

第百三十四條　證人ハ出頭ニ付テノ旅費、日當ヲ要ムルコトヲ得

第七節　鑑定

第百三十五條　豫審判事ハ犯罪ノ性質、方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定ヲ必要ナリトスルトキハ學術、職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得ヘキ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

鑑定ノ爲メ必要ナリトスルトキハ死體ノ解剖ヲ命シ又既ニ埋葬シタル死體ヲ解剖シ若クハ檢視スル爲メ墳墓ノ發掘ヲ命スルコトヲ得

第百三十六條　鑑定ニ付テハ第百十五條第百十八條乃至第百二十一條第百二十三條乃至第百二十五條及ヒ第百二十八條ノ規定ヲ準用ス但鑑定人ニ對シテハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得ス

第百條第百一條ノ規定ハ鑑定人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百三十七條　鑑定人ハ公平且正實ニ鑑定ス可キ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ第百二十二條ノ式ニ從フ

第百三十八條　鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサルトキハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ四十圓以下ノ罰金又ハ科料ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

第百三十九條　豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ增加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルコトヲ得

第百四十條　鑑定人ハ鑑定書ヲ作リ其手續、結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ

若シ綜果ヲ得サルトキハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスルトキハ各自鑑定書ヲ作リ又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載スヘシ

第百四十一條　鑑定人ハ旅費、日當及ヒ立替金ノ辨濟ヲ要ムルコトヲ得

第八節　現行犯ノ豫審

第百四十二條　豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ檢事ノ請求ヲ待タス直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ノ規定ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第百四十三條　前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタルモノトス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルコトヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キモノニ非サル意見アリト雖モ通常ノ規定ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第百四十四條　地方裁判所檢事及ヒ區裁判所檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ豫審判事ヲ待ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得但罰金又ハ科料及ヒ費用賠償ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス

證人及ヒ鑑定人ノ供述ハ宣誓ヲ用ユルコトナク之ヲ聽ク可シ

第百四十五條　前條ノ場合ニ於テ地方裁判所檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致シ區裁判所檢事ハ之ヲ地方裁判所檢事ニ送致ス可シ

第百四十六條　區裁判所檢事其裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ第百四十四條ニ規定シタル處分ヲ爲スコトヲ得

若シ被告人ニ對シ勾留狀ヲ發シタルトキハ三日內ニ起訴ノ手續ヲ爲ス可シ

第百四十七條　第百四十四條第百四十六條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フコトヲ得但勾留狀ヲ發スルコトヲ得ス

司法警察官ハ證憑書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致シ且被告人ヲ逮捕シタルトキハ共ニ之ヲ送致ス可シ

第百四十八條　地方裁判所檢事ハ區裁判所檢事又ハ司法警察官ヨリ事件ノ送致ヲ受ケタルトキハ一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ同時ニ被告人ヲ受取リタルトキハ二十四時內ニ之ヲ訊問シ勾留狀ヲ發シ又ハ發セスシテ前項ノ手續ヲ爲ス可シ

第百四十九條　地方裁判所檢事ハ何レノ場合ニ於テモ輕罪ノ現行犯ニ依リ豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタルトキハ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラス直チニ其裁判所ニ訴ヲ爲スコトヲ得

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カサルモノト思料シタルトキハハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第九節　保釋

第百五十條　豫審判事ハ豫審中勾留狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出頭ス可キ證書ヲ差出シ且保證ヲ立テシメ保釋ヲ許スコトヲ得

被告人無能力ナルトキハ法律上代理人ヨリ保釋ヲ求ムルコトヲ得

第百五十一條　保證ノ金額ハ豫審判事之ヲ定メ保釋ヲ許ス言渡書ニ記載ス可シ

第百五十二條　保證ヲ爲スニハ被告人又ハ法律上代理人ヨリ金錢若クハ有價證券ヲ差出ス可シ又裁判所ノ管轄地內ニ住シ且十分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スコトヲ得

第百五十三條　保釋人被告人ヲ呼出ストキハ出頭ヨリ二十四時前ニ其報告ヲ爲ス可シ

第百五十四條　保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出頭セサルトキハ保證金ノ全部又ハ一分ヲ沒收ス可シ

第百五十五條　保證金ヲ沒收スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

第百五十六條　豫審判事保證金ヲ沒收シタルトキハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スコトヲ必要ナリトスルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第百五十七條　豫審判事保證金ヲ沒收シタル後免訴ノ言渡、違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ公判ニ付スル言渡ヲ爲シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ沒收シタル金額ヲ還付ス可シ

第百五十八條　豫審判事免訴ノ言渡、違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ公判ニ付スル言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消シタルトキハ保證金ヲ還付ス可シ

第百五十八條ノ二　保釋ヲ許ササル言渡ニ對シテハ其裁判所ヘ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得

裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其許否ヲ決定ス可シ

第百五十九條　豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルコトヲ得

責付ヲ爲スニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ被告人ヲ出頭セシム可キ證書ヲ差出サシムヘシ

第百六十條　責付中被告人ヲ呼出ストキハ出頭ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

被告人正當ノ事由ナクシテ出頭セサルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ノ言渡ヲ取消ス可シ

第十節　豫審終結

第百六十一條　豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタルトキハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ訴訟記錄ヲ送致ス可シ

檢事ハ訴訟記錄ニ意見ヲ付シ三日內ニ之ヲ還付ス可シ

第百六十二條　檢事ハ豫審十分ナラスト思料シタルトキハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサルトキハ檢事ハ訴訟記錄ニ意見ヲ付シ二十四時內ニ之ヲ還付ス可シ

第百六十三條　豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後數條ニ記載シタル決定ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第百六十四條　豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルコトヲ認メタルトキハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第百六十五條　豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタルトキハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第一　犯罪ノ證憑十分ナラサルトキ

第二　被告事件罪ト爲ラサルトキ

第三　公訴ノ時效ニ罹リタルトキ

第四　確定判決ヲ經タルトキ

第五　大赦アリタルトキ

第六　法律ニ於テ其罪ヲ免ス可キ

第百六十六條　被告事件違警罪ナリト思料シタルトキハ區裁判所ニ移ス言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタルトキハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第百六十七條　被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬スルモノト思料シタルトキハ公判ニ付スル言渡ヲ爲ス可シ

被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ルモノト思料シタルトキハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第百六十八條　削除

第百六十九條　豫審終結ノ決定ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ

管轄違ノ言渡ヲ爲スニハ其原由ヲ明示シ若シ被告人ヲ勾留ス可キトキハ其原由ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルコト公訴受理ス可カラサルコト及ヒ其原因又犯罪ノ證憑十分ナラサルトキハ其旨ヲ明示ス可シ

區裁判所ニ移ス言渡又ハ公判ニ付スル言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質、模樣、證憑ノ十分ナルコト及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第百七十條　前條ノ決定ニハ第七十六條ノ規定ニ從ヒ被告人ニ送達ス可シ

第百七十一條　豫審終結ノ決定ノ正本ハ速ニ檢事及ヒ被告人ニ送達ス可シ

第百七十二條　檢事ハ免訴又ハ管轄違ノ決定ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得

被告人ハ重罪公判ニ付スル決定ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得

第百七十三條　削除

第百七十四條　豫審終結ノ決定ハ抗告ノ期間内又抗告アリタルトキハ其決定アルマテ執行ヲ停止ス

第百七十五條　豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其決定確定シタルトキハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ再ヒ訴ヲ受クルコトナカル可シ但新ナル證憑アルトキハ此限ニ在ラス

新ナル證憑アルトキハ檢事ヨリ之ヲ其裁判所ニ差出シ裁判所ニ於テ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヤヲ決定ス可シ

第四編　公判

第一章　通則

第百七十六條　公判ハ判事、檢事、裁判所書記出廷シテ之ヲ爲スモノトス

第百七十七條　被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置クコトアル可シ

第百七十八條　裁判長ハ何時ニテモ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

裁判所ハ被告人ヲ訊問シタル後何時ニテモ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人ニ對シ勾留狀ヲ發スルコトヲ得

第百七十九條　被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用ユルコトヲ得

辯護人ハ裁判所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タルトキハ辯護士ニ非サル者ト雖モ辯護人ト爲スコトヲ得

第百七十九條ノ二　左ノ場合ニ於テ被告人自ラ辯護人ヲ選任セサルトキハ裁判所ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ辯護人ヲ付スルコトヲ得

第一　被告人十五歲未滿ナルトキ

第二　被告人婦女ナルトキ

第三　被告人聾者又ハ啞者ナルトキ

第四　被告人精神病ニ罹リ又ハ意識不十分ナルノ疑アルトキ

第五　被告事件ノ模樣ニ因リ裁判所ニ於テ辯護人ヲ必要ナリトスルトキ

前項ノ辯護人ハ裁判長ノ職權ヲ以テ其裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ選任スヘシ但辯護士一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルコトヲ得

第百八十條　辯護人ハ裁判所ニ於テ訴訟記錄ヲ閲讀シ且之ヲ抄寫スルコトヲ得

第百八十一條　被告人ノ法律上代理人ハ其補佐人ト爲リ辯論ニ與カルコトヲ得

第百八十二條　被告人出頭シテ辯論スルコトヲ肯セサルトキハ對席トシテ裁判ヲ爲ス可シ

被告人審問ヲ妨ケ又ハ不當ノ行狀ヲ爲シ裁判長ヨリ退廷又ハ勾留ヲ命セラレタルトキ亦同シ若シ辯論二日ニ渉ルトキハ更ニ被告人ヲ出頭セシム可シ

第百八十三條　被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出頭スルコト能ハサルトキハ痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス但罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ被告人代人ヲ差出シタルトキハ此限ニ在ラス

辯論ニ取掛リタル被告人精神錯亂シタルトキハ其痊癒ノ後新ニ辯論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹ルトキハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求アリタルトキハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ

若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタルトキハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スコトナク裁判ヲ爲ス可シ

第百八十四條　裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラス但辯論ニ因リ發見シタル附帶ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスルトキハ本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得

第百八十五條　左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

第一　同一ノ場合ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタルトキ

第二　數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタルトキ

第三　自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免カル爲メ他ノ罪ヲ犯シタルトキ

第百八十六條　檢事及ヒ被告人ハ第一審第二審ヲ問ハス本案ノ判決アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサル申立ヲ爲スコトヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサル言渡ヲ爲スコトヲ得

第百八十七條　裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ却下シタルトキハ本案ノ判決ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第百八十八條　調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出スコトヲ得

第百八十九條　豫審ニ於テ訊問シタル證人又ハ鑑定ヲ爲シタル鑑定人ハ更ニ之ヲ呼出スコトヲ得

豫審ニ於ケル證人ノ供述書又ハ鑑定人ノ鑑定書ハ更ニ其證人、鑑定人ヲ呼出ササルトキ、證人鑑定人呼出ヲ受ケ出頭セサルトキ又ハ豫審及ヒ公判ニ於ケル供述鑑定ヲ比較ス可キトキハ檢出其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルコトヲ得

第百九十條　第十五條以下ノ規定ハ公判ノ證人ノ第百三十五條以下ノ規定ハ公判ノ鑑定人ニモ亦之ヲ準用ス

第百九十一條　證人疾病其他正當ノ事故ニ因リ出頭スル能ハサルコトヲ疏明シタルトキハ裁判所ハ其部員一名ニ命シ又ハ區裁判所判事ニ囑託シ其所在ニ就テ之ヲ訊問セシムルコトヲ得

第百九十二條　檢事、被告人及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出ス證人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ各相手方ニ送達ス可シ

第百九十三條　證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラス又供述前辯論ニ立會フ可カラス既ニ供述ヲ爲シタル後ハ公廷ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退去ノ允許ヲ得タルトキハ此限ニ在ラス

第百九十四條　證人及ヒ被告人ノ訊問ハ裁判長之ヲ爲スモノトス

陪席判事及ヒ檢事ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルコトヲ得

訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル事項ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問ス可キコトヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第百九十五條　證人又ハ鑑定人ノ供述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタルトキハ裁判所ニ於テ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ發シ豫審判事ニ送致ス可シ

其證人又ハ鑑定人ノ供述ハ裁判所書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得

第百九十六條　被告人聾者、啞者又ハ國語ニ通セサル者ナルトキハ第百條第百一條ノ規定ニ從フ

第百九十七條　裁判所ニ於テハ證人被告人ノ面前ニ於テ十分ナル供述ヲ爲スコトヲ得サル可シト思料シタルトキハ其證人ノ供述中被告人ヲ退廷セシムルコトヲ得但裁判長ハ證人供述ヲ終リタル後被告人ヲ入廷セシメ其供述シタル事項ヲ告知ス可シ

本條ノ規定ハ共同被告人ニモ亦之ヲ適用ス

第百九十八條　裁判長ハ各證憑ノ取調終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヤヲ問ヒ且其利益ト爲ル可キ證憑ヲ差出シ得ヘキコトヲ告知ス可シ

又證憑物件ハ被告人ニ示シテ辯解ヲ爲サシム可シ

第百九十九條　辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタルトキハ裁判所ニ於テ檢事ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ裁判ス可シ

第二百條　裁判所ニ於テハ公訴ノ判決ト同時ニ私訴ノ判決ヲ爲ス可シ

私訴ニ付キ取調未タ十分ナラサルトキハ公訴ノ判決アリタル後其判決ヲ爲スコトヲ得

第二百一條　被告人有罪ト爲リタルトキハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴ニ關スル訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔ス可キ言渡ヲ爲ス可シ

免許又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴ニ關スル訴訟費用ハ國庫之ヲ負擔ス

私訴ニ關スル訴訟費用ノ負擔ハ民事訴訟法ノ規定ニ從フ

第二百二條　被告人有罪ト爲リタルト否トヲ問ハス沒收ニ係ラサル差押物ハ所有者ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スル言渡ヲ爲ス可シ

第二百三條　刑ノ言渡ヲ爲スニハ罪トナル可キ事實及ヒ證據ニ依リテ之ヲ認メタル理由ヲ明示シ且法律ヲ適用シ其理由ヲ付ス可シ

無罪又ハ免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦其理由ヲ明示ス可シ

第二百四條　判決ノ言渡ハ辯論ヲ終リタル後即日又ハ次ノ開廷日ニ之ヲ爲ス可シ
判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス其判決ノ理由ハ判決ノ言渡ト同時ニ之ヲ朗讀シ又ハ口頭ニテ其要領ヲ告ク可シ

第二百五條　判決ノ原本ニハ其裁判ヲ爲シタル裁判所、年月日、其事件ニ干與シタル檢事ノ官氏名ヲ記載シ判事、裁判所書記共ニ署名捺印ス可シ

第二百六條　訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ判決ノ正本、謄本又ハ抄本ヲ求ムルコトヲ得上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタルトキハ書記ヨリ二十四時內ニ之ヲ下付ス可シ

第二百七條　對席判決ニ因リ刑ノ言渡アリタルトキハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其判決ニ對シ上訴ヲ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ告知シ又闕席判決ニ因リ刑ノ言渡アリタルトキハ其判決ニ對シ故障ヲ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ記載ス可シ
若シ其告知又ハ記載ナキトキハ更ニ其通知アルマテ上訴及ヒ故障期間ノ經過ヲ停止ス

第二百八條　裁判所書記ハ公判始末書ヲ作リ左ノ事項其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ
第一　公ニ辯論ヲ爲シタルコト又ハ公開ヲ禁シタルコト及ヒ其事由
第二　被告人ノ訊問及ヒ其供述
第三　證人、鑑定人ノ供述及ヒ宣誓ヲ爲シタルコト若シ宣誓ヲ爲ササルトキハ其事由
第四　證據物件
第五　辯論中異議ノ申立アリタルコト其申立ニ付キ檢事其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ裁判
第六　辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ供述セシメタルコト

第二百九條　公判始末書ニハ前條ニ記載シタル事項ノ外裁判ヲ爲シタル裁判所、年月日、裁判長、陪席判事、檢事及ヒ裁判所書記ノ官氏名ヲ記載スヘシ
辯論數日ニ涉ルトキハ其旨及ヒ同一ノ判事出席シタルコトヲ記載ス可シ
辯論中補充判事ヲシテ代ラシメタルトキハ其旨ヲ記載ス可シ

第二百十條　公判始末書ハ判決言渡ヨリ三日內ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ
裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アルトキハ其紙尾ニ記載ス可シ

第二百十一條　判決及ヒ公判始末書ノ原本ハ訴訟記錄ニ添付シ其裁判所ニ保存ス可シ若シ上訴アリタルトキハ之ヲ上訴裁判所ニ送付ス可シ

第二章　區裁判所公判

第二百十二條　區裁判所ハ左ノ場合ニ於テ其管轄ニ關スル違警罪及ヒ輕罪ノ公訴ヲ受理ス
第一　檢事ノ起訴アリタルトキ
第二　豫審判事又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ移ス裁判アリタルトキ

第二百十三條　檢事ハ何レノ場合ニ於テモ被告人ニ對シ呼出狀ヲ發ス可キコトヲ裁判所ニ請求ス可シ
裁判所ハ裁判所書記ヲシテ被告人ニ對シ呼出狀ヲ發セシム可シ

第二百十四條　呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名、職業、住所、出頭ノ日時、場所及ヒ被告事件ヲ記載シ且被告事件違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ナルトキハ代人ヲシテ出頭セシムルコトヲ得ヘキ旨ヲ記載ス可シ
若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其事件ニ取調ヲ受ケサリシトキノ辯論準備ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルコトヲ得

第二百十五條　呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

第二百十六條　判事ハ豫審ヲ經サル被告事件急速ヲ要スルトキハ公判ニ取掛ル前檢證處分ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ檢事其他訴訟關係人ノ立會ヲ要セス

第二百十七條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ
又呼出ヲ受ケスシテ出頭シタル者ト雖モ異議ノ申立ナキトキハ裁判所ニ於テ證人トシテ其供述ヲ聽クコトヲ得

第二百十八條　判事ハ先ツ被告人ノ氏名、年齡、身分、職業、住所、出生ノ地ヲ問フ可シ
檢事ハ被告人事件ヲ陳述ス可シ

第二百十九條　判事ハ被告人事件ニ付キ被告人ヲ訊問ス可シ
必要ナル調書其他證憑書類ハ書記ヲシテ朗讀セシメ又證人ノ供述ヲ聽キ其他證憑ノ取調ヲ爲ス可シ
若シ被告人ノ自白アリタル場合ニ於テ檢事、民事原告人ノ異議ナキトキハ他ノ證憑ヲ取調フルニ及ハス
第二百二十條　證憑調濟ノ後檢事ハ事實及ヒ法律適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ
被告人及ヒ其辯護人ハ答辯ヲ爲スコトヲ得
檢事、被告人及ヒ辯護人ハ迭ヒニ辯論ヲ爲スコトヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ヲシテ供述セシム可シ
第二百二十一條　公訴ニ付キ辯論終リタル後民事原告人ハ被害ノ事實ヲ證明シ且私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ
被告人、辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲スコトヲ得
第二百二十二條　被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ判決ヲ以テ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ被告人拘留ヲ受ケタルトキハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ
本條ノ場合ニ於テ拘留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前拘留狀ヲ存シ又ハ新ニ拘留狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ
第二百二十三條　被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬シ且犯罪ノ證憑十分ナルトキハ判決ヲ以テ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ
第二百二十四條　犯罪ノ證憑十分ナラス又ハ被告事件犯罪ト爲ラサルトキハ判決ヲ以テ無罪ノ言渡ヲ爲シ又第百六十五條第三號以下ノ場合ニ於テハ判決ヲ以テ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ
第二百二十五條　前二條ノ場合ニ於テハ私訴ニ付キ其請求價額ノ多寡ニ拘ラス判決ヲ爲ス可シ
第二百二十六條　呼出ヲ受ケタル被告人又ハ罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ其代人公判ノ期日ニ出頭セサルトキハ檢事ノ請求スル所ヲ聽キ闕席判決ヲ爲ス可シ
私訴關係人出頭セサルトキハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ闕席判決ヲ爲ス可シ

第二百二十七條　禁錮ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ被告人出頭セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ公判ノ呼出狀ヲ本人ニ送達シタル證アルニ非サレハ闕席判決ヲ爲ス可カラス
豫審終結ノ言渡書又ハ公判ノ呼出狀ヲ本人ニ送達スルコト能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ豫審ノ期間ヲ定メ其期間ニ被告人出頭セサルトキハ闕席判決ヲ爲ス可キ告知書ヲ其親族又ハ本籍又ハ最後ノ住所ノ地ノ市町村長ニ送達ス可シ若シ其本籍若クハ最後ノ住所ノ地分明ナラサルトキハ同上ノ告知書ヲ少クトモ一月間裁判所ノ掲示板ニ貼付シテ公示ス可シ
第二百二十八條　闕席判決ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席者ニ送達ス可シ
闕席判決ヲ受ケタル者ハ其判決ニ對シ故障ヲ申立ルコトヲ得
第二百二十九條　故障申立ノ期間ハ三日トス此期間ハ罰金以下ノ刑ヲ言渡シタル判決及ヒ私訴ノ判決ニ付テハ闕席判決ノ送達ヲ以テ始マリ禁錮ノ刑ヲ言渡シタル判決ニ付テハ被告人自ラ其送達ヲ受ケ又ハ判決執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルコトヲ知リタル日ヲ以テ始マル
第二百三十條　故障ヲ申立テントスル者ハ闕席判決ヲ爲シタル裁判所ニ其申立書ヲ差出ス可シ
第二百三十一條　裁判所ニ於テハ故障ノ申立アリタルコトヲ相手方ニ通知シ且其事件ヲ公判ニ付ス可キ期日ヲ定メ訴訟關係人ヲ呼出ス可シ
第二百三十二條　裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ故障ヲ許ス可キヤ否ヤ又故障ノ期間ニ於テ申立ヲ爲シタルヤ否ヤヲ調査シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ故障ヲ棄却ス可シ
第二百三十三條　故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ通常ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ前項ノ場合ニ於テ故障申立人闕席シタルトキハ更ニ故障ヲ申立ルコトヲ得ス
第二百三十四條　第二百四十七條第二百四十八條ノ規定ハ闕席判決ニ對スル故障ニモ亦之ヲ準用ス

第三章　地方裁判所公判

第二百三十五條　地方裁判所ニ於テハ豫審判事又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ移ス裁判ニ因リ其管轄ニ屬スル輕罪及ヒ重罪ノ公訴ヲ受理ス

又輕罪ニ付テハ檢事ノ起訴ニ因リ其公訴ヲ受理ス

第二百三十六條　前章ノ規定ニ別段ノ定メナキモノニ限リ地方裁判所ノ公判ニ準用ス

第二百三十七條　重罪事件ニ付テハ開廷前裁判長又ハ受命判事ハ裁判所書記ノ立會ニ依リ一應被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタルヤ否ヤヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサルトキハ裁判長ノ職權ヲ以テ其裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任ス可シ被告人及ヒ辯護士ニ異議ナキトキハ辯護士一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルコトヲ得

書記ハ本條ノ訊問ニ付キ特ニ調書ヲ作ル可シ

第二百三十八條　裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ受命判事ヲシテ臨檢ノ處分ヲ爲シ報告ヲ爲サシムルコトヲ得

第二百三十九條　裁判所ニ於テハ被告人其罪ヲ自白シタルトキト雖モ仍ホ證憑ヲ取調ヘサル可カラス

第二百四十條　裁判所ニ於テ被告事件區裁判所ノ管轄ニ屬スルモノト認メタルトキト雖モ第一審ノ判決ヲ爲ス可シ

私訴ニ付キ其請求ノ價格通常民事上裁判所ノ管轄ニ屬スルトキ亦同シ

第二百四十一條　裁判所ニ於テ輕罪トシテ受理シタル事件ヲ重罪ナリトスルトキハ其事件ヲ豫審判事ニ送付スル決定ヲ爲ス可シ檢事ノ請求アルトキ亦同シ

被告事件豫審ヲ經タルトキハ公判ヲ止メ受命判事ヲシテ其事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシム可シ

受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

第五編　上訴

第一章　通則

第二百四十二條　檢事其他訴訟關係人ハ法律ニ許シタル上訴ヲ爲スコトヲ得

檢事ハ被告人ノ利益ノ爲メニモ亦上訴ヲ爲スコトヲ得

第二百四十三條　辯護人ハ被告人ニ代リ上訴ヲ爲スコトヲ得但被告人ノ明言シタル意思ニ反スルコトヲ得ス

第二百四十四條　被告人ノ法律上代理人ハ獨立シテ上訴ヲ爲スコトヲ得

第二百四十五條　拘留ヲ受ケタル被告人上訴ヲ爲スニハ其申立書ヲ監獄署長ニ差出シ署長ハ之ヲ其裁判所ニ送致ス可シ

第二百四十六條　檢事ヲ除ク外上訴ヲ爲シタル者ハ其判決アルマテ何時ニテモ之ヲ取下クルコトヲ得

第二百四十七條　訴訟關係人天災其他避ク可カラサル事變ノ爲メ上訴期間ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ疏明シタルトキハ期間ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコトヲ得但障礙ノ止ミタル日ヨリ通常ノ期間內ニ疏明方法ヲ申立書ニ記載シ上訴ヲ爲ス可シ

第二百四十八條　前條ノ申立アリタルトキハ裁判所書記速ニ其申立書ヲ相手方ニ送達ス可シ相手方ハ三日內ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

上訴ヲ裁判ス可キ裁判所ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽キ先ツ其申立ヲ許ス可キヤ否ヤヲ決定ス可シ

第二百四十九條　上訴完結ノ後其訴訟記錄ハ上訴審ニ於テ爲シタル裁判ノ謄本ト共ニ第一審裁判所ニ之ヲ返還ス可シ

第二章　控訴

第二百五十條　控訴ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ第一審ニ於テ爲シタル本案ノ判決ニ對シ之ヲ爲スコトヲ得

第二百五十一條　控訴ハ判決ノ一分ニ限リ之ヲ爲スコトヲ得若シ之ヲ限ラサルトキハ判決ノ全部ニ對シ控訴ヲ爲シタルモノト看做ス可シ

第二百五十二條　控訴ノ期間ハ判決言渡アリタル日ヨリ五日トス

闕席裁判ヲ受ケタル者ハ故障ノ期間內故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スコトヲ得

第二百五十三條　本案ノ判決ニ對スル控訴ノ期間內及ヒ控訴アリタルトキハ判決ノ執行ヲ停止ス

第二百五十四條　控訴ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所ニ差出ス可シ

裁判所ハ控訴ノ申立アリタルコトヲ速ニ相手方ニ通知ス可シ

第二百五十五條　原裁判所ニ於テハ期間ヲ經過シタル控訴ノ申立ハ決定ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百五十六條　訴訟記錄ハ檢事ヨリ控訴裁判所ノ檢事ニ送致シ其檢事ハ之ヲ裁判所ニ差出ス可シ

公訴ノ判決ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタルトキハ檢事ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監獄ニ移ス可シ

第二百五十七條　控訴裁判所ニ於テハ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ

呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クモ二日ノ猶豫アル可シ

第二百五十八條　控訴ノ裁判ニ付テハ地方裁判所ノ第一審ニ關スル規定ヲ適用ス

第一審ニ於テ訊問シタル證人又ハ鑑定人ハ控訴裁判所ニ於テ其再度ノ訊問鑑定ヲ必要ナリトセサルトキハ之ヲ呼出ササルコトヲ得

第二百五十九條　控訴ノ相手方ハ其判決アルマテ附帶控訴ヲ爲スコトヲ得

控訴裁判所ノ檢事モ亦附帶控訴ヲ爲スコトヲ得

第二百六十條　控訴裁判所ニ於テハ控訴ノ期間內ニ於テ申立ヲ爲シタルヤ否ヤヲ調査シ期間ノ經過後ニ係ルモノト認ムルトキハ判決ヲ以テ控訴ヲ棄却ス可シ

第二百六十一條　控訴裁判所ニ於テハ控訴ヲ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ控訴ヲ棄却ス可シ控訴ヲ理由アリトスルトキハ原裁判ヲ取消シ更ニ判決ヲ爲ス可シ

第二百六十二條　控訴裁判所ニ於テハ原裁判所ノ管轄違ナルコトヲ認メタルトキハ原判決ヲ取消ス可シ此場合ニ於テ勾留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前勾留狀ヲ存シ又ハ新ニ勾留狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

原裁判所ニ於テ不當ニ管轄違ヲ言渡シタルトキハ其判決ヲ取消シ事件ヲ其裁判所ニ差戻ス可シ

第二百六十三條　前條第一項ノ場合ニ於テ控訴ヲ受ケタル地方裁判所自ラ其事件ニ付キ第一審トシテ裁判權ヲ有スルトキハ更ニ其事件ニ付キ判決ヲ爲ス可シ但事件重罪ナルトキハ第二百四十一條ノ規定ニ從ヒ處分ス可シ

第二百六十四條　控訴院ニ於テ地方裁判所カ輕罪ナリト判決シタル事件ヲ重罪ナリトスルトキ又ハ其事件ヲ重罪ナリトシテ主タル控訴又ハ附帶控訴アリタルトキハ其公判ヲ止メ更ニ重罪事件トシテ裁判ス可キ旨ノ決定ヲ爲シ受命判事ヲシテ其事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシム可シ

受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

本條ノ場合ニ於テ被告人辯護人ヲ選任セサルトキハ第二百三十七條第二項ノ規定ニ從ヒ裁判長ノ職權ヲ以テ辯護人ヲ選任ス可シ

第二百六十五條　被告人、辯護人又ハ法律上代理人ノミ控訴ヲ爲シタルトキハ原判決ヲ變更シテ被告人ノ不利益ト爲スコトヲ許サス

被告人ノ利益ノ爲メ檢事ヨリ控訴ヲ爲シタルトキ亦同シ

第二百六十六條　控訴申立人出頭セサルトキハ闕席判決ヲ以テ控訴ヲ棄却シ相手方出頭セサルトキハ申立人ノ意見ヲ聽キ闕席判決ヲ爲ス可シ

第三章　上告

第二百六十七條　上告ハ地方裁判所又ハ控訴院ノ第二審ニ於テ爲シタル本案ノ判決及ヒ第百八十七條ニ規定シタル本案前ノ判決ニ對シ之ヲ爲スコトヲ得

第二百六十八條　上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルコトヲ理由トスルトキニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルトキハ法律ニ違背シタルモノトス

第二百六十九條　裁判ハ左ノ場合ニ於テ常ニ法律ニ違背シタルモノトス

第一　規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セサリシトキ

第二　法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタル判事裁判ニ參與シタルトキ但忌避ノ申請ハ上訴ヲ以テ除斥ノ理由ヲ主張シタルモ其效ナカリシトキハ之ヲ以テ上告ノ理由ト爲スコトヲ得ス

第三　判事忌避セラレ其忌避ノ申請ヲ理由アリト認メタルニ拘ハラス裁判ニ參與シタルトキ

第四　裁判所ニ於テ其管轄又ハ管轄違ヲ不當ニ認メタルトキ

第五　法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルトキ
第六　法律ニ定メタル場合ニ於テ檢事ノ意見ヲ聽カサルトキ
第七　裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルコトヲ得ヘキ場合ヲ除ク外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタルトキ
第八　判決ヲ公行セス又ハ公開ヲ禁スル言渡ナクシテ辯論ヲ公ニセサルトキ
第九　裁判ニ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アルトキ
第十　擬律ノ錯誤アルトキ

第二百七十條　免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ設ケタル規定ニ背キタルコト又ハ土地ノ管轄違アリト雖モ上告ノ理由ト爲スコトヲ得ス

第二百七十一條　上告申立ノ期間ハ判決言渡アリタル日ヨリ三日トス

第二百七十二條　本案ノ判決ニ對スル上告ノ期間內及ヒ上告ノ申立アリタルトキハ勾留及ヒ放免ノ言渡ヲ除ク外判決ノ執行ヲ停止ス

第二百七十三條　上告ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所ニ差出シ且其申立ヲ爲シタル日ヨリ五日內ニ趣意書ヲ差出ス可シ

裁判所ハ上告申立書及ヒ趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時間內ニ之ヲ相手方ニ送達ス可シ

第二百七十四條　相手方ハ上告申立書及ヒ趣意書ヲ受取リタル日ヨリ五日內ニ答辯書ヲ原裁判所ニ差出スコトヲ得

裁判所ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時間ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第二百七十五條　檢事ヨリ差出ス可キ上告申立書及ヒ趣意書又ハ答辯書ハ二通ヲ作リ一通ヲ上告裁判所ニ差出シ一通ヲ相手方ニ送達ス可シ

私訴ノ判決ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告申立書及ヒ趣意書又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

第二百七十六條　原裁判所ニ於テハ期間ヲ經過シタル上告ハ決定ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百七十七條　訴訟記錄ハ檢事ヨリ上告裁判所ノ檢事ニ送致シ其檢事ハ之ヲ裁判所ニ差出ス可シ

第二百七十八條　上告ノ相手方ハ其判決アルマテ附帶上告ヲ爲スコトヲ得

上告裁判所ノ檢事モ亦附帶上告ヲ爲スコトヲ得

第二百七十九條　上告申立人及ヒ相手方ハ辯護士ヲ差出スコトヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢事ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キモノトシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ辯護士ヲ選任セサルトキハ上告裁判長ノ職權ヲ以テ其裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第二百八十條　裁判長ハ受命判事ヲ定ム可シ

受命判事ハ訴訟記錄ヲ檢閱シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラス

第二百八十一條　上告申立人及ヒ相手方ハ受命判事ノ報告書ヲ差出スマテハ其趣意ヲ擴張ス可キ證明書ヲ上告裁判所ニ差出スコトヲ得

受命判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタルトキハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ

第二百八十二條　裁判所書記ハ開廷ヨリ三日間ニ開廷ノ期日ヲ上告申立人及ヒ相手方ノ辯護士ニ報告ス可シ

第二百八十三條　開廷ノ日ニハ受命判事先ツ其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢事及ヒ辯護士ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ

私訴ノ上告ニ付テハ檢事最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第二百八十四條　上告申立人又ハ相手方ヨリ辯護士ヲ差出ササルトキハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

第二百八十五條　上告裁判所ニ於テハ上告ノ理由ナキトキ又ハ法律上ノ方式及ヒ期間內ニ於テ起ササルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ

第二百八十六條　上告ヲ理由アリトスルトキハ其上告ニ係ル判決ノ部分ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス言渡ヲ爲ス可シ但後二條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第二百八十七條　擬律ノ錯誤又ハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シタルニ因リ判決ヲ破毀シタルトキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク上告裁判所ニ於テ直チニ判決ヲ爲ス可シ

第二百八十八條　公判ノ手續規定ニ背キタルコトアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホササルトキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク止タ其手續ヲ破毀ス可シ

第二百八十九條　判決ノ一分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アルトキハ其部分ヲモ破毀ス可シ擬律ノ錯誤又ハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シタルニ因リ被告人ノ利益ノ爲メニ判決ヲ破毀シタルトキハ其利益ハ上告ヲ爲ササル共同被告人ニモ及ホス可シ

第二百九十條　上告裁判所ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス言渡ヲ爲ス可キトキハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ指定ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ其裁判所ノ民事部ニ移ス可シ

第二百九十一條　第二百六十五條ノ規定ハ上告ニモ亦之ヲ準用ス

第二百九十二條　第一審裁判所ト第二審裁判所トヲ問ハス法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ期間內ニ上訴スル者ナクシテ其判決確定シタルトキハ其事件ニ付キ上告ヲ受クル權アル裁判所ノ檢事ハ司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ其裁判所ニ非常上告ヲ爲スコトヲ得

非常上告ヲ理由アリトスルトキハ原判決ヲ破毀シ直チニ其事件ニ付キ判決ヲ爲ス可シ

第四章　抗告

第二百九十三條　抗告ハ法律ニ於テ特ニ許シタル場合ニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

第二百九十四條　抗告ニ付テハ直近ノ上級裁判所其裁判ヲ爲ス可シ

抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ抗告申立人ヨリ更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得ス

第二百九十五條　抗告ノ期間ハ裁判ノ送達アリタル日ヨリ三日トス

第二百九十六條　抗告ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ豫審判事ニ差出ス可シ其裁判所又ハ豫審判事ニ於テハ抗告ヲ理由アリトスルトキハ不服ノ點ヲ更正シ又理由ナシトスルトキハ意見ヲ付シテ三日內ニ抗告申立書ヲ抗告裁判所ニ送致シ且豫審終結ノ決定ニ對スル抗告ニ付テハ訴訟記錄ヲモ送致ス可シ

第二百九十七條　抗告裁判所ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽キ書類ニ依リ抗告ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百九十八條　豫審終結ノ決定ニ對スル抗告ニ付キ抗告裁判所ニ於テ必要ナリトスルトキハ受命判事ヲシテ事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシムルコトヲ得

受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

第二百九十九條　抗告裁判所ニ於テハ抗告ヲ許ス可キヤ否又抗告ノ期間內ニ於テ申立ヲ爲シタルヤ否ヤヲ調査シ此要件ノ一ヲ闕クトキハ其抗告ヲ棄却ス可シ

第三百條　抗告裁判所ニ於テ抗告ヲ理由アリトスルトキハ原裁判ヲ取消シ自ラ更ニ裁判ヲ爲シ又抗告ニ理由ナシトスルトキハ之ヲ棄却ス可シ

第六編　再審

第三百一條　再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪、輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スコトヲ得

但判決確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第一　人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタルモ其殺サレタリト認メラレシ者犯罪後生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタル確證アリタルトキ

第二　同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタルトキ

第三　犯罪アル以前ニ作リタル公正證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルコトヲ證明シタルトキ

第四　被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタルトキ

第五　公正證書ヲ以テ訴訟記錄ニ僞造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタルトキ

第六　判決ノ憑據ト爲リタル民事上ノ判決他ノ確定ト爲リタル判決ヲ以テ廢棄若クハ破毀セラレタルトキ

第三百二條　再審ノ訴ヲ爲スコトヲ得ヘキ者左ノ如シ

第一　刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事

第二　刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事

第三　刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル上告裁判所ノ檢事但司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ

第四　刑ノ言渡ヲ受ケタル者

第五　刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタルトキハ其親屬

第三百三條　再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラス何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第三百四條　再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原判決ノ謄本及ヒ證憑書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢事ハ其意見書ヲ添ヘ之ヲ上告裁判所ノ檢事ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢事及ヒ控訴裁判所ノ檢事自ラ再審ノ訴ヲ爲サントスルトキハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第三百五條　上告裁判所ニ於テハ檢事ノ請求ニ因リ速ニ受命判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシム可シ

第三百六條　上告裁判所ニ於テハ受命判事ノ報告及ヒ檢事ノ意見ヲ聽キ判決ヲ爲ス可シ

第三百七條　上告裁判所ニ於テ再審ノ原因アルコトヲ認メタルトキハ原判決ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲スコトヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ

其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第三百八條　死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ上告裁判所ニテ再審ノ原由アルコトヲ認メタルトキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク原判決ヲ破毀ス可シ

第三百九條　再審ノ判決ニ因リ無罪ノ言渡アリタルトキ又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタルトキハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其判決ヲ揭示ス可シ

第七編　大審院ノ特別權限ニ屬スル訴訟手續

第三百十條　裁判所構成法第五十條第二號ニ記載シタル大審院ノ特別權限ニ屬スル犯罪ニ付テハ檢事總長其捜査ヲ爲ズ可シ

地方裁判所、區裁判所ノ檢事及ヒ司法警察官モ亦其犯罪ニ付キ捜査ヲ爲シ檢事總長ニ報告ス可シ

第三百十一條　前條ニ記載シタル犯罪ノ現行犯アル場合ニ於テ急速ヲ要スルトキハ地方裁判所、區裁判所ノ檢事及ヒ司法警察官ハ第百四十四條及ヒ第百四十七條第一項ノ規定ニ從ヒ豫審處分ヲ爲スコトヲ得但豫審判事ニ通知スルコトヲ要セス

第三百十二條　前條ノ場合ニ於テハ地方裁判所檢事ヨリ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ檢事總長ニ送致ス可シ

第三百十三條　檢事總長ハ何レノ場合ニ於テモ其事件大審院ノ特別權限ニ屬シ且起訴ス可キモノト認メタルトキハ豫審判事ヲ命ス可キコトヲ大審院長ニ請求ス可シ

第三百十四條　大審院長ヨリ命ヲ受ケタル豫審判事ハ豫審ヲ爲シタル上ニテ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタルトキハ訴訟記錄ニ意見ヲ付シ大審院ニ差出ス可シ

第三百十五條　大審院ニ於テハ檢事總長ノ意見ヲ聽キ先ツ其事件ヲ公判ニ付ス可キヤ否ヤヲ決定ス可シ

其事件地方裁判所又ハ區裁判所ノ權限ニ屬スルモノト決定シタルトキハ管轄裁判所ヲ指定シ其事件ヲ送致ス可シ若シ特別裁判所ノ權限ニ屬スルモノト認メタルトキハ決定ヲ以テ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第百六十五條ニ記載シタル場合ニ於テハ決定ヲ以テ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百十六條　前數條ニ於テ特ニ規定シタルモノヲ除ク外豫審、公判ノ手續ハ第三編第四編ノ規定ヲ準用ス

第八編　裁判執行

第一章　裁判執行

第三百十七條　刑ノ執行ハ判決確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

監獄ニ於テ執行スヘキ二個以上ノ主刑ノ執行ハ其重キモノヲ先ニス但特別ノ事由アルトキハ檢事ハ重キ刑ノ執行ヲ停止シ他ノ刑ノ執行ヲ爲サシムルコトヲ得

第三百十八條　死刑ノ言渡確定シタルトキハ檢事ヨリ速ニ訴訟記錄ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

司法大臣ヨリ死刑ヲ執行ス可キ命令アリタルトキハ三日內ニ其執行ヲ爲ス可シ

第三百十八條ノ二　死刑ノ執行ハ檢事及ヒ裁判所書記ノ立會ニテ之ヲ爲ス可シ死刑ノ執行ニ關スル者ノ外刑場ニ入ルコトヲ得ス但檢事又ハ監獄ノ長ノ許可ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス

第三百十八條ノ三　死刑ノ言渡ヲ受ケタル者心神喪失シタルトキハ司法大臣ノ命令ニ因リ其癒癒ニ至ルマテ執行ヲ停止ス

死刑ノ言渡ヲ受ケタル婦女懷胎ナルトキハ分娩後司法大臣ノ命令アルニ非サレハ執行ヲ爲スコトヲ得ス

第三百十九條　死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタルトキハ直チニ之ヲ執行ス可シ

懲役、禁錮又ハ拘留ノ言渡ヲ受ケタル者左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其事故ノ止ムマテ刑ノ執行ヲ停止スルコトヲ得

一　心神喪失ノ狀態ニ在ルトキ

二　刑ノ執行ニ因リ生命ヲ保ツコト能ハサル虞アルトキ

三　受胎後七月以上ナルトキ

四　分娩後一月ヲ經過セサルトキ

體刑ノ言渡ヲ受ケ其執行ヲ逭レタル者ニ對シ檢事ノ發シタル逮捕狀ハ勾留狀ト同一ノ效ヲ有ス其關席判決ニ係ル場合ニ於テ發シタル者亦同シ

第三百二十條　刑ノ執行ヲ言渡シタル裁判所ノ檢事又ハ上告裁判所ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢事ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ刑ノ執行ノ停止ニ付キ亦同シ

罰金、科料、訴訟費用及ヒ沒收物品、追徵金ハ檢事ノ命令ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

前項ノ徵收ニ付テハ非訟事件手續法第二百八條ノ規定ヲ準用ス

破壞又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢事之ヲ處分ス可シ

第三百二十一條　死刑ノ執行ニ付テハ裁判所書記其始末書ヲ作リ刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

第三百二十二條　刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタルトキハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ決定ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百二十三條　賠償及ヒ訴訟關係人ニ辨濟ス可キ訴訟費用ニ付キ其判決ノ執行ハ民事訴訟法ノ規定ニ從フ

第二章　削除（復權）

第三章　削除（特赦）

第五章　竊盜ノ罪ニ關スル件

明治二十三年十月八日法律第九十九號

朕竊盜ノ罪ニ關スル件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

第一條　家屋其他ノ建造物外ニ於テ犯シタル竊盜ニシテ未タ遂ケサル者又ハ已ニ遂ケタルモ其贓額五圓ニ滿サル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮ニ處ス

第二條　田野、山林、川澤、池沼、湖海ニ於テ其產物ヲ竊取セントシ又ハ牧場ニ於テ其獸類ヲ竊取セントシテ未タ遂ケサル者又ハ已ニ竊取シタルモ其贓額五圓ニ滿サル者亦前條ニ同シ

第三條　前二條ニ記載シタル贓額ハ犯罪ノ地及ヒ其時ニ於ケル物價ニ據リ裁判所之ヲ定ム但贓物現存セサルトキハ其中等ノ價額ニ據ル可シ

第六章　決鬪罪ニ關スル件

明治二十二年十二月二十八日法律第三十四號

朕決鬪罪ニ關スル件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

第一條　決鬪ヲ挑ミタル者又ハ其挑ニ應シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二條　決鬪ヲ行ヒタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三條　決鬪ニ依テ人ヲ殺傷シタル者ハ刑法ノ各本條ニ照シテ處斷ス

第四條　決鬪ノ立會ヲ爲シ又ハ立會ヲ爲スコトヲ約シタル者ハ證人介添人等何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ラス一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

情ヲ知テ決鬪ノ場所ヲ貸與シ又ハ供用セシメタル者ハ罰前項ニ同シ

第五條　決鬪ノ挑ニ應セサルノ故ヲ以テ人ヲ誹毀シタル者ハ刑法ニ照シ誹毀ノ罪ヲ以テ論ス

第六條　前數條ニ記載シタル犯罪刑法ニ照シ其重キモノハ重キニ從テ處斷ス

第七章　瀆職法　明治三十四年四月十二日法律第三十七號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル瀆職法ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

第一條　法令ニ依リ選擧又ハ任用シタル議員、會員、委員又ハ總代其ノ職務ニ關シ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許若ハ要求シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

賄賂ヲ贈與、提供又ハ約束シタル者亦同シ

第二條　前條ニ記載シタル賄賂ヲ己ニ收受シタル者ハ之ヲ沒收シ費用シタル者ハ其價ヲ追徵ス

第八章　刑ノ執行猶豫ニ關スル件　明治三十八年三月三十一日法律第七十號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル刑ノ執行猶豫ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

第一條　左ニ記載シタル者一年以下ノ禁錮ニ處セラレタルトキハ情狀ニ因リ裁判確定ノ日ヨリ二年以上五年以下ノ期間內其ノ執行ヲ猶豫スルコトヲ得但シ監視ニ付セラレタル者ハ此ノ限ニ在ラス

一　前ニ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルコトナキ者

二　前ニ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルコトアルモ其ノ執行ヲ終リ又ハ其ノ執行ノ免除ヲ得タル日ヨリ十年以內ニ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルコトナキ者

第二條　刑ノ執行ヲ猶豫シタル場合ニ於テハ附加刑亦其ノ執行ヲ猶豫ス但シ沒收ハ此ノ限ニ在ラス

第三條　刑ノ執行猶豫ハ裁判所ニ於テ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ刑ノ言渡ト同時ニ判決ヲ以テ之ヲ言渡スヘシ

刑ノ言渡アリタル後ニ於テハ其ノ言渡ヲ爲シタル裁判所檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ執行猶豫ノ決定ヲ爲スヘシ此ノ場合ニ於テハ其決定確定ニ至ル迄刑ノ執行ヲ停止ス

刑ノ執行ニ著手シタル者ニ付テハ其ノ執行ヲ猶豫セス

第四條　檢事ハ刑ノ執行猶豫ノ裁判ニ對シテハ刑事訴訟法ノ規定ニ從ヒ上訴ヲ爲スコトヲ得

第五條　刑ノ言渡ニ對シ上訴アリタル場合ニ於テハ刑ノ執行猶豫ノ裁判ハ當然其ノ效力ヲ失フ但シ上訴裁判所ニ於テ更ニ執行ヲ猶豫スルコトヲ妨ケス

第六條　刑ノ執行猶豫ノ期間內左ニ記載シタル事由アルトキハ執行猶豫ノ裁判ヲ取消スヘシ

一　猶豫期間內ニ犯シタル罪ニ付禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

二　猶豫ノ裁判前ニ犯シタル他ノ罪ニ付禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

三　猶豫ノ裁判前十年內ニ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルコト發覺シタルトキ

第七條　刑ノ執行猶豫ノ取消ハ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所ニ於テ檢事ノ請求ニ因リ之ヲ決定スヘシ

前項ノ決定ニ對シテハ刑事訴訟法ノ規定ニ從ヒ抗告ヲ爲スコトヲ得

第八條　刑ノ執行猶豫ノ裁判取消サレタルトキハ刑期ハ其ノ決定確定ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第九條　刑ノ執行猶豫ノ裁判取消サルルコトナクシテ其ノ猶豫期間ヲ經過シタルトキハ猶豫セラレタル刑ノ執行ヲ免除ス

附則

本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第九章　監獄法

明治四十一年三月二十七日
法律第二十八號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル監獄法ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

監獄法

第一章　總則

第一條　監獄ハ之ヲ左ノ四種トス

一　懲役監　懲役ニ處セラレタル者ヲ拘禁スル所トス

二　禁錮監　禁錮ニ處セラレタル者ヲ拘禁スル所トス

三　拘留場　拘留ニ處セラレタル者ヲ拘禁スル所トス

四　拘留監　刑事被告人及ヒ死刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヲ拘禁スル所トス

拘留監ニハ懲役、禁錮又ハ拘留ニ處セラレタル者ヲ一時拘禁スルコトヲ得

警察官署ニ附屬スル留置場ハ之ヲ監獄ニ代用スルコトヲ得但懲役又ハ禁錮ニ處セラレタル者ヲ一月以上繼續シテ拘禁スルコトヲ得ス

第二條　二月以上ノ懲役ニ處セラレタル十八歲未滿ノ者ハ特ニ設ケタル監獄又ハ監獄內ニ於テ特ニ分界ヲ設ケタル場所ニ之ヲ拘禁ス

前項ノ規定ニ依ル者ハ滿二十歲ニ至ルマテ又滿二十歲ニ至リタル後三月內ニ刑期終了ス可キ者ハ其殘刑期間仍ホ繼續シテ之ヲ拘禁スルコトヲ得

心身發育ノ狀況ニ因リ必要ト認ムル者ハ前二項ノ適用ニ付キ年齡ニ拘ハラサルコトヲ得

第三條　監獄ニ男監及ヒ女監ヲ設ケ之ヲ分隔ス

懲役監、禁錮監、拘留場及ヒ拘置監ノ同一區劃內ニ在ルモノハ之ヲ分界ス

第四條　主務大臣ハ少クトモ二年每ニ一回官吏ヲシテ監獄ヲ巡閱セシム可シ

判事及ヒ檢事ハ監獄ヲ巡視スルコトヲ得

第五條　監獄ノ參觀ヲ請フ者アルトキハ學術ノ研究其他正當ノ理由アリト認ムル場合ニ限リ命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ許スコトヲ得

第六條　本法ニ依リ沒入シ又ハ國庫ニ歸屬シタル物ハ之ヲ監獄經費ノ用ニ充ツ

第七條　在監者監獄ノ處置ニ對シ不服アルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ主務大臣又ハ巡閱官吏ニ情願ヲ爲スコトヲ得

第八條　勞役場ハ之ヲ監獄ニ附設ス

前五條ノ規定ハ之ヲ勞役場ニ準用ス

第九條　本法中別段ノ規定アルモノヲ除ク外刑事被告人ニ適用ス可キ規定ハ死刑ノ言渡ヲ受ケタル者ニ之ヲ準用シ懲役囚ニ適用ス可キ規定ハ勞役場留置ノ言渡ヲ受ケタル者ニ之ヲ準用ス

第十條　本法ハ陸海軍ニ屬スル監獄ニ之ヲ適用セス

第二章　收監

第十一條　新ニ入監スル者アルトキハ令狀又ハ判決書及ヒ執行指揮書其他適法ノ文書ヲ査閱シタル後入監セシム可シ

第十二條　新ニ入監スル婦女其子ヲ携帶センコトヲ請フトキハ必要ト認ムル場合ニ限リ滿一歲ニ至ルマテ之ヲ許スコトヲ得

監獄ニ於テ分娩シタル子ニ付テモ亦前項ノ例ニ依ル

第十三條　新ニ入監スル者傳染病豫防法ニ依リ豫防方法ノ施行ヲ必要トスル傳染病ニ罹リタルモノナルトキハ之ヲ入監セシメサルコトヲ得

第十四條　新ニ入監スル者アルトキハ其身體及ヒ衣類ノ檢査ヲ爲ス可シ在監中ノ者ニ付キ必要ト認ムルトキ亦同シ

第三章　拘禁

第十五條　在監者ハ心身ノ狀況ニ因リ不適當ト認ムルモノヲ除ク外之ヲ獨居拘禁ニ付スルコトヲ得

第十六條　雜居拘禁ニ在テハ在監者ノ罪質、性格、犯數、年齢等ヲ斟酌シテ其監房ヲ別異ス

第一條第二項及ヒ第三項ノ場合ニ於テハ在監者ノ種類ニ依リ其監房ヲ別異ス

十八歲未滿ノ者ハ第二條第二項ノ場合ヲ除ク外十八歲以上ノ者ト其監房ヲ別異ス但心身發育ノ狀況ニ因リ其必要ナシト認ムルトキハ此限ニ在ラス

前三項ノ規定ハ工場ニ於ケル就業ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十七條　刑事被告人ニシテ被告事件ノ相關連スルモノハ互ニ其監房ヲ別異シ監房外ニ於テモ其交通ヲ遮斷ス

第十八條　懲役監、禁錮監、拘留場、拘置監及ヒ勞役所ノ同一區劃內ニ在ル場合ニ於テハ同性者ニ付キ同一ノ病監又ハ教誨堂ヲ使用スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ在監者ノ種類ニ因リ監房若クハ座席又ハ診察若クハ教誨ノ時間ヲ異ニス

病監ニ在テハ第二條及ヒ第十六條ヲ適用セサルコトヲ得

第四章　戒護

第十九條　在監者逃走、暴行若クハ自殺ノ虞アルトキ又ハ監外ニ在ルトキハ戒具ヲ使用スルコトヲ得

戒具ノ種類ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十條　法令ニ依リ監獄官吏ノ携帶スル劍又ハ銃ハ左ノ各號ノ一ニ該ル場合ニ限リ在監者ニ對シ之ヲ使用スルコトヲ得

一　人ノ身體ニ對シテ危險ナル暴行ヲ爲シ又ハ爲ス可キ勢迫ヲ加フルトキ

二　危險ナル暴行ノ用ニ供シ得可キ物ヲ所持シ其放棄ヲ肯セサルトキ

三　逃走ノ目的ヲ以テ多衆騷擾スルトキ

四　逃走ヲ企テタル者暴行ヲ爲シテ捕拿ヲ免カレントシ又ハ制止ニ從ハスシテ逃走セントスルトキ

第二十一條　天災事變ニ際シ必要ト認ムルトキハ在監者ヲシテ應急ノ用務ニ就カシムルコトヲ得

前項ノ用務ニ就キタル者ニハ第二十八條ノ規定ヲ準用ス

第二十二條　天災事變ニ際シ監獄內ニ於テ避難ノ手段ナシト認ムルトキハ在監者ヲ他所ニ護送ス可シ若シ護送スルノ遑ナキトキハ一時之ヲ解放スルコトヲ得

解放セラレタル者ハ監獄又ハ警察官署ニ出頭ス可シ解放後二十四時間內ニ出頭セサルトキハ刑法第九十七條ニ依リ處斷ス

第二十三條　在監者逃走シタルトキハ監獄官吏ハ逃走後四十八時間內ニ限リ之ヲ逮捕スルコトヲ得

前項ノ規定ハ刑事訴訟法第六十條ノ適用ヲ妨ケス

第五章　作業

第二十四條　作業ハ衛生、經濟及ヒ在監者ノ刑期、健康、技能、職業、將來ノ生計等ヲ斟酌シテ之ヲ課ス

十八歲未滿ノ者ニ課ス可キ作業ニ付テハ前項ノ外特ニ教養ニ關スル事項ヲ斟酌ス

第二十五條　大祭祝日、一月一日二日及ヒ十二月三十一日ニハ就業ヲ免ス

父母ノ訃ニ接シタル者ハ三日間其就業ヲ免ス

主務大臣ハ必要ト認ムルトキハ臨時就業ヲ免スルコトヲ得

炊事、酒掃、看護其他監獄ノ經理ニ關シ必要ナル作業ニ就ク者ニ付テハ就業ヲ免セサルコトヲ得

第二十六條　刑事被告人、拘留囚又ハ禁錮囚作業ニ就カンコトヲ請フトキハ其選擇スルモノニ就キ之ヲ許スコトヲ得

第二十七條　作業ノ收入ハ總テ國庫ノ所得トス

在監者ニシテ作業ニ就クモノニハ命令ノ定ムル所ニ依リ作業賞與金ヲ給スルコトヲ得

作業賞與金ハ行狀、作業ノ成績等ヲ斟酌シテ其額ヲ定ム

第二十八條　在監者就業ニ因リ創傷ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ之カ爲メニ死亡シ又ハ業務ヲ營ミ難キニ至リタルトキハ情狀ニ因リ手當金ヲ給スルコトヲ得

前項ノ手當金ハ釋放ノ際本人ニ之ヲ給シ死亡ノ場合ニ於テハ死亡者ノ父、母、配偶者又ハ子ニ之ヲ給ス

第六章　教誨及ヒ教育

第二十九條　受刑者ニハ教誨ヲ施ス可シ其他ノ在監者教誨ヲ請フトキハ之ヲ許スコトヲ得

第三十條　十八歲未滿ノ受刑者ニハ教育ヲ施ス可シ其他ノ受刑者ニシテ特ニ必要アリト認ムルモノニハ年齡ニ拘ハラス教育ヲ施スコトヲ得

第三十一條　在監者文書、圖畫ノ閲讀ヲ請フトキハ之ヲ許ス

文書、圖畫ノ閲讀ニ關スル制限ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第七章　給養

第三十二條　受刑者ニハ一定ノ衣類臥具ヲ著用セシム但拘留囚ニハ自衣ノ著用ヲ許シ其他ノ者ニハ襯衣ノ自辨ヲ許スコトヲ得

第三十三條　刑事被告人及ヒ勞役場留置ノ言渡ヲ受ケタル者ノ衣類臥具ハ自辨トシ其自辨スルコト能ハサル者ニハ之ヲ貸與ス

自辨ノ衣類臥具ニ關スル制限ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十四條　在監者ニハ其體質、健康、年齡、作業ヲ斟酌シテ必要ナル糧食及ヒ飲料ヲ給ス

第三十五條　刑事被告人ニハ糧食ノ自辨ヲ許スコトヲ得

第八章　衛生及ヒ醫療

第三十六條　在監者ノ頭髮鬚髯ハ之ヲ翦剃セシムルコトヲ得但刑事被告人ノ頭髮鬚髯ハ衛生上特ニ必要アリト認ムル場合ヲ除ク外其意思ニ反シテ之ヲ翦剃セシムルコトヲ得ス

第三十七條　在監者ハ其拘禁セラルル監房ノ清潔ヲ保ツニ必要ナル用務ニ服ス可シ

第三十八條　在監者ニハ其健康ヲ保ツニ必要ナル運動ヲ爲サシム

第三十九條　在監者ニハ種痘其他傳染病豫防ニ必要ト認ムル醫術ヲ行フコトヲ得

第四十條　在監者疾病ニ罹リタルトキハ醫師ヲシテ治療セシメ必要アルトキハ之ヲ病監ニ收容ス

第四十一條　傳染病者ハ嚴ニ之ヲ離隔シ健康者及ヒ他ノ病者ニ接近セシムルコトヲ得ス但懲役囚ヲシテ看護セシムルハ此限ニ在ラス

第四十二條　病者醫師ヲ指定シ自費ヲ以テ治療ヲ補助セシメンコトヲ請フトキハ情狀ニ因リ之ヲ許スコトヲ得

第四十三條　精神病、傳染病其他ノ疾病ニ罹リ監獄ニ在テ適當ノ治療ヲ施スコト能ハスト認ムル病者ハ情狀ニ因リ假ニ之ヲ病院ニ移送スルコトヲ得

前項ニ依リ病院ニ移送シタル者ハ之ヲ在監者ト看做ス

第四十四條　妊婦、產婦、老衰者及ヒ不具者ハ之ヲ病者ニ準スルコトヲ得

第九章　接見及ヒ信書

第四十五條　在監者ニ接見センコトヲ請フ者アルトキハ之ヲ許ス

受刑者ニハ其親族ニ非サル者ト接見ヲ爲サシムルコトヲ得ス但特ニ必要アリト認ムル場合ハ此限ニ在ラス

第四十六條　在監者ニハ信書ヲ發シ又ハ之ヲ受クルコトヲ許ス

受刑者ニハ其親族ニ非サル者ト信書ノ發受ヲ爲サシムルコトヲ得ス但特ニ必要アリト認ムル場合ハ此限ニ在ラス

第四十七條　受刑者ニ係ル信書ニシテ不適當ト認ムルモノハ其發受ヲ許サス

前項ニ依リ發受ヲ許ササル信書ハ二年ヲ經過シタル後之ヲ廢棄スルコトヲ得

第四十八條　裁判所其他ノ公務所ヨリ在監者ニ宛テタル文書ハ披閲シテ之ヲ本人ニ交付ス

第四十九條　在監者ニ交付シタル信書及ヒ前條ノ文書ハ本人閲讀ノ後之ヲ領置ス

第五十條　接見ノ立會、信書ノ檢閲其他接見及ヒ信書ニ關スル制限ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十章　領置

第五十一條　在監者ノ携有スル物ハ點檢シテ之ヲ領置ス

保存ノ價値ナク又ハ保存ニ不適當ト認ムル物ハ其領置ヲ爲サス又ハ之ヲ解クコトヲ得

領置ヲ爲サス又ハ之ヲ解キタル物ニ付キ在監者相當ノ處分ヲ爲ササルトキハ之ヲ廢棄スルコトヲ得

第五十二條　在監者領置物ヲ以テ其父、母、配偶者又ハ子ノ扶助其他正當ノ用途ニ充テンコトヲ請フトキハ情

狀ニ因リ之ヲ許スコトヲ得

第五十三條　在監者ニ差入ヲ爲サンコトヲ請フ者アルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ許スコトヲ得

在監者ニ宛テ送致シ來リタル物ニシテ其差出人ノ氏名若クハ居所不明ナルトキ、其差入ヲ許ス可カラスト認ムルトキ又ハ在監者ニ於テ其受領ヲ拒ミタルトキハ之ヲ沒入又ハ廢棄スルコトヲ得

第五十四條　在監者ノ私ニ所持スル物ハ之ヲ沒入又ハ廢棄スルコトヲ得

第五十五條　領置物ハ釋放ノ際之ヲ交付ス

第五十六條　死亡者ノ遺留物ハ請求ニ因リ相續人、家族又ハ親族ニ之ヲ交付ス

第五十七條　死亡者ノ遺留物ハ死亡ノ日ヨリ一年內ニ前條ニ揭ケタル者ノ請求ナキトキハ國庫ニ歸屬ス

逃走者ノ遺留物ニシテ逃走ノ日ヨリ一年內ニ居所分明セサルトキ亦同シ

第十一章　賞罰

第五十八條　受刑者改悛ノ狀アルトキハ賞遇ヲ爲スコトヲ得

賞遇ノ種類及ヒ方法ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第五十九條　在監者紀律ニ違ヒタルトキハ懲罰ニ處ス

第六十條　懲罰ハ左ノ如シ

一　叱責

二　賞遇ノ三月以內ノ停止

三　賞遇ノ廢止

四　文書、圖畫閱讀ノ三月以內ノ禁止

五　請願作業ノ十日以內ノ停止

六　自辨ニ係ル衣類臥具著用ノ十五日以內ノ停止

七　糧食自辨ノ十五日以上ノ停止

八　運動ノ五日以內ノ停止

九　作業賞與金計算高ノ一部又ハ全部減削

十　七日以內ノ減食

十一　二月以內ノ經屏禁

十二　七日以內ノ重屏禁

屏禁ハ受罰者ヲ罰室內ニ晝夜屏居セシメ情狀ニ因リ就業セシメサルコトヲ得重屏禁ニ在テハ仍ホ罰室ヲ暗クシ臥具ヲ禁ス

第一項各號ノ懲罰ハ之ヲ併科スルコトヲ得

第六十一條　前條第一項第十條ノ懲罰ハ刑事被告人及ヒ十八歲未滿ノ在監者ニ之ヲ科セス

第六十二條　懲罰ニ處セラレタル者疾病其他特別ノ事由アルトキハ其懲罰ノ執行ヲ停止スルコトヲ得

懲罰ニ處セラレタル者改悛ノ狀著シキトキハ其懲罰ヲ免除スルコトヲ得

第十二章　釋放

第六十三條　在監者ノ釋放ハ恩赦、職權アル者ノ命令又ハ刑期ノ終了ニ因リ關係文書ヲ查閱シテ其手續ヲ爲ス可シ

第六十四條　恩赦ヲ受ケ又ハ假出獄若クハ假出場ヲ許サレタル者ハ其裁可狀又ハ許可書ノ監獄ニ達シタル後二十四時間內ニ之ヲ釋放ス

第六十五條　前條ノ場合ヲ除ク外命令ニ因リ釋放ヲ爲ス可キ者ハ命令書ノ監獄ニ達シタル後十時間內ニ之ヲ釋放ス

第六十六條　假出獄又ハ假出場ヲ許サレタル者ヲ釋放スルトキハ之ニ證票ヲ交付ス

第六十七條　假出獄ヲ許サレタル者ハ其期間左ノ規定ヲ遵守ス可シ

一　正業ニ就キ善行ヲ保ツコト

二　警察官署ノ監督ヲ受クルコト但警察官署ハ監獄ノ意見ヲ聽キ他ニ其監督ヲ委任スルコトヲ得

三　住居ヲ轉移シ又ハ十日以上旅行ヲ爲サントスルトキハ監督者ノ許可ヲ請フコト

主務大臣ハ假出獄ヲ許サレタル者ノ帝國外ニ旅行ヲ爲スヲ許スコトヲ得

第六十八條　滿期ノ者ハ其刑期終了ノ翌日午後六時マテニ之ヲ釋放ス

第六十九條　釋放セラル可キ者重キ疾病ニ罹リ監獄ニ於テ醫療中ナルトキハ其請求ニ因リ仍ホ在監セシムルコトヲ得

第七十條　釋放セラル可キ者歸住旅費若クハ相當ノ衣類ヲ有セサルトキ又ハ監獄行政ノ便宜ニ因リ移監セシメタルカ爲メ歸住旅費ノ增加ヲ要スルニ至リタルトキハ衣類又ハ旅費ヲ給與スルコトヲ得

第十三章　死亡

第七十一條　死刑ノ執行ハ監獄內ノ刑場ニ於テ之ヲ爲ス

大祭祝日、一月一日二日及ヒ十二月三十一日ニハ死刑ヲ執行セス

第七十二條　死刑ヲ執行スルトキハ絞首ノ後死相ヲ檢シ仍ホ五分時ヲ經ルニ非サレハ絞繩ヲ解クコトヲ得ス

第七十三條　在監者死亡シタルトキハ之ヲ假葬ス

死體ハ必要ト認ムルトキハ之ヲ火葬スルコトヲ得

死體又ハ遺骨ハ假葬後二年ヲ經テ之ヲ合葬スルコトヲ得

第七十四條　死亡者ノ親族故舊ニシテ死體又ハ遺骨ヲ請フ者アルトキハ何時ニテモ之ヲ交付スルコトヲ得但合葬後ハ此限ニ在ラス

第七十五條　受刑者ノ死體ハ命令ノ定ムル所ニ依リ解剖ノ爲メ病院、學校又ハ其他ノ公務所ニ之ヲ送付スルコトヲ得

附則

本法ハ刑法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

監獄則ハ之ヲ廢止ス但懲治人ニ關スル規定ハ當分ノ內仍ホ其效力ヲ有ス

第七編　裁判　訴願

第一章　裁判所構成法

明治二十三年二月八日法律第六號　改正　三八年三九年四一年第六七號第五〇號第一〇、第三〇號

朕裁判所構成法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此ノ法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

裁判所構成法

第一編　裁判所及檢事局

第一章　總則

第一條　左ノ裁判所ヲ通常裁判所トス

第一　區裁判所

第二　地方裁判所

第三　控訴院

第四　大審院

第二條　通常裁判所ニ於テハ民事刑事ヲ裁判スルモノトス但シ法律ヲ以テ特別裁判所ノ管轄ニ屬セシメタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第三條　地方裁判所控訴院及大審院ヲ合議裁判所トシ數人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ總テノ事件ヲ審問裁判ス但シ訴訟法又ハ特別法ニ別段規定シタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第四條　裁判所ノ設立廢止及管轄區域竝ニ其ノ變更ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第五條　各裁判所ニ相應ナル員數ノ判事ヲ置ク

第六條　各裁判所ニ檢事局ヲ附置ス檢事ハ刑事ニ付公訴ヲ起シ其ノ取扱上必要ナル手續ヲ爲シ法律ノ正當ナル適用ヲ請求シ及判決ノ適當ニ執行セラルヽヤヲ監視シ又民事ニ於テモ必要ナリト認ムルトキハ通知ヲ求メ其ノ意見ヲ述フルコトヲ得又裁判所ニ屬シ若ハ之ニ關ル司法及行政事件ニ付公益ノ代表者トシテ法律上其ノ職權ニ屬スル監督事務ヲ行フ

檢事ハ裁判所ニ對シ獨立シテ其ノ事務ヲ行フ

檢事局ノ管轄區域ハ其ノ附置セラレタル裁判所ノ管轄區域ニ同シ

若一人ノ檢事若ハ數人ノ檢事悉ク差支アリテ或ル事件ヲ取扱フコトヲ得サルトキハ裁判所長ハ區裁判所ニ於テ判事若ハ監督判事ハ其ノ事件猶豫スヘカラサルニ於テハ判事ニ檢事ノ代理ヲ命シ其ノ事件ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第七條　檢事局ニ相應ナル員數ノ檢事ヲ置ク

第八條　各裁判所ニ書記課ヲ設ク書記課ハ往復會計記錄其ノ他此ノ法律又ハ他ノ法律ニ特定シタル事務ヲ取扱フ

裁判所ニ附置セラレタル檢事局ニ於テ前項ノ如キ事務ヲ取扱フ爲必要ナリト認メタルトキニ限リ別ニ書記課ヲ設クルコトヲ得但シ合議裁判所ノ檢事局ニ限ル

司法大臣ハ裁判所ノ會計事務ヲ專任スル爲特別官吏ヲ裁判所ニ置クコトヲ得

第九條　區裁判所ニ執達吏ヲ置ク執達吏ハ裁判所ヨリ發スル文書ヲ送達シ及裁判所ノ裁判ヲ執行ス

前項ノ外執達吏ハ此ノ法律又ハ他ノ法律ニ定メタル特別ノ職務ヲ行フ

第十條　法律ヲ以テ特定シタルモノヲ除ク外左ノ場合ニ於テ適當ノ申請アルトキハ關係アル各裁判所ヲ併セテ之ヲ管轄スル直近上級ノ裁判所ハ何レノ裁判所ニ於テ本件ヲ裁判スルノ權アルヤヲ裁判ス

第一　權限アル裁判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事情ニ因リ裁判權ヲ行フコトヲ得ス且此ノ法律第十三條ニ依リ之ニ代ルヘキコトヲ定メラレタル裁判所モ亦之ヲ行フコトヲ得サルトキ

第二　裁判所管轄區域ノ境界明確ナラサルカ爲其ノ權限ニ付疑ヲ生シタルトキ

第三　法律ニ從ヒ又ハ二以上ノ確定判決ニ因リ二以上ノ裁判所裁判權ヲ互有スルトキ

第四　二以上ノ裁判所權限ヲ有セストノ確定判決ヲ爲シ又ハ權限ヲ有セストノ確定判決ヲ受ケタルモ其ノ裁判所ノ一ニ於テ裁判權ヲ行フヘキトキ

第二章　區裁判所

第十一條　區裁判所ノ裁判權ハ單獨判事之ヲ行フ

判事二人以上ヲ置キタル區裁判所ニ於テハ司法大臣ノ定メタル通則ニ從ヒ其ノ裁判事務ヲ各判事ニ分配ス

此ノ事務分配ハ毎年地方裁判所長前以テ之ヲ定ム

區裁判所判事ノ取扱ヒタル事ハ裁判事務分配上其ノ事他ノ判事ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其ノ效力ヲ失フコトナシ

判事二人以上ヲ置キタル區裁判所ニ於テハ司法大臣ハ其ノ一人ヲ監督判事トシ之ニ其ノ行政事務ヲ委任ス

第十二條　事務分配一タヒ定マリタルトキハ司法年度中之ヲ變更セス但シ一人ノ判事ノ分擔多キニ過キ又ハ判事轉退シ又ハ疾病其ノ他ノ事故ニ因リ久ク闕動スル者アル等引續キ差支ヲ生シタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第十三條　區裁判所ノ判事差支アルトキハ毎年地方裁判所長ノ前以テ定メタル順序ニ從ヒ互ニ相代理ス但シ監督判事ノ職務ハ其ノ裁判所ノ判事官等ノ順序ニ從ヒ之ヲ代理ス

一ノ區裁判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事情ニ因リ事務ヲ取扱フコトヲ得サルトキ之ニ代ルヘキ他ノ區裁判所ハ前項ニ同ク毎年前以テ之ヲ定ム

第十四條　區裁判所ハ民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス但シ反訴ニ關リテハ民事訴訟法ノ定ムル所ニ依ル

第一　二百圓ヲ超過セサル金額又ハ價額二百圓ヲ超過セサル物ニ關ル請求

第二　價額ニ拘ラス左ノ訴訟

（イ）住家其ノ他ノ建物又ハ其ノ或ル部分ノ受取明渡使用占據若ハ修繕ニ關リ又ハ賃借人ノ家具若ハ所持品ヲ賃貸人ノ差押ヘタルコトニ關リ賃貸人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

（ロ）不動產ノ經界ノミニ關ル訴訟

（ハ）占有ノミニ關ル訴訟

（ニ）雇主ト雇人トノ間ニ雇期限一年以下ノ契約ニ關リ起リタル訴訟

（ホ）左ニ揭ケタル事項ニ付旅人ト旅店若ハ飲食店ノ主人トノ間ニ又ハ旅人ト水陸運送人トノ間ニ起リタ

ル訴訟

(一) 賄料又ハ旅人ノ運送料又ハ之ニ伴フ手荷物ノ運送料

(二) 旅店若ハ飲食店ノ主人又ハ運送人ニ旅人ヨリ保護ノ爲預ケタル手荷物金錢又ハ有價物

第十五條 區裁判所ハ非訟事件ニ付法律ニ定メタル範圍及方法ニ從ヒ左ノ事務ヲ取扱フノ權ヲ有ス

第一 未成年者瘋癲者白痴者失踪者其ノ他法律若ハ判決ニ因リ治產ノ禁ヲ受ケタル者ノ後見人若ハ管財人ヲ監督スル事

第二 不動產及船舶ニ關ル權利關係ヲ登記スル事

第三 商業登記及特許局ニ登錄シタル特許意匠及商標ノ登記ヲ爲ス事

第十六條ノ一 區裁判所ハ刑事ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス但シ第二以下ニ記載シタル罪ハ豫審ヲ經サルモノニ限ル

第一 拘留又ハ科料ニ該ル罪

第二 竊盜ノ罪

第三 竊盜及刑法第二百五十四條罪ノ贓物ニ關スル罪

第四 刑法第百三十條、第百七十五條、第百八十五條乃至第百八十七條及第二百九條ノ罪竝ニ第百三十條ノ未遂罪

第五 一年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ三百圓ヲ超過セサル罰金ニ該ル罪

二個以上ノ主刑中其ノ一個ヲ科スヘキ罪ニシテ其ノ刑前項第一又ハ第五ノ規定ニ適セサルモノアルトキハ區裁判ハ其ノ裁判權ヲ有セス

第十六條ノ二 前條第一項第五ニ記載シタル罪ニ付テハ累犯又ハ併合罪トシテ處分スヘキ場合ト雖モ區裁判所其ノ裁判ヲ有ス

第十六條ノ三 司法大臣ハ地方裁判所ノ管轄區域ノ內一ノ區裁判所ノ管轄ニ屬スル刑事ノ事務ノ全部又ハ一部分ヲ其ノ地方裁判所ノ管轄區域內ノ他ノ區裁判所ヲシテ取扱ハシムルコトヲ得

第十七條 前數條ニ掲ケタルモノヲ除ク外區裁判所ノ權限ハ此ノ章ニ掲ケタル事件ニ關リ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第十八條 各區裁判所ノ檢事局ニ檢事ヲ置ク

區裁判所檢事局ノ檢事ノ事務ハ其ノ地ノ警察官憲兵將校下士又ハ林務官之ヲ取扱フコトヲ得

司法大臣ハ適當ナル場合ニ於テハ區裁判所判事試補又ハ郡市町村ノ長ヲシテ檢事ヲ代理セシムルコトヲ得

第三章 地方裁判所

第十九條 地方裁判所ヲ第一審ノ合議裁判所トス

各地方裁判所ニ一若ハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設ク

第二十條 各地方裁判所ニ地方裁判所長ヲ置ク

地方裁判所長ハ裁判所ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

地方裁判所ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

第二十一條 司法大臣ハ毎年各地方裁判所ノ判事一人若クハ二人以上ニ其ノ裁判所ノ裁判權ニ屬スル刑事ノ豫審ヲ爲スコトヲ命ス

第二十二條 各地方裁判所ノ事務ハ司法大臣ノ定メタル通則ニ從ヒ各部及各豫審判事ニ之ヲ分配ス

各地方裁判所ノ各部長及部員ノ配置及所長部長部員差支アルトキノ代理モ亦毎年前以テ之ヲ定ム

前二項ニ掲ケタル諸件ハ裁判所長部長及部ノ上席判事一人ノ會議ニ於テ裁判所長會長トナリ多數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會長ノ決スル所ニ依ル

地方裁判所長ハ次年自ラ部長トナルヘキ部ヲ指定スヘシ

第二十三條 或ル部ニ於テ著手シタル事務ニシテ司法年度ノ終若ハ休暇ノ始ニ臨ミ未タ終結ニ至ラサルモノハ裁判所長便利ト認ムルトキ同部員ヲシテ引續キ之ヲ結了セシムルコトヲ得

豫審判事ノ取扱フ事務ニシテ未タ終結ニ至ラサルモノモ亦前項ニ同シ

第二十四條 第二十二條ニ從ヒ事務ノ分配及判事ノ配置一タヒ定マリタルトキハ休暇中ヲ除キ一部ノ事務多キ

ニ過キ又ハ判事轉退シ又ハ疾病其ノ他ノ事故ニ因リ久ク闕勤スル者アル等引續キ差支アルニ非サレハ司法年度中之ヲ變更セス

裁判所ノ事務其ノ現在ノ部ニ過多ナル場合ニ於テ司法大臣適宜ト認ムルトキハ新ニ一部又ハ數部ヲ設クルコトヲ得

第二十五條　地方裁判所ノ判事差支ノ爲或ル事件ヲ取扱フコトヲ得ス且同裁判所ノ判事中其ノ代理ヲ爲シ得ヘキ者ナキ場合ニ於テ其ノ事件緊急ナリト認ムルトキハ裁判所長ハ其ノ管轄區域內ノ區裁判所判事又ハ豫審判事ニ其ノ代理ヲ命スルコトヲ得

第二十六條　地方裁判所ハ民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一　第一審トシテ

區裁判所ノ權限又ハ第三十八條ニ定メタル控訴院ノ權限ニ屬スルモノヲ除キ其ノ他ノ請求

第二　第二審トシテ

（イ）區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

（ロ）區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第二十七條　地方裁判所ハ刑事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一　第一審トシテ

區裁判所ノ權限並ニ大審院ノ特別權限ニ屬セサル刑事訴訟

第二　第二審トシテ

（イ）區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

（ロ）區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第二十八條　地方裁判所ハ破產事件ニ付一般ノ裁判權ヲ有ス

第二十九條　地方裁判所ハ非訟事件ニ關ル區裁判所ノ決定及命令ニ對シ法律ニ定メタル抗告ニ付裁判權ヲ有ス

第三十條　地方裁判所ノ權限並ニ其ノ裁判權ヲ行フノ範圍及方法ニシテ此ノ法律ニ定メサルモノハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第三十一條　司法大臣ハ地方裁判所ト其ノ管轄區域內ノ區裁判所ト遠隔ナルカ若ハ交通不便ナルカ爲至當ト認ムルトキハ地方裁判所ニ屬スル民事及刑事ノ事務ノ一部分ヲ取扱フ爲一若クハ二以上ノ支部ノ設置ヲ命スルコトヲ得且支部ヲ開クヘキ區裁判所ヲ定ム

支部ニハ之ヲ設置シタル區裁判所若ハ近隣ノ區裁判所ノ判事ヲ用ヰルコトヲ得此ノ場合ニ於テ判事ヲ選用スルノ權ハ司法大臣ニ屬ス

司法大臣ハ支部ニ勤ムヘキ豫審判事及檢事ヲ命ス

司法大臣ハ支部ノ本部タル地方裁判所ノ管轄區域內ノ區裁判所判事ヲ豫審判事ヲ命スルコトヲ得

代理ニ關スル第二十五條ハ支部ニモ亦之ヲ適用ス

第三十二條　地方裁判所ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ三人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ之ヲ審問裁判ス其ノ三人ノ判事中一人ヲ裁判長トス且豫備判事ハ如何ナル事情アルモ二人以上其ノ部ニ列席スルコトヲ得ス其ノ他ノ事件ハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ

第三十三條　各地方裁判所ノ檢事局ニ檢事正ヲ置ク檢事正ハ檢事局ノ事務取扱ヲ分配指揮及監督ス但シ檢事局ノ其ノ他ノ檢事ハ事務取扱ニ付何等ノ事件ニ拘ラス特別ノ許可ヲ受ケスシテ檢事正ヲ代理スルノ權ヲ有ス

第四章　控訴院

第三十四條　控訴院ヲ第二審ノ合議裁判所トス

各控訴院ニ一若ハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設ク

第三十五條　各控訴院ニ控訴院長ヲ置ク

控訴院長ハ控訴院ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

控訴院ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

第三十六條　事務ノ分配及結了並ニ判事ノ代理ニ付テハ第二十二條第二十三條及第二十五條ヲ左ノ變更ヲ以テ

控訴院ニ適用ス

第一　前項ニ掲ケタル各條ヲ以テ地方裁判所長ニ與ヘタル權ハ控訴院長ニモ之ヲ與ヘタルモノトス

第二　控訴院ノ判事差支ノ爲或ル事件ヲ取扱フコトヲ得ス且同院ノ判事中其ノ代理ヲ爲シ得ヘキ者ナキ場合ニ於テ其ノ事件緊急ナリト認ムルトキハ之ヲ代理スル判事ヲ出スヘキ旨ヲ控訴院長ヨリ其ノ控訴院所在地ノ地方裁判所長ニ通知シ其ノ裁判所ノ判事ヲシテ代理ヲ爲サシムルコトヲ得但シ豫備判事ヲ用ヰルコトヲ得ス

第三十七條　控訴院ハ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一　地方裁判所ノ第一審判決ニ對スル控訴

第二　區裁判所ノ判決ニ對スル控訴ニ付爲シタル地方裁判所ノ判決ニ對スル上告

第三　地方裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第三十八條　皇族ニ對スル民事訴訟ニ付第一審及第二審ノ裁判權ハ東京控訴院ニ屬ス但シ第一審ノ訴訟手續ニ付テハ地方裁判所ノ第一審手續ヲ適用ス

第三十九條　控訴院ノ權限竝ニ其ノ裁判權ヲ行フノ範圍及方法ニシテ此ノ法律ニ定メサルモノハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第四十條　控訴院ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ五人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ之ヲ審問裁判ス其ノ五人ノ判事中一人ヲ裁判長トス其ノ他ノ事件ハ訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ

第四十一條　第三十八條ノ場合ニ於テ第一審ハ五人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ審問裁判シ第二審ハ特ニ七人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ審問裁判ス其ノ五人又ハ七人ノ判事中一人ヲ裁判長トス

第四十二條　各控訴院ノ檢事局ニ檢事長ヲ置ク

檢事長竝ニ其ノ他ノ檢事ノ職權ニ付テハ第三十三條ヲ適用ス

第五章　大審院

第四十三條　大審院ヲ最高裁判所トス

大審院ニ一若ハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ置ク

第四十四條　大審院ニ大審院長ヲ置ク

大審院長ハ大審院ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

大審院ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

第四十五條　大審院ノ事務ノ分配竝ニ代理ノ順序ハ毎年部長ト協議シ大審院長前以テ之ヲ定ム

大審院長ハ次年自ラ上席セントスル部ヲ指定スヘシ

大審院ノ判事差支ノ爲或ル事件ヲ取扱フコトヲ得ス且同院ノ判事中其ノ代理ヲ爲シ得ヘキ者ナキ場合ニ於テ其ノ事件緊急ナリト認ムルトキハ之ヲ代理スル判事ヲ出スヘキ旨ヲ大審院長ヨリ其ノ所在地ノ控訴院長ニ通知シ其ノ控訴院ノ判事ヲシテ代理ヲ爲サシムルコトヲ得

第四十六條　大審院長ハ何時ニテモ部長若ハ部員ノ承諾ヲ得テ之ヲ他ノ部ニ轉セシムルコトヲ得

第四十七條　大審院ニ於テ一タヒ定マリタル部ノ組立ヲ變更シタルトキハ現ニ取扱中ノ事務ニ付テハ第二十三條ヲ適用ス

司法年度中事務分配ノ變更ニ付テハ第二十四條ヲ適用ス

第四十八條　大審院ニ於テ裁判ヲ爲スニ當リ法律ノ點ニ付テ表シタル意見ハ其ノ訴訟一切ノ事ニ付下級裁判所ヲ羈束ス

第四十九條　大審院ノ或ル部ニ於テ上告ヲ審問シタル後法律ノ同一ノ點ニ付曾テ一若ハ二以上ノ部ニ於テ爲シタル判決ト相反スル意見アルトキハ其ノ部ハ之ヲ大審院長ニ報告シ大審院長ハ其ノ報告ニ因リ事件ノ性質ニ從ヒ民事ノ總部若ハ刑事ノ總部又ハ民事及刑事ノ總部ヲ聯合シテ之ヲ再ヒ審問シ及裁判スルコトヲ命ス

第五十條　大審院ハ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一　終審トシテ

（イ）第三十七條第二ニ依リ爲シタル判決及第三十八條ノ第一審ノ判決ニ非サル控訴院ノ判決ニ對スル上告

（ロ）控訴院ノ決定及命令ニ定メタル抗告

第二　第一審ニシテ終審トシテ

第七十三條、第七十五條及第七十七條乃至第七十九條ノ罪並ニ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮以上ノ刑ニ處スヘキモノノ豫審及裁判

第五十一條　前條第二ニ掲ケタル事件ニ付大審院ハ必要ナリト認ムルトキハ事件ノ審問裁判ヲ爲ス爲控訴院若ハ地方裁判所ニ於テ法廷ヲ開クコトヲ得

此ノ場合ニ於テハ控訴院判事ヲ以テ部員ニ加フルコトヲ得但シ其ノ半數ニ滿ツルコトヲ得ス

第五十二條　大審院ノ權限並ニ其ノ裁判權ヲ行フノ範圍及方法ニシテ此ノ法律ニ定メサルモノハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第五十三條　大審院ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ七人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ之ヲ審問裁判ス其ノ七人ノ判事中一人ヲ裁判長トス其ノ他ノ事件ハ訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ

第五十四條　第四十九條ニ定メタル場合ニ於テハ聯合部ノ判事少クトモ三分ノ二列席スルコトヲ要ス

前項ノ場合ニ於テ民事ノ總部若ハ刑事ノ總部聯合スルトキ又ハ民事及刑事ノ總部聯合スルトキハ總部ノ判事中官等最モ高キ者ヲ部長ト爲ス大審院長ハ至當ナリト認ムルトキハ自ラ總部ニ長タルノ權ヲ有ス

第五十五條　大審院長ハ第五十條ニ依リ大審院ニ於テ第一審ニシテ終審ヲ爲スヘキ各別ノ場合ニ付大審院ノ判事ニ豫審ヲ命ス但シ便宜ニ依リ各裁判所判事ヲシテ豫審ヲ爲サシムルコトヲ得

第五十六條　大審院ノ檢事局ニ檢事總長ヲ置ク

檢事總長並ニ其ノ他ノ檢事ノ職權ニ付テハ第三十三條ヲ適用ス

第二編　裁判所及檢事局ノ官吏

第一章　判事又ハ檢事ニ任セラルヽニ必要ナル準備及資格

第五十七條　判事又ハ檢事ニ任セラルヽニハ第六十五條ニ掲ケタル場合ヲ除キ二回ノ競爭試驗ヲ經ル事ヲ要ス

第五十八條　志願者前條ノ競爭試驗ヲ受ケ得ルニ必要ナル資格並ニ此ノ試驗ニ關ル細則ハ判事檢事登用試驗規則中ニ司法大臣之ヲ定ム

第一回試驗ニ及第シタル者ハ第二回試驗ヲ受クルノ前試補トシテ裁判所及檢事局ニ於テ一年六月以上實地修習ヲ爲スコトヲ要ス

前項ノ修習ニ關ル細則モ亦試驗規則中ニ之ヲ定ム

第五十九條　司法大臣ハ試補ノ行狀罷免スルニ足レリト認ムルトキハ何時ニテモ之ヲ罷免スルコトヲ得此ノ罷免ニ關ル細則モ亦試驗規則中ニ之ヲ定ム

第六十條　一年以上修習ヲ爲シタル試補ハ其ノ修習ヲ現ニ監督スル判事ノ命アルトキ區裁判所ニ於テ或ル司法事務ヲ取扱フコトヲ得

豫審判事及地方裁判所ノ受命判事モ亦其ノ附屬ノ試補ヲシテ自己ニ代リ或ル事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第六十一條　試補ハ如何ナル場合ニ於テモ左ノ事務ヲ取扱フノ權ヲ有セス

第一　訴訟事件ト非訟事件トニ拘ラス裁判ヲ爲ス事

第二　證據ヲ調フル事但シ前條第二項ノ場合ヲ除ク

第三　登記ヲ爲ス事

第六十二條　第二回ノ競爭試驗ニ及第シタル試補ハ判事又ハ檢事ニ任セラルヽコトヲ得

第六十三條　新任ノ判事又ハ檢事ハ關位アルトキ之ヲ區裁判所若ハ地方裁判所ノ判事又ハ區裁判所若ハ地方裁判所ノ檢事局ノ檢事ニ補ス

司法大臣ハ關位アルマテ新任ノ判事又ハ檢事ニ豫備判事又ハ豫備檢事トシテ勤務スルコトヲ命シ之ヲ司法省又ハ區裁判所又ハ地方裁判所又ハ其ノ裁判所ノ檢事局ニ用ウ

第六十四條　區裁判所又ハ地方裁判所又ハ其ノ檢事局ニ用ヰラレタル豫備判事又ハ豫備檢事ハ判事又ハ檢事差支アリテ職務ニ從事スルコトヲ得ス且通常代理ノ規程ニ依リ難キコトアルトキハ第三十二條ノ制限ニ從ヒ司法大臣ハ之ニ其ノ判事又ハ檢事ヲ代理セシムルコトヲ得

司法大臣ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ判事又ハ其ノ檢事局ノ檢事ニ一時闕位アル間ハ此ノ法律ノ範圍內ニ於テ豫備判事又ハ豫備檢事ヲ以テ之ヲ充タスコトヲ得

第六十五條　三年以上帝國大學法科教授若ハ辯護士タル者ハ此ノ章ニ揭ケタル試驗ヲ經スシテ判事又ハ檢事ニ任セラルヽコトヲ得

帝國大學法科卒業生ハ第一回試驗ヲ經スシテ試補ヲ命セラルヽコトヲ得

第六十六條　左ニ揭ケタル者ハ判事又ハ檢事ニ任セラルヽコトヲ得ス

第一　重罪ヲ犯シタル者但シ國事犯ニシテ復權シタル者ハ此ノ限ニ在ラス

第二　定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

第三　身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レサル者

第二章　判事

第六十七條　判事ハ勅任又ハ奏任トシ其ノ任官ヲ終身トス

第六十八條　大審院長ハ勅任判事ノ中ヨリ天皇之ヲ補シ各控訴院長及大審院ノ部長ハ司法大臣ノ上奏ニ因リ勅任判事ノ中ヨリ之ヲ補ス其ノ他ノ判事ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス

第六十九條　五年以上判事タル者又ハ五年以上檢事帝國大學法科教授若ハ辯護士ニシテ判事ニ任セラレシ者ニ非サレハ控訴院判事ニ補セラルヽコトヲ得ス

第七十條　十年以上判事タル者又ハ十年以上檢事帝國大學法科教授若ハ辯護士ニシテ判事ニ任セラレシ者ニ非サレハ大審院判事ニ補セラルヽコトヲ得ス

第七十一條　第六十九條及第七十條ニ揭ケタル年限ヲ算フルニハ補職ノ時マデ各々其ノ條ニ列記シタル職務ノ一ノミニ引續キ從事シタルコトヲ必要トセス

第七十二條　判事ハ在職中左ノ諸件ヲ爲スコトヲ得ス

第一　公然政事ニ關係スル事

第二　政黨ノ黨員又ハ政社ノ社員トナリ又ハ府縣郡市町村ノ議會ノ議員トナル事

第三　俸給アル又ハ金錢ノ利益ヲ目的トスル公務ニ就ク事

第四　商業ヲ營ミ又ハ其ノ他行政上ノ命令ヲ以テ禁シタル業務ヲ營ム事

第七十三條　第七十四條及第七十五條ノ場合ヲ除ク外判事ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニ非サレハ其ノ意ニ反シテ轉官轉所停職免職又ハ減俸セラルヽコトナシ但シ豫備判事タルトキ及補闕ノ必要ナル場合ニ於テ轉所ヲ命セラルヽハ此ノ限ニ在ラス

前項ハ懲戒取調又ハ刑事訴追ノ始若ハ其ノ間ニ於テ法律ノ許ス停職ニ關係アルコトナシ

第七十四條　判事身體若ハ請神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルニ至リタルトキハ司法大臣ハ控訴院又ハ大審院ノ總會ノ決議ニ依リ之ニ退職ヲ命スルコトヲ得

第七十五條　法律ヲ以テ裁判所ノ組織ヲ變更シ又ハ之ヲ廢シタル場合ニ於テ其ノ判事ヲ補スヘキ闕位ナキトキハ司法大臣ハ之ニ俸給ノ半額ヲ給シテ闕位ヲ待タシムルノ權ヲ有ス

第七十六條　判事ノ官等俸給及進級ニ關ル規程ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第七十七條　判事ハ退職シタルトキハ恩給法ニ依リ恩給ヲ受ク

第七十八條　判事ノ俸給ハ判事ニ對シ懲戒取調又ハ刑事訴追ヲ始メタルカ故ニ停職シタルニ拘ラス引續キ之ヲ給ス

第三章　檢事

第七十九條　檢事ハ勅任又ハ奏任トス

第七十六條及第七十七條ハ檢事ニモ亦之ヲ適用ス

檢事總長及檢事長ノ職ハ司法大臣ノ上奏ニ因リ勅任檢事ノ中ヨリ之ヲ補ス其ノ他ノ檢事ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス

第八十條　檢事ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニ非サレハ其ノ意ニ反シテ之ヲ免職スルコトナシ

第八十一條　檢事ハ如何ナル方法ヲ以テスルモ判事ノ裁判事務ニ干涉シ又ハ裁判事務ヲ取扱フコトヲ得ス

第八十二條　檢事ハ其ノ上官ノ命令ニ從フ

第八十三條　檢事總長檢事長及檢事正ハ其ノ各管轄區域內ノ裁判所ノ檢事ノ職務ノ範圍內ニ在ル事務ヲ自ラ取扱フノ權ヲ有ス

檢事總長檢事長及檢事正ハ其ノ管轄區域內ニ於テ或ル檢事ノ取扱フヘキ事務ヲ他ノ檢事ニ移スノ權ヲ有ス

第八十四條　司法警察官ハ檢事ノ職務上其ノ檢事局管轄區域內ニ於テ發シタル命令及其ノ檢事ノ上官ノ發シタル命令ニ從フ

司法官又ハ檢事局及內務省又ハ地方官廳ハ協議シテ警察官中各裁判所ノ管轄區域內ニ於テ司法警察官トシテ勤務シ前項ノ命令ヲ受ケ及之ヲ執行スル者ヲ定ム

第四章　裁判書記

第八十五條　裁判所ニ第八條ニ從ヒ相應ナル員數ノ書記ヲ置ク

區裁判所ノ各判事及合議裁判所ノ各部ノ爲少クトモ一人ノ書記ヲ置ク

第八十六條　地方裁判所ノ書記課ニ監督書記ヲ置ク控訴院及大審院ノ書記課ニ書記長ヲ置ク

區裁判所及檢事局ノ書記課ニ二人以上ノ書記ヲ置キタルトキハ其ノ一人ヲ監督書記トス

監督書記及書記長ハ各々其ノ上官ノ命令ニ服從シテ書記課ノ事務ヲ指揮監督ス

第八十七條　書記其ノ職務ノ範圍內ニ於テ取扱ヒタル事ハ既ニ定マリタル事務分配上其ノ事他ノ書記ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其ノ效力ヲ失フコトナシ

第八十八條　書記ハ司法大臣之ヲ任シ及之ヲ補ス

書記長ハ奏任トス

書記長ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス

第八十九條　書記ニ任セラルヽニハ勅令ノ定ムル所ニ依リ試驗ヲ經ルコトヲ要ス

志願者前項ノ試驗ヲ受ケ得ルニ必要ナル資格竝ニ此ノ試驗及試驗ヲ經タル後爲スヘキ修習ニ關ル細則ハ裁判所書記登用試驗規則中ニ司法大臣之ヲ定ム

第九十條　書記ニ任セラレタル者闕位ナキ間ハ豫備書記ニ補ス

豫備書記ハ書記トシテ臨時勤務ヲ命セラルヽコトヲ得

第九十一條　書記ハ其ノ上官ノ命令ニ從フ

裁判所ノ開廷ニ於テハ裁判長ノ命令ニ從ヒ又判事一人ナルトキハ其ノ判事ノ命令ニ從フ

書記ハ檢事局ニ勤務スルトキ又ハ特別ノ事務ニ付判事若ハ檢事ニ附屬シタルトキモ亦其ノ檢事局又ハ判事若ハ檢事ノ命令ニ從フ

前二項ノ命令ニシテ口述ノ書取ニ關ルカ又ハ書類記錄ノ調製若ハ變更ニ關ル場合ニ於テ其ノ調製若ハ變更ヲ正當ナラスト認ムルトキ書記ハ自己ノ意見ヲ記シテ之ニ添フルコトヲ得

前四項ニ揭ケタルモノヲ除ク外書記ノ職務及其ノ事務取扱方法ハ書記ニ關ル規則中ニ司法大臣之ヲ定ム

第九十二條　合議裁判所長又ハ區裁判所ノ判事若ハ監督判事ハ其ノ裁判所ニ於テ修習中ノ試補ニ書記ノ事務ヲ臨時取扱ハシムルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ職務上署名ヲ要スルトキハ特別ノ許可ヲ得テ署名スル旨ヲ記ス

第九十三條　豫備書記ハ事務ノ取扱ニ於テハ書記ニ同シ但シ書記規則中ニ制限ヲ設ケタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第五章　執達吏

第九十四條　各區裁判所ニ第九條ニ從ヒ相應ナル員數ノ執達吏ヲ置ク

第九十五條　執達吏ハ司法大臣之ヲ任シ及之ヲ補ス司法大臣ハ控訴院長ニ其ノ管轄區域內ノ裁判所ノ執達吏ヲ任シ及補スルノ權ヲ委任スルコトヲ得

執達吏ニ任セラルヽニ必要ナル資格竝ニ試驗ニ關ル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第九十六條　執達吏ハ手數料ヲ受ク其手數料一定ノ額ニ達セサルトキ補助金ヲ受ク

第九十七條　執達吏ハ其ノ所屬區裁判所ヲ管轄スル地方裁判所管轄區域內ノ何レノ場所ニ於テモ其ノ職務ヲ行フ

第九十八條　裁判所ヨリ發スル文書ニシテ送達ヲ要スルモノハ執達吏ヲ以テ之ヲ送達ス但シ書記ヨリ直接ニ若

ハ郵便ヲ以テ送達スルコトヲ法律ノ許ス場合ハ此ノ限ニ在ラス

執達吏ハ刑事ニ付警察官ヲ以テ執行ヲ爲サヽル場合ニ限リ裁判所ノ裁判ヲ執行ス

前二項ニ揭ケタルモノヲ除ク外執達吏ノ權限ハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第九十九條　執達吏ハ其ノ職務ヲ適實ニ行フ爲保證金ヲ出スコトヲ要ス

執達吏ノ職務細則竝ニ保證金ニ關ル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第百條　執達吏ハ其ノ所屬裁判所ノ上官ノ命ヲ受ケタル書記及其ノ裁判所ヲ管轄スル地方裁判所ノ上官ノ命ヲ受ケタル書記及其ノ書記ノ上官ノ命令ニ從フ

第六章　廷丁

第百一條　廷丁ハ大審院控訴院及地方裁判所ニ於テハ裁判所長區裁判所ニ於テハ地方裁判所長之ヲ雇ヒ及其ノ雇ヲ解ク

第百二條　廷丁ハ開廷ニ出頭セシメ及司法大臣ノ發シタル一般ノ規則中ニ定メタル事務ヲ取扱ハシム

區裁判所ハ執達吏ヲ用ヰルコト能ハサルトキハ其ノ裁判所所在地ニ於テ書類ヲ送達スル爲廷丁ヲ用ヰルコトヲ得

第三編　司法事務ノ取扱

第一章　開廷

第百三條　開廷ハ裁判所又ハ支部ニ於テ之ヲ爲ス

司法大臣ニ於テ事情ニ因リ必要ナリト認ムルトキハ區裁判所ヲシテ其ノ管轄區域內ノ一定ノ場所ニ於テ職務ヲ行ハシムルコトヲ得

第百四條　訴訟審問ノ上席及指揮ハ合議裁判所ニ於テハ開廷ヲ爲シタル裁判長ニ屬シ區裁判所ニ於テハ開廷ヲ爲シタル判事ニ屬ス

裁判長ニ屬スル權ハ裁判上一人ニテ執務スル判事ニモ亦屬ス

第百五條　裁判所ニ於テ對審ノ公開ヲ停ムルノ決議ヲ爲シタルトキハ其ノ決議ハ其理由ト共ニ公衆ヲ退カシムル前之ヲ言渡ス此ノ場合ニ於テ裁判所ノ判決ヲ言渡ストキハ再ヒ公衆ヲ入廷セシムヘシ

第百六條　裁判長ハ公開ヲ停メタルトキモ入廷ノ特許ヲ與フルコトヲ至當ト認ムル者ヲ入廷セシムルノ權ヲ有ス

第百七條　裁判長ハ婦女兒童及相當ナル衣服ヲ著セサル者ヲ法廷ヨリ退カシムルコトヲ得其ノ理由ハ之ヲ訴訟ノ記錄ニ記入ス

第百八條　開廷中秩序ノ維持ハ裁判長ニ屬ス

第百九條　裁判長ハ審問ヲ妨クル者又ハ不當ノ行狀ヲ爲ス者ヲ法廷ヨリ退カシムルノ權ヲ有ス

前項ニ揭ケタル違犯者ノ行狀ニ因リ之ヲ拘引シ閉廷ノトキマテ之ヲ拘留スノ必要アリト認ムルトキ裁判長ハ之ヲ命令スルノ權ヲ有ス閉廷ノトキ裁判所ハ之ヲ釋放スルコトヲ命シ又ハ五圓以下ノ罰金若ハ五日以內ノ拘留ニ處スルコトヲ得

此ノ處罰ニ對シテハ上告ヲ許シ控訴ヲ許サス且其ノ所爲ノ輕罪若ハ重罪ニ該ルヘキモノナルトキハ之ニ對シテ刑事訴追ヲ爲スコトヲ得

第百十條　前條ノ規程ハ左ノ變更ヲ以テ當事者證人及鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス

第一　裁判所ハ閉廷ヲ待タスシテ本條ノ違犯者ヲ卽時ニ罰スルコトヲ得

第二　違犯者原告ナルトキハ裁判所ハ處罰ノ上仍本人宥恕ヲ請フカ又ハ恭順ヲ表シテ不敬ノ罪ヲ謝スルマテ其ノ審問ヲ中止スルコトヲ得

第百十一條　裁判長ハ不當ノ言語ヲ用ヰル辯護士ニ對シ同事件ニ付引續キ陳述スルノ權ヲ行フコトヲ禁スルコトヲ得其ノ禁止ハ此ノ行狀ニ付懲戒上ノ訴追ヲ爲スコトヲ妨ケス

第百十二條　裁判所ノ開廷中秩序ヲ維持スル爲第百九條第百十條及第百十一條ヲ以テ與ヘタル權ハ豫審判事又ハ受命判事又ハ法律ニ從ヒ其ノ職務ヲ行フ試補モ亦之ヲ行フコトヲ得

此ノ場合ニ於テノ異議ハ二十四時以內ニ其ノ判事又ハ試補ニ之ヲ申出ルコトヲ得

豫審判事又ハ其ノ命ヲ受ケタル試補ノ命令ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ判事ノ屬スル裁判所ノ刑事部若ハ刑

事支部ニ於テ前項ノ異議ヲ裁判ス受命判事又ハ其ノ命ヲ受ケタル試補ノ命令ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ判事ニ命シタル裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

第百十三條　第百九條第百十條第百十一條及第百十二條ヲ以テ與ヘタル權ヲ行ヒタルトキハ訴訟ノ記錄ニ之ヲ記入シ及其ノ理由ヲ記ス

前項ノ場合ニ於テ其ノ所爲ノ重罪若ハ輕罪ニ該ルヘキモノナルカ又ハ懲戒上罰スヘキモノナルトキハ詳細ニ之ヲ記入シ裁判長ハ其ノ事件ヲ更ニ處分スルノ權アル官廳ニ報告ヲ爲ス

第百十四條　判事檢事及裁判所書記ハ公開シタル法廷ニ於テハ一定ノ制服ヲ著ス

前項ノ開廷ニ於テ審問ニ參與スル辯護士モ亦一定ノ職服ヲ著スルコトヲ要ス

第二章　裁判所ノ用語

第百十五條　裁判所ニ於テハ日本語ヲ用ウ

當事者證人又ハ鑑定人ノ中日本語ニ通セサル者アルトキハ訴訟法又ハ特別法ニ通事ヲ用ヰルコトヲ要スル場合ニ於テ之ヲ用ウ

第百十六條　通事ノ任命及使用竝ニ訴訟手續上其ノ行フヘキ職務ニ關ル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第百十七條　通事ノ得難キ場合ニ於テ書記其ノ言語ニ通スルトキハ裁判長ノ承諾ヲ得テ通事ニ用ヰラルヽコトヲ得

第百十八條　外國人ノ當事者タル訴訟ニ關係ヲ有スル者及其ノ訴訟ノ審問ニ參與スル官吏ノ或ル外國語ニ通スル場合ニ於テ裁判長便利ト認ムルトキハ其ノ外國語ヲ以テ口頭審問ヲ爲スコトヲ得但シ其ノ審問ノ公正記錄ハ日本語ヲ以テ之ヲ作ル

第三章　裁判ノ評議及言渡

第百十九條　合議裁判所ノ裁判ハ此ノ法律ニ從ヒ定數ノ判事之ヲ評議シ及之ヲ言渡ス

第百二十條　四日以上引續クヘキ見込アル刑事ノ審問ニ於テ裁判所長ハ補充判事一人ヲ命シ之ニ立會ハシムルコトヲ得此ノ補充判事ハ其ノ審問中或ル判事ノ疾病其ノ他ノ事故ニ因リ引續キ參與スルコトヲ得サル場合ニ於テ之ニ代リ審問及裁判ヲ完結スルノ權ヲ有ス

第百二十一條　判事ノ評議ハ之ヲ公行セス但シ豫備判事及試補ノ傍聽ヲ許スコトヲ得

判事ノ評議ハ其ノ裁判長之ヲ開キ且之ヲ整理ス其ノ評議ノ顚末竝ニ各判事ノ意見及多少ノ數ニ付テハ嚴ニ祕密ヲ守ルコトヲ要ス

第百二十二條　評議ノ際各判事意見ヲ述フルノ順序ハ官等ノ最モ低キ者ヲ始トシ裁判長ヲ終トス官等同キトキハ年少ノ者ヲ始トシ受命ノ事件ニ付テハ受命判事ヲ始トス

第百二十三條　裁判ハ過半數ノ意見ニ依ル

金額ニ付判事ノ意見三說以上ニ分レ其ノ說各々過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ最多額ノ意見ヨリ順次寡額ニ合算ス

刑事ニ付其ノ意見三說以上ニ分レ各々過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ被告人ニ不利ナル意見ヨリ順次利益ナル意見ニ合算ス

第百二十四條　判事ハ裁判スヘキ問題ニ付自己ノ意見ヲ表スルコトヲ拒ムコトヲ得ス

第四章　裁判所檢事局ノ事務章程

第百二十五條　裁判所及檢事局ノ標準ト爲スヘキ規則ハ司法大臣之ヲ定ム

控訴院長及檢事長ハ前項ノ規則ニ依リ各自管轄區域內ノ裁判所及檢事局ニ對シテ事務ノ一般ノ取扱ニ關リ成ルヘク統一ヲ旨トシ殊ニ裁判所及檢事局ノ開廳時間及開廷ノ時日ニ付訓令ヲ發ス

大審院ハ自ラ其ノ事務章程ヲ定ム但シ之ヲ實施スル前司法大臣ノ認可ヲ受ク

第五章　司法年度及休暇

第百二十六條　司法年度ハ一月一日ニ始マリ十二月三十一日ニ終ハル

第百二十七條　裁判所ノ休暇ハ七月十一日ニ始マリ九月十日ニ終ハル

第百二十八條　休暇中ハ左ノ事件ノ外既ニ著手シタル民事訴訟ヲ中止ス且新ナル訴訟ニ著手セス

第一　爲替手形若ハ約束手形其ノ他ノ流通證書ニ關ル請求

第二　艀舶又ハ運送賃又ハ積荷ニ對スル請求
第三　財産差押事件
第四　住家其ノ他ノ建物又ハ或ノ或ル部分ノ受取明渡使用占據若ハ修繕ニ關リ又ハ賃借人ノ家具若ハ所持品ヲ賃貸人ノ差押ヘタルコトニ關リ賃貸人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟
第五　養料ノ請求
第六　保證ヲ出サシムルノ請求
第七　取掛リタル建築ノ繼續ニ關ル事件
第八　前數項ニ掲ケタルモノヲ除ク外區裁判所ノ判事ニ於テ又ハ民事訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ休暇部若ハ休暇部長ニ於テ直ニ著手スヘキ緊急ノモノト認メタル請求若ハ事件

第百二十九條　休暇中ニ拘ラス刑事訴訟非訟事件判決執行破産事件竝ニ民事訴訟法ニ依リ略式ヲ以テ取扱フコトヲ得ヘキ訴訟ハ之ヲ停止スルコトナシ

第百三十條　合議裁判所ニ於テハ休暇中事務取扱ノ爲休暇部ト稱スル一若ハ二以上ノ部ヲ設ク
休暇部ノ組立ハ休暇ノ始マル前裁判所長之ヲ定ム第二十三條ハ此ノ部ニモ亦之ヲ適用ス
二人以上ノ判事ヲ置キタル區裁判所ノ休暇事務取扱方法ハ監督判事之ヲ定ム

第六章　法律上ノ共助

第百三十一條　裁判所ハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依リ互ニ法律上ノ輔助ヲ爲ス
法律上ノ輔助ハ別ニ法律ニ定メタル場合ノ外ハ所要ノ事務ヲ取扱フヘキ地ノ區裁判所ニ於テ之ヲ爲ス

第百三十二條　檢事局モ亦各自ノ管轄區域内ニ於テ取扱フヘキ事務ニ付互ニ法律上ノ輔助ヲ爲ス

第百三十三條　裁判所書記課モ亦其ノ權内ノ事件又ハ其ノ配下ノ執達吏ノ權内ノ事件ニ付互ニ法律上ノ輔助ヲ爲ス

第四編　司法行政ノ職務及監督權

第百三十四條　合議裁判所長區裁判所ノ判事若ハ監督判事檢事總長檢事長檢事正ハ司法大臣ノ由テ以テ司法行政ノ職務ヲ行フノ官吏トス

第百三十五條　司法行政監督權ノ施行ハ左ノ規程ニ依ル

第一　司法大臣ハ各裁判及各檢事局ヲ監督ス
第二　大審院長ハ大審院ヲ監督ス
第三　控訴院長ハ其ノ控訴院及其ノ管轄區域内ノ下級裁判所ヲ監督ス
第四　地方裁判所長ハ其ノ裁判所若ハ其ノ支部及其ノ管轄區域内ノ區裁判所ヲ監督ス
第五　區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ハ其ノ裁判所所屬ノ書記及執達吏ヲ監督ス
第六　檢事總長ハ其ノ檢事局及下級檢事局ヲ監督ス
第七　檢事長ハ其ノ檢事局及其ノ局ノ附置セラレタル控訴院管轄區域内ノ檢事局ヲ監督ス
第八　檢事正ハ其ノ檢事局其ノ局ノ附置セラレタル地方裁判所管轄區域内ノ檢事局ヲ監督ス

第百三十六條　前條ニ掲ケタル監督權ハ左ノ事項ヲ包含ス

第一　官吏不適當又ハ不充分ニ取扱ヒタル事務ニ付其ノ注意ヲ促シ竝ニ適當ニ其ノ事務ヲ取扱フコトヲ之ニ訓令スル事
第二　官吏ノ職務上ト否トニ拘ラス其ノ地位ニ不相應ナル行狀ニ付之ヲ諭告スル事
但シ此ノ諭告ヲ爲ス前其ノ官吏ヲシテ辯明ヲ爲スコトヲ得セシムヘシ

第百三十七條　第十八條及第八十四條ニ掲ケタル官吏ハ第百三十五條ニ依リ行フヘキ監督ヲ受クルノ官吏中ニ之ヲ包含ス

第百三十八條　裁判所若ハ檢事局ノ官吏ニシテ適當ニ其ノ職務ヲ行ハサル者又ハ其ノ行狀其ノ地位ニ不相應ナル者ニ付第百三十六條ヲ適用スルコト能ハサルトキハ懲戒法ニ從ヒ之ヲ訴追ス

第百三十九條　前數條ニ掲ケタル司法行政ノ職務及監督權ハ判事若ハ檢事其ノ官吏タルノ資格又ハ其ノ他ノ資格ヲ以テ爲シタル事ニ對シテ起リタル請求ニ付其ノ請求ヲ滿足セシムル爲之ヲ執行スルコトヲ得ス

第百四十條　司法事務取扱ノ方法ニ對スル抗告殊ニ或ル事務ノ取扱方ニ對シ又ハ取扱ノ延滯若ハ拒絶ニ對ス

ル抗告ハ此ノ編ニ掲ケタル司法行政ノ職務及監督權ニ依リ之ヲ處分ス

第百四十一條　裁判所及檢事局ハ司法大臣又ハ監督權アル判事若ハ檢事ノ要求アルトキハ法律上ノ事項又ハ司法行政ニ關ル事項ニ付意見ヲ述フ

第百四十二條　司法官廳ニ對シテ起リタル民事ノ訴訟ニ於テハ其ノ訴訟ヲ受ケタル裁判所ノ檢事局ハ司法官廳ヲ代表ス

第百四十三條　此ノ編ニ掲ケタル前各條ノ規程ハ裁判上執務スル判事ノ裁判權ニ影響ヲ及ホシ又ハ之ヲ制限スルコトナシ

附　則

第百四十四條　此ノ法律ノ施行ニ關ル規程竝ニ從來ノ法律ニシテ此ノ法律ニ牴觸スト雖モ當分ノ內仍ホ効力ヲ有セシムルモノハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

附　則

本法ハ明治四十一年三月十九日ヨリ之ヲ施行ス

附　則

本法ハ刑法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前ニ提起シタル訴訟ハ本法ニ依リ他ノ裁判所ノ權限ニ屬スヘキモノト雖モ受訴裁判所之ヲ裁判スヘシ

本法施行後重禁錮又ハ輕禁錮ニ處スヘキ罪ノ裁判權ニ付テハ重禁錮ヲ懲役ト看做シ輕禁錮ヲ禁錮ト看做ス

第二章　裁判所構成法施行條例

明治二十三年三月十八日法律第二十二號　改正　四一年第三一號

朕裁判所構成法施行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

裁判所構成法施行條例

第一條　從來ノ治安裁判所ハ裁判所構成法ニ定メタル區裁判所トシ從來ノ始審裁判所ハ裁判所構成法ニ定メタル地方裁判所トス

第二條　始審裁判所從來ノ檢事局ハ裁判所構成法ニ定メタル地方裁判所ノ檢事局トス控訴院大審院ノ檢事局モ亦同シ

第三條　區裁判所ノ管轄區域ヲ爲ス町村ノ變更ハ之ヲ區裁判所管轄區域ニ及ホスモノトス

第四條　裁判所構成法實施前他ノ裁判所第一審トシテ受理シタル民事訴訟及刑事訴訟ニシテ同法ニ依リ區裁判所ノ管轄ニ屬シタルモノハ現在ノ儘相當ノ區裁判所ニ移ルモノトス既ニ爲シタル裁判ハ區裁判所之ヲ爲シタルモノト看做ス

第五條　裁判所構成法ニ依リ地方裁判所ノ第二審ニ屬スヘキモ既ニ控訴院ニ於テ受理シタル事件ハ控訴院之ヲ裁判スヘシ又控訴院ノ管轄ニ屬スヘキモ既ニ大審院ニ於テ受理シタル民事刑事ノ上告ハ大審院之ヲ裁判スヘシ

第六條　裁判所構成法實施前重罪裁判所ニ於テ受理シタル刑事訴訟ハ現在ノ儘相當ノ地方裁判所ニ移ルモノトス既ニ爲シタル裁判ハ地方裁判所之ヲ爲シタルモノト看做ス

第七條　裁判所構成法實施前始審裁判所ニ於テ受理シタル郡長區長戶長又ハ市長町長村長ニ對スル民事訴訟ハ同法ニ依リ區裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノト雖其ノ地方裁判所之ヲ裁判シ控訴院ニ於テ受理シタル官廳ニ對スル民事訴訟ハ其ノ控訴院之ヲ裁判スヘシ

第八條　裁判所構成法實施前高等法院ニ於テ受理シタル刑事訴訟ハ現在ノ儘相當ノ裁判所ニ移ルモノトス高等法院ニ於テ裁判スヘキ事件ヲ通常裁判所ニ於テ受理シタルモノモ亦同シ

第九條　明治十八年第三十一號布告違警罪卽決例ハ裁判所構成法ノ爲ニ變更ヲ受クルコトナシ

第十條　明治十八年第十二號布告普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交涉ノ件處分法ハ裁判所構成法ノ爲ニ變更ヲ受クルコトナシ

第十一條　明治二十一年勅令第六十四號ハ仍效力ヲ有ス

區裁判所出張所ニ於テ判事差支アルトキハ裁判所書記ヲシテ登記事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

北海道及島嶼ニシテ區裁判所遠隔ノ地方ニ於テ司法大臣ハ郡長町長又ハ村長ニ委任シテ登記事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第十二條　東京地方裁判所管内小笠原島及伊豆七島ニ於テ民事刑事ノ訴訟ニシテ區裁判所ノ裁判權ニ屬スルモノ及非訟事件ハ裁判所設置マテ島吏之ヲ取扱フ但シ刑事訴訟ノ手續ハ便宜之ヲ取扱フコトヲ得

第十三條　沖繩縣ニ於テ民事刑事ノ訴訟及非訟事件ニシテ區裁判所及地方裁判所ノ裁判權ニ屬スルモノハ裁判所設置マテ同縣官吏之ヲ取扱フ但シ控訴院ノ裁判權ニ屬スルモノハ長崎控訴院ノ管轄トス

第十四條　削除

第十五條　明治二十一年勅令第七十一號清國並ニ朝鮮國駐在領事裁判規則ハ裁判所構成法ノ爲ニ變更ヲ受クルコトナシ

第十六條　裁判所構成法實施ノ際在職ノ裁判官檢察官ハ同法第二編第一章ノ要件ヲ必要トセス

第十七條　裁判所構成法實施ノ際在職ノ書記ハ同法第二編第四章第八十九條ノ要件ヲ必要トセス

第十八條　裁判所構成法實施後三年間ハ司法大臣ハ試補實地修習ノ時間ヲ一年六箇月マテニ減縮スルコトヲ得

明治十七年太政官達第百二號判事登用規則及明治二十年勅令第三十七號文官試驗試補及見習規則ニ依リ試補ト爲リタル者ハ第二回試驗ヲ要セスシテ之ヲ判事又ハ檢事ニ任スルコトヲ得

第十九條　裁判所構成法實施後一年間ハ司法大臣ハ同法第二編第二章第六十九條及第七十條ノ規程ニ拘ラス補職ヲ爲スコトヲ得

第二十條　三年以上裁判官又ハ檢察官ノ職ヲ奉シタル者又ハ三年以上舊參事院議官又ハ議官補ノ職ヲ奉シタル者又ハ三年以上法制局參事官ノ職ヲ奉シタル者又ハ三年以上司法省高等官(會計局ノ高等官ヲ除ク)ノ職ヲ奉シタル者ハ裁判所構成法實施後一年間ハ之ヲ判事又ハ檢事ニ任スルコトヲ得

第二十一條　裁判所構成法第二編第二章第七十四條及第七十五條ハ檢事ニモ亦之ヲ適用ス

附則

本法ハ刑法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第三章　行政裁判法

明治二十三年六月三十日法律第四十八號

朕行政裁判法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

行政裁判法

第一章　行政裁判所組織

第一條　行政裁判所ハ之ヲ東京ニ置ク

第二條　行政裁判所ニ長官一人及評定官ヲ置ク評定官ノ員數ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

行政裁判所ニ書記ヲ置ク其員數及職務ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三條　長官ハ勅任トス評定官ハ勅任又ハ奏任トス

長官及評定官ハ三十歳以上ニシテ五年以上高等行政官ノ職ヲ奉シタル者若クハ裁判官ノ職ヲ奉シタル者ヨリ内閣總理大臣ノ上奏ニ依リ任命セラルルモノトス書記ハ長官之ヲ判任ス

第四條　長官及評定官ハ在職中左ノ諸件ヲ爲スコトヲ得ス

一　公然政事ニ關係スルコト

二　政黨ノ黨員又ハ政社ノ社員トナリ又ハ衆議院議員府縣郡市町村會ノ議員若クハ參事會員タルコト

三　兼官ノ場合ヲ除ク外俸給アル又ハ金錢ノ利益ヲ目的トスル公務ニ就クコト

四　商業ヲ營ミ其他行政上ノ命令ヲ以テ禁シタル業務ヲ營ムコト

第五條　第六條ノ場合ヲ除ク外長官及評定官ハ刑法ノ宣告又ハ懲役ノ處分ニ由ルニ非サレハ其意ニ反シテ退官轉官又ハ非職ヲ命セラルルコトナシ

行政裁判所ノ長官又ハ評定官ヲ兼任スル者ハ其本官在職中前項ヲ適用ス

懲戒處分ノ法ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第六條　長官及評定官身體若クハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルトキハ內閣總理大臣ハ行政裁判所ノ總會ノ決議ニ依リ其退職ヲ上奏スルコトヲ得

第七條　長官ハ行政裁判所ノ事務ヲ總理ス

長官故障アルトキハ評定官中官等最モ高キ者之ヲ代理ス官等同シキトキハ任官ノ順序ニ依リ其先ナル者之ヲ代理ス

第八條　長官ハ自ラ裁判長トナリ若クハ評定官ニ裁判長ヲ命スルコトヲ得

部ヲ分ツノ必要アルトキハ其組織及事務分配ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第九條　行政裁判所ノ裁判ハ裁判長及評定官ヲ併セ五人以上ノ列席合議ヲ要ス但列席ノ人員ハ奇數ニ限ル若シ闕席ノ爲偶數トナリタルトキハ官等最モ低キ評定官ヲ議決ヨリ除ク官等同シキトキハ任官ノ順序ニ依リ其後ナル者ヲ除ク

議決ハ過半數ニ依ル

第十條　長官又ハ評定官ハ左ノ場合ニ於テ評議及議決ニ加ハルコトヲ得ス

一　裁判スヘキ事件自己又ハ父母兄弟姉妹若クハ妻子ノ身上ニ關スルトキ

二　裁判スヘキ事件一私人ノ資格ヲ以テ意見ヲ述ヘタルモノ又ハ理事者代者理若クハ職務外ノ地位ニ於テ取扱ヒタルモノニ關スルトキ

三　裁判スヘキ事件行政官タルノ資格ヲ以テ其事件ノ處分又ハ裁決ニ參與シタルモノニ關スルトキ

第十一條　前條ノ場合ニ於テ原告又ハ被告ハ原因ヲ疏明シテ文書又ハ口頭ヲ以テ長官又ハ評定官ヲ忌避スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ行政裁判所ハ本人ヲ回避セシメ之ヲ議決ス

第十二條　忌避若クハ除斥ノ原因タル事情ニ付キ長官又ハ評定官ヨリ申出アルトキ又ハ他ノ事由ヨリシテ長官又ハ評定官カ法律ニ依リ評議及決議ニ加ハルヲ得サルノ疑アルトキハ行政裁判所ハ本人ヲ回避セシメ之ヲ議決ス

第十三條　行政裁判所ノ處務規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條　行政訴訟ノ辯護人タルコトヲ得ルハ行政裁判所ノ認許シタル辯護士ニ限ル

第二章　行政裁判所權限

第十五條　行政裁判所ハ法律勅令ニ依リ行政裁判所ニ出訴ヲ許シタル事件ヲ審判ス

第十六條　行政裁判所ハ損害要償ノ訴訟ヲ受理セス

第十七條　行政訴訟ハ法律勅令ニ特別ノ規程アルモノヲ除ク外地方上級行政廳ニ訴願シ其裁決ヲ經タル後ニ非サレハ之ヲ提起スルコトヲ得ス

各省大臣ノ處分又ハ內閣直轄官廳又ハ地方上級行政廳ノ處分ニ對シテハ直ニ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

各省又ハ內閣ニ訴願ヲ爲シタルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得ス

第十八條　行政裁判所ノ判決ハ其事件ニ付キ關係ノ行政廳ヲ羈束ス

第十九條　行政裁判所ノ裁判ニ對シテハ再審ヲ求ムルコトヲ得ス

第二十條　行政裁判所ハ其權限ニ關シテハ自ラ之ヲ決定ス

行政裁判所ト通常裁判所又ハ特別裁判所トノ間ニ起ル權限ノ爭議ハ權限裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

第二十一條　行政裁判所ノ判決ノ執行ハ通常裁判所ニ囑託スルコトヲ得

第三章　行政訴訟手續

第二十二條　行政訴訟ハ行政廳ニ於テ處分書若クハ裁決書ヲ交付シ又ハ告知シタル日ヨリ六十日以內ニ提起スヘシ六十日ヲ經過シタルトキハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得ス但法律勅令ニ特別ノ規定アルモノハ此限ニ在ラス

訴訟提起ノ日限其他此法律ニ依リ行政裁判所ノ指定スル日限ノ計算竝ニ災害事變ノ爲メ遷延シタル期間ニ關シテハ民事訴訟ノ規程ヲ適用ス

第二十三條　行政訴訟ハ法律勅令ニ特別ノ規程アルモノヲ除ク外行政廳ノ處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止セス但行政廳及行政裁判所ハ其職權ニ依リ又ハ原告ノ願ニ依リ必要ト認ムルトキハ其處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止スル

コトヲ得

第二十四條　行政訴訟ハ文書ヲ以テ行政裁判所ニ提起スヘシ

法律ニ依リ法人ト認メラレタル者ハ其名ヲ以テ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十五條　訴狀ハ左ノ事項ヲ記載シ原告署名捺印スヘシ

一　原告ノ身分、職業、住所、年齢

二　被告ノ行政廳又ハ其他ノ被告

三　要求ノ事件及其理由

四　立證

五　年月日

訴狀ニハ原告ノ經歷シタル訴願書裁決書竝ニ證據書類ヲ添フヘシ

第二十六條　訴狀ニハ被告ニ送付スル爲メニ必要文書ノ副本ヲ添フヘシ

第二十七條　行政裁判所ハ原告ノ訴狀ニ就テ審査シ若シ法律勅令ニ依リ行政訴訟ヲ提起スヘカラサルモノナルカ又ハ適法ノ手續ニ違背スルモノナルトキハ其理由ヲ付シタル裁決書ヲ以テ之ヲ却下スヘシ

其訴狀ノ方式ヲ缺クニ止マルモノハ之ヲ改正セシムル爲メ期限ヲ指定シテ還付スヘシ

第二十八條　行政裁判所ニ於テ訴狀ヲ受理シタルトキハ其副本ヲ被告ニ送付シ相當ノ期限ヲ指定シテ答辯書ヲ差出サシムヘシ

答辯書ニハ原告ニ送付スル爲メ必要文書ノ副本ヲ添フヘシ

第二十九條　行政裁判所ハ必要ナリト認ムルトキハ其期限ヲ指定シテ原告被告交互ニ辯駁書及再度ノ答辯書ヲ差出サシムヘシ

第三十條　行政裁判所ハ訴狀及答辯書ノ附屬文書ノ副本ヲ原告被告交互ニ送付スル代リニ所内ニ於テ之ヲ閲覽セシムルコトヲ得

第三十一條　行政裁判所ハ訴訟審問中其事件ノ利害ニ關係アル第三者ヲ訴訟ニ加ハラシメ又ハ第三者ノ願ニ依リ訴訟ニ加ハルコトヲ許可スルヲ得

前項ノ場合ニ於テハ行政裁判所ノ判決ハ第三者ニ對シテモ亦其效力ヲ有ス

第三十二條　行政官廳ハ其官吏又ハ其申立ニ依リ主務大臣ヨリ命シタル委員ヲシテ訴訟代理ヲ爲サシムルコトヲ得

代理者ハ委任狀ヲ以テ代人タルコトヲ證明スヘシ

第三十三條　行政裁判所ハ豫メ指定シタル期日ニ於テ原告被告及第三者ヲ召喚シテ審廷ヲ開キ口頭審問ヲ爲スヘシ

原告被告及第三者ニ於テ口頭審問ヲ爲スコトヲ望マサル旨ヲ申立タル場合ニ於テハ行政裁判所ハ文書ニ就キ直ニ判決ヲ爲スコトヲ得ス

第三十四條　審廷ニ於テハ裁判長ノ許可ヲ得タル者ヨリ順次發言スヘシ

原告被告及第三者ハ事實上及法律上ノ點ニ就キ文書ニ盡サヽル所ヲ補足シ又ハ誤謬ヲ更正シ若クハ新ニ證憑ヲ提出シ及證書ヲ提示スルコトヲ得

第三十五條　主務大臣ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ公益ヲ辯護スル爲メ委員ヲ命シ審廷ニ差出スコトヲ得

第三十六條　行政裁判所ノ對審判決ハ之ヲ公開ス

安寧秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アリ又ハ行政廳ノ要求アルトキハ行政裁判所ノ決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ムコトヲ得

第三十七條　公開ヲ停ムルノ決議ヲ爲シタルトキハ公衆ヲ退カシムルノ前之ヲ言渡ス

第三十八條　行政裁判所ハ原告被告及第三者ニ出廷ヲ命シ竝ニ必要ト認ムル證憑ヲ徵シ證人及鑑定人ヲ召喚シ審問ニ應シ證明及鑑定ヲ爲サシムルコトヲ得

證人又ハ鑑定人トシテ審問ニ應シ證明及鑑定ヲ爲スヘキ義務ニ關シテハ民事訴訟ノ規程ヲ適用ス其義務ヲ盡サル丶場合ニ於テ處分スヘキ科罰ハ行政裁判所自ラ之ヲ判決ス

行政裁判所ハ口頭審問ニ於テ舉證ノ手續ヲ爲シ又ハ評定官ニ委任シ若クハ通常裁判所又ハ行政廳ニ囑託シテ之カ調査ヲ爲サシムルコトヲ得

第二十九條　行政裁判所ニ於テ審問中ノ事件ニ關シ民事上ノ訴訟起ルコトアリテ通常裁判ノ確定ヲ待ツノ必要アリト認ムルトキハ其審判ヲ中止スルコトヲ得

第四十條　審問手續ニ關スル故障ノ申立ハ行政裁判所自ラ之ヲ判決ス

第四十一條　召喚ノ期日ニ於テ原告若クハ被告若クハ第三者出延セサルコトアルモ行政裁判所ハ其審判ヲ中止セス

原告被告及第三者共ニ出延セサルトキハ行政裁判所ハ審問ヲ行ハス直ニ判決ヲ爲スコトヲ得

第四十二條　裁判宣告書ハ理由ヲ付シ裁判長評定官及書記之ニ署名捺印シ其謄本ニ行政裁判所ノ印章ヲ捺シ之ヲ原告被告及第三者ニ交付スヘシ

行政訴訟ノ文書ニハ訴訟用印紙ヲ貼用スルヲ要セス

第四十三條　行政訴訟手續ニ關シ此法律ニ規程ナキモノハ行政裁判所ノ定ムル所ニ依リ民事訴訟ニ關スル規程ヲ適用スルコトヲ得

第四章　附則

第四十四條　此法律ハ明治二十三年十月一日ヨリ施行ス

第四十五條　第二十條第二項ノ權限爭議ハ權限裁判所ヲ設クル迄ノ間樞密院ニ於テ之ヲ裁定ス

裁定ノ手續ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第四十六條　從前ノ法令ニシテ此法律ト抵觸スルモノハ此法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第四十七條　此法律施行ノ前既ニ行政訴訟トシテ受理シ審理中ニ係ルモノハ仍從前ノ成規ニ依リ處分スヘシ

第四章　行政廳ノ違法處分ニ關スル行政裁判ノ件

明治二十三年十月九日法律第百六號

朕行政廳ノ違法處分ニ關スル行政裁判ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ掲クル事件ニ付行政廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ毀損セラレタリトスル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

一　海關稅ヲ除ク外租稅及手數料ノ賦課ニ關スル事件

二　租稅滯納處分ニ關スル事件

三　營業免許ノ拒否又ハ取消ニ關スル事件

四　水利及土木ニ關スル事件

五　土地ノ官民有區分ノ査定ニ關スル事件

第五章　訴願法

明治二十三年十月十日法律第百五號

朕訴願法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

訴願法

第一條　訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ掲クル事件ニ付之ヲ提起スルコトヲ得

一　租稅及手數料ノ賦課ニ關スル事件

二　租稅滯納處分ニ關スル事件

三　營業免許ノ拒否又ハ取消ニ關スル事件

四　水利及土木ニ關スル事件

五　土地ノ官民有區分ニ關スル事件

六　地方警察ニ關スル事件

其他法律勅令ニ於テ特ニ訴願ヲ許シタル事件

第二條　訴願セントスル者ハ處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シ直接上級行政廳ニ之ヲ提起スヘシ

訴願ノ裁決ヲ受ケタル後更ニ上級行政廳ニ訴願スルトキハ其裁決ヲ爲シタル行政廳ヲ經由スヘシ

國ノ行政ニ付此法律ニ依リ郡參事會又ハ市參事會ノ處分若クハ裁決ニ對シテ訴願セントスル者ハ其處分若クハ裁決ヲ爲シタル郡參事會又ハ市參事會ヲ經由シテ府縣參事會ニ之ヲ提起スヘシ

第三條　各省大臣ノ處分ニ對シ訴願セントスル者ハ其省ニ之ヲ提起スヘシ

第四條　裁判所ノ裁判各省ノ裁決及第二條第三項府縣參事會ノ裁決ヲ經タルモノハ其事件ニ付更ニ訴願スルコトヲ得ス

第五條　訴願ハ文書ヲ以テ之ヲ提起スヘシ

訴願書ノ侮辱誹毀ニ渉ルモノハ之ヲ受理セス

第六條　訴願書ハ其不服ノ要點理由要求及訴願人ノ身分職業住所年齢ヲ記載シ署名捺印スヘシ

訴願書ニハ證據書類ヲ添ヘ並下級行政廳ノ裁決ヲ經タルモノハ其裁決書ヲ添フヘシ

第七條　多數ノ人員共同シテ訴願セントスルトキハ其訴願書ニ各訴願人ノ身分職業住所年齢ヲ記載シ署名捺印シ其中ヨリ三名以下ノ總代人ヲ選ヒ之ニ委任シ總代委任ノ正當ナルコトヲ證明スヘシ

法律ニ依リ法人ト認メラレタル者ハ其名ヲ以テ訴願ヲ提起スルコトヲ得

第八條　行政處分ヲ受ケタル後六十日ヲ經過シタルトキハ其處分ニ對シ訴願スルコトヲ得ス

行政廳ノ裁決ヲ經タル訴願ニシテ其裁決ヲ受ケタル後三十日ヲ經過シタルモノハ更ニ上級行政廳ニ訴願スルコトヲ得ス

行政廳ニ於テ宥恕スヘキ事由アリト認ムルトキハ期限經過後ニ於テモ仍之ヲ受理スルコトヲ得

第九條　法律勅令ニ依リ訴願ヲ提起スヘカラサルモノナルカ又ハ適法ノ手續ニ違背スルモノナルトキハ之ヲ却下ス

其訴願書ノ方式ヲ缺クニ止マルモノハ期限ヲ指定シテ還付スヘシ

第十條　訴願書ハ郵便ヲ以テ之ヲ差出スコトヲ得

郵便遞送ノ日數ハ第八條ノ訴願期限內ニ之ヲ算入セス

第十一條　第二條第一項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ十日以內ニ辯明書及必要文書ヲ添ヘ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ

第二條第二項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ三日以內ニ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ

第二條第三項ノ場合ニ於テ訴願書ヲ發送スルトキ亦前二項ノ例ニ依ルヘシ

第十二條　訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外行政處分ノ執行ヲ停止セス但行政廳ハ其職權ニ依リ又ハ訴願人ノ願ニ依リ必要ナリト認ムルトキハ其執行ヲ停止スルコトヲ得

第十三條　訴願ハ口頭審問ヲ爲サス其文書ニ就キ之ヲ裁決ス但行政廳ニ於テ必要ナリト認ムルトキハ口頭審問ヲ爲スコトヲ得

第十四條　訴願ノ裁決ハ文書ヲ以テ之ヲ爲シ其理由ヲ付スヘシ訴願ヲ却下スルトキ亦同シ

第十五條　訴願ノ裁決書ハ其處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シテ之ヲ訴願人ニ交付スヘシ訴願書ヲ却下スルトキ亦同シ

第十六條　上級行政廳ニ於テ爲シタル裁決ハ下級行政廳ヲ羈束ス

第十七條　訴願ノ手續ニ關シ他ノ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノハ各其規程ニ依ル

附則

第十八條　明治十五年(十二月)第五十八號布告請願規則ハ此法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第十九條　此法律施行ノ前請願規則ニ依リ受理シタル請願ハ仍其規則ニ依リ之ヲ處分ス

請願規則ニ依リ下級行政廳ノ指令ヲ受ケタル者訴願スルヲ得ヘキ場合ニ於テ更ニ訴願セントスルトキハ此法律ニ從ヒ其上級行政廳ニ之ヲ提起スヘシ

第二十條　第八條ノ訴願期限ハ此法律施行ノ前行政處分ヲ受ケ又ハ請願規則ニ依リ指令ヲ受ケタル事件ニシテ其處分又ハ指令ヲ受ケタル日ヨリ滿五年ヲ經過セサルモノニ對シテハ此法律施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第二十一條　行政廳ニ呈出スル請願ハ法律ニ依ルノ限ニ在ラス

第八編　軍事　赤十字

第一章　徴兵令

法律第一號　明治二十二年一月二十二日

改正　二二年第二九號、二六年第四號、二八年第一五號、三七年勅令第二一二號、三九年法律第四三號、四〇年第二五四號

朕徴兵令改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

徴兵令

第一章　總則

第一條　日本帝國臣民ニシテ滿十七歳ヨリ滿四十歳迄ノ男子ハ總テ兵役ニ服スルノ義務アルモノトス

第二條　兵役ハ分テ常備兵役後備兵役補充兵役及國民兵役トス

第三條　常備兵役ハ分テ現役及豫備役トス

現役ハ陸軍ハ三箇年海軍ハ四箇年ニシテ滿二十歳ニ至リタル者之ニ服シ豫備役ハ陸軍ハ四箇年四箇月海軍ハ三箇年ニシテ現役ヲ終リタル者之ニ服ス

第四條　後備兵役ハ陸軍ハ十箇年海軍ハ五箇年ニシテ常備兵役ヲ終リタル者之ニ服ス

第五條　補充兵役ハ陸軍ニ在リテハ十二箇年四箇月海軍ニ在リテハ一箇年ニシテ其ノ年所要ノ現役兵員ニ超過スル者ノ中所要ノ人員之ニ服ス

第六條　國民兵役ハ分テ第一國民兵第二國民兵役トス

第一國民兵役ハ陸軍ニ在リテハ後備兵役又ハ召集セラレタル補充兵ニシテ其ノ役ヲ終リタル者海軍ニ在リテハ後備兵役ヲ終リタル者之ニ服シ第二國民兵役ハ常備兵役後備兵役補充兵役及第一國民兵役ニ在ラサル者之ニ服ス

第七條　各兵役ノ期限既ニ滿ルト雖モ戰時或ハ事變ニ際スルトキ若クハ臨時ニ演習或ハ觀兵ノ舉アルトキ若クハ航海中或ハ外國駐劄中ハ其期ヲ延スコトアル可シ

第八條　重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ兵役ニ服スルコトヲ許サス

第二章　服役

第九條　陸軍現役兵及補充兵ハ毎年所要ノ人員ニ應シ壯丁ノ身材藝能職業ニ從ヒ歩兵騎兵砲兵工兵輜重兵職工及雜卒ニ區別シ抽籤ノ法ニ依リ當籤ノ者ヲ以テ之ニ充ツ

海軍現役兵及補充兵ハ毎年所要ノ人員ニ應シ沿海地方及島嶼ノ壯丁ヲ調査シ海軍ニ適スル職業ニ從ヒ水兵【火夫】職工及雜卒ニ區別シ抽籤ノ法ニ依リ當籤ノ者ヲ以テ之ニ充ツ但【海軍志願兵徴募規則】ニ依リ服役スル者ハ本令ノ限ニ在ラス

警備隊ヲ置キタル島嶼ノ壯丁（近衛師團ニ編入スル者ヲ除ク）ハ總テ之ヲ警備隊ニ充テ其地ニ於テ服役セシム但在營期限ハ一箇年以内トス

第十條　雜卒ノ現役期限ハ其職務ニ因リ之ヲ短縮スルコトアル可シ但常備兵役ノ全期ハ之ヲ減スルコトナシ

第十一條　抽籤番號ノ順序ニ由リ其年ノ補充兵役所要員ニ超過スル者ハ國民兵役ニ服セシム

第十二條　二十歳ニ至ラスト雖モ滿十七歳以上ノ者ハ志願ニ由リ現役ニ服スルコトヲ得

第十三條　滿十七歳以上滿二十八歳以下ニシテ官立學校（小學科及豫科等ノ別科ヲ除ク）府縣立師範學校中學校若クハ文部大臣ニ於テ中學校ノ學科程度ト同等以上ト認メタル學校若クハ文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學政治學理財學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ所持シ若クハ陸軍試驗委員ノ試驗ニ及第シ服役中食料被服裝具等ノ費用ヲ自辯シ豫備後備將校タル冀望ヲ有スル者ハ志願ニ由リ一箇年間陸軍現役ニ服スルコトヲ得但費用ノ全額ヲ自辯シ能ハサルノ證アル者ニハ其幾部ヲ官給スルコトアル可シ

一年志願兵ノ豫備役後備役年期ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

滿十七歳以上滿二十八歳以下ニシテ官立府縣立師範學校ノ卒業證書ヲ所持シ官立公立小學校ノ教職ニ在ル者ハ六週間陸軍現役ニ服セシム其服役ニ關スル費用ハ官給トス

前項ノ現役ヲ終リタル者ハ直チニ國民兵役ニ服セシム

第三項又ハ第四項ニ依リ服役中ノ者ニシテ滿二十八歳迄ニ其教職ヲ罷ムル者ハ抽籤ノ法ニ依ラスシテ更ニ二箇年間陸軍現役及常例ノ豫備役後備役ニ服セシム但第一項ニ依リ一年志願兵ヲ志願スル者ハ此限ニ在ラス

第十四條　禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ賭博犯ニ由リ懲罰ニ處セラレタル者ハ一年志願兵タルコトヲ許サス

第十五條　現役中殊ニ勤務ニ熟シ品行方正ナル者ハ歸休ヲ命スルコトアル可シ

第十六條　豫備兵後備兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ之ヲ召集ス平常ニ於テハ毎年一度六十日以内勤務演習ノ爲メ之ヲ召集シ又毎年一度簡閲點呼ヲ爲ス

第十七條　陸軍補充兵及海軍補充兵ハ現役兵ノ補缺ニ充テ又戰時若クハ事變ニ際シ之ヲ召集ス但陸軍補充兵ヲ以テ現役兵ノ補缺ニ充ツルハ其服役ノ初年ニ限ル

陸軍補充兵ハ平常ニ在テ百五十日以内教育ノ爲メ之ヲ召集ス其他勤務演習及簡閲點呼ヲ爲スコト豫備兵ニ同シ

第十八條　國民兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ後備兵ヲ召集シ仍ホ兵員ヲ要スルトキニ限リ之ヲ召集ス

第三章　免役延期及猶豫

第十九條　兵役ヲ免スルハ癈疾又ハ不具等ニシテ徴兵檢査規則ニ照シ兵役ニ堪ヘサル者ニ限ル

第二十條　左ニ掲クル者ハ徴集ヲ延期ス次年ニ於テ仍ホ徴集ニ適セサル者ハ國民兵役ニ服セシム

第一　體格完全且强壯ナルモ身幹未タ定尺ニ滿タサル者

第二　疾病中又ハ病後ニシテ勞役ニ堪ヘサル者

第二十一條　公權ノ剝奪若クハ停止ヲ附加ス可キ重輕罪ノ爲メ訊問若クハ拘留中ノ者ハ徴集ヲ延期ス

第二十二條　徴集ニ應スルトキハ其家族自活シ能ハサルノ確證アル者ハ本人ノ願ニ由リ徴集ヲ延期ス其事故三箇年ヲ過クルモ仍ホ止マサル者ハ國民兵役ニ服セシム但分家又ハ絶家廢家再興ノ故ヲ以テ本條ニ當ル者其他自活シ能ハサル事故ヲ作爲シタル者ハ其願ヲ許可セス

第二十三條　第十三條第一項ニ掲クル學校ニ在校ノ者ハ本人ノ願ニ由リ滿二十八歳迄徴集ヲ猶豫ス其事故滿二十八歳迄ニ止ミ又ハ二十八歳ヲ過クルモ仍ホ止マサル者ハ抽籤ノ法ニ依ラスシテ之ヲ徴集ス但第十三條第一項ニ依リ一年志願兵ヲ志願スル者及第十三條第三項ニ依リ服役スル者ハ此限ニ在ラス

韓國、露國領沿海州、露國領薩哈嗹、滿國、香港、澳門以外ノ外國ニ在ル者ハ本人ノ願ニ由リ徴集ヲ猶豫ス

滿三十二歳迄ニ歸朝スル者ハ抽籤ノ法ニ依ラスシテ之ヲ徴集シ三十二歳ヲ過クル者ハ國民兵役ニ服セシム但第十三條第一項ニ依リ一年志願兵ヲ志願スル者ハ此限ニ在ラス

第二十四條　餘人ヲ以テ代フ可カラサル職務ヲ奉スル官吏及市町村長、助役及收入役ハ豫備兵後備兵ニ在ルト陸軍補充兵ニ在ルトヲ問ハス勤務演習簡閲點呼ノ爲メ召集スルコトナシ

法律ヲ以テ設立シタル議會ノ議員其開會中亦同シ

第四章　雜則

第二十五條　毎年一月一日ヨリ十一月三十日迄ニ滿二十歳ト爲ル者ハ其年一月中ニ、十二月一日ヨリ同月三十一日迄ニ滿二十歳ト爲ル者ハ翌年一月中ニ又第二十三條第一項ニ當ル者ニシテ二十八歳迄ニ事故止ミ同條第二項ニ當ル者ニシテ三十二歳迄ニ歸朝シタル者ハ十四日以内ニ書面ヲ以テ戸主ニ非サル者ハ其戸主ヨリ本籍ノ市町村長ニ屆出ツ可シ但二十歳未滿ニシテ現役ヲ終ヘタル者又ハ現役中ノ者ハ本條ノ屆出ヲ爲スニ及ハス

第二十六條　徴集ハ本籍所在ノ徴募區ニ於テスルモノトス

第二十七條　疾病又ハ犯罪等ノ爲メ期限ニ際シ入營シ難キ者ハ翌年之ヲ徴集ス

第二十八條　兵役ヲ免レンカ爲メ身體ヲ毀傷シ疾病ヲ作爲シ其他詐僞ノ所爲ヲ用ヒ又ハ逃亡若クハ潛匿シタル者又ハ正當ノ事故ナク身體ノ檢査ヲ受ケサル者ハ抽籤ノ法ニ依ラスシテ之ヲ徴集ス

第二十九條　服役年期ノ計算ハ現役豫備役補充役及海軍後備役ニ在テハ各其役ニ就ク年ノ十二月一日（第十三條第三項ニ依リ服役スル者ノ現役年期ノ計算ハ別ニ勅令ヲ以テ規定スル月日ヨリ起算ス）ヨリ陸軍後備役ニ在テハ其役ニ就ク年ノ四月一日ヨリ起算ス但第七條ニ依リ延期シタルモノト雖モ服役年期ノ計算ハ延期セサル者ニ同シ

現役中禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ逃亡シタル者其刑期中及逃亡中ノ日數ハ現役年期ニ算入セス其豫備役年期ハ現役ヲ終ル年ヨリ起算シ陸軍ニ在テハ第六年目ノ三月三十一日迄海軍ニ在テハ第五年目ノ十一月三十日迄トス但第十條ニ依リ現役年期ヲ短縮シタルモノハ其現役ヲ短縮シタル場合ニ於ケル豫備役年期ニ應シ本項ニ準シテ計算ス

豫備役後備役及補充役中犯罪ノ爲メ又ハ正當ノ事由ナクシテ召集ヲ缺キタル者其召集ヲ缺キタル年ハ服役年期ニ算セス

第五章　罰則

第三十條　第二十五條ノ屆出ヲ爲サヽル者及正當ノ事故ナク身體ノ檢査ヲ受ケサル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十一條　兵役ヲ免レンカ爲メ逃亡シ又ハ潛匿シ若クハ身體ヲ毀傷シ疾病ヲ作爲シ其他詐僞ノ所爲ヲ用ヒタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第六章　附則

第三十二條　本令ハ明治二十二年一月ヨリ施行ス但第二十五條ノ屆出期限ハ明治二十二年ニ限リ三月一日ヨリ同月十五日迄トス

第三十三條　本令ハ北海道ニ於テ函館江差福山ノ外及沖繩縣並東京府管下小笠原島ニハ漸ヲ以テ施行ス其時期區域及特ニ徴集ヲ免除シ若クハ猶豫ス可キモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十四條　本令中市町村長トアルハ市制町村制ヲ實施スル迄ノ間戸長ノコトトス

第三十五條　現今陸軍豫備役ニ在ル者ノ服役年期ハ第三條ニ依ル其後備役ニ在ル者ハ常備役年期ヲ通シテ十二箇年四箇月トス

第三十六條　舊令第十七條ニ依リ徴集猶豫ニ屬シタル者ハ徴集ヲ延期シ其事故七箇年ヲ過クルモ仍ホ止マサルトキハ國民兵役ニ服セシム

第三十七條　舊令第十八條第二項ニ依リ徴集猶豫ニ屬シタル者ハ徴集ヲ延期シ其事故七箇年ヲ過クルモ仍ホ止マサルトキハ國民兵役ニ服セシム

第三十八條　舊令第十八條第七項及第二十一條ニ依リ徴集猶豫ニ屬シタル者ハ徴集ヲ延期シ其事故七箇年ヲ過クルモ仍ホ止マサルトキハ國民兵役ニ服セシム

第三十九條　舊令第十八條第三項ノ生徒ニシテ第一豫備徴員ト爲リ仍ホ在校ノ者ハ該徴員タルコトヲ止メ滿二十七歳迄徴集ヲ猶豫シ其事故二十七歳ヲ過クルモ仍ホ止マサルトキハ國民兵役ニ服セシム

第四十條　第三十六條第三十七條第三十八條及第三十九條ニ掲クル者其事故各其本條ノ期限内ニ止ミタルトキハ抽籤ノ法ニ依リ徴集ス但一年志願兵ヲ志願スルコトヲ得

第四十一條　舊令第十八條第三項若クハ第十九條ニ依リ徴集猶豫ニ屬シ在校ノ者ハ其事故八箇年以内ニ止ミタルトキ又ハ八箇年ヲ過クルモ仍ホ止マサルトキハ抽籤ノ法ニ依リ徴集ス但一年志願兵ヲ志願スルコトヲ得

第四十二條　舊令第三十條ニ依リ補充員ト爲リタル者ハ之ヲ豫備徴員ト爲シ一箇年間（明治二十一年十二月一日ヨリ起算ス）ニ徴集セサル者ハ國民兵役ニ服セシム

第四十三條　舊令第三十一條ニ依リ第一豫備徴員ト爲リ在校セサル者及舊令第三十二條ニ依リ第二豫備徴員ト爲リタル者ハ直ニ國民兵役ニ服セシム補充員ヨリ第一豫備徴員ト爲リタル者亦同シ

第四十四條　明治十二年第四十六號布告徴兵令ニ依リ國民軍ノ外免役又ハ半時免役若クハ徴集猶豫ニ屬シタル者ハ直ニ國民兵役ニ服セシム

第四十五條　舊令第八條ニ依リ海軍兵ト爲リタル者ノ服役期限ハ同令第三條及第四條ニ依ル

第四十六條　第三十六條第三十七條第三十八條ニ掲クル徴集延期ノ者及第三十九條第四十一條ニ掲クル徴集猶豫ノ者其事故各其本條ノ期限内ニ止ミタルトキハ三日以内ニ本籍ノ市町村長ニ屆出可シ

第十三條第三項又ハ第四項ニ依リ服役中ノ者ニシテ滿二十八歳迄ニ其教職ヲ罷ムル者ハ三日以内ニ本籍ノ市町村長ニ屆出可シ

第一項及第二項ノ屆出ヲ爲サヽル者及本令施行前舊令第三十五條第三十六條ノ屆出ヲ爲サスシテ本令施行後ニ於テ發覺スル者ハ本令第三十條ニ依リ處分ス可シ

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際ニ於ケル第一補充兵及第二補充兵ハ前後ノ服役ヲ通算シテ十二箇年四箇月ニ滿ツル迄補充兵役ニ服セシム

本令施行ノ際第一國民兵役ニ在ル陸軍出身者ニシテ服役尚五箇年ニ滿タサル者ハ五箇年ニ滿ツル迄後備兵役ヲ終リタル者ニ在リテハ後備兵役ニ、第一補充兵役ヲ終リタル者ニ在リテハ補充兵役ニ服セシム

附則

本法ハ明治四十年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行ノ際現ニ露國領沿海州、露國領薩哈璉、清國、香港又ハ澳門ニ在リテ徴集猶豫中ノ者ハ從前ノ規定ニ依リ徴集ヲ猶豫ス

明治三十七年九月二十九日勅令第二百十五號

朕第一國民兵役ニ在ル者ニシテ後備役ニ編入セラレタル者ノ服役ニ關スル件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

明治三十七年勅令第二百十二號附則第三項ニ該當スル者ハ別ニ命ナクシテ第一國民兵役ニ編入ノ際ニ於ケル各兵科、部、官等級又ハ之ニ相當スル各兵科、部、官等級ノ下士兵卒タルモノトス

第二章　北海道ニ徴兵令施行ノ制

（明治二十八年九月二十一日勅令第百二十六號　改正　三〇年第二五七號　三三年第三三六號）

朕北海道ニ徴兵令ヲ施行スルノ件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

第一條　明治二十九年一月一日ヨリ北海道渡島、後志、膽振、石狩ノ四箇國ニ徴兵令ヲ施行ス

明治三十一年一月一日ヨリ天鹽、北見、日高、十勝、釧路、根室、千島ノ七箇國ニ徴兵令ヲ施行ス

第二條　前條ノ徴兵令施行地ニ轉籍移住シ開墾其ノ他一定ノ生業ニ從事スル者ハ轉籍移住ノ後五箇年ニ滿ツル迄徴集ヲ猶豫ス但轉籍移住ノ後前條ノ區域外ニ轉籍シ更ニ轉籍移住シタル者ハ此ノ限ニアラス

占守島ニ轉籍移住ノ者ニ在リテハ滿三十二歳迄徴集ヲ猶豫ス滿三十二歳ヲ過キ仍在住スル者ハ國民兵役ニ服セシム

第三條　（屯田現役豫備役下士兵卒ノ戸籍内ニ在ル者ハ徴集ヲ免除ス但シ專ラ兵村ノ業務ニ從事セサル者ハ此ノ限ニ在ラス）

（前項ニ依リ徴集免除ニ屬シタル者五箇年以内ニ其ノ資格ヲ失フトキハ徴集ニ應セシム）

第四條　徴兵令ヲ施行セル函館江差福山ニハ本令ヲ適用スルノ限ニアラス

第三章　沖繩縣及小笠原島ニ徴兵令施行ノ制

明治三十年八月七日勅令第二百五十八號改正　三七年第四九號

朕沖繩縣及東京府管下小笠原島ニ徴兵令ヲ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十一年一月一日ヨリ沖繩縣及東京府管下小笠原島ニ徴兵令ヲ施行ス

小笠島ニ轉籍移住シ開墾其ノ他一定ノ生業ニ從事スル者ハ轉籍移住ノ後五箇年ニ滿ツル年迄徴集ヲ猶豫ス但轉籍移住ノ後本島ニ轉籍シ更ニ轉籍移住シタル者ハ此ノ限ニアラス

第四章　徴兵事務條例

明治二十九年三月三十一日勅令第二十二號改正三二年第一二三號、三五年第三四號、三六年第六四號、三七年第四七號、三九年第一五二號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ徴兵事務條例ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

徴兵事務條例

第一章　徴兵區

第一條　徴兵區ハ師管及聯隊區又ハ警備隊區ノ區域ニ從フ

第二條　聯隊區及警備隊區ハ更ニ之ヲ徴募區ニ分ツ

第三條　徴募區ハ一郡一市又ハ一島廳ノ管轄區域ヲ以テ一區ト爲シ但シ北海道ニ在リテハ支廳ノ管轄區域又ハ區、沖繩ノ區ニ在リテハ區ヲ以テ一區ト爲シ一市ニシテ二聯隊區ニ分屬スルモノハ各別ニ一區ト爲ス

東京市、京都市、大阪市ニ於テハ更ニ徴募區ヲ檢査區ニ分チ區ヲ以テ檢査區ト爲ス

第四條　歩兵隊ノ兵員ハ聯隊毎ニ其ノ師管ノ一聯隊區（第一師管ニ在テハ二聯隊區）ヨリ其ノ他ノ兵員ハ其ノ師管各聯隊區ヨリ之ヲ徴集ス但シ要員配賦上ノ必要ニ依リ他ノ聯隊區又ハ他ノ師管ヨリ之ヲ徴集スルコトヲ得

徴兵區ヲ有セサル團隊ノ兵員ハ各師管又ハ數師管ヨリ之ヲ徴集ス

警備隊ノ兵員ハ其ノ警備隊區ヨリ之ヲ徴集ス

海軍兵員ハ各師管內沿海及島嶼ヲ包括スル聯隊區及沖繩警備隊區ヨリ之ヲ徴集ス

第二章　徴兵官

第五條　徴兵官ハ總理徴兵官、師管徴兵官、聯隊區徴兵官、警備隊徴兵官及聯隊區聯合徴兵署徴兵官トス

第六條　總理徴兵官ハ內務大臣及陸軍大臣ヲ以テ之ニ充テ全國徴兵ノ事ヲ統轄ス

第七條　師管徴兵官ハ師管內府縣毎ニ師團長及府縣知事ヲ以テ之ニ充テ師團長ヲ首坐トシ其ノ管內府縣徴兵ノ事ヲ統轄ス

北海道ニ於テハ師團長及北海道廳長官ヲ以テ師管徴兵官ニ充テ師團長ヲ首坐トシ其ノ管內徴兵ノ事ヲ統轄ス

第八條　聯隊區內徴募區毎ニ聯隊區司令官及島司郡市長ヲ以テ之ニ充テ警備隊區徴兵官ハ警備隊司令官及島司郡長ヲ以テ之ニ充テ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ヲ首坐トシ其區內徴募事務ヲ執行ス

東京市、京都市、大阪市ニ於テハ檢査區毎ニ聯隊區司令官及區長ヲ以テ聯隊區徴兵官ニ充テ聯隊區司令官ヲ首坐トシ抽籤事務ヲ除クノ外其ノ區內徴募事務ヲ執行ス

第九條　聯隊區聯合徴兵署徴兵官ハ東京市、京都市、大阪市ニ於テ徴兵區毎ニ聯隊區司令官、市長及各區長ヲ以テ之ニ充テ聯隊區司令官ヲ首坐トシ其ノ區內抽籤事務ヲ執行ス

第十條　前二條ノ徴兵官事故アルトキハ聯隊區司令官及警備隊司令官ニ在リテハ師團長ニ於テ其ノ部下ノ佐官又ハ尉官ヲシテ其ノ職務ヲ代理セシメ島司及郡市區長ニ在リテハ各其職務ヲ代理スル者徴兵官ノ職務ヲ行フ

第十一條　（削除）

第十二條　（削除）

第十三條　毎年徴募事務執行中ハ師管徴兵醫官及聯隊區徴兵醫官聯隊區徴兵副醫官又ハ警備隊區徴兵醫官警備隊區徴兵副醫官ヲ置ク但シ警備隊區徴兵副醫官ハ時宜ニ依リ之ヲ置カサルコトヲ得

師管徴兵醫官ハ師團長ニ屬シ師管內徴兵身體檢査ニ係ル事ヲ管掌シ聯隊區徴兵醫官ハ聯隊區司令官ニ警備隊區徴兵醫官ハ警備隊司令官ニ屬シ其ノ區內徴兵身體檢査ニ係ル事ヲ管掌シ聯隊區徴兵副醫官ハ聯隊區徴兵醫

官ヲ警備隊區徴兵副醫官ハ警備隊區徴兵醫官ヲ補佐ス

第十四條　師管徴兵醫官ハ師團軍醫部長ヲ以テ之ニ充テ聯隊區徴兵醫官及警備隊區徴兵醫官ハ陸軍二三等軍醫ノ内一名ヲ以テ之ニ充ツ

名聯隊區徴兵副醫官及警備隊區徴兵醫官ハ陸軍二三等軍醫ノ内一名ヲ以テ之ニ充ツ

第十五條　毎年徴募事務執行中ハ聯隊區徴兵署、警備隊區徴兵署及聯隊區聯合徴兵署ニ事務員ヲ置キ該徴兵署ノ庶務ニ從事セシム

第十六條　聯隊區徴兵署事務員又ハ警備隊區徴兵署事務員ハ聯隊區書記又ハ警備隊書記一名若ハ二名及看護長一名並島廳郡市書記（東京市、京都市、大阪市ノ區ニ在テハ區書記）二名乃至四名ヲ以テ之ニ充ツ

聯隊區聯合徴兵署事務員ハ聯隊區書記一名若ハ二名市書記二名及各區書記二名乃至四名ヲ以テ之ニ充ツ

第十七條　師管徴兵官タル師團長、師管徴兵醫官タル師團軍醫部長遠隔ノ地ニ在ル爲ノ其ノ職務ヲ行ヒ難キ場合ニ於テハ必要ニ應シ陸軍大臣他ノ師團長又ハ師團軍醫部長ヲ指定シテ其ノ職務ヲ行ハシムルコトヲ得

第三章　配賦

第十八條　毎年徴集スヘキ現役兵及補充兵ノ員數ハ上裁ヲ經テ海軍大臣之ヲ各師管ニ配賦ス

第十九條　師團長ハ第十八條ニ依リ現役兵及補充兵ノ要員ヲ各聯隊區又ハ警備隊區ニ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ハ之ヲ各徴募區ニ配賦ス

第二十條　現役兵及補充兵ノ配賦ハ壯丁ノ總數ヲ基準トシテ之ヲ定ム

第四章　徴募

第二十一條　町村長ハ毎年戸籍簿ニ據リ前年十二月一日ヨリ其ノ年十一月三十日迄ノ徴兵適齢者ヲ取調ヘ徴兵令第二十五條ノ届書ニ照較シ壯丁名簿ヲ作リ二月十五日迄ニ島司又ハ郡長ニ差出シ島司郡長ハ點檢ノ後之ヲ一徴募區ニ取纒メ前年假決ノ諸名簿ト共ニ聯隊區徴兵署又ハ警備隊區徴兵署ヲ設ク但シ土地市長（東京市、京都市、大阪市ニ在リテ區長）ハ前項ノ例ニ依リ壯丁名簿ヲ作リ前年假決ノ諸名簿ト共ニ之ヲ聯隊區徴兵署ニ提出スヘシ

第二十一條ノ二　假決處分ヲ受ケタル者ニシテ引續キ七箇年間所在不明ナルトキハ其ノ所在分明トナルトキ徴集ニ關スル手續ヲ爲スヘシ

第二十二條　毎年徴募事務執行ノトキハ各徴募區及檢査區ニ聯隊區徴兵署又ハ警備隊區徴兵署ヲ設ク但シ土地ノ狀況ニ依リ二箇所以上ノ地ニ逐次開設シ又ハ一徴募區若ハ一檢査區ノ徴兵署ヲ他ノ徴募區若ハ檢査區内ニ設クルコトヲ得

東京市、京都市、大阪市ニ於テハ抽籤執行ノ爲メ別ニ徴募區ニ聯隊區聯合徴兵署ヲ設ク

第二十三條　聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ハ島司郡市長ニ協議シ徴兵署開設ノ日割ヲ定メ聯隊區司令官警備隊司令官ハ師團長ニ島司郡市長ハ北海道廳長官府縣知事ニ申報スヘシ

但シ前條第一項但書ノ場合ニ於テハ豫メ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ヨリ師管徴兵官ノ認可ヲ受クヘシ

島司郡市長ハ檢査抽籤ノ日時及徴兵署設置ノ場所ヲ豫メ其ノ管内ニ告示スヘシ

第二十四條　兵役ノ適否ヲ定ムル爲メ聯隊區徴兵署又ハ警備隊區徴兵署ニ於テ壯丁ノ身體檢査ヲ行フ其ノ檢査ハ徴兵官ノ面前ニ於テスルモノトス

町村長ハ前項ノ檢査ニ列席シ徴兵官ノ諮詢ニ應スヘシ

第二十五條　聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ハ壯丁ノ身體檢査ノ事ヲ監督シ兵種ノ選定ニ任ス

第二十六條　島司郡市長（東京市、京都市、大阪市ニ在テハ區長）ハ徴集延期及徴集猶豫ニ關スル書類ノ調査及事實ノ審査ニ任ス

第二十七條　壯丁ノ身體檢査終ルトキハ聯隊區徴兵官又ハ警備隊區徴兵官ハ徴集延期、徴集猶豫、徴集免除及兵役免除ノ處分ヲ爲シ又壯丁名簿ヲ以テ徴集名簿、徴集延期名簿、徴集猶豫名簿、徴集免除名簿及兵役免除名簿ヲ作ルヘシ

但シ徴兵令第十二條ニ依ル陸軍現役兵志願者ヲ採用シタルトキハ其ノ名簿ヲ徴集名簿ニ添附スヘシ

第二十八條　身體檢査ニ合格シタル壯丁ハ徴集順序ヲ定ムル爲メ徴募區毎ニ體格ノ等位及兵種ヲ分チ聯隊區徴兵署又ハ警備隊區徴兵署ニ於テ抽籤ヲ行フ但東京市、京都市、大阪市ニ於テハ聯隊區聯合徴兵署ニ於テ之ヲ行フ

抽籤ハ徴兵官及町村長列席ノ上抽籤總代人之ヲ爲スモノトス

抽籤總代人ハ徴兵官其ノ年ノ壯丁ニ就キ市町村長（東京市、京都市、大阪市ニ在リテハ區長以下同シ）ヲシテ之ヲ選定セシム其ノ人員ハ適宜

トス

第二十九條　前條ノ徴兵官ハ總代人ノ抽キタル籤番號ノ順序ニ依リ抽籤名簿ニ通ヲ作ルヘシ

第三十條　抽籤終ルトキハ抽籤名簿及徴集名簿ハ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官之ヲ領シ抽籤名簿、徴集延期名簿、徴集免除名簿ハ島司郡市長之ヲ領シ島廳、郡市役所ニ備置クヘシ

抽籤名簿ヲ除クノ外ハ區長之ヲ領シ區役所ニ備置クヘシ但東京市、京都市、大阪市ニ於テハ

第三十一條　各徴募區ノ抽籤終ルトキハ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ハ第十九條ノ配賦ニ基キ現役兵徴募及補充兵編入ノ處分ヲ爲シ又徴集名簿ヲ以テ現役兵名簿、補充兵名簿及要員超過名簿ヲ作ルヘシ

第三十二條　聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ハ現役名簿ヲ各聯隊長（聯隊ヲ爲ササル隊ニ在テハ其ノ隊長）及鎮守府兵事官ニ交付シ且現役兵ニ徴募スヘキ者及補充兵ニ編入スヘキ者ノ順序ヲ島司郡市長ニ通知スヘシ

抽籤名簿及補充兵名簿ハ之ヲ聯隊區司令部又ハ警備隊司令部ニ備置キ要員超過名簿ハ島司郡市長ニ交付シ島廳郡市役所ニ備置クヘシ

第三十三條　第二十七條ノ處分ヲ爲シタル者ニハ聯隊區徴兵官又ハ警備隊區徴兵官第三十一條ノ處分ヲ爲シタル者ニハ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官各其ノ證書ヲ附與ス但徴集免除ノ者竝ニ要員ニ超過シタル者ニハ證書ヲ附與セス

第三十四條　徴募事務終ルトキハ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ハ徴兵事務報告書及徴兵表ヲ作リ十一月十日迄ニ師團長ニ差出シ師團長ハ師管徴兵事務報告書及徴兵表ヲ作リ十一月三十日迄ニ陸軍大臣ニ差出シ陸軍大臣ハ全國徴兵表ヲ作リ奏上スヘシ

第五章　裁決

第三十五條　裁決ハ分テ假決及終決ノ二種トス

第三十六條　假決ハ徴集延期及徴集猶豫ノ事ヲ裁決シ終決ハ現役兵徴募、補充兵編入、要員超過、徴集免除及兵役免除ノ事ヲ裁決ス

第三十七條　徴集延期、徴集猶豫、徴集免除及兵役免除ノ裁決ハ聯隊區徴兵官又ハ警備隊區徴兵官之ヲ爲シ其ノ

他ノ裁決ハ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官之ヲ爲ス

第三十八條　壯丁若クハ其ノ家族ニ於テ徴兵令第二十二條ニ關スル聯隊區徴兵官又ハ警備隊區徴兵官ノ裁決ニ不服アルトキハ師管徴兵官ニ師管徴兵官ノ裁決ニ不服アルトキハ總理徴兵官ニ訴願スルコトヲ得但訴願ノ爲ニ裁決ノ執行ヲ停止セス

本條ノ訴願ハ裁決書ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ之ヲ爲スヘシ其ノ期日ヲ過クルモノハ受理セス

第三十九條　徴兵官ノ裁決ニ對シ訴願ヲ爲サントスル者ハ其ノ訴願書ニ同徴募區内其ノ年徴集ニ應スヘキ壯丁ノ戸主三名ノ保證書ヲ添ヘ其ノ裁決ヲ爲シタル徴兵官ヲ經由シテ差出スヘシ

徴兵官前項ノ訴願書ヲ受領シタルトキハ之ニ前裁決ニ關スル書類ヲ添ヘ上級ノ徴兵官ニ差出スヘシ

第四十條　總理徴兵官又ハ師管徴兵官ハ下級徴兵官ノ處分違法又ハ不當ナリト認ムルトキハ之ヲ取消シ更ニ處分ヲ命スヘシ但シ師管徴兵官ハ總理徴兵官ノ認可ヲ受クヘシ

第四十一條　徴兵官ノ裁決ニ對シテハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ許サス

第六章　現役兵及補充兵

第四十二條　現役兵入營期日ハ毎年十二月一日トス但疾病犯罪其ノ他ノ事故ニ由リ十二月一日ニ入營シ難キ者ハ同月三十一日迄ニ入營セシム

警備隊兵ノ入營ハ二期ニ分チ其ノ第一期ハ徴募年ノ十二月一日、第二期ハ翌年六月一日トシ輜重輸卒ノ入營ハ四期ニ分チ其ノ第一期ハ徴募年ノ十二月一日、第二期ハ翌年三月一日、第三期ハ同年六月一日、第四期ハ同年九月一日トス

第七師管、第八師管、第九師管及第十三師管ニ於ケル輜重輸卒ノ入營ハ三期ニ分チ其ノ第一期ハ徴集年ノ翌年三月一日、第二期ハ同年六月一日、第三期ハ同年九月一日トス

戰時若ハ事變ノ際其ノ他必要ノ場合ニ在テハ前諸項ノ入營期日ヲ變更スルコトヲ得

第四十三條　（削除）

第四十四條　現役兵入營ニ際シ父母ノ疾病危篤或ハ死亡ノ爲メ入營ノ延期ヲ願フ者アルトキハ聯隊區司令官又

ハ警備隊司令官ニ於テ二十日以内ノ延期ヲ許スヘシ

其ノ延期ヲ願フ者ハ願書ニ市町村長ノ奥書證印ヲ受ケ其ノ父母疾病危篤ノ者ハ醫師ノ診斷證書ヲ添ヘ差出スヘシ

第四十五條　現役兵入營前ハ第四條ノ區域外ニ轉籍（戸籍上本人ノ出入モ含ム以下同シ）スルモ所屬ノ隊籍ヲ變更セス

徵兵令第二十七條ニ當リ翌年回ト爲リタル者ハ身體檢査ヲ行ヒ更ニ隊籍ヲ定ムルモノトス但第四條ノ區域外ニ轉籍シタル者ハ其ノ地ニ於テ身體檢査ヲ行ヒ隊籍ヲ定ム

第四十六條　現役兵入營前若ハ入營後ニ於テ死亡、疾病犯罪其ノ他ノ事故ニ依リ又ハ第四十二條第一項但書ノ期日ヲ過クルモ入營シ難キ者アルニ依リ闕員ヲ生シタルトキハ徵募年ノ翌年一月三十日迄ニ其ノ徵募區同兵種ノ補充兵ヲ以テ徵集順序ニ從ヒ補充ス但シ警備隊兵及輜重輸卒ニ在リテハ入營スヘキ月ノ十日迄ニ次期入營スヘキ者ヲ繰リ上ケ入營セシメ其ノ最終期ニ於テハ前期ニ繰リ上ケタル闕員ト其ノ期ノ闕員トヲ補充ス又看護卒ニ在リテハ入營スヘキ月ノ十日迄ニ補充スルモノトス

徵兵令第十二條ニ依リ陸軍現役兵ニ採用シタル者闕員ト爲リタル場合ノ補充ハ之ヲ採用シタル聯隊區又ハ警備隊區內ニ於ケル同兵種ノ補充兵ヲ以テ徵集順序ニ從ヒ補充ス

第一項ノ場合ニ於テ其ノ徵募區ヨリ補充スルコト能ハサルトキ聯隊區又ハ警備隊區內他ノ徵募區ヨリ、第一項又ハ第二項ノ場合ニ於テ其ノ聯隊區又ハ警備隊區ヨリ補充スルコト能ハサルトキハ師管內他ノ聯隊區又ハ警備隊區ヨリ、其ノ師管ヨリ補充スルコト能ハサルトキハ他ノ師管ヨリ之ヲ補充スルコトヲ得其ノ補充ハ總テ徵集順序ニ依ルモノトス

前二項ニ依ル補充員ノ配賦ハ各徵募區、各聯隊區又ハ警備隊區、各師管同兵種補充兵ノ總數ヲ率トシ比例ヲ以テ之ヲ定ム

臨時ニ多數ノ闕員ヲ生シタル場合ニ於テハ第一項ノ期日ニ拘ラス前諸項ノ例ニ依リ各年次ニ於ケル現役兵ノ闕員ヲ補充スルコトヲ得

第四十七條　現役兵入營前廢疾又ハ不具ト爲リ永久兵役ニ堪ヘ難キ者アルトキハ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ於テ兵役ヲ免ス但シ徵兵令第二十七條ニ當リ翌年回ト爲リタル者其ノ年徵募事務終結前ハ此ノ限ニ在ラス

第四十八條　現役兵入營前徵兵令第二十二條ニ當ルヘキ事故ノ生スルトキハ本人ノ願ニ由リ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ於テ徵集ヲ延期ス

其ノ願書ニハ同徵募區內其ノ年徵集ニ應スヘキ現役兵ノ戶主二名ノ保證書ヲ添ヘ島司郡市長ヲ經テ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ差出スヘシ但東京市、京都市、大阪市ニ在テハ區長町村ニ在テハ町村長ノ奥書證印ヲ受クヘキモノトス

島司郡市長ハ其ノ事實ヲ審覈シ狀況書ヲ作リ願書ト共ニ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ送付スヘシ

第四十九條　現役兵入營前及補充兵（補充兵證書附與後其ノ年十一月三十日以前ノ者以下同シ）轉籍シタルトキハ十四日以內ニ舊住地島司郡市長ヲ經テ舊住地聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ屆出ヘシ但東京市、京都市、大阪市ニ在テハ區長町村ニ在テハ町村長ヲ經由スヘシ

其ノ轉籍聯隊區外又ハ警備隊區外ニ係ルトキハ舊住地聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ヨリ新住地聯隊區司令官ニ通報スヘシ

本條ノ屆出ヲ爲ササル者ハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第五十條　現役兵入營前及補充兵寄留若クハ十四日以上ノ旅行ヲ爲サントスルトキハ召集ノ命アルトキ之ヲ通報人正當ノ事由ナクシテ召集ノ命ヲ通報セス若クハ其ノ通報ヲ遲緩シタルトキハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

本條ノ屆出ヲ爲ササル者ハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

通報人正當ノ事由ナクシテ召集ノ命ヲ通報セス若クハ其ノ通報ヲ遲緩シタルトキハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第七章　雜則

第五十一條　徵兵令第十二條ニ依リ現役ニ服セムコトヲ志願スル者ハ其願書ニ戶主及親權者連署シ身元證書ヲ添ヘ市町村長ノ奥書證印ヲ受ケ徵兵檢査ノ際任意ノ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ願出テ身體檢査ヲ受ク

ヘシ但シ海軍兵志願者ニ在リテハ九月一日迄ニ鎮守府ニ願出テ許可ヲ受クルカ又ハ徴兵檢査ノ際聯隊區徴兵署又ハ警備區徴兵署ニ申出テ身體檢査ヲ受ケ合格者ハ其ノ合格證書ヲ添ヘ鎮守府ニ願出ツルモノトス

檢査及入營ノ爲往復スル旅費ハ自辨トス

第一項ノ出願者中陸軍志願者ハ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ於テ本人希望ノ兵種隊號ヲ參酌シ配賦要員ニ充テ得ヘキ者ニ限リ之ヲ許可シ本人本籍地所管ノ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ通知スヘシ

第五十二條　前條ニ依リ服役ヲ許可シタル者入營シタルトキハ當該隊長又ハ鎮守府兵事官ヨリ本籍地ノ市町村長ニ通知スヘシ

第五十三條　他ノ徴募區ニ寄留スル者ハ願ニ依リ其地ニ於テ身體檢査ヲ受クルコトヲ得前項ニ依リ身體檢査ヲ受ケタル者ハ寄留地徴募區ノ壯丁ト合シテ抽籤ヲ行フコトヲ得

第五十四條　徴兵令第二十二條ニ當ル者ハ同徴募區內其ノ年ノ徴集ニ應スヘキ壯丁ノ戶主二名ノ保證書ヲ添ヘ三月一日迄ニ（三月一日後身體檢査前迄ニ事故ノ生シタル者ハ其ノ都度）聯隊區徴兵官又ハ警備隊區徴兵官ニ願出ヘシ但其ノ事故二年以上繼續スル者ハ毎年願出テ其ノ三箇年ヲ過クルモ仍ホ止マサル者ハ本文ノ保證書ヲ添ヘ屆出スヘシ

前項ノ願書及屆書ニハ町村長ノ奥書證印ヲ受クヘキモノトス

第五十五條　徴兵令第二十三條第一項ニ當ル者ハ學校長ノ證明書同條第二項ニ當ル者ハ大使公使領事又ハ貿易事務官ノ證明書ヲ添ヘ毎年四月十五日迄ニ聯隊區徴兵官又ハ警備隊區徴兵官ニ願出ヘシ

大使公使領事及貿易事務官ヲ置カサル國ニ在ル者及一定ノ地ニ在留セサル旅行ノ者ハ其ノ徴集猶豫願書ニ海外旅券ヲ受取リタル官廳ノ證明書ヲ添ヘ差出スヘシ

大使公使領事及貿易事務官ヲ置キタル國ニ在ル者ト雖徴集猶豫願ヲ差出ストキ未タ大使公使領事又ハ貿易事務官ノ證明書ヲ得サルトキハ之ニ換フルニ海外旅券ヲ受取リタル官廳ノ承認書ヲ添ヘ差出シ置キ追テ證明書ヲ差出スコトヲ得

本條ノ願書ニハ町村長ノ奥書證印ヲ受クヘキモノトス

第五十六條　（削除）

第五十七條　徴兵令第二十三條第一項ノ事故止ミタル者ノ屆書及同條第二項ノ歸朝シタル者ノ屆書ハ町村長ヨリ其ノ年ノ壯丁名簿進達前ニ在テハ其ノ名簿ト共ニ進達後ニ在テハ受領ノ日ヨリ三日以內ニ島司郡長ニ差出スヘシ

島司郡市長ハ前項ノ屆書ヲ聯隊區徴兵署又ハ警備隊區徴兵署開設ノトキ同署ニ提出スヘシ但シ當該徴兵署閉鎖後師管內各徴兵署閉鎖前ニ在リテハ之ヲ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ差出スモノトス

第五十八條　傷痍疾病、犯罪若ハ所在不明等ノ爲又ハ志願兵出願者ニシテ其ノ檢査ノ爲徴兵檢査ヲ受ケ難キ場合ニ於テハ本人ヨリ本人屆出ヲ爲シ得ヘカラサルトキハ家事擔當者ヨリ書面ヲ以テ檢査當日迄ニ島司郡市長ニ屆出ツヘシ其ノ傷痍疾病ノ者ハ醫師ノ診斷書ヲ添フヘシ

前項ノ屆出ヲ爲シタル者其ノ事故止ミタルトキハ直ニ島司郡市長ニ屆出ツヘシ

島司郡長ニ差出ス屆書ニハ町村長ノ奥書證印ヲ受クヘキモノトス

本條ノ屆出ヲ爲ササル者ハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第五十八條ノ二　徴募區徴兵署閉鎖後徴兵令第二十三條第一項ノ該當前條第一項ノ事故止ミタル者、六週間現役兵ニシテ入營前教職ヲ罷メタル者、徴兵令第十三條第五項ニ該當スル者、身體檢査前身體檢査ヲ終リタル徴募區ニ轉籍シタル者、其ノ他其ノ年徴兵檢査ヲ受クヘキ者、聯隊區又ハ警備隊區內各徴募區徴兵署閉鎖前ニ在リテハ區內便宜ノ徴兵署ニ於テ身體檢査ヲ行フヘシ但シ該區內各徴募區ノ徴兵署閉鎖後ニ在リテハ師管內ニ於テ師團長ノ指定シタル聯隊區又ハ警備隊區內便宜ノ徴兵署ニ於テ身體檢査ヲ行フコトヲ得

前項ニ依リ身體檢査ヲ爲シタル者ノ中抽籤ヲ要スル者ニ付テハ第五十三條ニ依リ寄留地ニ於テ身體檢査ヲ受クル者ノ例ニ依ル

第五十九條　疾病傷痍或ハ犯罪等ニテ期限ニ際シ入營シ難キ者ハ書面ヲ以テ入營當日迄ニ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ屆出ヘシ其ノ疾病傷痍ノ者ハ醫師ノ診斷證書ヲ添フヘシ其ノ屆書ニハ市町村長ノ奥書證印ヲ受クヘキモノトス

本條ノ屆出ヲ爲サザル者ハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第六十條　徵兵署ノ諸費、壯丁及抽籤總代人ノ旅費、現役兵入營ノ旅費ハ官給ス

但シ徵兵令第十二條ニ依リ現役ニ服スル者ノ入營旅費ハ此ノ限ニ在ラス

第六十一條　第四十條ニ依リ更ニ處分ヲ爲ストキハ臨時徵兵署ヲ開設スルコトヲ得

第六十二條　島嶼ニ於テ本條例中ノ條規ヲ實施スルコト能ハサルトキハ師團長地方、長官協議ノ上適宜ノ方法ヲ設クルコトヲ得

第六十三條　徵兵令ヲ施行セサル地ニ寄留ノ者ハ寄留地最寄ノ徵募區ニ於テ身體檢査ヲ受クルコトヲ得其ノ取扱ハ第五十三條ニ依リ寄留地ニ於テ身體檢査ヲ受クル者ノ例ニ依ル

韓國在留ノ者ニ在テモ前項ノ例ニ依リ便宜ノ徵募區ニ於テ身體檢査ヲ受クルコトヲ得

第六十四條　徵兵令ヲ施行セサル地ヨリ施行ノ地ニ轉籍シタル者ハ其ノ年又ハ翌年ノ徵集ニ應セシム但年齡二十六歲ヲ過キ轉籍シタル者ハ此ノ限ニ在ラス

附則

第六十五條　北海道千島、伊豆七島及小笠原島ニ於ケル聯隊區徵兵官タル聯隊區司令官ノ職務ハ聯隊區副官又ハ他ノ將校ヲシテ臨時之ヲ行ハシムルコトヲ得

北海道千島、伊豆七島及小笠原島ニ於ケル徵兵事務執行ノ際ハ第十四條ノ規定ニ依ラス軍醫一名ヲ以テ聯隊區徵兵醫官ト爲シ聯隊區徵兵副醫官ヲ置カサルコトヲ得

第六十六條　本令中郡役所トアルハ北海道ニ在リテハ支廳、市役所トアルハ北海道及沖繩縣ニ在リテハ區役所警備隊司令官トアルハ沖繩警備隊區ニ在リテハ警備隊區司令官、郡長郡書記トアルハ北海道ニ在リテハ支廳長支廳屬、市長市書記トアルハ北海道及沖繩縣ニ在リテハ區長、區書記町村長トアルハ町村制ヲ施行セサル地ニ在リテハ戶長、其ノ他町村長ニ準スヘキ者ニ該當ス

第六十七條　本條例ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス但シ第五十五條中徵集猶豫ノ願出期日ニ關スル改正ハ明治四十年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

徵兵事務條例補則ハ之ヲ廢止ス

本令施行ノ際徵兵令第十二條ニ依リ陸軍現役ニ服スルコトノ許可ヲ受ケ未タ入營セサル者ハ更ニ本令ノ規定ニ依リ願出ツヘキモノトス、

明治二十八年勅令第百二十六號第二條及明治三十年勅令第二百五十八號第二項ニ依リ徵集ヲ猶豫セラルル者ニ關シテハ仍從前ノ規定ニ依ル

第五章　陸軍一年志願兵條例

明治三十七年三月二十八日勅令第八十四號　改正　三七年第二一四號

朕陸軍一年志願兵條例改正ノ件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

陸軍一年志願兵條例

第一條　徵兵令第十三條ニ依リ一年志願兵ト爲ル者ハ志願ノ際本籍ノ在ル師管內ノ軍隊ニ於テ服役セシム但シ軍事上ノ必要アルトキハ他ノ師管內ノ軍隊ニ於テ服役セシムルコトアルヘシ

第二條　一年志願兵ノ兵科ハ本人ノ冀望ト軍事上ノ必要トニ依リ之ヲ定ム但シ騎兵科ハ本人ノ冀望ニ依ルモノトス

第三條　一年志願兵出願者ニシテ左ノ各號中第一號ニ該當スル者ハ主計生、第二號ニ該當スル者ハ軍醫生、第三號ニ該當スル者ハ藥劑生、第四號ニ該當スル者ハ獸醫生タルコトヲ志願スルコトヲ得

一　專門學校又ハ之ト同等以上ノ學校ニ於テ法律又ハ經濟ノ課程ヲ卒業シタル者

二　醫術開業免狀ヲ有シ又ハ之ヲ受クヘキ資格アル者

三　藥劑師免狀ヲ有シ又ハ之ヲ受クヘキ資格アル者

四　獸醫開業免狀ヲ有シ又ハ之ヲ受クヘキ資格アル者

第四條　一年志願兵ハ營內ニ居住セシム但シ入營後六箇月ヲ經過シタルトキハ聯隊長外泊ヲ許シ通勤セシムルコトヲ得

第五條　一年志願兵ニハ給料及旅費ヲ給セス

第六條　一年志願兵ニハ所屬隊ニ於テ糧食、被服、彈藥等ノ現品ヲ給シ兵器ヲ貸與ス

騎兵科ノ者ニハ前項ノ外ニ馬匹ヲ貸與ス

第七條　一年志願兵ノ服役ニ關スル費用ハ之ヲ前納セシム其ノ金額及納付ノ方法ハ陸軍大臣之ヲ定ム

前項ノ金額ハ前條ニ依リ支給シ又ハ貸與スルモノノ費用等ニ充テ不足アルトキハ之ヲ追徵シ剩餘アルトキハ之ヲ還付ス

第八條　一年志願兵ハ現役滿期ノ後六年四箇月豫備役ニ、豫備役滿期後十箇年後備役ニ服セシム但シ第二十七條及第二十八條ニ依リ豫備役ニ編入セラレタル者ノ豫備役年期ハ現役期間ヲ通算シテ七年四箇月トス

第九條　一年志願兵タラムトスルモノハ本籍所在師管ノ師團長ニ願出テ身體檢査又ハ身體檢査及學術試驗ヲ受クヘシ但シ其ノ檢査及試驗ハ寄留地所在師管ニ於テ之ヲ受クルコトヲ得

前項出願ノ期日手續並檢査及試驗ニ關スル事項ハ陸軍大臣之ヲ定ム

第十條　本籍所在師管ノ師團長ハ合格ノ者ニハ一年志願兵認定證書ヲ付與シ不合格ノ者ニハ其ノ旨ヲ通知スヘシ

第十一條　一年志願兵認定證書ヲ有スル者入營前左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ認定證書ヲ返還セシム

一　傷痍又ハ疾病ニ依リ服役ニ堪ヘ難キトキ

二　陸海軍ノ兵籍ニ編入スヘキ諸生徒候補生等ヲ命セラレタルトキ

三　本人ヲ要スルニ非サレハ一家ノ生計ヲ營ミ難キトキ

第十二條　一年志願兵ノ入營期日ハ毎年十二月一日トス但シ戰時又ハ事變ノ際其ノ他必要ノ場合ニ於テハ之ヲ

變更スルコトアルヘシ

第十三條　一年志願兵認定證書ヲ有スル者傷痍疾病其ノ他止ムヲ得サル事故ニ依リ所定ノ期日ニ入營シ難キトキハ其ノ入營ヲ延期スルコトヲ得

第十四條　入營ヲ延期セラレタル者十二月三十一日迄ニ入營シ難キトキハ翌年入營セシム

前項ニ依リ翌年入營セシムヘキ者仍其ノ年ニ於テ入營シ難キトキハ一年志願兵認定證書ヲ返還セシム

第十五條　一年志願兵認定證書ヲ得タル者正當ノ事由ナクシテ所定ノ期日ニ入營セサルトキハ一年志願兵タルノ資格ヲ失フモノトス

第十六條　一年志願兵ノ教育ハ聯隊長其ノ責ニ任ス

第十七條　一年志願兵ハ入營後四箇月一般ノ兵卒ト同一ノ教育ヲ爲シ之ニ一等卒ヲ命シ二箇月以上通常教育ノ外特別ノ教育ヲ爲シ之ニ上等兵ヲ命シ其ノ材幹ト學術修得ノ成績トニ依リ下士及士官ノ勤務ヲ練習セシム

其成績優秀ナルトキハ伍長ノ階級ニ進ムルコトヲ得

一等卒上等兵ヲ命シ又ハ伍長ノ階級ニ進ムルハ聯隊長ニ於テス

第十八條　第三條第一號、第二號又ハ第三號ニ該當スル者ハ步兵隊ニ於テ、同條第四號ニ該當スル者ハ騎兵隊、砲兵隊又ハ輜重兵隊ニ於テ六箇月間同條ニ依リ教育ヲ爲シタル後上等兵ヲ命シ之ヲ主計生、軍醫生、藥劑生又ハ獸醫生ト爲シ各專門ニ關スル下士及士官ノ勤務ヲ練習セシム

主計生ハ師團經理部長、軍醫生及藥劑生ハ師團軍醫部長、獸醫生ハ師團獸醫部長師團長ノ認可ヲ受ケ之ヲ命ス

第一項ノ期間ハ戰時又ハ事變ニ際シテハ之ヲ四箇月ニ短縮スルコトヲ得

第十九條　專門勤務ニ關スル教育ハ主計生ニ在リテハ隊附高級主計、軍醫生ニ在リテハ隊附高級醫官、藥劑生ニ在リテハ衛戍病院長、獸醫生ニ在リテハ隊附高級獸醫官各其ノ責ニ任シ師團經理部長、師團軍醫部長、師團獸醫部長各其ノ教育ヲ監督ス

第二十條　專門勤務ヲ練習スル者ニシテ其ノ成績優秀ナルトキハ其教育ヲ監督スル諸官ニ於テ主計生ハ三等計

手ノ階級ニ、軍醫生藥劑生ハ三等看護長ノ階級ニ、獸醫生ハ三等蹄鐵工長ノ階級ニ進ムルコトヲ得但シ三等蹄鐵工長ノ階級ニ進ムルハ師團獸醫部長ノ意見ニ依リ聯隊長ニ於テスルモノトス

第二十一條　一年志願兵ハ戰時又ハ事變ニ際シ通常ノ現役勤務ニ期セシムルコトアルヘシ此ノ場合ニ於テハ階級相當ノ給料ヲ給シ服役ニ關スル費用ハ之ヲ官費トス

第二十二條　一年志願兵ハ現役滿期前終末試驗ヲ施行ス其ノ方法ハ師團長之ヲ定ム

第二十三條　終末試驗ヲ終リタルトキハ試驗ノ成績ト平素ノ勤務トヲ參酌シ及第者ニハ豫備役編入ノ際終末試驗及第證書ヲ付與シ各兵科ノ者ハ軍曹ニ、主計生ハ二等計手ニ任シ軍醫生及藥劑生ハ二等看護長ノ階級ニ、獸醫生ハ二等蹄鐵工長ノ階級ニ定ム

終末試驗及第證書ヲ付與セサル者ニシテ下士ノ技能アル者ハ豫備役編入ノ際各兵科ノ者ハ伍長ニ主計生ハ三等計手ニ、軍醫生及藥劑生ハ二等看護長ニ、獸醫生ハ三等蹄鐵工長ニ任シ主計生、軍醫生、藥劑生、獸醫生ニシテ下士ノ技能ナキ者ハ之ヲ免ス

前二項ニ依リ及第證書ヲ付與シ、下士ニ任シ下士ノ階級ニ進メ又ハ主計生、軍醫生、藥劑生、獸醫生ヲ免スルハ師團長ノ命ニ依リ主計生ニ在リテハ師團經理部長、軍醫生及藥劑生ニ在リテハ師團軍醫部長其ノ他ニ在リテハ聯隊長之ヲ爲スモノトス但シ獸醫生ヲ免スルハ師團獸醫部長ニ於テスルモノトス

第二十四條　一年志願兵ニシテ傷痍疾病等ニ因リ終末試驗ヲ受ケサル者ハ現役滿期後一箇年以內ニ於テ終末試驗ヲ受クルコトヲ得

前項ニ依リ終末試驗ヲ受ケタル者ハ前條ノ例ニ依ル

第二十五條　前條ニ依リ終末試驗ヲ受ケサル者ハ第二十三條第二項及第三項ニ準シ伍長同相當官ニ任シ又ハ主計生、軍醫生、藥劑生、獸醫生ヲ免ス

第二十六條　一年志願兵ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ第十七條及第十八條ノ例ニ依ラス二等卒ト爲シ一般ノ兵卒ト同一ノ教育ヲ爲シ其必要ニ應シ現役滿期ノ後每年六十日間勤務演習ノ爲召集ス之ニ適スル費用ハ自辨トス

一　怠慢ニシテ勤務ヲ得ノ見込ナキ者

二　軍紀ヲ紊リ、屢法則ヲ犯シ又ハ品行不正ニシテ改悛ノ見込ナキ者

第二十七條　一年志願兵中第十一條第三號ニ該當スル者アルトキハ師團長ハ聯隊長ヲシテ其ノ現役ヲ免シ豫備役ニ編入セシム

第二十八條　一年志願兵中傷痍又ハ疾病ニ因リ服役ニ堪ヘ難キ者アルトキハ師團長ハ聯隊長ヲシテ現役ニ堪ヘサル者ハ豫備役ニ編入シ常備後備ノ役ニ堪ヘサル者ハ其ノ役ヲ免シ第二國民兵役ニ服セシメ永久服役ニ堪ヘサル者ハ兵役ヲ免セシム

第二十九條　前二條ニ依リ豫備役ニ編入スル者ハ第二十三條第二項及第三項ニ準シ伍長同相當官ニ任シ又ハ主計生、軍醫生、藥劑生、獸醫生ヲ免ス

第三十條　本條例ニ規定スルモノノ外一年志願兵ト爲リタル者ノ士官又ハ下士ノ任官ニ關シテハ陸軍補充條例豫備後備ノ服役ニ關シテハ陸軍服役條例ノ規定ニ依ル

第三十一條　本條例中聯隊長トアルハ獨立隊ニ在リテハ其隊長ニ該當ス

附　則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際服役中ノ者翌年同トナリタル者及明治三十七年出願ニ係ル一年志願兵ノ服役スヘキ兵科及衛戍地ニ關シテハ從前ノ規定ニ依ル

明治三十七年一年志願兵ヲ出願シタル者ノ身體檢査及學術試驗並認定證書ノ付與ニ關シテハ從前ノ規定ニ依ル

本令施行ノ際既ニ官費服役ヲ許可シタル者ハ其ノ服役ノ費用ニ關シテハ從前ノ規定ニ依ル

本令施行ノ際既ニ現役ヲ終リ又ハ免セラレタル者ノ服役ニ關シテハ從前ノ規定ニ依ル

臺灣總督府國語學校土語科ノ卒業證書ヲ有スル者ハ當分臺灣ニ於テ身體檢査ヲ受ケ臺灣守備步兵隊ニ於テ服役スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ本條例中師團長トアルハ臺灣守備混成旅團長ニ該當ス但シ第九條ノ願書ハ本籍所在師管ノ

師團長ニ差出スヘキモノトス

第六章　陸軍一年志願兵條例施行細則

明治三十七年三月二十九日陸軍省令第十三號　改正　三八年三九年第四號第一二號

陸軍一年志願兵條例施行細則左ノ通改正ス

陸軍一年志願兵條例施行細則

第一條　一年志願兵ノ被服ハ左ノ區別ニ依リ取扱フヘシ

一　第一種帽、前立、第二種帽、絨衣袴、略衣袴、夏衣袴、日覆、外套、脚胖、軍隊手牒ハ新品ヲ給シ其ノ代價ヲ納付セシム

二　背嚢、被服手入具、飯盒、水筒、寢具ハ貯藏品ヲ貸與シ其ノ補修費ヲ納付セシム

三　第一號ノ品種ハ新品ヲ支給スルノ外必要ニ應シ貯藏品ヲ貸與シ其ノ補修費ヲ納付セシム

四　前各號ノ外下士卒給與品ニ限リ必要ニ應シ其ノ代價ヲ徵シ特ニ支給スルコトヲ得

第二條　糧食及馬糧ハ行軍又ハ演習中ト雖官給スルコトナシ

第三條　一年志願兵ハ左ノ金額ヲ入營スル月ノ前月十五日迄ニ所屬隊ニ納付スヘシ但シ第三號ハ騎兵科ノ者ニ限ル

一　被服費、彈藥費、兵器修理費　金四十五圓

二　糧食費　金六十圓

三　馬糧費、裝蹄費、馴毛費、馬藥費　金百五十六圓

第四條　一年志願兵ヲ出願スル者ハ其ノ願書（附錄第一樣式）ニ戸籍謄本、履歷書（附錄第二樣式）ヲ添ヘ學術試驗ヲ要スル者ニ在リテハ六月十日迄其他ノ者ニ在リテハ七月十日迄ニ本籍地ノ市町村長ニ差出スヘシ

前項ノ願書ニハ徵兵令第十三條ノ學校卒業者ニ在リテハ學校長ノ卒業證明書、戸主ニ非ラサル者ハ戸主、未成年ニ在リテハ親權者ノ服役承諾書（附錄第三樣附）ヲ添付スヘシ

市町村長ハ志願者ノ身元資產及犯罪ノ有無等ヲ調査シ證明書（附錄第四樣式）ヲ製シ又他師管ニ全戸寄留ノ者ニ在リテハ其ノ師管名及寄留ノ年月日ヲ付記シ願書ニ添付シ學術試驗ヲ要スル者ニ在リテハ七月十日迄其ノ他ノ者ニ在リテハ八月五日迄ニ師團長ニ到著スル如ク島司、郡市長聯隊區司令官ヲ經テ之ヲ差出スヘシ

第五條　前條ノ志願者ニシテ徵兵令第十三條ノ學校ヲ卒業セサル者ハ其ノ年十月三十一日迄ニ卒業スヘキ者ニ限リ學校長ノ證明書ヲ以テ卒業證明書ニ代フルコトヲ得但シ卒業ノ上ハ直ニ學校長ノ卒業證明書ヲ添ヘ師團長ニ屆出ツヘシ

第六條　師團長ハ志願者中學術試驗ヲ要スル者ノ人員ヲ檢査ヲ爲スヘキ師管ニ區分シ之ヲ八月一日迄ニ陸軍將校生徒試驗常置委員長ニ通知シ他ノ師管ニ於テ檢査ヲ受ケムトスル者ノ人名及必要ノ事項ヲ當該師管ノ師團長ニ八月二十日迄ニ通知スヘシ

第七條　陸軍將校生徒試驗委員長前條ノ通知ヲ受ケタルトキハ試驗問題ヲ師團長ニ送付スヘシ

第八條　師團長ハ身體檢査ノ時日ヲ定メ地方長官ニ通知シ地方長官ハ志願者ヲ檢査場ニ出頭セシムヘシ

第九條　師團長ハ軍醫ヲシテ志願者ノ身體檢査ヲ行ハシメ尙身體檢査合格者中學術試驗ヲ要スル者ハ部下ノ將校同相當官ニ試驗委員ヲ命シ其ノ試驗ヲ行ハシム

學術試驗ヲ受クヘキ者ハ新ニ單身脫帽ニテ撮影シタル寫眞紙（手札形）ノ裏面ニ族籍氏名ヲ自書シ身體檢査ノ際軍醫ニ差出スヘシ

第十條　一年志願兵出願者ノ檢査場ハ師團司令部所在ノ衛戍地トシ其ノ學術試驗期日ハ九月五日トス

第十一條　學術試驗ヲ要セサル者ハ檢査場ノ變更ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ八月十日迄ニ本籍所在師管ノ師團長ニ願出テ許可ヲ受クヘシ

第十二條　師團長前條ノ願ヲ許可シタ場合ニ於テ第六條ノ他師管內受檢者ノ通知ニ變更ヲ要スルトキハ八月二十日迄ニ關係師團長ニ通知スヘシ

第十三條　師團長ハ檢査ヲ終リタルトキハ五月十日迄ニ合格人員表（附錄第七樣式）ヲ調製シ陸軍大臣ニ報告スヘシ但シ他ノ師管在籍者ノ成績ハ同日迄ニ受檢者本籍所在師管ノ師團長ニモ通知スヘシ

第十四條　陸軍大臣ハ前條ノ合格人員表ニ依リ一年志願兵配當表ヲ作リ師團長ニ通達ス

師團長前項ノ通達ヲ受ケタルトキハ一年志願兵認定證書（附錄第五樣式）ヲ本人ニ付與スヘシ但第五條ニ依リ學校長ノ證明書ヲ以テ卒業證明書ニ代用スル者ニ在リテハ卒業ノ屆出ヲ爲シタル後之ヲ付與スヘキモノトス

第十五條　他ノ師管ニ於テ服役ズヘキ者ノ認定證書ハ本籍所在師管ノ師團長之ヲ付與シ其ノ人名書ニ體格檢査表、願書其ノ他必要ノ書類ヲ添ヘ速ニ當該師團長ニ送付スヘシ

第十六條　師團長前條ノ書類ヲ受領シタルトキハ更ニ入營命令（附錄第六樣式）ヲ作リ本人ニ送付スヘシ

第十七條　一年志願兵ヲ各師管、各軍隊ニ配賦スルニハ左ノ各號ヲ參酌スルモノトス但シ主計生タラムコトヲ希望スル者ハ師團司令部所在地ノ步兵隊ニ配賦スルモノトス

一　軍事上ノ必要

二　志願者ノ希望

三　兵科毎ニ成ヘク各隊ノ人員ヲ平等ニスルコト

四　特別ノ技術ヲ修メ若ハ其ノ實驗ヲ有スル者ハ其ノ技術ヲ必要トスル部隊ニ配賦スルコト例ヘハ鐵道隊工兵隊等ニハ成ヘク土木、電氣、機械、冶金採鑛、物理ニ關スル技能アル者、要塞砲兵隊ニハ成ヘク電氣、機械ニ關スル技能アル者ヲ配賦スル等

第十八條　師團長ハ其ノ師管內ノ軍隊ニ於テ服役スヘキ者ノ人名書ニ其ノ體格檢査表、願書其ノ他必要ノ書類ヲ添ヘ入營前聯隊長ニ下付スヘシ

但シ近衛師團ニ於テ服役スヘキ者ニ關スル書類ハ第一師團長ヨリ近衛師團長ニ送付シ同師團長ニ於テ下付ノ手續ヲ爲スモノトス

第十九條　一年志願兵出願後入營迄ノ間ニ轉籍、轉住、氏名變更、犯罪、死亡其ノ他願書及添付書類ニ記載セル事項ニ異動ヲ生シタルトキハ本人又ハ親族ヨリ認定證書付與前ニ在リテハ本籍所在師管ノ師團長ニ、認定證書付與後ニ在リテハ服從スヘキ師團ノ師團長ニ屆出ツヘシ

第二十條　條例第十一條第一號ニ該當スルトキハ在職軍醫ノ診斷證書（軍醫有ラサル地ニ在リテハ醫師ノ病況書）同第二號ニ該當スルトキハ學校又ハ官廳等ノ證明書、第三號ニ該當スルトキハ近鄰戶主二名ノ保證書ヲ添付シ本籍地ノ市町村長、島司、郡長、聯隊區司令官ヲ經テ服役スヘキ師團ノ師團長ニ屆出ツヘシ

島司、郡市町村長ハ前項ノ病況書又ハ保證書ニ記載セル事實ヲ審査シ市町村長ニ在リテハ狀況書島司、郡長ニ在リテハ意見書ヲ作リ屆書ト共ニ聯隊區司令官ニ送付シ聯隊區司令官ハ該狀況書及意見書ニ尙其ノ意見ヲ添付シ師團長ニ進達スヘシ

第二十一條　條例第十三條ニ依リ入營ノ延期ヲ願出テムトスルトキハ願書ニ證據書類ヲ添ヘ本籍地市町村長、島司、郡長、聯隊區司令官ヲ經テ服役スヘキ軍隊所管ノ師團長ニ差出スヘシ

市町村長ハ前項ノ願書ニ奧書證印ヲ爲スヘキモノトス

第二十二條　師團長一年志願兵入營前認定證書ヲ返還セシメントスルトキハ本籍地ノ聯隊區司令官ニ其ノ旨ヲ通知シ聯隊區司令官ハ本人ヘ其ノ返還ヲ命スヘシ

第二十三條　聯隊長ハ條例第二十八條ニ依リ常備後備ノ役ヲ免シ又ハ兵役ヲ免シタルトキハ之ヲ本籍地ノ聯隊區司令官ニ通知スヘシ

第二十四條　聯隊長ハ一年志願兵中所定ノ期日ニ入營セサル者アルトキハ之ヲ師團長ニ報告シ二十歲以上ノ者ニ在リテハ尙本籍地ノ聯隊區司令官ニ通知スヘシ

第二十五條　師團長ハ一年志願兵人員（附錄第八樣式）表及一年志願兵終末試驗成績表（附錄第九樣式）ヲ毎年一月三十一日迄ニ同陸軍大臣ニ報告スヘシ

第二十六條　一年志願兵終末試驗及第證書（附錄第十樣式）ハ各部隊ニ於テ調製スルモノトス

第二十七條　一年志願兵認定證書ヲ有スル者入營シタルトキ又ハ翌年同ト爲リタルトキハ十四日以內ニ本籍地ノ市町村長ニ屆出ツヘシ但シ十一月三十日迄ニ滿二十歲ニ達セサル者ハ之ヲ要セス

第二十八條　一年志願兵ニシテ條例第十一條第三號ニ該當スルトキハ聯隊長ニ屆出ツヘシ此ノ場合ニ在リテハ第二十條ヲ準用ス

第二十九條　本則中聯隊長トアルハ獨立隊ニ在リテハ該隊長、聯隊區司令官トアルハ警備隊區ニ在リテハ警備

隊司令官又ハ警備隊區司令官、島司又ハ郡長トアルハ北海道ニ在リテハ支廳長又ハ區長、沖繩縣ノ區ニ在リテハ區長、島司又ハ郡長ヲ置カサル島嶼ニ在リテハ島司又ハ郡長ニ準スヘキ者市長トアルハ東京、京都、大阪ノ三市ニ在リテハ區長、町村長トアルハ町村制ヲ施行セサル地ニ在リテハ町村長ニ準スヘキ者ニ該當ス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際入營延期又ハ翌年同ト爲リタル者及明治三十七年志願ニ係ル一年志願兵ニシテ舊一年志願兵條例施行細則ノ規定ヲ適用スヘキモノハ從前ノ規定ニ依ル

明治三十七年志願ニ係ル一年志願兵中條例第三條第一號ニ該當スル者主計生タラムトスルトキハ證明書類ヲ添ヘ入營一箇月前迄ニ服役スヘキ軍隊所管ノ師團長ニ願出ツヘシ

前項ノ願ヲ許可セラレタル者ハ師團司令部所在地ノ歩兵隊ニ於テ服役セシム

條例附則ニ依リ臺灣ニ於テ服役スル者ニ關シテハ第五條第九條第十一條第十二條第十八條乃至第二十條第二十二條第二十四條及第二十五條中師團長トアルハ臺灣守備混成旅團長ニ該當シ、其ノ被服ハ從前ノ規定ニ依リ、第四條ノ願書其ノ他ノ書類ハ本籍所在師管ノ師團長ヨリ臺灣守備混成旅團長ニ送付シ、檢査ハ臺灣守備混成旅團長適宜當該司令部所在地ニ召集シテ之ヲ行ヒ認定證書ハ檢査終了後臺灣守備混成旅團長ニ於テ適宜之ヲ付與シ、第二十一條ノ書類ハ直接臺灣守備混成旅團長ニ差出スモノトス

第六章　海軍志願兵條例

（明治三十二年三月勅令第七十一號　改正　三二年三六年三七年第四四七號第二〇號第八號）

朕海軍志願兵條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍志願兵條例

第一條　海軍志願兵トハ海軍兵役ニ服センコトヲ志願シ認可ヲ得海軍志願兵籍ニ編入セラレタル者ヲ謂フ

第二條　海軍志願兵トシテ徵募スヘキ卒ノ種別ハ左ノ如シ

水兵、軍樂生、木工、機關兵、看護、主厨

第三條　志願兵トシテ徵募シタル水兵中適當ノ者ハ所要ニ應シ之ヲ信號兵ニ轉セシム其ノ規程ハ海軍大臣之ヲ定ム

第四條　志願兵ノ徵募ハ其ノ年ニ於テ左ノ各項ニ適合スル者ニ就キ之ヲ行フ

一　水兵、機關兵ハ十七年以上二十一年未滿

二　木工、看護、主厨ハ十七年以上二十六年未滿

三　軍樂生ハ十六年以上十九年未滿

第五條　左ニ掲クル者ハ志願兵ノ徵募ニ應スルコトヲ得ス

一　陸軍ノ豫備役後備役ニ在ル者

二　徵兵令第二十八條ニ當ル當

三　禁錮以上ノ刑ニ處セラレタル者又ハ賭博犯ノ處分ヲ受ケタル者

四　刑事被告人

五　復權ヲ得サル家資分散者破產者若ハ其ノ相續人

六　身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者若ハ其ノ相續人

第五條ノ二　左ニ掲クル者ハ志願兵ニ採用スルコトヲ得ス

一　身體完全ナラサル者

二　品行方正ナラサル者

三　無教育ノ者

四　前各號ニ掲クル者ノ外海軍軍人ノ服役ニ適セサル者

第六條　軍樂生ニシテ入團後三箇月ヲ經過シ技藝發達ノ目途ナキ者ハ軍樂生ヲ免ス

第七條　志願兵ノ服役ハ海軍下士卒服役條例ニ依ル

第七條ノ二　志願兵現役中殊ニ勤務ニ熟シ品行方正ナル者ハ歸休ヲ命スルコトアルヘシ

第八條　削除

第九條　海軍大臣ハ志願兵徴募ノ爲海軍志願兵徴募區ヲ定メ鎮守府ヲシテ之ヲ管セシム

第十條　海軍大臣ハ毎年志願兵トシテ採用スヘキ人員ヲ定メ鎮守府ヲシテ徴募セシム

附則

第十一條　削除

第十二條　海軍志願兵徴募ニ關スル細則ハ海軍大臣之ヲ定ム

第十三條　本條例ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

第十四條　明治三十一年勅令第八十三號海軍志願兵徴募規則ハ本條施行ヨリ廢止ス

附則

本令ハ明治三十七年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

第七章　日本赤十字社條例

明治三十四年十二月ノ勅令第二百二十三號

朕日本赤十社條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

日本赤十字社條例

第一條　日本赤十字社ハ陸軍大臣海軍大臣ノ指定スル範圍内ニ於テ陸海軍ノ戰時衛生勤務ヲ幫助スルコトヲ得

第二條　日本赤十字社社長及副社長ノ就任ニ付テハ勅許ヲ與ヘラルヘシ

第三條　陸軍大臣海軍大臣ハ第一條ノ目的ノ爲日本赤十字社ヲ監督ス

第四條　第一條ノ勤務ニ服スル日本赤十字社ノ救護員ハ陸海軍ノ紀律ヲ守リ命令ニ服スルノ義務ヲ負フ

第五條　戰時ニ於ケル日本赤十社ノ人員材料ノ官設鐵道ニ於ケル輸送ハ陸海軍々人及軍用品ニ準スヘシ

第六條　戰時服務中日本赤十社ノ理事員、醫員、調劑員及看護婦監督ハ陸海軍將校相當官ノ待遇ニ、書記、調劑員補、看護婦長、看護人長及輸長ハ下士ノ待遇ニ、看護婦、看護人及輸送人ハ卒ノ待遇ニ準ス

第七條　戰時ニ於ケル日本赤十字社救護員ノ宿舍糧食船車馬ハ場合ニ依リ官給トス

第九編　學事

第一章　小學校令

明治三十三年八月二十日勅令第三百四十四號　改正　三六年第六三號　四〇年第七四號　第五二號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ小學校令ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

小學校令

第一章　總則

第一條　小學校ハ兒童身體ノ發達ニ留意シテ道德教育及國民教育ノ基礎並其生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ授クルヲ以テ本旨トス

第二條　小學校ハ之ヲ分テ尋常小學校及高等小學校トス

尋常小學校ノ教科ト高等小學校ノ教科トヲ一校ニ併置スルモノヲ尋常高等小學校トス

市町村、町村學校組合又ハ其區ノ負擔ヲ以テ設置スルモノヲ市町村立小學校トシ私人ノ費用ヲ以テ設置スルモノヲ私立小學校トス

第三條　尋常高等小學校ニ於テ尋常小學校ノ教科ヲ授クヘキ部分ニ對シテハ尋常小學校ノ規定ヲ準用シ高等小學校ノ教科ヲ授クヘキ部分ニ對シテハ高等小學校ノ規定ヲ準用ス但シ文部大臣ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第四條　町村組合ニシテ其町村一切ノ事務ヲ共同處分スルモノハ之ヲ一町村ト同視ス

第五條　幼稚園、盲啞學校其他小學校ニ類スル各種學校ノ規程ニ關シテハ本令中別段ノ規定アルモノヲ除クノ外文部大臣之ヲ定ム

第二章　設置

第六條　市町村ハ其區域内ノ學齢兒童ヲ就學セシムルニ足ルヘキ尋常小學校ヲ設置スヘシ

第七條　郡長ハ一町村ノ資力尋常小學校設置ニ關スル費用ノ負擔ニ堪ヘスト認メタルトキハ其町村ヲシテ尋常

小學校設置ノ爲他ノ町村ト學校組合ヲ設ケシムヘシ

第八條　郡長ハ一町村ニ於テ就學セシムヘキ兒童ノ數一尋常小學校ヲ構成スルニ足ラスト認メタルトキ又ハ適度ノ通學路程內ニ於テ一尋常小學校ヲ構成スルニ足ルヘキ數ヲ得ルコト能ハスト認メタルトキハ左ノ例ニ依ルヘシ

一　其町村ヲシテ尋常小學校設置ノ爲他ノ町村ト學校組合ヲ設ケシムルコト

二　其町村ヲシテ就學セシムヘキ兒童ノ全部若ハ一部ノ教育事務ヲ他町村、町村學校組合又ハ其ノ區ニ委託セシムルコト

郡長ハ町村ノ一部ニシテ前項ノ事情アルモノ其町村ノ尋常小學校ニ對シ適度ノ通學路程內ニ在ラスト認メタルトキハ亦前項ノ例ニ依ルヘシ

郡長ハ町村學校組合ノ一部ニシテ前項ニ準スヘキ事情アリト認メタルトキハ第一項第二號ノ例ニ準スヘシ

第九條　市立尋常小學校ノ校數並位置ハ府縣知事ニ於テ市ノ意見ヲ聞キ之ヲ定ムヘシ

町村立尋常小學校ノ校數並位置ハ郡長ニ於テ町村又ハ町村學校組合ノ意見ヲ聞キ之ヲ定メ府縣知事ノ認可ヲ受クヘシ

第十條　第七條又ハ第八條ニ依リ郡長ニ於テ町村學校組合ヲ設ケシメ若クハ其組合ヲ解カシメムトスルトキハ關係町村ノ意見ヲ聞キ府縣知事ノ認可ヲ受クヘシ

第八條ニ依リ郡長ニ於テ兒童教育事務ヲ委託セシメ又ハ其委託ヲ止メシメムトスルトキハ關係町村、町村學校組合及區ノ意見ヲ聞キ府縣知事ノ認可ヲ受クヘシ

第十一條　府縣知事ハ市ニ於テ設置スヘキ尋常小學校數校アルトキハ市內ノ一區若クハ數區ニ對シ又ハ市ヲ分畫シテ數區ト爲シ其一區若クハ數區ニ對シ小學校設置ニ關スル費用ノ負擔ノ爲其使用スヘキ小學校ヲ指定スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ關係市及區ノ意見ヲ聞クヘシ其之ヲ止メムトスルトキ亦同シ

郡長ハ町村若クハ町村學校組合ニ於テ設置スヘキ尋常小學校數校アルトキ、兒童教育事務ノ委託ヲ要スル場所數箇所アルトキ又ハ其ノ設置スヘキ尋常小學校ト兒童教育事務ノ委託ヲ要スル場所トアルトキハ町村內若

クハ町村學校組合內ノ一區若クハ數區ニ對シ又ハ町村若クハ町村學校組合ヲ分畫シテ數區ト爲シ其一區若クハ數區ニ對シ小學校設置ニ關スル費用ノ負擔又ハ兒童教育事務委託ノ爲其使用スヘキ小學校ヲ指定スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ關係町村、町村學校組合及區ノ意見ヲ聞キ府縣知事ノ認可ヲ受クヘシ其之ヲ止メムトスルトキ亦同シ

第十二條　府縣知事ハ第七條及第八條第一項ノ事情アルモ同條及第五十三條並第五十四條ニ依ルコトヲ得ス認メタルトキハ其町村ヲシテ尋常小學校ノ設置又ハ兒童教育事務ノ委託ニ關スル義務ヲ免レシムルコトヲ得府縣知事ハ第八條第二項又ハ第三項ノ事情アルモ同項及第五十三條並第五十四條ニ依ルコトヲ得スト認メタルトキハ其町村若クハ町村學校組合ヲシテ其一部ニ關シテハ尋常小學校ノ設置又ハ兒童教育事務ノ委託ニ關スル義務ヲ免レシムルコトヲ得

第十三條　削除

郡長ハ特別ノ事情ニ依リ町村立尋常小學校ノ設置若クハ其一部ノ設備又ハ兒童教育事務ノ委託ヲ猶豫シ町村若クハ町村學校組合內ノ私立小學校ヲ以テ之ニ代用セシムルコトヲ得

第十四條　市町村ハ市町村又ハ其區ノ負擔ヲ以テ高等小學校ヲ設置スルコトヲ得

町村ハ數町村ノ協議ニ依リ町村學校組合ヲ設ケ高等小學校ヲ設置スルコトヲ得

前項ノ町村學校組合ヲ設ケ又ハ之ヲ解カムトスルトキハ郡長ノ認可ヲ受クヘシ

郡長ハ前項ノ場合ニ於テハ府縣知事ノ指揮ヲ受クヘシ

第十五條　市町村立高等小學校ノ設置及廢止ハ府縣知事ノ認可ヲ受クヘシ

第十六條　私立小學校ノ設置ハ設立者ニ於テ府縣知事ノ認可ヲ受ケ其ノ廢止ハ之ヲ府縣知事ニ屆出ヘシ

第十七條　前三條ノ規定ハ幼稚園、盲啞學校其他ノ小學校ニ類スル各學校ニ關シ之ヲ準用ス

幼稚園、盲啞學校其ノ他小學校ニ類スル各種學校ハ之ヲ小學校ニ附設スルコトヲ得

第三章　教科及編制

第十八條　尋常小學校ノ修業年限ハ六箇年トス

高等小學校ノ修業年限ハ二箇年トス但シ延長シテ三箇年トスコトヲ得

第十九條　尋常小學校ノ教科目ハ修身、國語、算術、日本歴史、地理、理科、圖畫、唱歌、體操トシ女兒ノ爲ニハ裁縫ヲ加フ

土地ノ情況ニ依リ手工ヲ加フルコトヲ得

第二十條　第二項以下ヲ左ノ如ク改ム

高等小學校ノ教科目ハ修身、國語、算術、日本歴史、地理、理科、圖畫唱歌、體操トシ女兒ノ爲ニハ裁縫ヲ加フ

前項教科目ノ外手工、農業、商業ノ一科目又ハ數科目ヲ加フ其ノ數科目ヲ加ヘタル場合ニ於テハ兒童ニハ農業、商業ヲ併セ課スルコトヲ得ス

土地ノ情況ニ依リ英語ヲ加フルコトヲ得

農業、商業、英語ハ之ヲ隨意科目ト爲スコトヲ得

第二十一條　小學校ニ補習科ヲ置クコトヲ得

補習科ニ關スル規程ハ文部大臣之ヲ定ム

第二十二條　小學校ノ教科目中兒童身體ノ情況ニ依リ學習スルコト能ハサル教科目ハ之ヲ其ノ兒童ニ課セサルコトヲ得

第二十三條　小學校ノ教科目ヲ加除シ若ハ隨意科目ト爲シ又ハ第二十條第二項ノ教科目ヲ定メムトスルトキハ市町村立小學校ニ在リテハ管理者、私立小學校ニ在リテハ設立者ニ於テ府縣知事ノ認可ヲ受クヘシ

補習科ヲ設置シ若クハ之ヲ廢止シ又ハ高等小學校ノ修業年限ヲ延長セムトスルトキハ市町村立小學校ニ在リテハ市町村若クハ町村學校組合、私立小學校ニ在リテハ設立者ニ於テ府縣知事ノ認可ヲ受クヘシ

第二十四條　小學校ノ教科用圖書ハ文部省ニ於テ著作權ヲ有スルモノタルヘシ

前項ノ圖書同一ノ教科目ニ關シ數種アルトキハ其ノ中ニ就キ府縣知事之ヲ採定ス

文部大臣ハ第一項ノ規定ニ拘ラス修身、日本歴史、地理ノ教科用圖書及國語讀本ヲ除キ其ノ他ノ教科用圖書ニ限リ文部省ニ於テ著作權ヲ有スルモノ及文部大臣ノ檢定シタルモノニ就キ府縣知事ヲシテ之ヲ採定セシムルコトヲ得

補習科ノ教科用圖書ニ關シテハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

第二十五條　削除

第二十六條　削除

第二十七條　小學校ノ休業日ハ日曜日ヲ除クノ外毎年九十日ヲ超ユルコトヲ得ス但シ補習科ハ此ノ限ニアラス

特別ノ事情アルトキハ府縣知事ニ於テ文部大臣ノ認可ヲ受ケ前項ノ日數ヲ增加スルコトヲ得

傳染病豫防ノ爲必要アルトキ其ノ他非常變災アルトキハ監督官廳ニ於テ臨時小學校ノ閉鎖ヲ命スヘシ其急迫ノ事情アル場合ニ於テハ市町村立小學校ニ在リテハ管理者、私立小學校ニ在リテハ設立者ニ於テ之ヲ閉鎖スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ直ニ監督官廳ニ屆出ツヘシ

第二十八條　小學校教則及小學校編制ニ關スル規程ハ文部大臣之ヲ定ム

第四章　設備

第二十九條　小學校ニ於テハ校舍、校地、校具及體操場ヲ備フヘシ

第三十條　校舍、校地、校具及體操場ハ非常變災ノ場合ヲ除クノ外小學校ノ目的以外ニ之ヲ使用スルコトヲ得ス但シ已ムヲ得サル事情ニ依リ監督官廳ノ認可ヲ受ケタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第三十一條　小學校ノ設備ニ關スル規程ハ文部大臣ニ於テ定ムル準則ニ基キ府縣知事之ヲ定ム

第五章　就學

第三十二條　兒童滿六歲ニ達シタル翌日ヨリ滿十四歲ニ至ル八箇年ヲ以テ學齡トス

學齡兒童ノ學齡ニ達シタル日以後ニ於ケル最初ノ學年ノ始ヲ以テ就學ノ始期トシ尋常小學校ノ教科ヲ修了シタルトキヲ以テ就學ノ終期トス

學齡兒童保護者ハ就學ノ始期ヨリ其終期ニ至ル迄學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ

學齡兒童保護者ト稱スルハ學齡兒童ニ對シ親權ヲ行フ者又ハ親權ヲ行フ者ナキトキハ其後見人ヲ謂フ

第三十三條　學齢兒童癲癇白痴又ハ不具癈疾ノ爲就學スルコト能ハスト認メタルトキハ市町村長ハ監督官廳ノ認可ヲ受ケ學齢兒童保護者ノ義務ヲ免除スルコトヲ得

學齢兒童病弱又ハ發育不完全ノ爲就學セシムヘキ時期ニ於テ就學スルコト能ハスト認メタルトキハ市町村長ハ監督官廳ノ認可ヲ受ケ其就學ヲ猶豫スルコトヲ得

市町村長ニ於テ學齢兒童保護者貧窮ノ爲其ノ兒童ヲ就學セシムルコト能ハスト認メタルトキ亦前二項ニ準ス

第三十四條　第十二條ニ依リ尋常小學校ノ設置又ハ兒童教育事務ノ委託ニ關スル義務ヲ免セラレタル區域内ノ學齢兒童保護者ハ其義務ヲ免除セラレタルモノトス

第三十五條　尋常小學校ノ教科ヲ修了セサル學齢兒童ヲ雇傭スル者ハ其雇傭ニ依リテ兒童ノ就學ヲ妨クルコトヲ得ス

第三十六條　學齢兒童保護者ハ就學セシムヘキ兒童ヲ市町村立尋常小學校ニ入學セシムヘシ但シ村長ノ認可ヲ受ケ家庭又ハ其他ニ於テ尋常小學校ノ教科ヲ修メシムルコトヲ得

官立又ハ府縣立學校ニ於テ尋常小學校ノ教科ヲ授クヘキ部分ハ兒童就學ニ關シテハ市町村立尋常小學校ト同視ス

第三十七條　兒童ノ年齢就學ノ始期ニ達セサル者ハ之ヲ小學校ニ入學セシムルコトヲ得ス

第三十八條　小學校長ハ傳染病ニ罹リ若クハ其ノ虞アル兒童又ハ性行不良ニシテ他ノ兒童ノ教育ニ妨アリト認メタル兒童ノ小學校ニ出席スルヲ停止スルコトヲ得

第六章　職員

第三十九條　小學校ノ教科ヲ教授スル者ヲ本科正教員トシ其教科目中圖畫、唱歌、體操、裁縫、英語、農業、商業又ハ手工ノ一科目若クハ數科目ヲ限リ教授スル者ヲ專科正教員トス

本科正教員ヲ補助スル者ヲ准教員トス

第四十條　小學校教員タルヘキ者ハ免許狀ヲ受クヘシ

免許狀ハ普通免許狀及府縣免許狀ノ二種トス

普通免許狀ハ文部大臣之ヲ授與シ全國ニ通シテ有效トス

府縣免許狀ハ府縣知事之ヲ授與シ其府縣限リ有效トス

第四十一條　府縣免許狀ヲ受クルニハ師範學校若クハ文部大臣ノ指定シタル學校ヲ卒業シ又ハ小學校教員ノ檢定ニ合格スルコトヲ要ス

前項ノ檢定ヲ施行スルカ爲府縣ニ小學校教員檢定委員會ヲ置ク

免許狀及小學校教員檢定委員會ノ組織權限其他檢定ニ關スル規程ハ文部大臣之ヲ定ム

第四十二條　特別ノ事情アルトキハ免許狀ヲ有セサル者ヲ以テ小學校准教員ニ代用スルコトヲ得

代用教員ニ關スル規程ハ文部大臣之ヲ定ム

第四十三條　市町村立小學校長ハ其學校ノ本科正教員ヲシテ之ヲ兼ネシムヘシ

第四十四條　市立小學校長及教員ノ任用ハ市長ノ申請ニ依リ町村立小學校長及教員ノ任用ハ郡長ノ申請ニ依リ府縣知事之ヲ行フ

市町村立小學校長及教員ノ解職ハ府縣知事之ヲ行フ

第四十五條　市町村立小學校教員ノ俸給旅費其他諸給與竝其支給方法ハ文部大臣ニ於テ定ムル準則ニ基キ府縣知事之ヲ定ム

第四十六條　小學校長及教員ノ進退、職務及服務ニ關スル規程ハ文部大臣之ヲ定ム

第四十七條　小學校長及教員ハ教育上必要ト認メタルトキハ兒童ニ懲戒ヲ加フルコトヲ得但シ體罰ヲ加フルコトヲ得ス

第四十八條　市町村立小學校長及教員職務上ノ義務ニ違背シ若クハ職務ヲ怠リタルトキ又ハ職務ノ内外ヲ問ハス體面ヲ汚辱スルノ所爲アリタルトキハ府縣知事ニ於テ懲戒處分ヲ行フ其處分ハ譴責、減俸及免職トス

私立小學校長及教員ニシテ前項ニ準スヘキ所爲アリタルトキハ府縣知事ハ其業務ヲ停止ス

第四十九條　小學校教員免許狀ヲ有スル者左ノ各號ノ一ニ該當シタルトキハ免許狀ハ其効力ヲ失フ

一　禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

二　信用若クハ風俗ヲ害スルノ罪ヲ犯シテ罰金ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレタルトキ

三　破産若クハ家資分散ノ宣告ヲ受ケタルトキ

小學校教員免許狀ヲ有スル者不正ノ所爲其他教員タルヘキ體面ヲ汚辱スルノ所爲アリテ其情狀重シト認メタルトキハ文部大臣又ハ府縣知事ニ於テ其ノ免許狀ヲ褫奪ス

第五十條　府縣知事ニ於テ行ヒタル免職若クハ業務停止又ハ免許狀褫奪ノ處分ニ不服アル者ハ文部大臣ニ訴願スルコトヲ得

第七章　費用負擔及授業料

第五十一條　市町村立小學校ノ設置ニ關スル費用ハ市町村、町村學校組合又ハ其區ノ負擔トス

其概目左ノ如シ

一　設備及其維持ノ費用

二　職員ノ俸給、旅費、其他諸給與

三　校費

兒童教育事務委託ニ關スル費用ハ町村、町村學校組合又ハ其區ノ負擔トス

第五十二條　郡長ハ町村學校組合ニ於テ設置スヘキ尋常小學校數校アルトキ又ハ兒童教育事務ノ委託ヲ要スル場所アルトキハ其學校組合內ノ某町村ヲシテ其數校中ノ一校若クハ數校ノ設置又ハ兒童教育事務委託ニ關スル費用ヲ一町村限リ負擔セシムルコトヲ得

前項ノ處分ヲ爲シ又ハ之ヲ止メムトスルトキハ關係町村及町村學校組合ノ意見ヲ聞キ府縣知事ノ認可ヲ受クヘシ

第五十三條　郡長ニ於テ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノアリト認メタルトキハ郡ハ町村又ハ町村學校組合ニ相當ノ補助ヲ與フヘシ

一　町村ニシテ第七條ノ事情アルモ同條ニ依ルコトヲ得サルトキ

二　町村學校組合ノ資力尋常小學校設置ニ關スル費用ノ負擔ニ堪ヘサルトキ又ハ町村學校組合ノ一部タル町村ノ資力其學校組合費ノ分擔ニ堪ヘサルトキ

三　町村又ハ町村學校組合ノ資力兒童教育事務委託ニ關スル費用ノ負擔ニ堪ヘサルトキ

前項ノ認定ニ付テハ郡長ハ郡參事會ノ意見ヲ府縣知事ノ指揮ヲ受クヘシ

第五十四條　府縣知事ニ於テ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノアリト認メタルトキハ府縣ハ郡又ハ市ニ相當ノ補助ヲ與フヘシ

一　郡ノ資力第五十三條ノ補助ノ負擔ニ堪ヘサルトキ

二　市ノ資力尋常小學校設置ニ關スル費用ノ負擔ニ堪ヘサルトキ

前項ノ認定ニ付テハ府縣知事ハ府縣參事會ノ意見ヲ聞キ文部大臣ノ指揮ヲ受クヘシ

第五十五條　區長及其代理者並學務委員ニ於テ國ノ教育事務ヲ執行スルカ爲ニ要スル費用ハ市町村又ハ町村學校組合ノ負擔トス但シ區長及其代理者並區ノ學務委員ニ關スル費用ハ市町村會又ハ町村學校組合會ノ議決ヲ以テ之ヲ區ノ負擔ト爲スコトヲ得

第五十六條　小學校教員檢定及府縣免許狀ニ關スル費用ハ府縣ノ負擔トス

第五十七條　市町村立尋常小學校ニ於テハ授業料ヲ徵收スルコトヲ得ス但シ補習科ハ此ノ限ニ在ラス

特別ノ事情アルトキハ府縣知事ノ認可ヲ受ケ市町村立尋常小學校ニ於テ授業料ヲ徵收スルコトヲ得

第五十八條　市町村立小學校ノ授業料ハ市町村、町村學校組合又ハ其區ノ收入トス

第五十九條　授業料ニ關スル規程ハ文部大臣之ヲ定ム

第八章　管理及監督

第六十條　市町村長又ハ町村學校組合長ハ市町村又ハ町村學校組合ニ屬スル國ノ教育事務ヲ管掌シ市町村立小學校ヲ管理ス

第六十一條　府縣知事ハ市町村又ハ町村學校組合ノ區長及其代理者ヲシテ市町村長又ハ町村學校組合長ノ指揮命令ヲ受ケテ區ニ屬スル國ノ教育事務ヲ補助執行セシムルコトヲ得

第六十二條　市町村ハ教育事務ノ爲市制第六十一條町村制第六十五條ニ依リ學務委員ヲ置クヘシ但シ市會町村

會ノ議決ニ依ルノ限ニ在ラス

町村學校組合ハ教育事務ノ爲條例ノ規定ニ依リ學務委員ヲ置クヘシ

市町村又ハ町村學校組合ハ教育事務ノ爲條例ノ規定ニ依リ其區ニ學務委員ヲ置クコトヲ得

學務委員ニハ市町村立小學校男教員ヲ加フヘシ

委員中教員ヨリ出ツル者ハ市町村長又ハ町村學校組合長之ヲ任免ス

第六十三條　學務委員ノ職務其他學務委員ニ關スル規程ハ文部大臣之ヲ定ム

第六十四條　市町村吏員ニ對スル懲戒處分ニシテ國ノ教育事務取扱ニ關スルモノニ就キテハ市制第百二十四條町村制第百二十八條ノ規定ニ依ル

第六十五條　市立小學校長及教員ノ執行スル國ノ教育事務ハ府縣知事之ヲ監督シ町村立小學校長及教員ノ執行スル國ノ教育事務ハ郡長之ヲ監督ス

第六十六條　私立小學校ニシテ市内ニ在ルモノハ府縣知事之ヲ監督シ町村内ニ在ルモノハ郡長之ヲ監督ス

第九章　附則

第六十七條　本令ハ明治三十三年九月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ小學校ノ教科目並教則及授業料ノ徴收ニ關シテハ明治三十四年三月三十一日ニ至ル迄仍從前ノ例ニ依ル

第六十八條　本令ハ市制町村制ヲ施行シタル地ニ之ヲ施行ス

第六十九條　明治二十三年勅令第二百十五號小學校令第三條ニ依リ設ケタル町村學校組合ハ明治三十八年三月三十一日ニ至ル迄之ヲ存續スルコトヲ得

第七十條　明治二十三年勅令第二百十五號小學校令第三條及第四條ニ依リ小學校ニ於テ加設シタル教科目中本令ノ規定ニ抵觸スルモノ又ハ同令第六條ニ依リ高等小學校ニ於テ專修科ヲ置キタルモノハ明治三十三年九月一日ニ於テ現ニ學習スル兒童ノ卒業スルニ至ル迄仍從前ノ例ニ依ルコトヲ得

明治二十三年勅令第二百十五號小學校令第三條ニ依リ體操科ヲ闕ケル尋常小學校ニ於テハ明治三十六年三月三十一日迄仍從前ノ例ニ依ルコトヲ得

第七十條ノ二　第二十條第三項ノ教科目ハ當分ノ内之ヲ闕クコトヲ得

第七十一條　既設ノ尋常小學校ニシテ體操場ノ設備ナキモノハ明治三十八年三月三十一日迄其設備ヲ猶豫ス

前項ノ場合ニ於テハ其ノ猶豫ノ期間内體操科ヲ闕クコトヲ得

第七十二條　本令施行前ニ授與シタル小學校教員免許狀ハ本令施行後仍其效力ヲ有ス但シ小學校專科准教員ノ免許狀ハ此ノ限ニ在ラス

第七十三條　明治二十六年勅令第百四號及明治三十年勅令第三百十六號ハ之ヲ廢止ス

明治二十六年勅令第三十四號及明治三十年勅令第四百七號ハ明治三十四年四月一日ヨリ之ヲ廢止ス

附則

本令ハ明治三十七年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ第二十四條第二項及第三項ハ此ノ限ニ在ラス

明治三十七年四月一日前第二十四條第二項又ハ同條第三項ニ依リ採定ヲ爲ス場合ニ於テハ審査委員會ノ審査ヲ經ルヲ要セス

本令施行前ニ於ケル審査採定及本令施行前ニ採定シタル教科用圖書ニ關シテハ從前ノ罰則其ノ他ノ規定ヲ適用ス但シ使用ヲ始メタル後四箇年ヲ經タル圖書ハ採定ノ效力ヲ失フ

附則

本令ハ明治四十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ第十三條及第三十六條第一項ノ改正ハ明治四十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

市町村立尋常小學校ニ代用シタル私立小學校ニ關シテハ其ノ代用期間ノ滿了スルニ至ル迄仍其ノ代用ヲ存續スルコトヲ得

特別ノ事情ニ依リ第十八條第一項ニ依リ難キ場合ニ於テハ市町村立小學校ニ在リテハ市町村又ハ町村學校組合ニ於テ私立小學校ニ在リテハ設立者ニ於テ期間ヲ定メテ府縣知事ノ認可ヲ受ケ當分ノ内尋常小學校ニ關シテハ仍從前ノ規定ニ依ルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ高等小學校ニ關シテモ仍從前ノ規定ニ依ルコトヲ得

前項ニ依ル尋常小學校ノ教科目ニ關シテハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

第十九條ノ教科目中唱歌及第二十條第二項ノ教科目ハ當分ノ內之ヲ闕クコトヲ得

本令施行ノ際現ニ在學スル高等小學校ノ兒童ニ關シテハ其ノ卒業スルニ至ル迄仍從前ノ規定ニ依ルコトヲ得

第二章　中學校令

明治三十二年二月七日勅令第二十八號　改正　四〇年第二八〇號

朕中學校令ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

中學校令

第一條　中學校ハ男子ニ須要ナル高等普通教育ヲ爲スヲ以テ目的トス

第二條　北海道及府縣ニ於テハ土地ノ情況ニ應シ一箇以上ノ中學校ヲ設置スヘシ

文部大臣ハ必要ト認ムル場合ニ於テ府縣ニ中學校ノ增設ヲ命スルコトヲ得

第三條　前條ノ中學校ノ經費ハ北海道及沖繩縣ヲ除ク外府縣ノ負擔トス

第四條　郡市町村（北海道及沖繩縣ノ區ヲ含ム）又ハ町村學校組合ハ土地ノ情況ニ依リ須要ニシテ其區域內小學教育ノ施設上妨ケナキ場合ニ限リ中學校ヲ設置スルコトヲ得

第五條　私人ハ法令ノ規定ニ依リ中學校ヲ設置スルコトヲ得

第六條　土地ノ情況ニ依リ中學校ノ分校ヲ必要トスルトキハ文部大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ設置スルコトヲ得

但シ一校ニ付一分校ニ限ル

第七條　中學校ノ設置廢止ハ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

中學校ノ設置廢止ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第八條　公立中學校ノ位置ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ地方長官之ヲ定ム

第九條　中學校ノ修業年限ハ五箇年トス但シ一箇年以內ノ補習科ヲ置クコトヲ得

第十條　中學校ニ入學スルコトヲ得ル者ハ年齡十二年以上ニシテ尋常小學校卒業シタル者又ハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

第十一條　中學校ノ學科及其程度ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十二條　中學校ノ教科書ハ文部大臣ノ檢定ヲ經タルモノニ就キ地方長官ノ認可ヲ經テ學校長之ヲ定ム

但シ文部大臣ノ檢定ヲ經サル教科書ヲ使用スル必要アルトキハ地方長官ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ一時其使用ヲ認可スルコトヲ得

中學校教科書ノ檢定ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十三條　中學校ノ教員ハ文部大臣ノ授與シタル教員免許狀ヲ有スル者タルヘシ但シ文部大臣ノ定ムル所ニ依リ本文ノ免許狀ヲ有セサル者ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

中學校教員免許狀ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十四條　公立中學校職員ノ俸給旅費其他諸給費ニ關スル規則ハ別段ノ規定アルモノヲ除クノ外地方長官之ヲ定ム

第十五條　中學校ノ編制及設備ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十六條　公立中學校ニ於テハ授業料ヲ徵收スヘシ但シ特別ノ場合ニ於テハ之ヲ減免スルコトヲ得

授業料、入學料等ノ額ハ公立學校ニ在リテハ地方長官ニ於テ私立學校ニ在リテハ設立者ニ於テ文部大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム

第十七條　本令ノ規定ニ依ラサル學校ハ中學校ト稱スルコトヲ得ス

第十八條　本令施行ノ爲メニ必要ナル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

附則

第十九條　本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

第二十條　既設ノ尋常中學校分校ニシテ第六條ノ制限ニ超過スルモノハ文部大臣ノ認可ヲ經テ本令施行ノ日ヨリ五箇年以內存置スルコトヲ得

第二十一條　明治十九年勅令第十五號中學校令第十二條ニ依リ設置シタル農業、工業、商業等ノ專修科ハ本令施行ノ日ニ於テ現ニ在學スル生徒ノ卒業スルマテ之ヲ存置スルコトヲ得

第二十二條　既設ノ公私立尋常中學校ハ本令施行ノ日ヨリ中學校ト改稱ス
他ノ法令中尋常中學校トアルハ本令施行ノ日ヨリ當然中學校ト看做ス

附　則

本令ハ明治四十年八月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ第十條ハ明治四十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス
修業年限四箇年ノ尋常小學校ノ課程ヲ卒リタル者ノ入學ニ付テハ第十條施行後ト雖仍從前ノ例ニ依ル

第三章　師範教育令　明治三十年十月九日勅令第三百四十六號

朕師範教育令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

師範教育令

第一條　高等師範學校ハ師範學校、尋常中學校、高等女學校ノ教員タルヘキ者ヲ養成スル所トス
女子高等師範學校ハ師範學校女子部、及高等女學校ノ教員タルヘキ者ヲ養成スル所トス
師範學校ハ小學校ノ教員タルヘキ者ヲ養成スル所トス
前三項ニ記載シタル學校ニ於テハ順良、信愛、威重ノ德性ヲ涵養スルコトヲ務ムヘシ

第二條　高等師範學校及女子高等師範學校ハ東京ニ各一校ヲ設置シ師範學校ハ北海道及各府縣ニ各一校若クハ數校ヲ設置ス

第三條　高等師範學校及女子高等師範學校ハ文部大臣ノ管理ニ屬シ師範學校ハ地方長官ノ管理ニ屬ス

第四條　師範學校ノ經費北海道及沖繩縣ヲ除クハ府縣稅又ハ地方稅ノ負擔トス

第五條　師範學校ノ設備ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第六條　高等師範學校、女子高等師範學校及師範學校生徒ノ募集及卒業後ノ服務ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第七條　高等師範學校、女子高等師範學校及師範學校生徒ノ學費ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依リ其學校ヨリ之ヲ支給スヘシ

前項ノ外文部大臣ノ定ムル所ニ依リ私費生ヲ置クコトヲ得

第八條　高等師範學校、女子高等師範學校及師範學校ノ學科及其程度並ニ教科書ハ文部大臣之ヲ定ム

第九條　師範學校ニ豫備科、小學校教員講習科及幼稚園保姆講習科ヲ置クコトヲ得

附　則

第十條　本令ハ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス
明治十九年勅令第十三號師範學校令ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

第十一條　他ノ法令中尋常師範學校トアルハ本令施行ノ日ヨリ當然師範學校ト改正セラレタルモノト看做ス

第四章　高等學校令　明治二十七年六月二十五日勅令第七十五號

朕高等學校令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

高等學校令

第一條　第一高等「中」學校、第二高等「中」學校、第三高等「中」學校、第四高等「中」學校及第五高等「中」學校ヲ高等學校ト改稱ス

第二條　高等學校ハ專門學校ヲ教授スル所トス但帝國大學ニ入學スル者ノ爲メ豫科ヲ設クルコトヲ得

第三條　高等學校ハ其ノ附屬トシテ低度ナル特別學科ヲ設クルコトヲ得

第四條　高等學校ニ於テ設クル所ノ學科及講座ノ數ハ文部大臣之ヲ定ム

附　則

第五條　本令ハ明治二十七年九月十一日ヨリ施行ス但各高等學校ニ於テ學科ヲ設置スルノ時期ハ文部大臣之ヲ指定スヘシ

本令ヲ施行シ又ハ一部ヲ施行スル所ノ高等學校ニ於テ高等中學校ノ學科ヲ履修スル年期內ニ在ル生徒ノ爲ニ舊學科ヲ存スルコトヲ得

第五章　帝國大學令

明治十九年三月二日勅令第三號　改正　二六年第八二號

朕帝國大學令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝國大學令

第一條　帝國大學ハ國家ノ須要ニ應スル學術技藝ヲ教授シ及其蘊奥ヲ攷究スルヲ以テ目的トス

第二條　帝國大學ハ大學院及分科大學ヲ以テ構成ス大學院ハ學術技藝ノ蘊奥ヲ攷究シ分科大學ハ學術技藝ノ理論及應用ヲ教授スル所トス

第三條　分科大學ノ學科ヲ卒ヘ定規ノ試驗ヲ經タル者ニハ卒業證書ヲ授與ス

第四條　分科大學ノ卒業生若クハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者ニシテ大學院ニ入リ學術技藝ノ蘊奥ヲ攷究シ定期ノ試驗ヲ經タル者ニハ學位ヲ授與ス

第五條　帝國大學總長ハ帝國大學ヲ總轄シ帝國大學內部ノ秩序ヲ保持ス

第六條　帝國大學ニ評議會ヲ設ク

評議會ハ各分科大學長及各分科大學教授各一名ヲ以テ會員トス

帝國大學總長ハ評議會ヲ召集シ其ノ議長トナル

第七條　教授ニシテ評議員タルモノハ各分科大學每ニ教授ノ互選ニ依リ文部大臣之ヲ命ス

前項ノ評議員ハ三箇年ヲ以テ任期トス但滿期ノ後再選セラルルコトヲ得

第八條　評議會ハ左ノ事項ヲ審議ス

第一　各分科大學ニ於ケル學科ノ設置廢止ノ件

第二　講座ノ種類ニ付諮詢ノ件

第三　大學內部ノ制規但勅令又ハ省令ヲ發スルノ必要アルモノハ其建議案

第四　學位授與ノ件

第五　其他文部大臣又ハ帝國大學總長ヨリ諮詢ノ件

評議會ハ高等教育ニ關スル事項ニ付其ノ意見ヲ文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第九條　分科大學ハ法科大學醫科大學工科大學文科大學理科大學農科大學トス

第十條　分科大學長ハ分科大學ノ學務ヲ統理ス

第十一條　各分科大學ノ教官ハ教授及助教授トス

第十二條　必要アル場合ニ於テハ帝國大學總長ハ講師ヲ囑託スルコトヲ得

第十三條　帝國大學ニ功勞アリ又ハ學術上效績アル者ニ對シ勅旨ニ由リ又ハ文部大臣ノ奏宣ニ由リ名譽教授ノ名稱ヲ與フルコトアルヘシ

第十四條　各分科大學ニ教授會ヲ設ケ教授ヲ以テ會員トス

分科大學長ハ教授會ヲ召集シ其ノ議長トナル

第十五條　教授會ハ左ノ事項ヲ審議ス

第一　分科大學ノ學科課程ニ關スル件

第二　學生試驗ノ件

第三　學位授與資格ノ審査

第四　其ノ他文部大臣又ハ帝國大學總長ヨリ諮詢ノ件

第十六條　分科大學長ハ必要アリト認ムルトキハ教授ノ外助教授又ハ囑託講師ヲ教授會ニ列席セシムルコトヲ得

第十七條　各分科大學ニ講座ヲ置キ教授ヲシテ之ヲ擔任セシム

教授ヲ缺ク場合ニ於テハ助教授又ハ囑託講師ヲシテ講座ヲ擔任セシム

第十八條　講座ノ種類及其數ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十九條　本令ハ明治二十六年九月十一日ヨリ施行ス

第六章　實業學校令

明治三十二年二月七日勅令第二十九號　改正　三五年三六年第一三二號　第六二號

朕實業學校令ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

實業學校令

第一條　實業學校ハ工業農業商業等ノ實業ニ從事スル者ニ須要ナル教育ヲ爲スヲ以テ目的トス

第二條　實業學校ノ種類ハ工業學校、農業學校、商業學校、商船學校、及實業補習學校トス
蠶業學校、山林學校、獸醫學校及水産學校等ハ農業學校ト看做ス
徒弟學校ハ工業學校ノ種類トス

第二條ノ二　實業學校ニシテ高等ノ教育ヲ爲スモノヲ實業專門學校トス

第三條　北海道及府縣ニ於テハ實業學校ヲ設置スルコトヲ得但道府縣立實業補習學校ハ他ノ道府縣立學校ニ附
實業專門學校ニ關シテハ專門學校令ノ定ムル所ニ依ル
設スル場合ニ限ル

第四條　文部大臣ハ土地ノ情況ニ應シ必要ナル實業學校ノ設置ヲ北海道又ハ府縣ニ命スルコトヲ得

第五條　削除

第五條ノ二　郡市町村（北海道沖繩縣ノ區、北海道一級町村二級町村、沖繩縣島嶼）又ハ町村學校組合ハ土地ノ情況ニ依リ須要ニシテ其ノ區域內小學教
育ノ施設上妨ナキ場合ニ限リ實業學校ヲ設置スルコトヲ得
市町村又ハ町村學校組合ハ前項ニ依リ實業學校ヲ設置スル場合ニ於テ費用ノ負擔ノ爲區ヲ設クルコトヲ得

第六條　商業會議所ハ實業學校ヲ設置スルコトヲ得

第七條　私人ハ本令ノ規定ニ依リ實業學校ヲ設置スルコトヲ得
公立又ハ私立ノ工業學校農業學校商業學校商船學校ノ設置廢止ハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ公立又ハ私立
ノ實業補習學校ノ設置廢止ハ道府縣立ニ係ルモノヲ除クノ外地方長官ノ認可ヲ受クヘシ
公立又ハ私立ノ實業學校ノ設置廢止ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第八條　實業學校ノ修業年限、學科、學科目及其程度ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第九條　實業學校ノ教科書ハ公立學校ニ在リテハ學校長ニ於テ私立學校ニ在リテハ設立者ニ於テ地方長官ノ認
可ヲ經テ之ヲ定ム

第十條　公立又ハ私立ノ實業學校教員ノ資格ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十一條　公立實業學校職員ノ旅費其ノ他諸給與ニ關スル規則ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ地方長官之ヲ定ム

第十二條　公立實業補習學校職員ノ名稱待遇ハ公立小學校ノ例ニ依ル

第十三條　公立又ハ私立ノ實業學校ノ編制及設備ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十四條　實業學校ニ於テ授業料ヲ徴收スルコトヲ得

第十五條　本令施行ノ爲ニ必要ナル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

附則

第十六條　本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

第十七條　削除

第十八條　他ノ法令中ニ技藝學校トアルハ本令施行ノ日ヨリ當然實業學校ト看做ス

第十九條　明治二十三年勅令第二百十五號小學校令中徒弟學校及實業補習學校ニ關スル規定ハ本令施行ノ日ヨ
リ其ノ效力ヲ失フ

附則

本令ハ明治三十六年四月一日ヨリ之ヲ施行ス
札幌農學校、盛岡高等農林學校、東京高等商業學校、神戸高等商業學校、東京高等工業學校、大阪高等工業學
校及京都高等工藝學校ハ本令施行ノ日ヨリ實業專門學校トス